仙台市文化財調査報告書第274集

保春院前遺跡他

発掘調査報告書

平成16年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第274集

保春院前遺跡他

発掘調査報告書

平成16年3月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なるご協力を賜り、まことに感謝にたえません。仙台市内には、現在約800ヶ所の遺跡が確認されております。これらの遺跡は、先人達の知恵と努力によって今日まで伝えられてきたものであります。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

本報告書には、平成15年度に実施いたしました発掘調査の中から、保春院前遺跡、南小泉遺跡、富沢遺跡、養種園遺跡、北目城跡、郡山遺跡、小鶴城跡、富沢館跡、山田条里遺跡といった数多くの遺跡の調査成果を収録しております。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私達にとって大きな責務であると考えております。本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために多少なりともお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政につきましてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2004年3月

仙台市教育委員会

教育長　阿　部　芳　吉

例　　言

1　本書は、仙台市教育委員会による保春院前遺跡第2次、南小泉遺跡第40次、富沢遺跡第127・128・129・130次、養種園遺跡第４次、北目城跡第３次、郡山遺跡第154次、小鶴城跡第２次、富沢館跡第2次、山田条里遺跡第８次の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査報告書のうち、養種園遺跡、小鶴城跡の調査は、個人住宅建設に伴う事前調査として実施したものであり、他は民間の開発事業に伴って行われた発掘調査である。

3　民間の開発事業に伴って行われた発掘調査及びその報告書の刊行にあたっては、地権者である菅原修一氏、横田良和氏、㈱深松組、みずほ信託銀行㈱、庄子とよ氏、畑文雄氏、庄子善範氏、庄子はるの氏、本多竹実氏、㈱福田道路の各位に絶大なご理解とご協力をいただいた。また、個人住宅建設に伴う調査にあたっても、建築主の多大なるご理解をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

4　本書の作成は、仙台市教育委員会文化財課調査係が行い、次のとおり分担した。

保春院前遺跡第２次	豊村幸宏	南小泉遺跡第40次	豊村幸宏	養種園遺跡第４次	豊村幸宏
富沢遺跡第127次	豊村幸宏	富沢遺跡第128次	豊村幸宏	富沢遺跡第129次	豊村幸宏
富沢遺跡第130次	宮内　周	北目城跡第３次	豊村幸宏	郡山遺跡第154次	大倉秀之
小鶴城跡第２次	豊村幸宏	富沢館跡第２次	豊村幸宏	山田条里遺跡第８次	大倉秀之

5　陶磁器の鑑定は、仙台市博物館主査　佐藤洋氏に依頼した。

6　本調査にかかわる資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　調査地点は地図中に★で示した。

2　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

3　本書に係わる遺構の実測は、平面座標系Ｘを基準点としたものと、任意の点を基準点としたものがある。任意の基準点からの測量では、周辺の境界杭等を計測することにより調査区の位置を決めた。

4　平面座標系の座標値の単位はkmである。

5　座標値は、海抜高度を示している。

6　遺構名の略号として、以下の略号を使用した。

ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土坑　　Ｐ：ピット　　ＳＲ：河川跡

ＳＸ：その他の遺構

7　報告書中の全体図および遺構平面図においては、撹乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。

8　遺物の登録には、以下の分類と略号を使用した。

Ｃ：土師器（非ロクロ）　Ｄ：土師器（ロクロ）　Ｅ：須恵器　Ｉ：陶器・土師質土器　Ｊ：磁器

Ｋ：石器・石製品　Ｌ：木製品　Ｎ：金属製品　Ｐ：土製品

9　土師器実測図内面のスクリーントーン（網）は黒色処理されていることを示している。

10　礫石器実測図の細かなスクリーントーン（網）は磨面を示している。

11　遺物観察表の（　）内の法量は、残存値を示している。

12　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、「十和田ａ（Ｔｏ－ａ）」と考えられ、十和田ａの降下年代は、現在西暦915年初夏とされている。（町田：1981・1996）

13　「擬似畦畔Ｂ」という用語は、水田の畦畔直下の自然堆積層において認められる畦畔状の高まりをさす（齋野ほか1987：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第98集）が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下における下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりについてもこの用語を用いた。

本　文　目　次

序　文
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　保春院前遺跡（第2次）発掘調査報告書
1　調査要項……1
2　遺跡の位置と環境……1
3　調査に至る経過と調査方法……1
4　基本層位……1
5　発見遺構と出土遺物……2
1）溝跡……3　3）ピット……6
2）土坑……3
6　まとめ……6

Ⅱ　南小泉遺跡（第40次）発掘調査報告書
1　調査要項……11
2　遺跡の位置と環境……11
3　調査に至る経過と調査方法……12
4　基本層位……12
5　発見遺構と出土遺物……12
Ⅰ区の調査……12
1）溝跡……12　3）ピット……13
2）土坑……13
Ⅱ区の調査……13
1）溝跡……13　3）ピット……15
2）焼土遺構……14　4）その他の遺物……15
6　まとめ……15

Ⅲ　富沢遺跡（第127次）発掘調査報告書
1　調査要項……19
2　遺跡の位置と環境……19
3　調査に至る経過と調査方法……19
4　基本層位……21
5　発見遺構と出土遺物……22
水田跡……22
1）3層水田跡……22　2）4層水田跡……22

3） 8層水田跡……23
6　まとめ……23
1）水田耕作土……23　2）まとめ……23

Ⅳ　富沢遺跡（第128次）発掘調査報告書
1　調査要項……27
2　遺跡の位置と環境……27
3　調査に至る経過と調査方法……27
4　基本層位……28
5　まとめ……28
1）水田耕作土……28　2）まとめ……29

Ⅴ　富沢遺跡（第129次）発掘調査報告書
1　調査要項……32
2　遺跡の位置と環境……32
3　調査に至る経過と調査方法……32
4　基本層位……33
5　発見遺構と出土遺物……34
1）溝跡……34　2）畦畔状遺構……35
6　まとめ……35
1）水田耕作土……35　2）まとめ……36

Ⅵ　富沢遺跡（第130次）発掘調査報告書
1　調査要項……42
2　遺跡の位置と環境……42
3　調査に至る経過と調査方法……42
4　基本層序……43
5　検出遺構と出土遺物……46
1） 2層上面検出遺構及び2層出土遺物……46
2） 3層上面検出遺構……46
3） 4a層上面検出遺構及び4a層出土遺物……47
4） 5層上面検出遺構及び出土遺物……49
5） 6層上面検出遺構及び出土遺物……50
6） 7層上面検出遺構及び出土遺物……50
7）10層出土遺物……52
8）14層上面……52
9）20検出遺構及び19層下部・20層出土遺物…52
10）22層……57
6　まとめ……57
7　自然科学分析……65
1）テフラ分析……65
2）放射性炭素年代測定……68
4）22層における最終氷期最寒冷期の植物化石群…75
5）中世から近世より出土した加工材及び種実…86

3）植物珪酸体（プラント・オパール）分析……69　　6）昆虫化石……89

Ⅶ　養種園遺跡（第4次）発掘調査報告書
1　調査要項……93
2　遺跡の位置と環境……93
3　調査に至る経過と調査方法……94
4　基本層位……94
5　発見遺構と出土遺物……94
溝跡……94
6　まとめ……95

Ⅷ　北目城跡（第3次）発掘調査報告書
1　調査要項……97
2　遺跡の位置と環境……97
3　調査に至る経過と調査方法……98
4　基本層位……99
5　発見遺構と出土遺物……100
溝跡……100
6　まとめ……100

Ⅸ　郡山遺跡（第154次）発掘調査報告書
1　調査要項……102
2　遺跡の位置と環境……102
3　調査に至る経過と調査方法……103
4　基本層位……103
5　発見遺構と出土遺物……103
A区の調査……103
B区の調査……103
ピット……103
6　まとめ……104

Ⅹ　小鶴城跡（第2次）発掘調査報告書
1　調査要項……106
2　遺跡の位置と環境……106
3　調査に至る経過と調査方法……107
4　基本層位……107
5　発見遺構と出土遺物……107

溝跡……107
6　まとめ ……108

XI　富沢館跡（第２次）発掘調査報告書
1　調査要項 ……110
2　遺跡の位置と環境 ……110
3　調査に至る経過と調査方法 ……111
4　基本層位 ……111
5　発見遺構と出土遺物 ……111
1）溝跡……111　　3）ピット ……112
2）河川跡……112
6　まとめ ……113

XII　山田条里遺跡（第８次）発掘調査報告書
1　調査要項 ……116
2　遺跡の位置と環境 ……116
3　調査に至る経過と調査方法 ……116
4　基本層位 ……117
1）１区の基本層位……118　　2）２区の基本層位 ……119
5　発見遺構と出土遺物 ……119
１区の調査 ……119
性格不明遺構……121
２区の調査 ……121
1）ピット……121　　2）性格不明遺構 ……121
6　まとめ ……122

図　目　次

Ⅰ　保春院前遺跡（第2次）発掘調査報告書

第１図　保春院前遺跡と周辺の遺跡……2
第２図　調査地点と周辺の地形……3
第３図　調査区配置図……3
第４図　Ⅰ区遺構配置図……4
第５図　Ⅰ区調査区西壁・北壁・東壁断面図……4
第６図　遺構断面図……5
第７図　出土遺物……5
第８図　Ⅱ区調査区西壁断面図……6
第９図　Ⅱ区遺構配置図……6

Ⅱ　南小泉遺跡（第40次）発掘調査報告書

第10図　調査地点と周辺の地形……11
第11図　調査区配置図……12
第12図　Ⅰ区遺構配置図……13
第13図　Ⅰ区南壁・遺構断面図……13
第14図　Ⅱ区遺構配置図……14
第15図　Ⅱ区南壁・遺構断面図……14
第16図　Ⅱ区ＳＤ１溝跡出土遺物……15
第17図　Ⅱ区出土遺物……16

Ⅲ　富沢遺跡（第127次）発掘調査報告書

第18図　富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡……20
第19図　調査区配置図……20
第20図　調査区東壁断面図……21
第21図　３層水田跡……22
第22図　４層水田跡……22
第23図　８層水田跡……22

Ⅳ　富沢遺跡（第128次）発掘調査報告書

第24図　調査区配置図……27
第25図　調査区北壁・東壁断面図……28

Ⅴ　富沢遺跡（第129次）発掘調査報告書

第26図　調査区配置図……32
第27図　調査区東壁・北壁断面図……33
第28図　２ａ層・２ｂ層遺構配置図……34
第29図　ＳＤ１溝跡断面図……34
第30図　出土遺物……35

Ⅵ　富沢遺跡（第130次）発掘調査報告書

第31図　調査区配置図……42
第32図　調査区東壁断面図……44
第33図　調査区北壁断面図……45
第34図　性格不明遺構平断面図……46
第35図　４ａ層畦畔断面図……47
第36図　検出遺構平面図……48
第37図　打ち込み杭断面図……51
第38図　14層平面図……52
第39図　20層検出遺構平面図……53
第40図　出土遺物（１）……54
第41図　出土遺物（２）……55
第42図　出土遺物（３）……56
第43図　22層検出樹木……57

Ⅶ　養種園遺跡（第4次）発掘調査報告書

第44図　調査地点と周辺の地形……93
第45図　調査区配置図……94
第46図　遺構配置図……94
第47図　調査区西壁・ＳＤ１溝跡断面図……95
第48図　ＳＤ１溝跡出土遺物……95

Ⅷ　北目城跡（第3次）発掘調査報告書

第49図　調査地点と周辺の地形……97
第50図　調査区配置図……98
第51図　Ｂトレンチ遺構配置図……99
第52図　Ａトレンチ東壁断面図……99
第53図　Ｂトレンチ西壁断面図……99
第54図　ＳＤ１溝跡出土遺物 ……100

Ⅸ　郡山遺跡（第154次）発掘調査報告書

第55図　調査地点と周辺の地形 ……102
第56図　調査区配置図 ……103

Ⅹ　小鶴城跡（第２次）発掘調査報告書

第57図　調査地点と周辺の地形 ……106
第58図　調査区配置図 ……107
第59図　遺構配置図 ……107
第60図　調査区西壁断面図 ……108

Ⅺ　富沢館跡（第2次）発掘調査報告書

第61図　調査地点と周辺の地形 ……110
第62図　調査区配置図 ……111
第63図　遺構配置図 ……111
第64図　調査区西壁断面図 ……112
第65図　ＳＲ１河川跡出土遺物 ……113

Ⅻ　山田条里遺跡（第８次）発掘調査報告書

第66図　山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡 ……117
第67図　調査区位置図 ……118
第68図　調査区配置図 ……119
第69図　１区北壁断面図 ……120
第70図　１区遺構配置図 ……121
第71図　２区西壁断面図 ……121
第72図　２区遺構配置図 ……122
第73図　遺構断面図 ……122
第74図　出土遺物 ……123

写　真　目　次

Ⅰ　保春院前遺跡（第２次）発掘調査報告書

図版１　Ⅰ区　調査区・溝跡・土坑……８

図版２　Ⅰ区　土坑・調査区土層断面……９

図版３　Ⅱ区の状況・出土遺物……10

Ⅱ　南小泉遺跡（第40次）発掘調査報告書

図版４　Ⅰ区・Ⅱ区調査状況……17

図版５　Ⅱ区調査状況・出土遺物……18

Ⅲ　富沢遺跡（第127次）発掘調査報告書

図版６　調査状況……25

図版７　調査状況・土層断面……26

Ⅳ　富沢遺跡（第128次）発掘調査報告書

図版８　調査状況・土層断面……30

図版９　土層断面……31

Ⅴ　富沢遺跡（第129次）発掘調査報告書

図版10　調査状況……37

図版11　ＳＤ１溝跡・畦畔状遺構……38

図版12　畦畔状遺構・土層断面……39

図版13　土層断面……40

図版14　土層断面・出土遺物……41

Ⅵ　富沢遺跡（第130次）発掘調査報告書

図版15　調査完了全景　土層断面、水田跡の調査(1)…59

図版16　水田跡の調査(2)……60

図版17　水田跡の調査(3)……61

図版18　縄文時代早期、後期旧石器時代の調査…62

図版19　出土遺物（１）……63

図版20　出土遺物（２）……64

Ⅶ　養種園遺跡（第４次）発掘調査報告書

図版21　調査状況・出土遺物……96

Ⅷ　北目城跡（第３次）発掘調査報告書

図版22　調査状況・出土遺物……101

Ⅸ　郡山遺跡（第154次）発掘調査報告書

図版23　調査状況……105

Ⅹ　小鶴城跡（第2次）発掘調査報告書

図版24　調査状況……109

XI　富沢館跡（第２次）発掘調査報告書
図版25　調査状況 ……114
図版26　出土遺物 ……115

XII　山田条里遺跡（第8次）発掘調査報告書
図版27　１区・２区調査状況 ……124
図版28　２区調査状況・遠景 ……125
図版29　出土遺物 ……126

Ⅰ　保春院前遺跡（第２次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　保春院前遺跡（宮城県遺跡番号01555）
調 査 地 点　　仙台市若林区六十人町95
調 査 期 間　　平成15年６月16日～６月20日
調査対象面積　　54㎡
調 査 面 積　　63㎡（Ⅰ区：マンホール設置箇所24㎡　Ⅱ区：管路部分39㎡）
調 査 原 因　　配電線路地中線埋設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　教諭　豊村幸宏　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

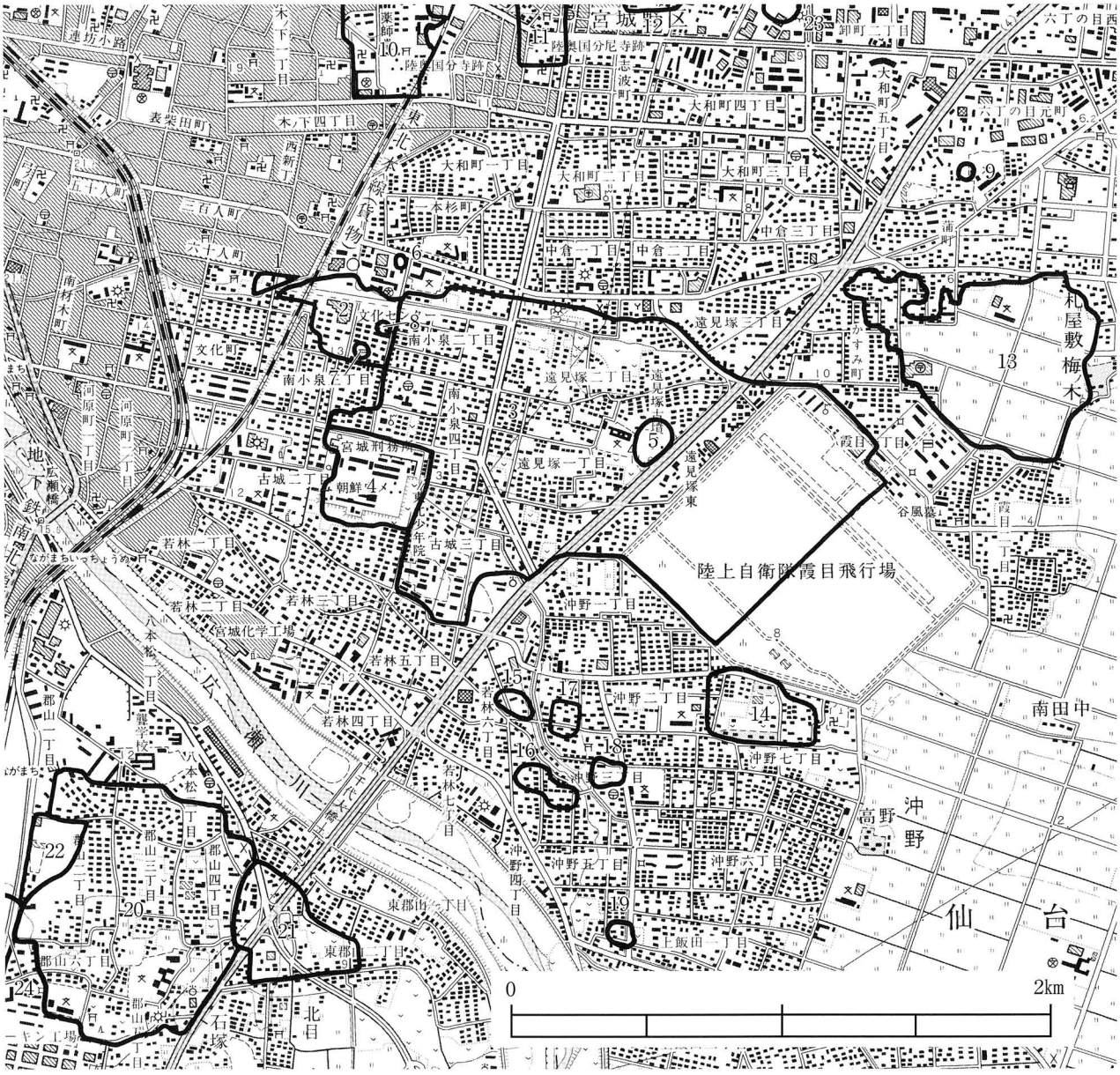
保春院前遺跡は、JR仙台駅の南東約2.2㎞付近の仙台市若林区保春院前丁、六十人町に所在する古代から近世の複合遺跡である。仙台市街地の東側、広瀬川の北側に位置し、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地の標高12～14mの自然堤防上に立地している。周辺には東側に隣接して養種園遺跡が広がっている他、南小泉遺跡、若林城跡、遠見塚古墳、法領塚古墳、猫塚古墳、蛇塚古墳がある。今回の調査地点は、遺跡のほぼ中央部に当たり標高は13mである。本遺跡では平成14年に都市計画道路南小泉茂庭線建設に伴い調査が行われており、古代の竪穴住居跡や中・近世の遺構・遺物が検出されている。

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年５月19日付で東北電力株式会社仙台南営業所長佐藤善昭氏より配電線路地中線埋設工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－36号で回答）。これを受けて平成15年６月16日に、工事予定地内のうちマンホール設置予定箇所に東西６m、南北４mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、溝跡、土坑、ピット多数が検出されたため引き続き本調査へと移行した。調査は、重機により盛土とⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。なおマンホール設置箇所に接続する管路部分でも東西1.5m、南北26mの調査区を設定して遺構検出作業を行い溝跡、土坑、ピット等を多数検出したが、調査区が狭長なため安全面に配慮して遺構の掘り込みは行わなかった。

4　基本層位

調査区内は、全体に厚さ60～80㎝の盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅢ層まで大別3層である。Ⅰ層は木炭粒、焼土粒、砂粒を含む暗褐色シルト層で、旧耕作土と考えられる。Ⅱ層は木炭粒、Ⅲ層土ブロックを含む暗褐色シルト質粘土層である。Ⅰ層より暗い色調を呈している。Ⅲ層は灰黄褐色粘土ブロック、酸化鉄斑を含む褐色シルト層で周辺一帯の基盤となる自然堆積層である。この層の上面で遺構検出作業を行った。

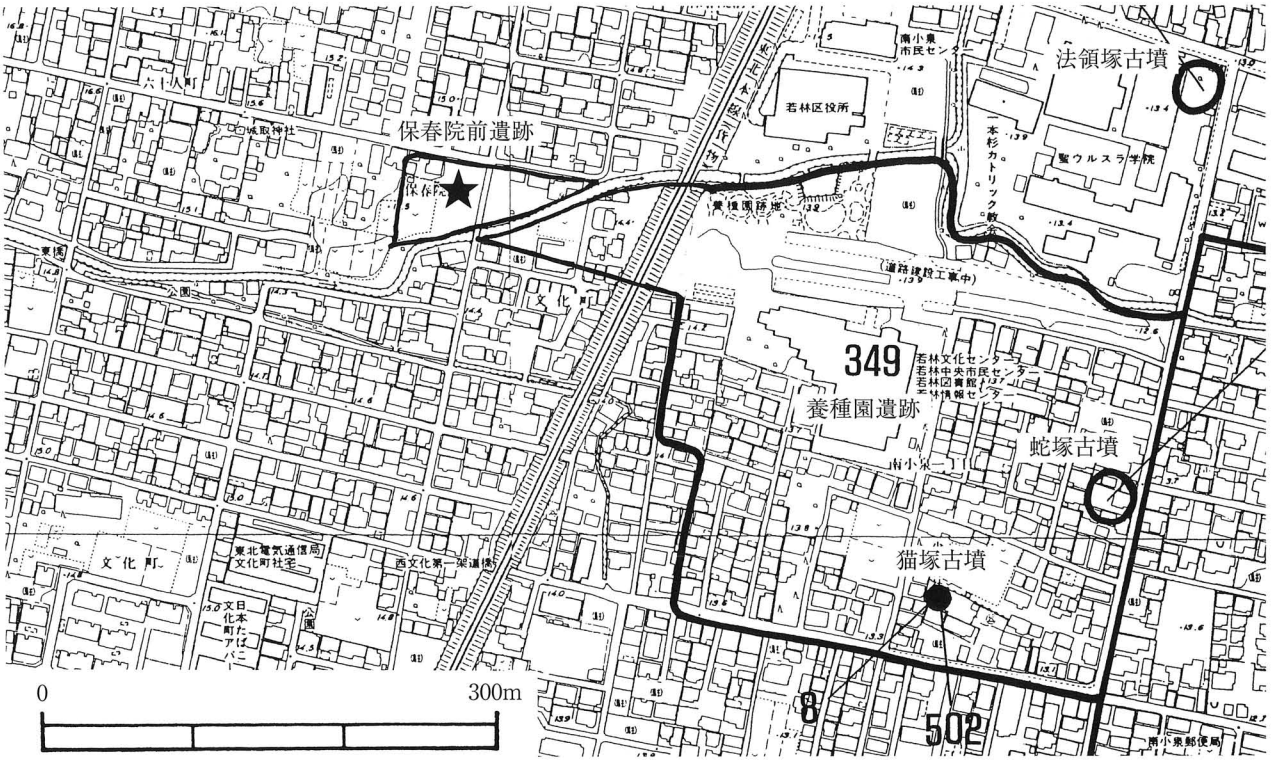


No.	遺跡名	種　別	立　地	年　　代	No.	遺跡名	種　別	立　地	年　　代
1	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世	13	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	古代
2	養種園遺跡	集落跡他	自然堤防	弥生・古墳・中世・近世	14	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
3	南小泉遺跡	集落跡他	自然堤防	縄文～近世	15	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	若林城跡	城館跡	自然堤防	古墳～近世	16	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
5	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	17	神柵遺跡	官衙跡？	自然堤防	古代
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	18	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
7	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	19	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
8	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	20	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
9	曽利松明神古墳	円墳	自然堤防	古墳	21	北目城遺跡	城館跡	自然堤防	縄文～近世
10	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代・中世	22	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
11	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	自然堤防	古代	23	谷地館跡	城館跡	自然堤防	中世
12	志波遺跡	散布地	自然堤防	古代	24	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代

第１図　保春院前遺跡と周辺の遺跡

5　発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は溝跡2条、土坑5基、ピット36基である。これらの遺構はいずれもⅢ層上面で検出しているが、Ⅱ層上面を本来の掘り込み面としているものも含まれている。



第２図　調査地点と周辺の地形

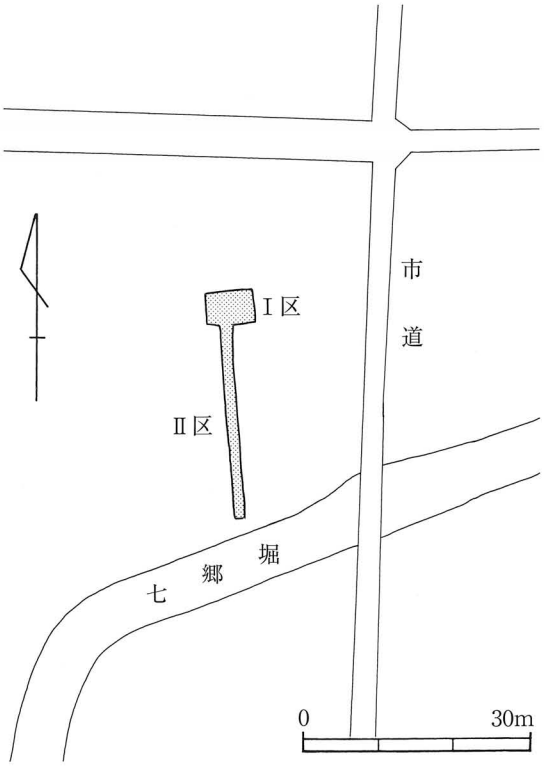
１）溝跡

ＳＤ１　溝跡

調査区の東半部で検出した。南西から北東に延びる。ＳＫ１、ＳＫ２、Ｐ４と重複しこれらより古い。検出長４ｍ、上幅158㎝、下幅27～41㎝、深さ57㎝である。断面形は逆台形で、西壁は底面から緩やかに立ち上がるが、東壁では底面から直立気味に立ち上がり途中から緩やかに傾斜し段差を生じている。底面はやや丸みを帯びる。堆積土は３層に分かれいずれも自然堆積層である。１、２層中に灰白色火山灰ブロックを含んでいる。２、３層中から土師器甕片が５点出土した。

ＳＤ２　溝跡

調査区の西壁際で検出した。南北方向に延びているものと考えられるが、遺構の一部を検出したに留まっているため、全体の形状や規模は不明である。Ｐ29、30、36と重複し、P29、P30より古く、P36より新しい。検出長2.7ｍ、上幅38㎝以上、下幅32㎝以上、深さ36㎝である。壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に分けられる。遺物は土師器甕片が２点、須恵器甕片が1点出土した。



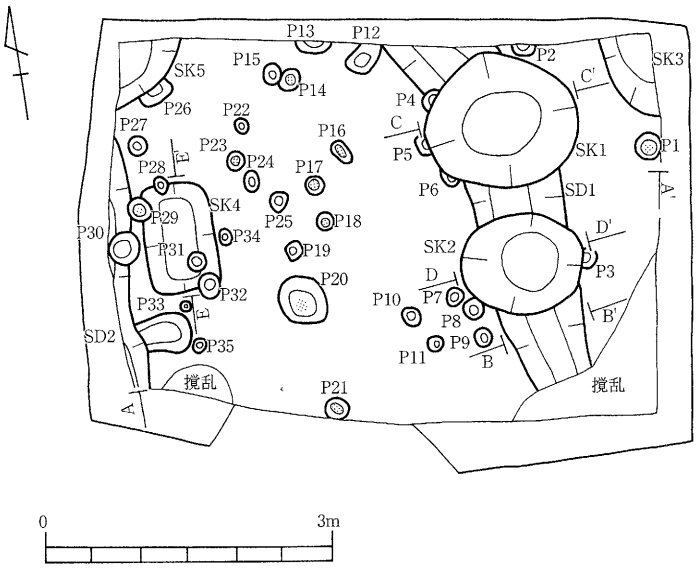
第３図　調査区配置図

２）土坑

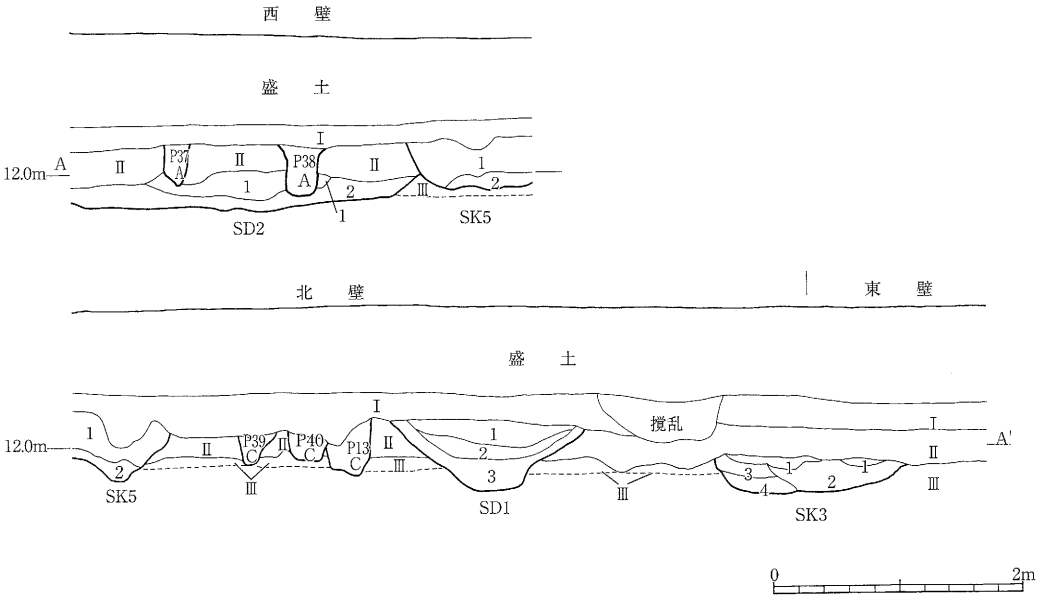
ＳＫ１　土坑

調査区の北東部で検出した。ＳＤ１、Ｐ４～６と重複しこれ

らより新しい。平面形は円形を呈し、径155cm、深さ25cmである。断面形は舟底形で、壁は底面から丸みを帯びて外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分かれ、いずれも人為堆積層である。出土遺物は、１、２層中から瓦質土器火鉢（Ⅰ－１）、長石釉陶器碗（Ⅰ－２）、鉄釉陶器小壷（Ⅰ－３）、鉄釉陶器擂鉢（Ⅰ－４）、黒釉陶器鉢（Ⅰ－５）、長石釉陶器大鉢（Ⅰ－６）、磁器染付仏飯具（Ｊ－１）、磁器染付碗（Ｊ－２）、非ロクロ土師器高坏（Ｃ－１）の他、非ロクロ土師器甕片、須恵器甕片、土師質土器坏片、磁器碗片が出土している。遺物は１層に特に集中しており、円礫や木炭塊を伴っている。陶磁器類についてはⅠ－２が16世紀末～17世紀初、Ⅰ－６が17世紀代の唐津、Ⅰ－３が17世紀代の岸窯、Ⅰ－１が江戸時代の在地、Ⅰ－４、Ⅰ－５が19世紀代の堤、Ｊ－１、Ｊ－２が18～19世紀代の肥前である。

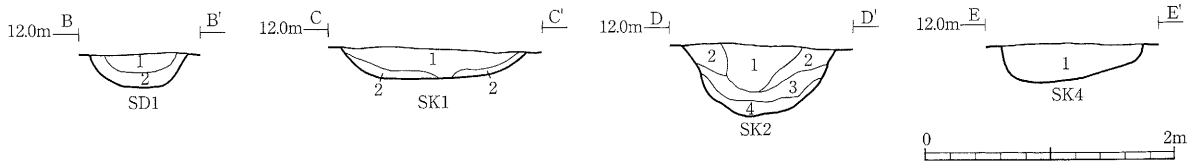


第４図　Ⅰ区遺構配置図



遺構	層位	土　色	土　性	備　考	遺構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭粒、焼土粒、砂粒を含む。	SD2	2	10YR4/4 褐色	シルト	10YR2/2 黒褐色粘土ブロック、粘土粒を含む。
	Ⅱ	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	木炭粒、Ⅲ層土ブロックを含む。Ⅰ層より暗い色調。	SK3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭粒、マンガン粒を含む。
	Ⅲ	10YR4/6 褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック、酸化鉄斑を含む。		2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	木炭塊、マンガン粒、酸化鉄斑、径1～3cmの円礫を含む。
SD1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰小ブロック、木炭粒を含む。		3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト小ブロック、木炭粒、酸化鉄斑を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	灰白色火山灰ブロック、木炭粒を含む。		4	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック、焼土塊、木炭粒、マンガン粒を含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック、木炭粒、酸化鉄斑を含む。	SK5	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/6褐色シルトブロック、木炭粒、マンガン粒、酸化鉄斑を含む。
SD2	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6黄褐色シルトブロック、木炭粒、焼土粒を含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック、酸化鉄斑を含む。

第５図　Ⅰ区調査区　西壁・北壁・東壁断面図

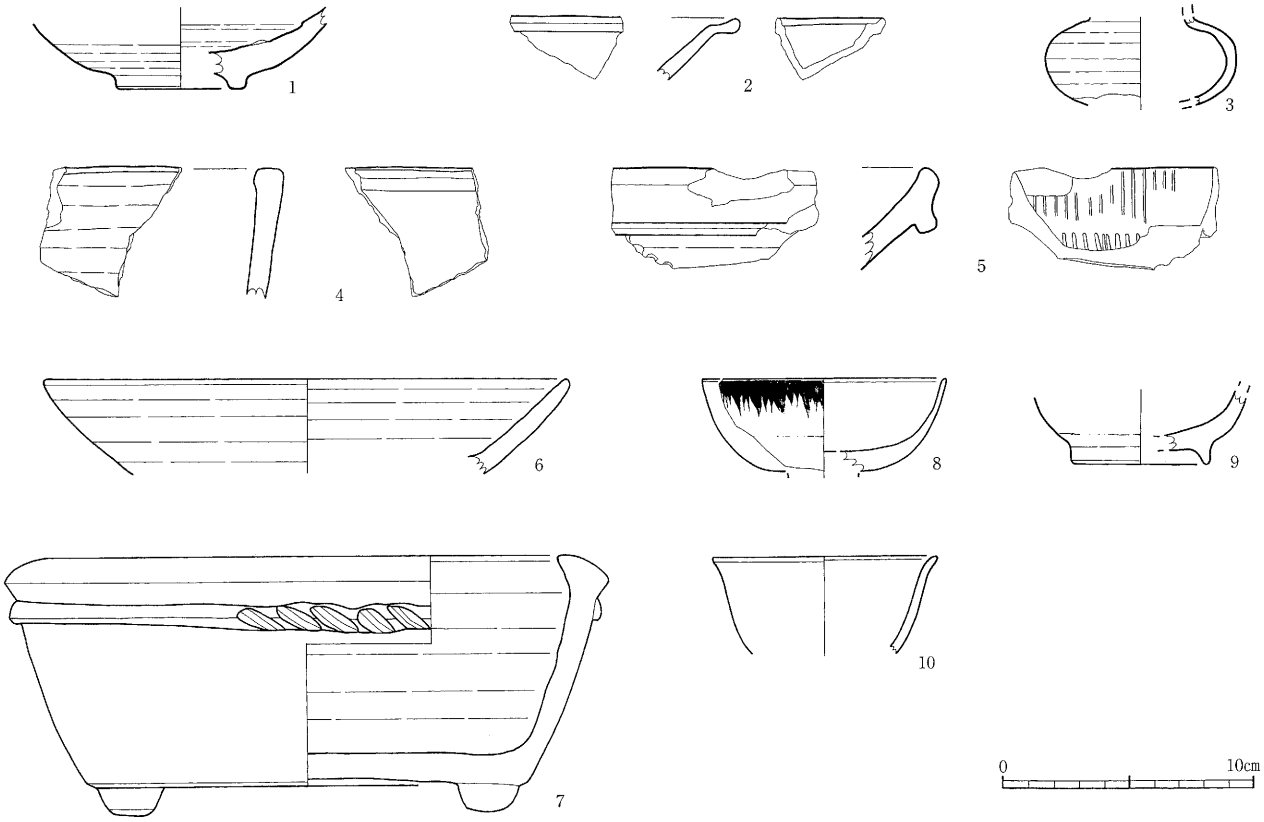


遺構	層位	土　色	土　性	備　考	遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SD1	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR7/1灰色（灰白色火山灰）ブロック、木炭粒、焼土粒を含む。	SK2	2	10YR4/4 褐色	シルト	木炭粒、10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/6褐色シルトブロック、木炭粒、焼土粒を含む。		3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR2/2黒褐色粘土ブロック、10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック、焼土粒を含む。
SK1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	φ2cmの木炭塊、焼土粒、φ1～15cmの円礫、10YR4/6褐色シルトブロックを含む。		4	10YR5/3 にぶい黄褐色	細砂	10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック、木炭粒を含む。
	2	10YR4/6 褐色	シルト	φ1～2cmの円礫、木炭粒を含む。	SK4	1	10YR4/4 褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土小ブロックを斑状に多量に含む、木炭粒を含む。
SK2	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR4/4褐色シルトブロックを含む。					

第６図　遺構断面図

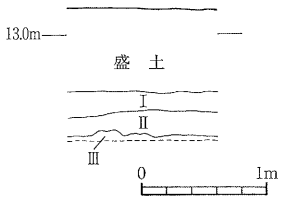
ＳＫ２　土坑

調査区の南東部で検出した。ＳＤ１、Ｐ３と重複しこれらより新しい。平面形は長円形を呈し、長径125cm、短径116cm、深さ58cmである。断面形は椀形で、壁は底面から丸みを帯びて直立気味に立ち上がる。底面は丸みを帯びる。堆積土は４層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は土師器甕片が４点出土した。



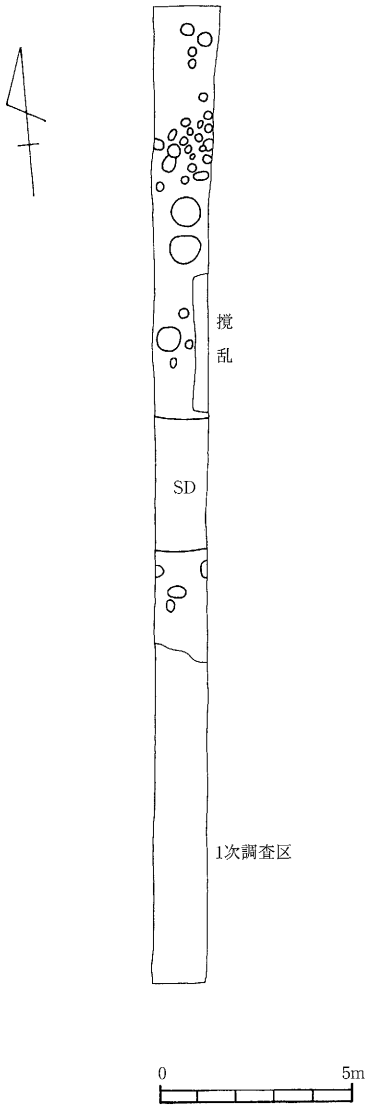
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　徴	写真図版
1	Ⅰ－2	陶器　皿	Ⅰ区		SK1　1・2層	(3.2)		5.2	唐津　16c末～17c前半　長石釉　体部下端から高台は露胎。見込みに目跡あり。	3-1
2	Ⅰ－6	陶器　大鉢	Ⅰ区		SK1　1・2層	(2.5)			唐津　17c後半　長石釉　内面　白泥土刷毛目文	3-2
3	Ⅰ－3	陶器　小壺	Ⅰ区		SK1　1・2層	(3.5)			岸窯系　17c代　鉄釉	3-3
4	Ⅰ－5	陶器　鉢	Ⅰ区		SK1　1・2層	(5.1)			堤　19c代（幕末～明治）黒釉	3-4
5	Ⅰ－4	陶器　擂鉢	Ⅰ区		SK1　1・2層	(4.0)			堤　19c代　鉄釉	3-5
6	Ⅰ－8	土師質土器　皿	Ⅰ区		SK1　1・2層	(3.8)	22.2		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	3-6
7	Ⅰ－1	瓦質土器　火鉢	Ⅰ区		SK1　1・2層	10.3	23.9	16.8	外面:粘土紐貼付のち刻み目　ヘラミガキ、内面:ロクロナデ　底部:ヘラケズリ　三足貼付	3-9
8	Ｊ－1	磁器　碗	Ⅰ区		SK1　1・2層	(3.7)	9.8		肥前　18c代　仏飯具?　染付　雨降り文	3-7
9	Ｊ－2	磁器　碗	Ⅰ区		SK1　1・2層	(3.1)	5.5		肥前　江戸時代　染付	3-8
10	Ⅰ－7	陶器　端反碗	Ⅱ区	遺構検出面		(3.9)	9.0		大堀相馬　19c前半代　白濁釉	3-10

第７図　出土遺物



遺構	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅰ	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	木炭粒、焼土粒、酸化鉄粒、マンガン粒を含む。
	Ⅱ	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR2/2黒褐色シルト質粘土ブロック、木炭粒、マンガン粒を含む。
	Ⅲ	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック、酸化鉄斑を含む。

第８図　Ⅱ区調査区西壁断面図



第９図　Ⅱ区遺構配置図

ＳＫ３　土坑

調査区の北東コーナー部で検出した。他の遺構との重複はない。遺構の一部を検出したに留まっているため、全体の形状や規模は不明であるが、円形を呈する土坑と思われる。検出した規模は南北98cm、東西63cm、深さ31cmである。断面形は皿状で、壁は底面から外傾して緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ４　土坑

調査区の西半部で検出した。P28、29、31、32と重複しこれらより古い。平面形は隅丸方形を呈し、南北120cm、東西74cm、深さ32cmである。断面形は方形で、壁は底面から直立して立ち上がる。底面は北から南に傾斜している。堆積土は１層で、人為堆積である。遺物は土師器甕片が１点出土した。

ＳＫ５　土坑

調査区の北西コーナー部で検出した。P26と重複しこれよりも新しい。遺構の一部を検出したに留まっているため、全体の形状や規模は不明である。検出した規模は南北75cm、東西66cm、深さ56cmである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。堆積土は２層に分かれ、人為堆積である。遺物は土師質土器坏片が２点出土した。

３）ピット

調査区内で36基のピットを検出した。堆積土の性質では３種類に分けられ、平面形では円形、長円形、方形、不整形の４種類に分けられる。形状としては径20～30cm、深さ10～30cmの円形のものが大半を占める。このうち柱痕跡の認められるものが９基あるが、建物跡として配置を想定できるものはなかった。遺物は、P20から土師器甕片、Ｐ32から須恵器坏片がそれぞれ１点出土した。年代的には古代から近世頃のものと思われる。

６　まとめ

①　保春院前遺跡は、仙台市若林区保春院前丁、六十人町に所在する古代から近世にかけての複合遺跡である。

②　今回の調査によって検出された遺構は、溝跡２条、土坑５基、ピット36基である。出土遺物には、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、石製品、鉄製品がある。

No.	径(cm)	深さ(cm)	平面形	堆積土	柱痕跡	重　複　関　係
P1	30×27	36	円形	A	あり	
P2	25×13	9	長円形	A	なし	
P3	23×17	9	円形	A	なし	SK2に切られる
P4	28×14	12	長円形	B	なし	SD1を切り、SK1に切られる
P5	16×13	8	方形	B	なし	SK1に切られる
P6	19×10	10	円形	A	なし	SK1に切られる
P7	26×20	8	円形	A	なし	
P8	24	17	円形	A	なし	
P9	26×25	14	円形	A	なし	
P10	21×20	9	方形	A	なし	
P11	24×22	10	円形	A	なし	
P12	39×28		長方形	C	なし	
P13	33	14	長円形	C	なし	
P14	27×20	37	円形	C	あり	P15に切られる
P15	23×21	24	円形	C	なし	P14を切る
P16	34×21	52	長円形	A	あり	
P17	24×22	31	円形	A	あり	
P18	24×22	33	円形	A	あり	
P19	21×19	9	方形	A	なし	
P20	54×50	48	円形	A	あり	
P21	25×21	19	円形	A	あり	
P22	16	6	円形	C	なし	
P23	26×23	23	方形	B	あり	
P24	25×17	11	長円形	B	なし	
P25	24×19	5	不整形	B	なし	
P26	32×20	13	方形	C	なし	SK5に切られる
P27	23×21	8	円形	A	なし	
P28	15×14	6	円形	B	なし	SK4を切る
P29	26×25	34	円形	A	あり	SD2、SK4を切る
P30	38×34	32	円形	B	なし	SD2を切る
P31	23×21	16	方形	B	なし	SK4を切る
P32	22×21	19	円形	B	なし	SK4を切る
P33	13×12	3	方形	A	なし	
P34	16	9	円形	A	なし	
P35	14×13	6	円形	B	なし	
P36	55×44	18	長円形	A	なし	SD2に切られる

A：10YR3/3　暗褐色　シルト　木炭粒を微量に含む
B：10YR2/2　黒褐色　シルト　Ⅲ層土小ブロックを含む
C：10YR3/1　黒褐色　粘土質シルト　10YR4/1褐灰色粘土質シルト小ブロック、マンガン粒、酸化鉄斑を含む

ピット註記表

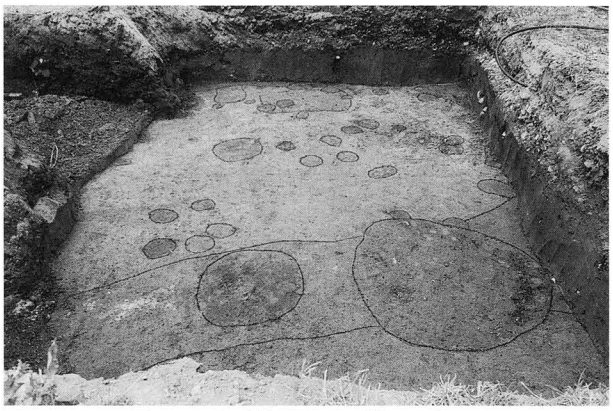
③　１号溝跡については、上層に含まれている灰白色火山灰が10世紀前半に降下したものと考えられることから、この頃までには埋没していたものと捉えられる。溝の機能していた年代は、出土遺物から平安時代前半以前のそれほど古くない段階と理解できる。

④　１号土坑については、近世最末期から明治初年頃の陶磁器類を包含していることから該期に埋没したものと思われる。また、これらの遺物が礫や木炭などを伴って一括投棄されたような堆積状況を示していることから、この土坑は廃棄坑と考えられる。２号土坑については、１号溝跡を切っていることから平安時代以降の年代が考えられる。これ以外の溝跡や土坑については、遺構の一部を検出したに留まっているため詳細は不明である。

引用・参考文献

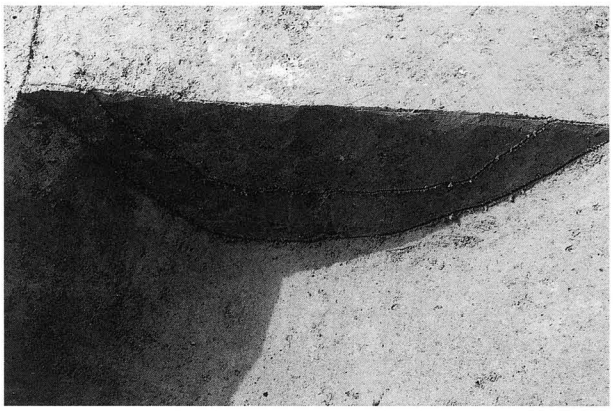
伊東真文（2002）：「若林城跡－第3次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第256集
佐藤　洋（1997）：「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集
仙台市教育委員会（2001）：「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集

1　調査前状況（北東より）



2　遺構検出状況（東より）

3　調査区　完掘状況（南東より）

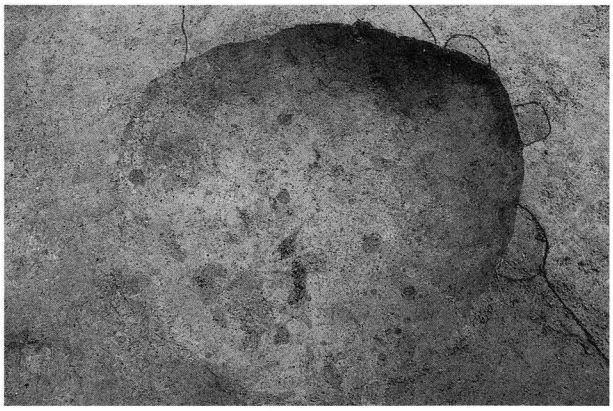


4　SD1　溝跡断面（南より）

5　SD1　溝跡全景（北より）

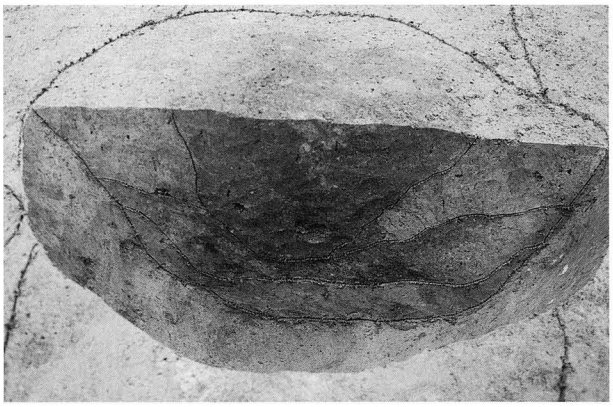
6　SD2　溝跡全景（北より）

7　SK1　土坑土層断面（南より）



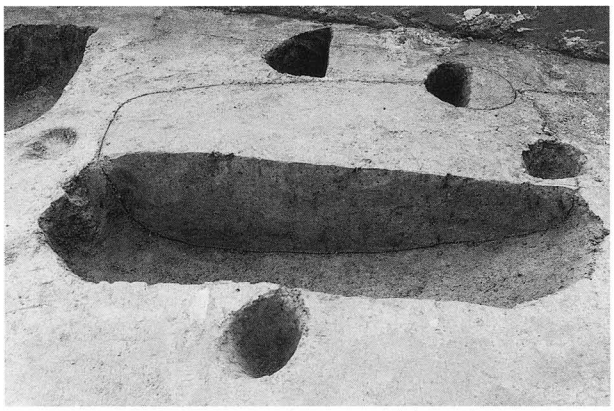
8　SK1　土坑全景（北より）

図版１　Ⅰ区調査区・溝跡・土坑

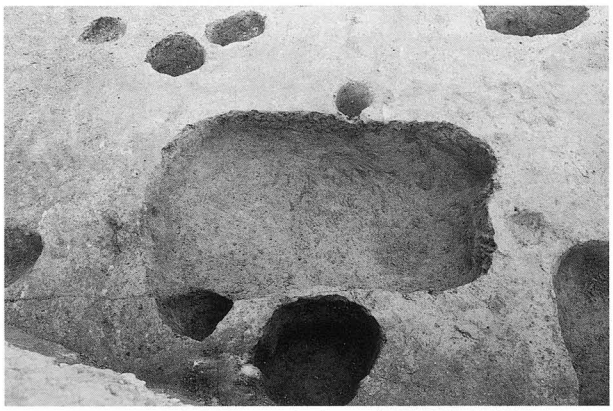


1　SK2　土坑土層断面（南より）

2　SK2　土坑全景（北東より）

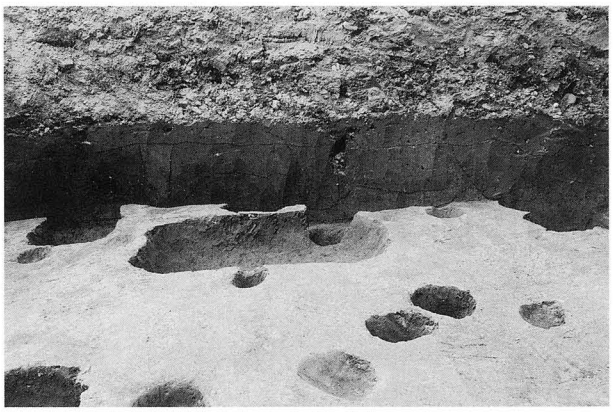


3　SK4　土坑土層断面（東より）

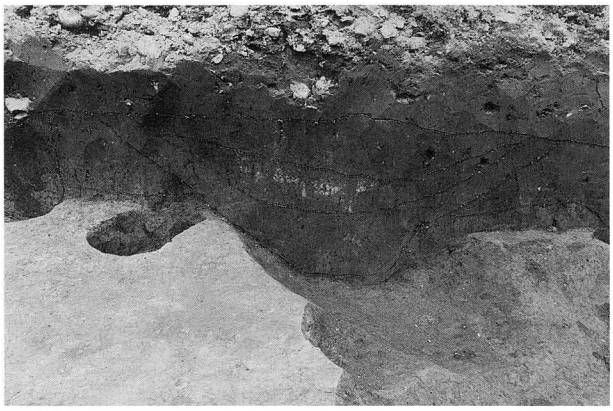


4　SK4　土坑全景（西より）

5　調査区　東壁土層断面（西より）



6　調査区　西壁土層断面（東より）

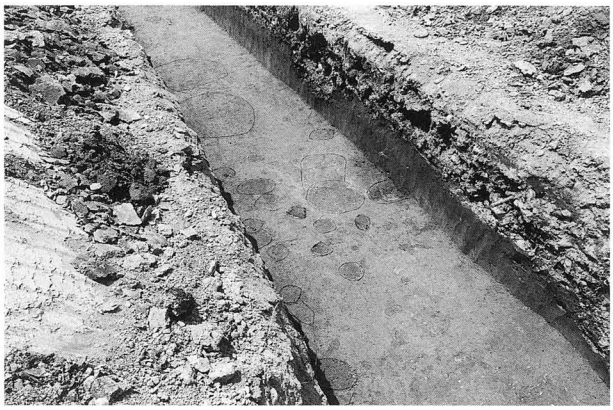


7　調査区北壁・SD1　溝跡土層断面（南より）

8　調査区北壁土層断面（南より）

図版２　Ⅰ区土坑・調査区土層断面

1　遺構検出状況（北より）



2　遺構検出状況（北東より）

※縮尺は任意とする。

1　陶器　皿　　Ⅰ−2　（Ⅰ区SK1　第7図1）
2　陶器　大鉢　　Ⅰ−6　（Ⅰ区SK1　第7図2）
3　陶器　小壺　　Ⅰ−3　（Ⅰ区SK1　第7図3）
4　陶器　鉢　　Ⅰ−5　（Ⅰ区SK1　第7図4）
5　陶器　擂鉢　　Ⅰ−4　（Ⅰ区SK1　第7図5）
6　土師質土器　皿　　Ⅰ−8　（Ⅰ区SK1　第7図6）
7　磁器　碗　　J−1　（Ⅰ区SK1　第7図8）
8　磁器　碗　　J−2　（Ⅰ区SK1　第7図9）
9　瓦質土器　火鉢　　Ⅰ−1　（Ⅰ区SK1　第7図7）
10　陶器　端反碗　　Ⅰ−7　（Ⅱ区遺構検出面　第7図10）

図版３　Ⅱ区の状況・出土遺物

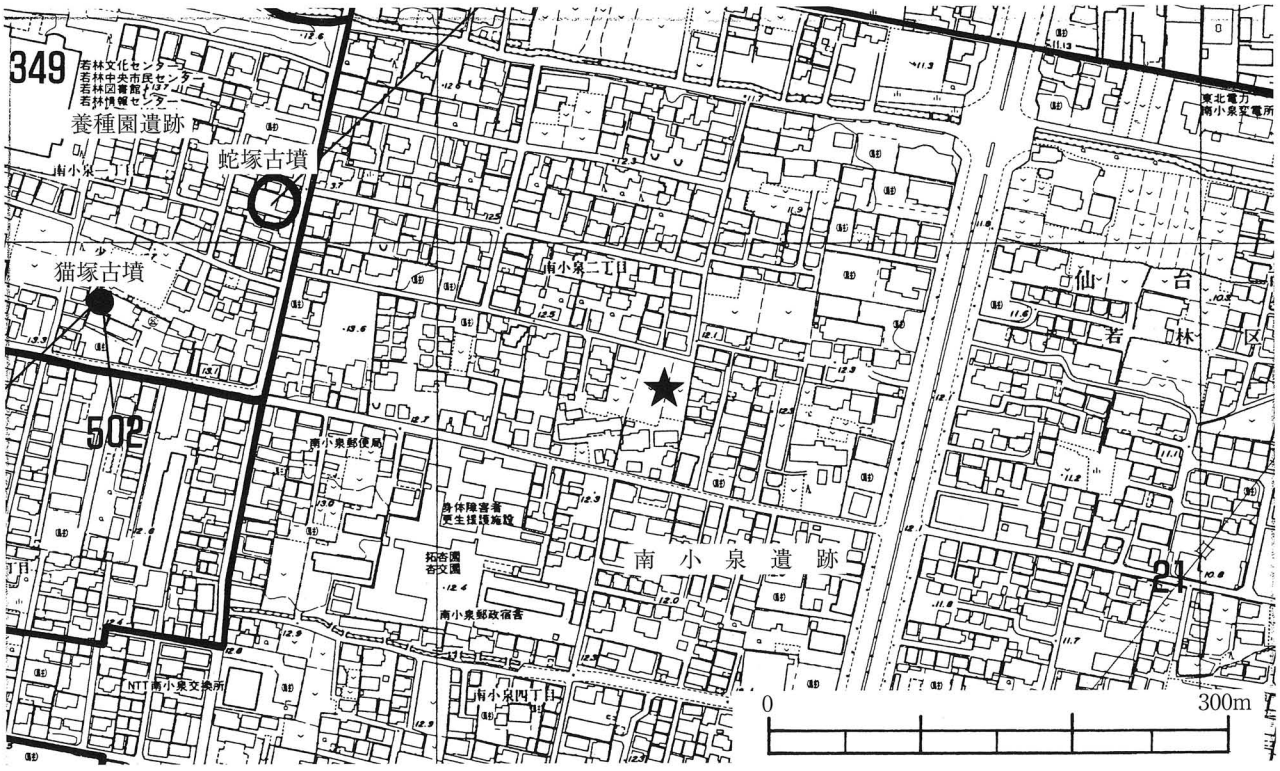
Ⅱ　南小泉遺跡（第40次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区南小泉２丁目101－１、102－２
調 査 期 間	平成15年７月16日～７月17日
調査対象面積	508.36㎡
調 査 面 積	90㎡
調 査 原 因	共同住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之　　教諭　豊村幸宏

2　遺跡の位置と環境

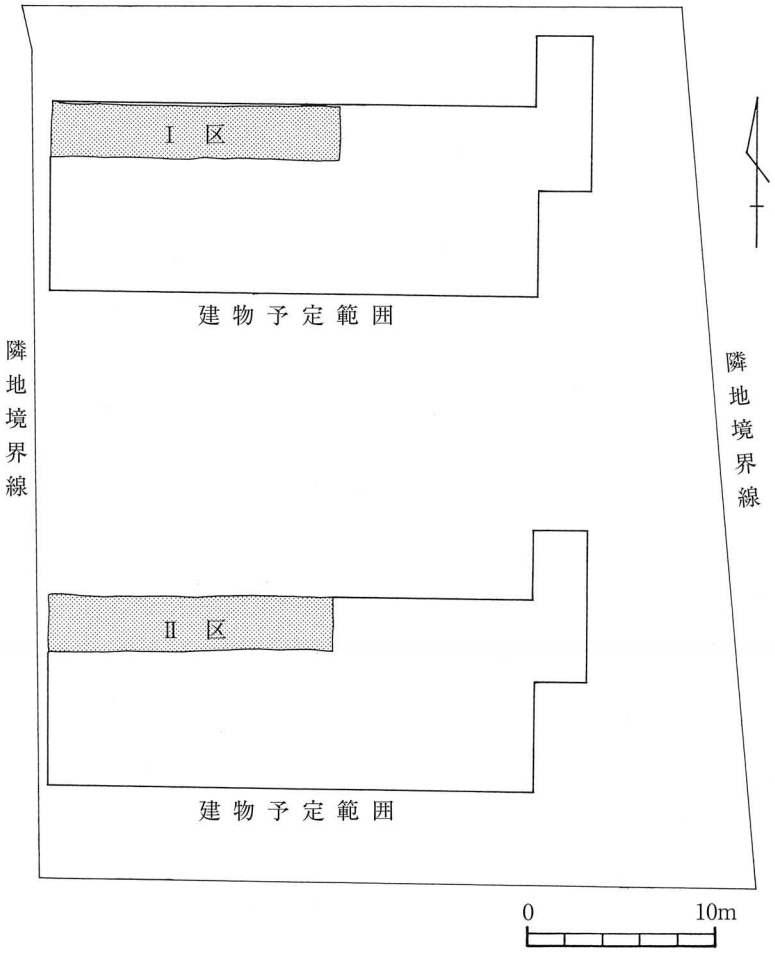
南小泉遺跡は、JR仙台駅の南東約３㎞付近の仙台市若林区南小泉、古城、遠見塚地区に所在する面積約135haの遺跡である。仙台市街地の東側、広瀬川の北側に位置しており、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地の標高11～13mの自然堤防上に立地している。南小泉遺跡が広く認識されたのは、昭和14年から16年にかけての霞の目飛行場拡張工事に際し、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が発見されたことによる。特に古墳時代中期の土師器の標識遺跡として知られることとなり、東北地方の土師器研究に与えた影響は大きい。これまでの各調査では縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見されており、自然堤防上に位置するという利点を生かし周辺の低湿地に見られる遺跡群とも関連しながら人々の生活の場となってきている。



第10図　調査地点と周辺の地形

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年７月２日付けで菅原修一氏より仙台市若林区南小泉２丁目101－１、102－２に於ける改良杭打工事を伴うＲＣ造３階建共同住宅２棟の建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文２－77号で回答）。これを受けて平成15年７月16日に、建築予定範囲内でそれぞれ東西15m、南北３mの調査区を設定して（北側Ⅰ区、南側Ⅱ区）確認調査を実施した。その結果、溝跡、ピット等が検出されたため引き続き遺構の精査を行った。調査は、重機によりⅠ層を排除し、Ⅱ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第11図　調査区配置図

4　基本層位

Ⅰ区で確認した基本層はⅠ層からⅡ層まで大別２層、細別３層である。Ⅰａ層は、Ⅰｂ層ブロック土、木炭片を含む黒褐色シルト層である。Ⅰｂ層は、木炭粒、焼土粒を含む暗褐色シルト層である。いずれの層も旧耕作土と考えられる。Ⅱ層は、にぶい黄褐色砂質シルト層で酸化鉄斑を含む。周辺一帯の基盤となる自然堆積層である。この層の上面が遺構検出面となっている。Ⅱ区で確認した基本層はⅠ層からⅡ層まで大別2層、細別5層である。Ⅰａ層は、黒褐色シルト層で木炭粒を含む。Ⅰｂ層は、黒褐色シルト層でⅠｄ層土、Ⅱ層土ブロック、木炭片、焼土粒を含む。Ⅰｃ層は、黒褐色シルト層でⅡ層土ブロックを少量含み、木炭粒を含む。Ⅰｄ層は、灰オリーブ色砂層である。これらの層は現代の耕作土及び盛土と考えられる。Ⅱ層はにぶい黄褐色シルト層でマンガン粒、酸化鉄斑を含む。この地域の基盤となっている自然堆積層と考えられる。この層の上面で遺構検出作業を実施した。

5　発見遺構と出土遺物

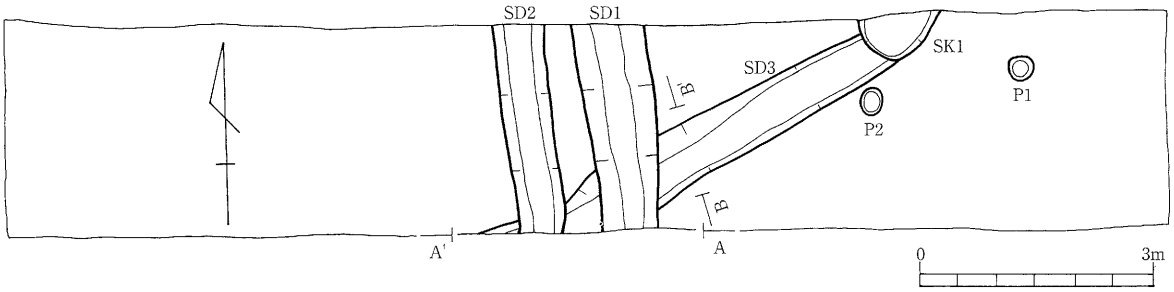
発見遺構は、Ⅰ区が溝跡３条、土坑1基、ピット２基、Ⅱ区が溝跡２条、焼土遺構１基、ピット14基である。

Ⅰ区の調査

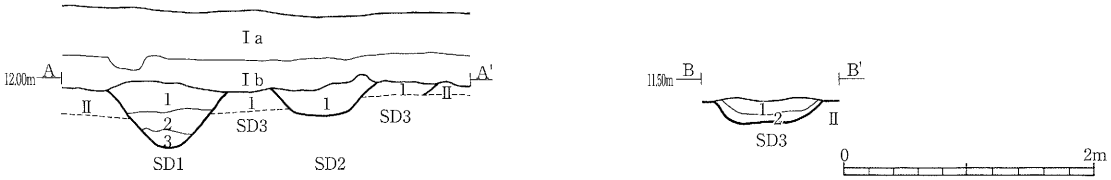
１）溝　跡

ＳＤ１　溝跡

調査区のほぼ中央部で検出された。南北方向に延びているものと思われる。ＳＤ３と重複しこれよりも新しい。規模は上幅90cm、下幅10cm、深さ50cmである。断面形は底面がやや丸みを帯びたV字形である。壁は底面から外傾して立ち上がる。堆積土は３層に分かれ人為堆積層と考えられる。出土遺物は、ロクロ調整され内外面黒色処理された土師器坏片と土師器甕片がそれぞれ１点ずつ出土した。



第12図　Ⅰ区遺構配置図



遺　構	層位	土　色	土　性	備　　考	遺　構	層位	土　色	土　性	備　　考
基本層	Ⅰa	10YR3/2 黒褐色	シルト	Ⅰb層土ブロック、木炭片を含む。旧耕作土。	SD1	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	Ⅱ層土極小ブロックを斑状に含む。
	Ⅰb	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭粒、焼土粒を含む。旧耕作土。	SD2	1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトブロック、Ⅱ層土ブロック、酸化鉄斑、マンガン粒、木炭粒を含む。
	Ⅱ	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑を含む。	SD3	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロック、Ⅱ層土ブロック、酸化鉄斑、マンガン粒、木炭粒を含む。
SD1	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土小ブロック、マンガン粒、木炭粒を含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅱ層土ブロック、木炭粒を含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑、マンガン粒を含む。					

第13図　Ⅰ区南壁・遺構断面図

ＳＤ２　溝跡

調査区のほぼ中央部でＳＤ１の西側に平行して検出された。ＳＤ３と重複しこれよりも新しい。規模は上幅85cm、下幅40cm、深さ35cmである。断面形は扁平な逆台形である。壁は底面から丸みを持って外傾して立ち上がる。堆積土は1層で人為堆積層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ３　溝跡

調査区の東半部で検出された。北東から南西方向に延びている。ＳＤ１、ＳＤ２、ＳＫ１と重複しこれらより古い。規模は上幅90cm、下幅45cm、深さ15cmである。断面形は扁平な逆台形である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は２層で、１層は人為堆積層、２層は自然堆積層と考えられる。遺物は、１層からロクロ調整された土師器の甕片が6点出土した。

２）土　坑

ＳＫ１　土坑

調査区の東半部北壁際で検出された。ＳＤ３と重複しこれより新しい。規模は、径1.1mの円形を呈するものと思われ、深さは24cmである。断面形は方形である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は１層で人為堆積層と考えられる。遺物は出土しなかった。

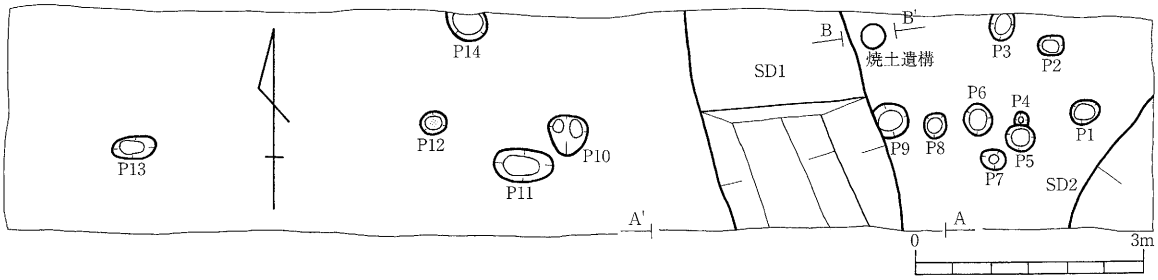
３）ピット

調査区の東半部で２基のピットを検出した。規模は、Ｐ１が径36cm、深さ44cm、Ｐ２が径33cm、深さ49cmの円形で堆積土は灰黄褐色シルトである。柱痕跡は認められず、遺物の出土もなかった。

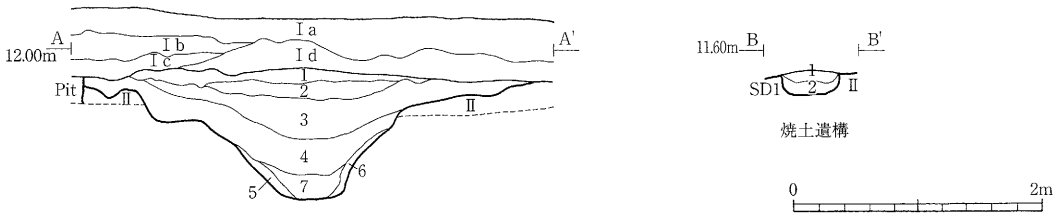
Ⅱ区の調査

１）溝　跡

ＳＤ１　溝跡



第14図　Ⅱ区遺構配置図



遺　構	層位	土　色	土　性	備　　考	遺　構	層位	土　色	土　性	備　　考
基本層	Ⅰa	10YR2/2 黒褐色	シルト	木炭粒を含む。	SD1	4	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック、10YR7/2にぶい黄色粘土小ブロック、酸化鉄斑、マンガン粒、木炭粒、地山粒を含む。
	Ⅰb	10YR3/2 黒褐色	シルト	Ⅰd層土、Ⅱ層土ブロック、木炭片、焼土粒を含む。		5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
	Ⅰc	10YR3/2 黒褐色	シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。木炭粒を含む。		6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
	Ⅰd	7.5Y5/2 灰オリーブ色	砂			7	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄斑、マンガン粒を含む。
	Ⅱ	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄斑、マンガン粒を含む。	焼土遺構	1	5YR4/6 赤褐色	シルト	被熱により赤変、マンガン粒を含む。層上面は7.5YR4/3褐色シルト土。
SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄斑、木炭粒を含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑を多量に含む。マンガン粒、木炭粒、地山粒を含む。	Pit	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土ブロック、木炭粒、マンガン粒を含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/1褐灰色シルトブロック、10YR2/1黒色粘土ブロック、酸化鉄斑、マンガン粒を含む。					

第15図　Ⅱ区南壁・遺構断面図

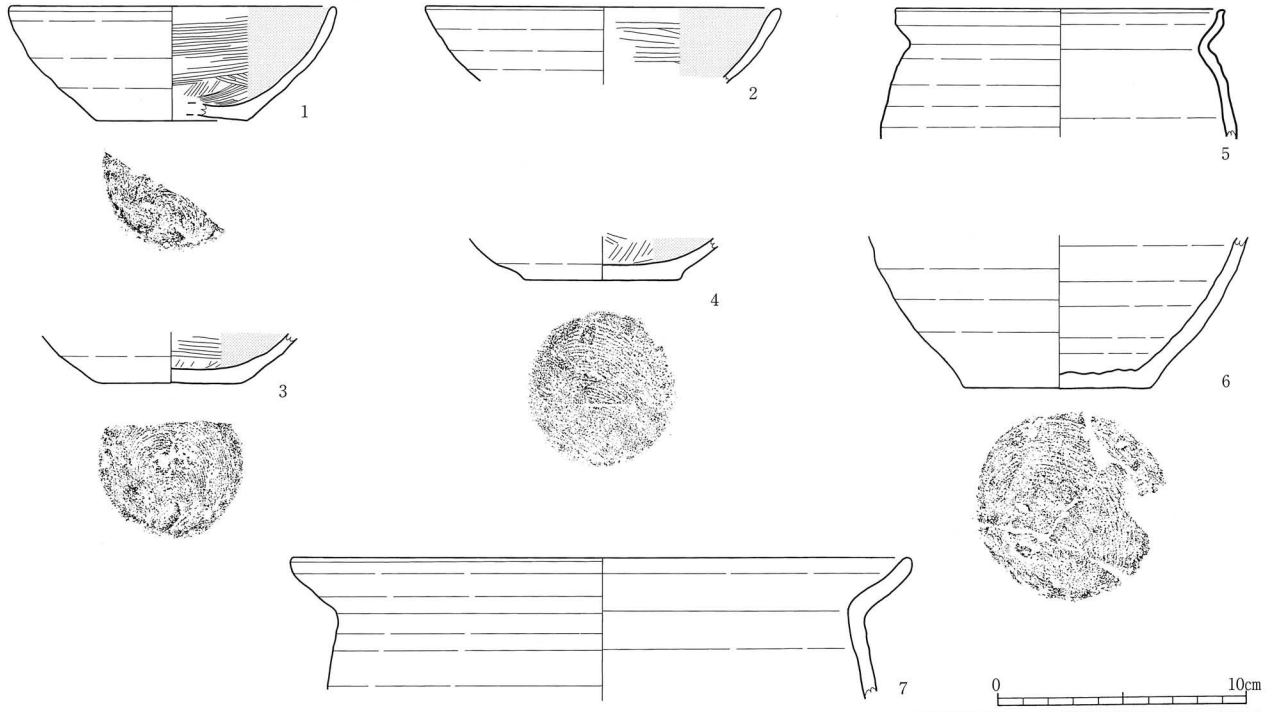
調査区の東半部で検出された。南北方向に延びているものと思われる。焼土遺構、Ｐ９と重複しこれらよりも新しい。規模は、上幅3.5m、下幅50cm、深さ1.05mである。断面形は逆台形である。壁は下半部では底面からやや直立気味に立ち上がり、上半部では開き気味で、東壁に幅30cmの犬走り状のテラスが見られる。底面は平坦である。堆積土は7層に分かれ、１～４層は人為堆積層、５～７層は自然堆積層と考えられる。出土遺物には、内外面ロクロ調整され底部内面を放射状にヘラミガキした後黒色処理を施した土師器坏（Ｄ－１、２、３）と同じく口縁部内面を平行にヘラミガキした後に黒色処理した土師器坏（Ｄ－４）、内外面ロクロ調整された土師器甕（Ｄ－５、６、７）のほか非ロクロ土師器坏片１点、ロクロ土師器坏片４点、須恵器甕片２点、磨石１点がある。ロクロ土師器については、形態から９世紀後半～10世紀前半頃に当てはまると考えられる。周辺に当該期の集落が存在した可能性が高く、溝跡の堆積土に混入したものと思われる。

ＳＤ２　溝跡

調査区の南東コーナーで検出された。遺構の一部を検出、掘り込んだのに留まる。遺構の詳細については不明であるが、北東から南西方向に延びる溝跡の西辺部と判断した。出土遺物は、土師器坏片２点、甕片４点、須恵器甕片１点である。

２）焼土遺構

調査区の東半部で検出された。ＳＤ１と重複しこれよりも古い。規模は東西45cm以上、南北32cm以上、深さ20cmである。平面形は不整円形である。断面形は半円形である。壁は底面から丸みを帯びて直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。被熱によってⅡ層が赤色硬化している。炉の跡もしくは何らかの焼成にかかわる遺構の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	D-1	土師器　坏	Ⅱ区	SD1　埋土	4.6	13.0	6.0	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ黒色処理　底部:回転糸切り	5-1
2	D-4	土師器　坏	Ⅱ区	SD1　埋土	(3.0)	14.0		外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ黒色処理	5-2
3	D-3	土師器　坏	Ⅱ区	SD1　埋土	(2.0)		5.9	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ黒色処理　底部:回転糸切り	5-4
4	D-2	土師器　坏	Ⅱ区	SD1　埋土	(1.7)		6.2	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ黒色処理　底部:回転糸切り	5-5
5	D-6	土師器　甕	Ⅱ区	SD1　埋土	(5.2)	13.0		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ　二次加熱を受けている	5-3
6	D-5	土師器　甕	Ⅱ区	SD1　埋土	(6.0)		7.5	外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ　底部:回転糸切り　二次加熱を受けている	5-7
7	D-7	土師器　甕	Ⅱ区	SD1　埋土	(5.7)	24.5		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	5-6

第16図　Ⅱ区SD1溝跡出土遺物

3）ピット

ピットは14基検出された。規模は径20～80cm、深さ６～46cmである。平面形は、円形、長円形、方形、長方形、不整形である。柱痕跡を伴うものはP12のみであり、調査区内で建物跡を想定することはできなかった。出土遺物は、Ｐ７から土師器甕片が１点、Ｐ９からロクロ土師器坏片2点、甕片1点が出土した。

4）その他の遺物

Ⅰ区の遺構検出面からロクロ土師器甕片、Ⅱ区の遺構検出面から非ロクロ土師器高坏（Ｃ－１）、甕（Ｃ－２）、青磁碗（Ｊ－１）、白磁手塩皿（Ｊ－２）が出土している。Ｃ－１、２は５世紀代の南小泉式に該当する。Ｊ－１は17世紀代の肥前、Ｊ－２は19世紀前半代で産地は不明である。周辺に該期かそれ以降の遺構が存在する可能性も考えられる。その他、ロクロ土師器坏片、甕片、赤焼土器坏片、土師質土器小皿片、陶器擂鉢片がⅡ区のⅠ層中から出土した。

6　まとめ

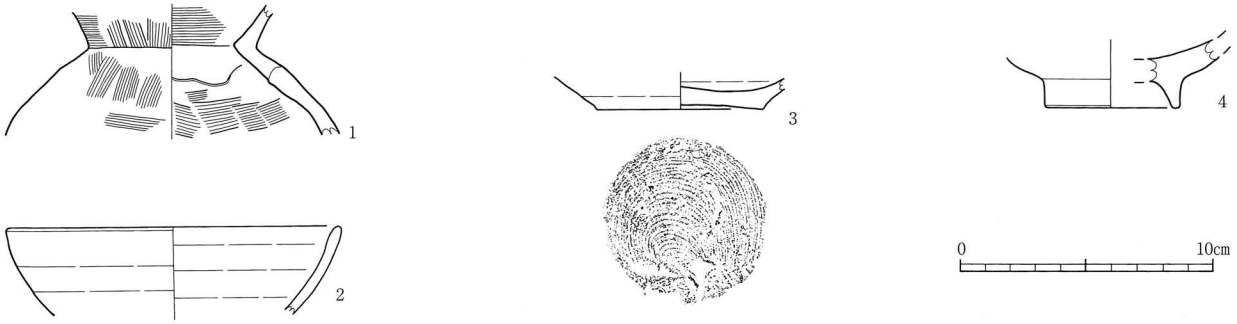
①　今回の調査で検出された遺構は、溝跡5条、土坑１基、焼土遺構1基、ピット16基である。

②　出土遺物には、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器、赤焼土器、土師質土器、陶磁器、礫石器がある。

③　Ⅱ区のＳＤ１溝跡については、規模や形状から屋敷の掘割といった区画溝の可能性が高い。年代的には中世以降と捉えられる。それ以外の溝跡については、小規模であることから耕作などに係わるものと考えられる。

④　焼土遺構については、何らかの焼成に関連した遺構と考えられるが遺物を伴わないため年代は不明である。

Ⅱ　南小泉遺跡（第40次）



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	C－1	土師器・甕	Ⅱ区	遺構検出面	(5.3)			外面:口縁部ヨコナデ・ヘラナデ　体部ヘラナデ　内面:口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	5－9
2	D－9	赤焼土器・坏	Ⅱ区	遺構検出面	(3.5)	13.2		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	5－11
3	D－8	赤焼土器・坏	Ⅱ区	遺構検出面	(1.3)		6.5	外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ　底部:回転糸切り	5－8
4	J－1	青磁・碗	Ⅱ区	遺構検出面	(2.7)		5.2	肥前　17c代?	5－10

第17図　Ⅱ区出土遺物

引用・参考文献

五十嵐康洋（1998）：「南小泉遺跡第26次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第225集

工藤信一郎他（1998）：「南小泉遺跡第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第226集

齋野裕彦（1994）：「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集

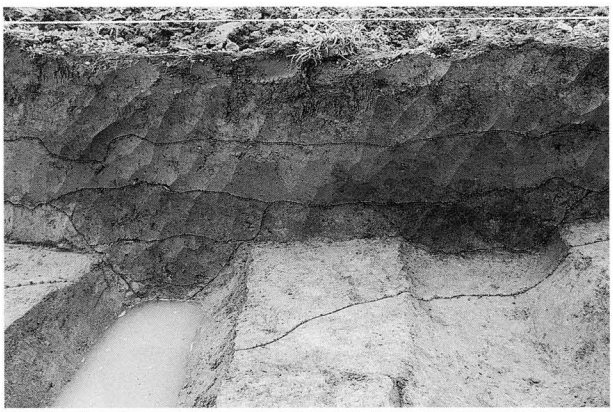
佐藤洋（1990）：「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集

1　Ⅰ区遺構検出状況（南東より）

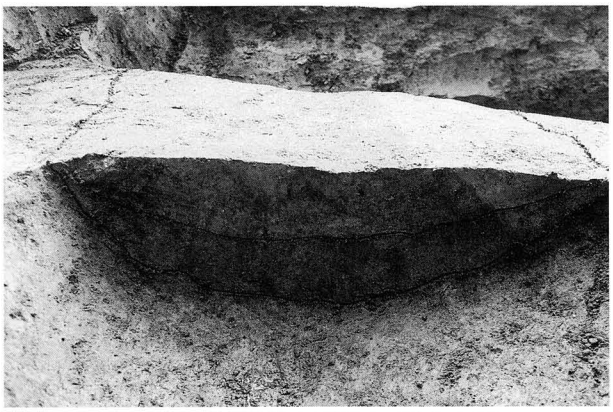
2　Ⅰ区調査区完掘状況（東より）

3　Ⅰ区SD1・SD2溝跡検出状況（南より）

4　Ⅰ区SD1・SD2溝跡全景（北より）



5　Ⅰ区調査区南壁SD1・SD2溝跡土層断面（北より）

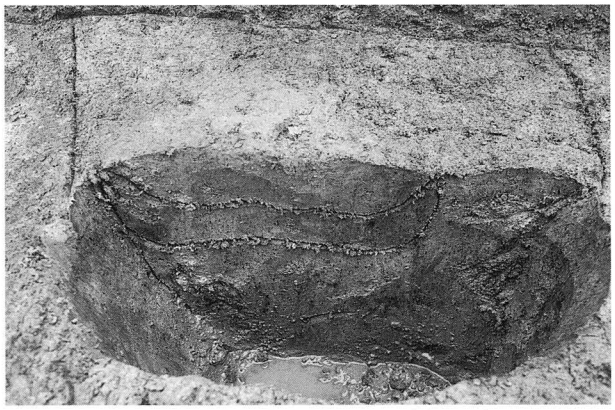


6　Ⅰ区SD3溝跡土層断面（北東より）

7　Ⅱ区遺構検出状況（東より）

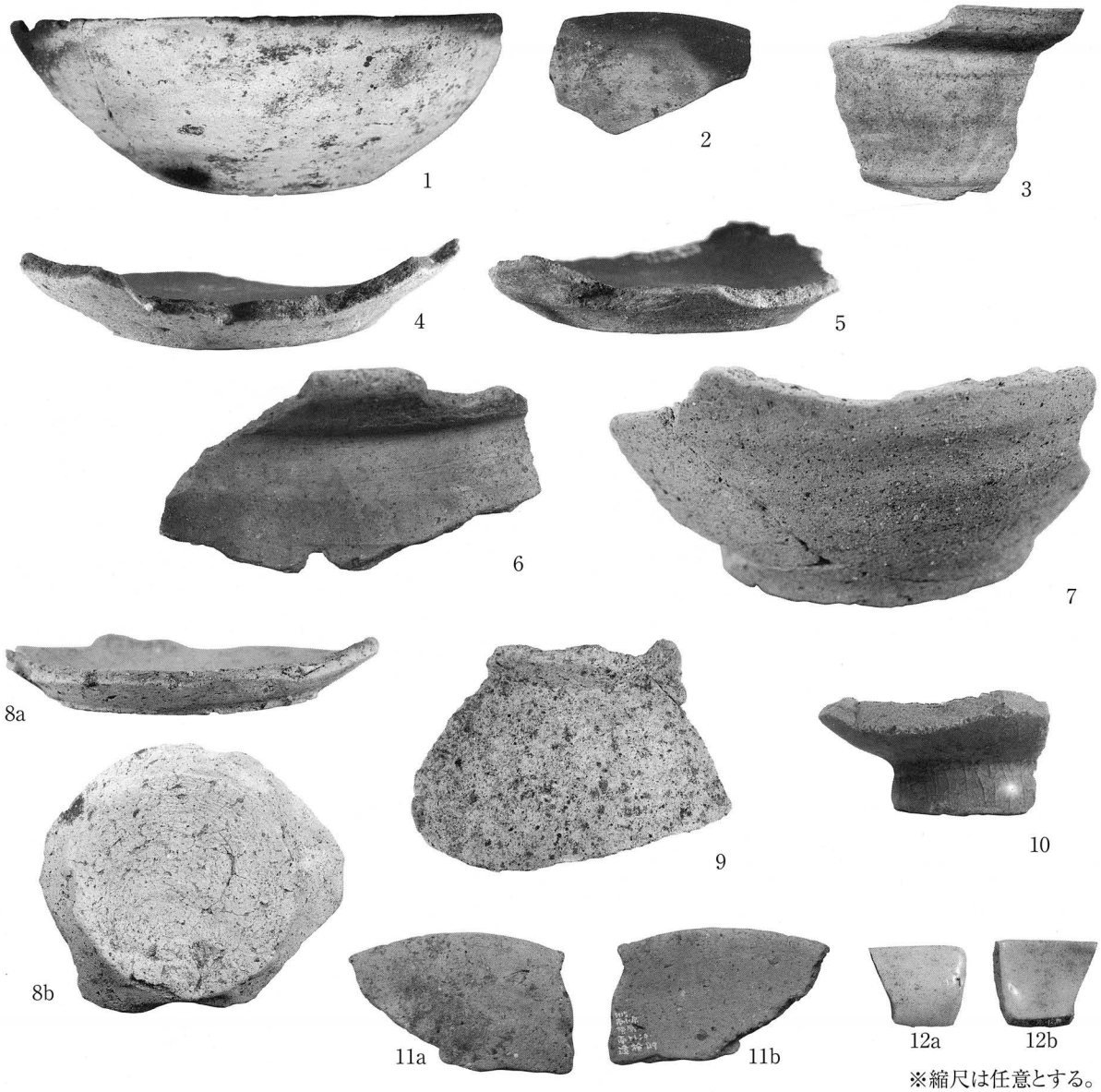
8　Ⅱ区SD1溝跡土層断面（北より）

図版4　Ⅰ区・Ⅱ区調査状況



1　Ⅱ区焼土遺構土層断面（南より）

2　Ⅱ区調査区南壁土層断面・SD1溝跡全景（北より）



※縮尺は任意とする。

1 土師器　坏　D－1（Ⅱ区SD1第16図1）
2 土師器　坏　D－4（Ⅱ区SD1第16図2）
3 土師器　甕　D－6（Ⅱ区SD1第16図5）
4 土師器　坏　D－3（Ⅱ区SD1第16図3）
5 土師器　坏　D－2（Ⅱ区SD1第16図4）
6 土師器　甕　D－7（Ⅱ区SD1第16図7）
7 土師器　甕　D－5（Ⅱ区SD1第16図6）
8 赤焼土器　坏　D－8（Ⅱ区遺構検出面 第17図3）
9 土師器　甕　C－1（Ⅱ区遺構検出面 第17図1）
10 青　磁　碗　J－1（Ⅱ区遺構検出面 第17図4）
11 赤焼土器　坏　D－9（Ⅱ区遺構検出面 第17図2）
12 白　磁　手塩皿　J－2（Ⅱ区 遺構検出面）

図版5　Ⅱ区調査状況・出土遺物

Ⅲ　富沢遺跡（第127次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区泉崎1丁目20－5、20－6
調 査 期 間　　平成15年4月11日～4月22日
調査対象面積　　222.04㎡
調 査 面 積　　21㎡
調 査 原 因　　店舗・共同住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

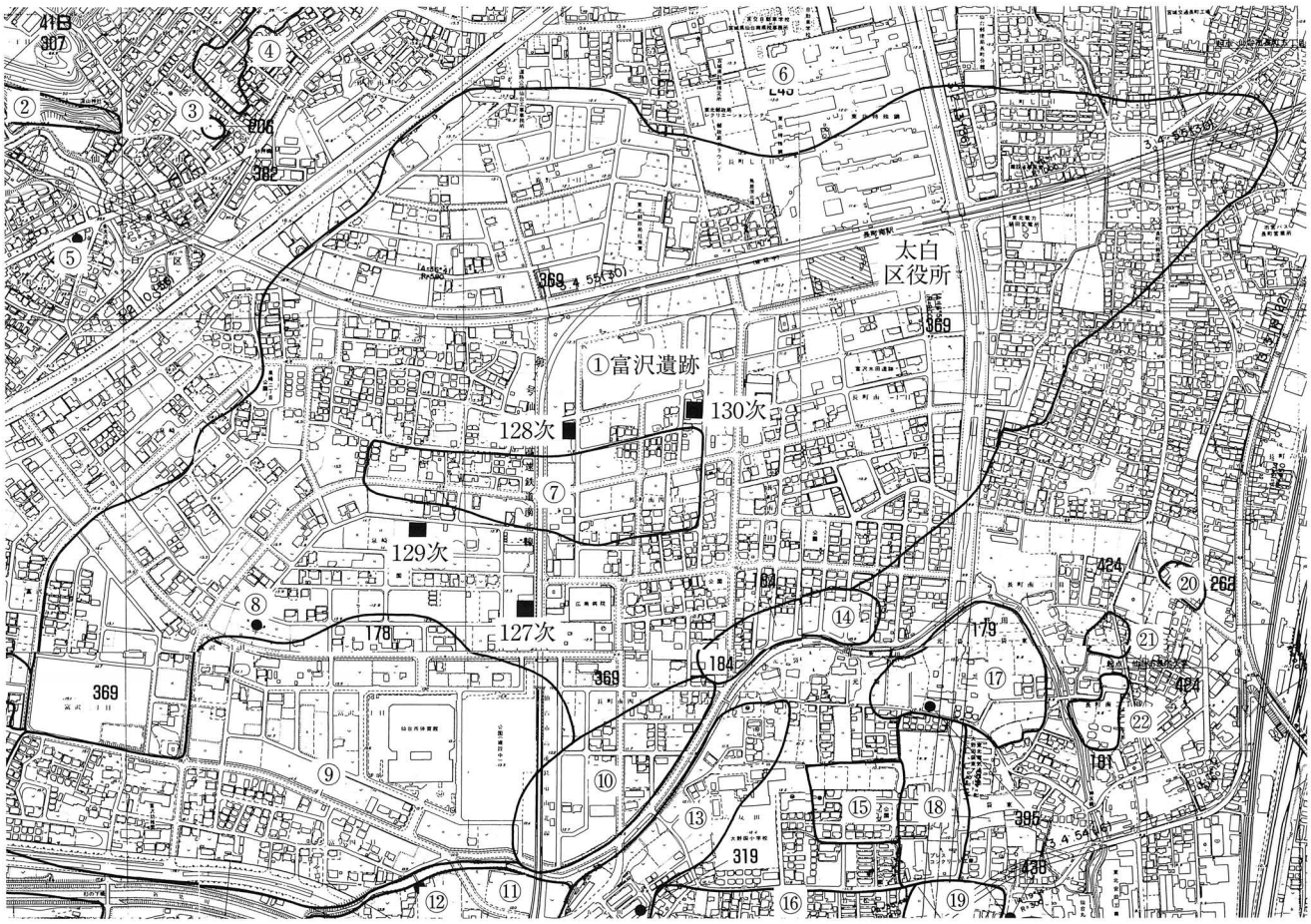
富沢遺跡は、仙台市の南東部、JR長町駅の南南西に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に立地している。遺跡の総面積は約90haにも及ぶ。20年程前まで一帯は水田として利用されてきたが、現在は土地区画整理事業により遺跡東側の一部を除いて盛土がなされており、住宅地、商業地となっている。区画整理以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜して下がっており、遺跡内の標高は９～16mである。

富沢遺跡ではこれまでに120次を越える調査が実施され、弥生時代から近世に至る水田跡が重層状に発見されている。特に古代の条里制に伴う大畦畔が各地点で確認され当地域の条里地割の実態が明らかにされている。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺構・遺物が、さらにその下層からは後期旧石器時代の遺構・遺物が発見されている。旧石器時代の地層からは樹木群、植物化石、動物の糞、昆虫なども多数検出されており古環境復元にとって貴重な資料を提示することとなった。

なお富沢遺跡の環境及び地形、地質については、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）、第24次調査報告書（豊島：1988）、第30次調査報告書（太田：1991）に詳しい記載があるのでこれらを参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の南端部にあたり、周辺の調査としては１次、３次、８次、55次、59次、97次調査がある。

3　調査に至る経過と調査方法

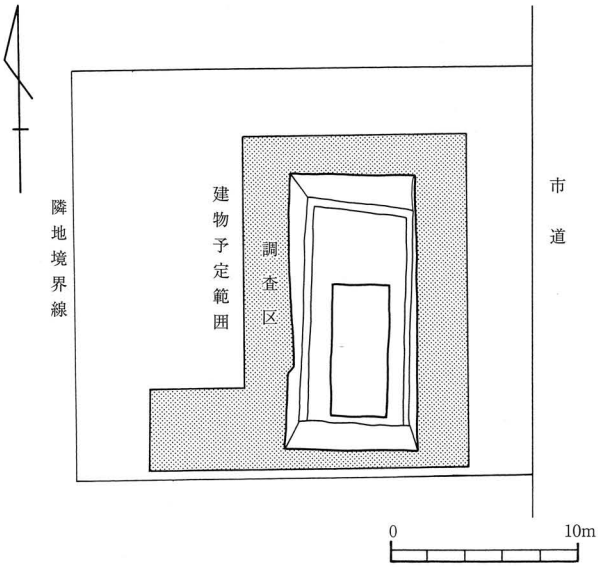
平成15年１月20日付で横田良和氏より仙台市太白区泉崎1丁目20－５、20－６に於ける鉄筋コンクリート造５階建共同住宅・店舗建築工事に係わる発掘届が提出された（平成14年度教生文第4－250号で回答）。建築工事には杭基礎工事を伴い、また工事地点において水田土壌が良好に遺存していることが明らかなことから、工事着手前に発掘調査を実施することとした。調査は平成15年４月11日に、建物建築予定地内に東西７m、南北14.5mの調査区を設定して調査を実施した。調査地内は厚さ1.1mの盛土に覆われていたことから、重機により盛土を除去した後、盛土下の１層上面で、東西５m、南北11mに調査区を縮小し、２層より下層では東西３m、南北７mの範囲で人力による遺構検出と掘り込みを行った。調査は、調査区の制約から現地表から－2.2mの17層中まで掘り下げたところで終了した。



第18図　富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡

富沢遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	時　　代
①	富沢遺跡	後背湿地	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代～近世
②	土手内横穴墓群 土手内窯跡群	丘陵斜面	古墳・奈良
③	砂押古墳	丘陵麓	古墳(円墳)
④	砂押屋敷遺跡	丘陵麓	奈良・平安
⑤	金洗沢古墳	丘陵麓	古墳(円墳)
⑥	金岡八幡古墳	自然堤防	古墳(円墳)
⑦	泉崎浦遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・近世
⑧	教塚古墳	自然堤防	古墳(円墳)
⑨	山口遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
⑩	下ノ内浦遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
⑪	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
⑫	富沢四丁目古碑群	自然堤防	中世
⑬	六反田遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・近世
⑭	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
⑮	袋前遺跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
⑯	大野田古墳群	自然堤防	古墳(前方後円墳・円墳)
⑰	元袋遺跡	自然堤防	弥生・奈良・平安・中世・近世
⑱	大野田遺跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
⑲	王ノ壇遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
⑳	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
㉑	長町南遺跡	自然堤防	奈良・平安
㉒	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安



第19図　調査区配置図

4　基本層位

区画整理の際の盛土が1.1mあり、その下に旧表土の水田耕作土（１層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高9.6mまで17層である。

1層　オリーブ黒色砂質シルト。層厚は14～18cmである。層下面に厚さ１cmの酸化鉄集積層がある。旧水田耕作土。

2層　暗灰黄色砂質シルト。層厚は３～15cmである。下面は凹凸が著しい。砂粒を多く含む。水田耕作土。

3層　黒色粘土。層厚は2～12cmである。４層土を巻き上げている。水田耕作土。

4層　黒褐色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は5～16cmである。層下面は緩やかに起伏している。水田耕作土。

5層　黒褐色粘土。層厚は２～12cmである。層下面はやや起伏がある。自然堆積層。

6層　黒褐色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は８～16cmである。白色土を互層状に含む。自然堆積層。

7層　黒褐色粘土。層厚は６～15cmである。自然堆積層。

8層　黒色粘土。層厚は３～27cmである。灰黄褐色土小ブロックを疎らに含む。水田耕作土。

9層　黒褐色粘土。灰黄褐色土との混成層。層厚は10～25cmである。自然堆積層。

10層　黒色粘土・黒褐色粘土の混成層。層厚は５～18cmである。自然堆積層。

11層　黒褐色粘土。層厚は５～８cmである。自然堆積層。

12層　黒褐色泥炭質粘土。層厚は10～30cmである。自然堆積層。

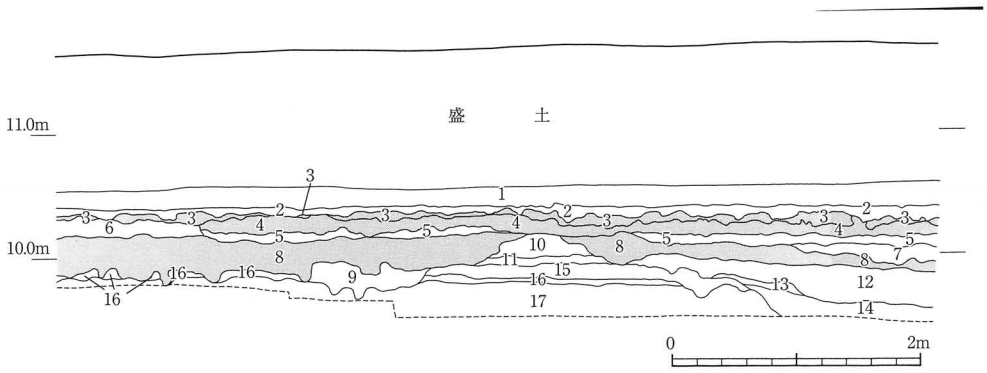
13層　黒褐色泥炭。層厚は３～８cmである。自然堆積層。

14層　黒褐色泥炭質粘土。層厚は21cm以上である。暗灰黄色土を粒状に斑に含む。自然堆積層。

15層　黒褐色粘土。層厚は６～16cmである。11層よりやや明るい。自然堆積層。

16層　黒色粘土。層厚は２～７cmである。灰黄褐色土を薄く筋状に含む。自然堆積層。

17層　黒褐色泥炭。層厚は30cm以上である。自然堆積層。



層位	土　色	土　性	備　考	層位	土　色	土　性	備　考
1	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	下面に厚さ1cmの酸化鉄集積層を含む。現代の水田土壌。	10	10YR2/1 黒色	粘土	黒褐色粘土との混成層。上面に黒色土層を含む。
2	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	全体的に砂粒を多く含む。水田土壌。	11	10YR3/2 黒褐色	粘土	
3	10YR2/1 黒色	粘土	4層土を巻き上げている。水田土壌。	12	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	
4	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰白色火山灰小ブロックを含む。水田土壌。	13	10YR2/2 黒褐色	泥炭	
5	10YR2/2 黒褐色	粘土		14	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	暗灰黄色土を粒状に斑に含む。
6	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	灰白色火山灰小ブロックを含む。白色土を互層状に含む。	15	10YR3/2 黒褐色	粘土	11層よりやや明るい。
7	10YR2/2 黒褐色	粘土		16	10YR1.7/1 黒色	粘土	灰黄褐色土を薄く筋状に含む。
8	10YR2/1 黒色	粘土	灰黄褐色土小ブロックを疎らに含む。水田土壌。	17	7.5YR2/1 黒褐色	泥炭	
9	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色土との混成層。				

第20図　調査区東壁断面図

5　発見遺構と出土遺物

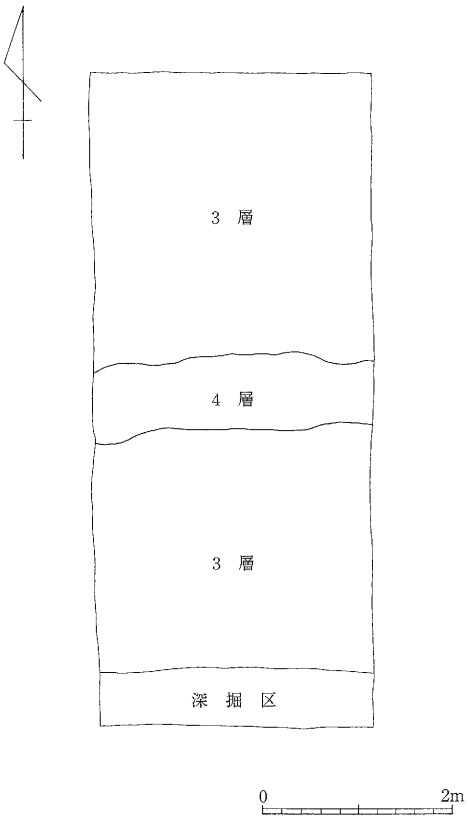
水田跡

1）3層水田跡

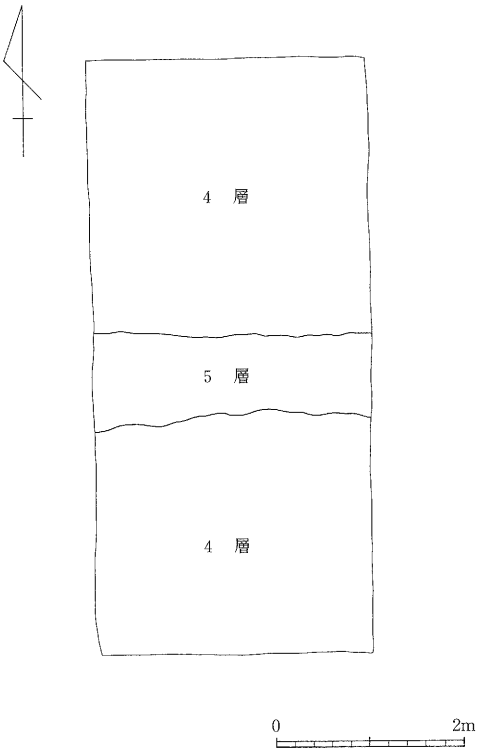
3層掘り下げ中に4層が帯状に1条東西方向に延びているのが確認されたため、3層水田跡に伴う擬似畦畔Bと認定した。標高は10.3～10.4mで、調査区の南側に下がっている。方向はE－3°－Nで、規模は、検出長2.9m、幅62～84cmを測る。3層は黒色粘土層で全域に分布している。層下面は耕作により攪拌されており、4層を巻き上げている。遺物は出土しなかった。

2）4層水田跡

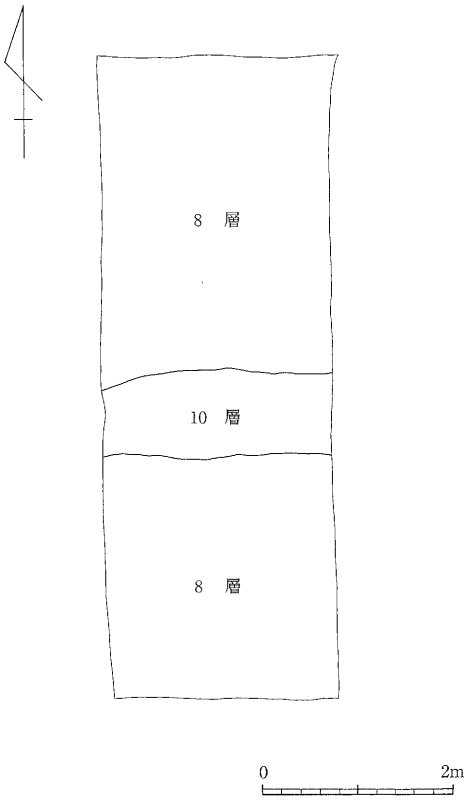
4層掘り下げ中に5層の帯状の伸びが東西方向に確認されたことから、4層水田跡に伴う擬似畦畔Bと認定した。標高は10.1～10.2mで、北から南に向かって緩やかに下がっている。方向はE－3°－Nで、規模は、検出長3.0m、幅79～105cmである。4層は黒褐色粘土層で、調査区の北端部で自然堆積層の6層に切られていることから耕作域が北側には延びていないものと捉えられる。層中に十和田a火山灰を小ブロック状に含んでいるため降灰後にそれほどの時間を置かずに復旧された水田跡と考えられる。作土は5層を母材としており、層下面は耕作によって起伏に富んでいる。遺物は出土しなかった。



第21図　3層水田跡



第22図　4層水田跡



第23図　8層水田跡

3）８層水田跡

８層の掘り下げ中に下層である10層の擬似畦畔Bを検出したものである。標高は9.9～10.1mでほぼ平坦である。方向はＥ－0°－Ｎで、規模は、検出長2.3m、幅70～94cmである。8層は黒色粘土で、作土は10層、11層を母材としている。層下面は耕作による凹凸が著しい。遺物は出土しなかった。

6　まとめ

1）水田耕作土

調査の結果、３層、４層、８層において擬似畦畔Bを検出した。これ以外の層で水田土壌の可能性のある層としては、断面観察から、下面の凹凸と直下層を起源とするブロック土の混在により、現代の水田耕作土の１層を除いた２層が水田層と考えられる。年代的には10世紀前半（西暦915年）に降下したと言われている灰白色火山灰（十和田ａ）をブロック状に層中に含む４層が、降灰直後の水田層と考えられることから、２、３層は10世紀前半以降近・現代以前の時間幅に収まるものと捉えられる。このうち２層については、層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないことから近世頃に所属するものとされる。３層については、４層土を巻き上げていることから、４層水田跡に連続して耕作されていたものと考えられることから中世頃の年代が与えられる。８層については、降灰前の水田層と考えられること、59次調査区の８層、97次調査区の５ａ、５ｂ層との対応が考えられることから古墳時代～平安時代前半の水田層と思われる。なお、前述調査間の各層の対応関係については以下のとおりである。出土遺物は、１、２層から土師器甕片が１点ずつ出土した。

127次	97次	59次	所属年代
１層	１層	１層	現代
２層	２層	２層	近世
３層	３層	５層	中世
４層	４層	６層	平安時代：灰白色火山灰降下以降
５層			
６層			
８層	５ａ・５ｂ層	８層	古墳時代～平安時代：灰白色火山灰降下以前
11層	８層	11層	

2）まとめ

① 今回の調査は、富沢遺跡の南端部、59次調査区の北側に近接する地点で実施した。

② 調査を実施した地点では現状地盤から深さ約2.2mまでの地層は17層に分けられた。

③ 現代の水田耕作土層である１層を除き、２、３、４、８層が水田耕作土層と考えられる。

④ 水田の年代は、２層が近世、３層が中世、４層が平安時代中葉～後半頃、８層が古墳時代～平安時代前半に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

阿子島功（1991）：「東北地方．10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

太田昭夫（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

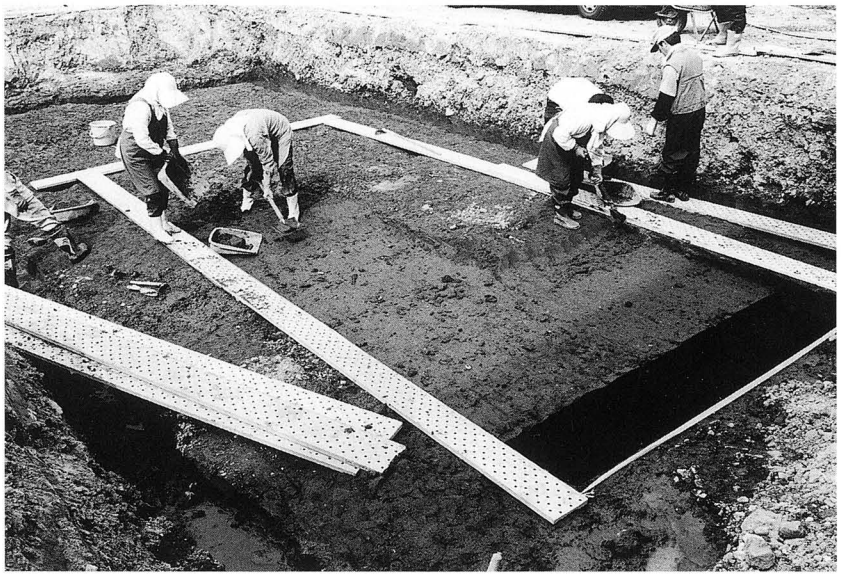
斎野裕彦（1987）：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

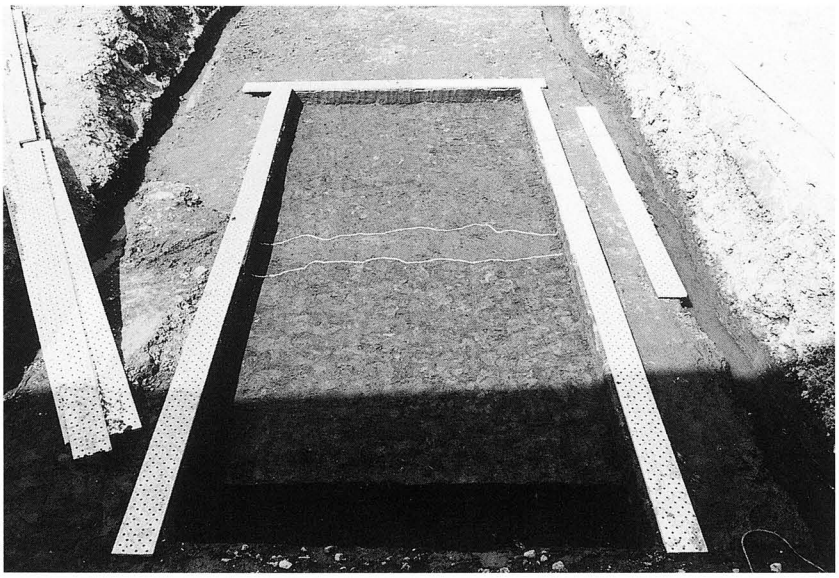
東日本の水田跡を考える会（1990）：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』

平間亮輔（1991）：「富沢遺跡第59次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口（３）』仙台市文化財調査報告書第152集

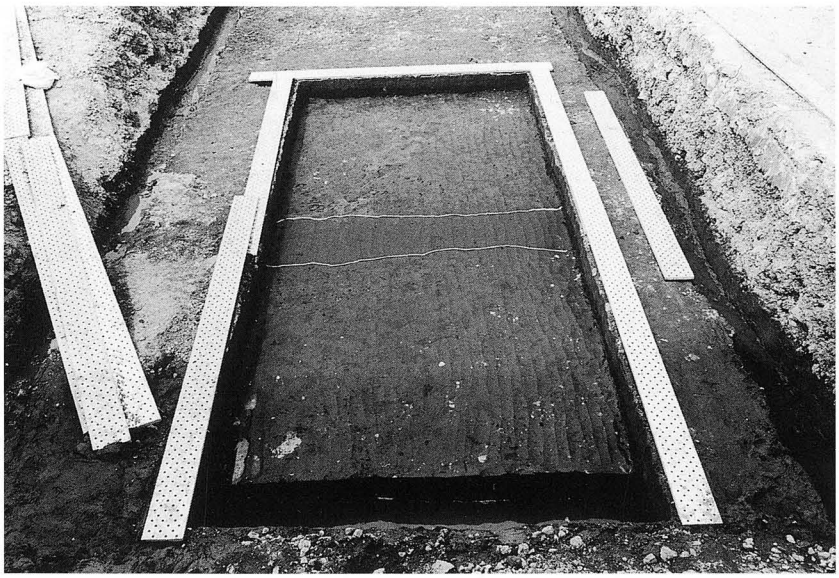
吉岡恭平（1997）：「富沢遺跡第97次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（11）』仙台市文化財調査報告書第221集



1　1層除去作業風景（南西より）

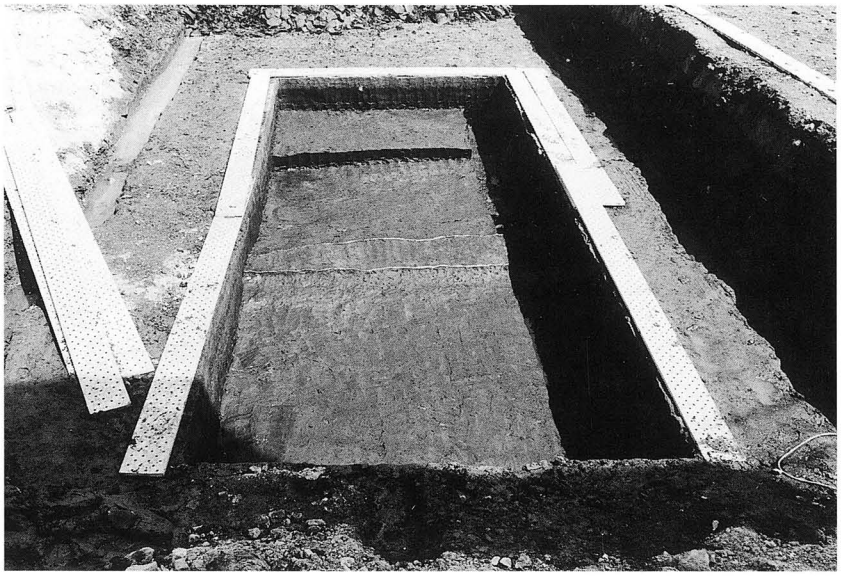


2　3層水田跡検出状況（南より）
畦畔は疑似畦畔Bとしての
4層

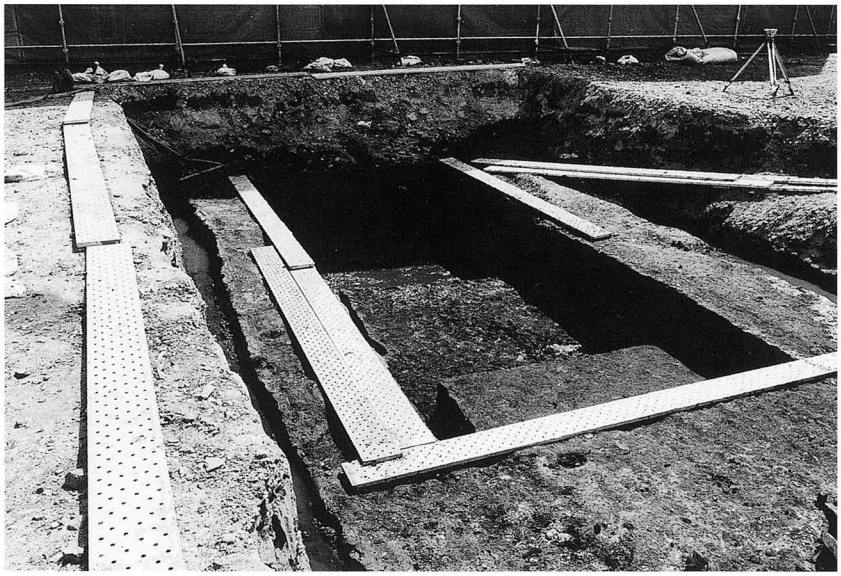


3　4層水田跡検出状況（南より）
畦畔は疑似畦畔Bとしての
5層

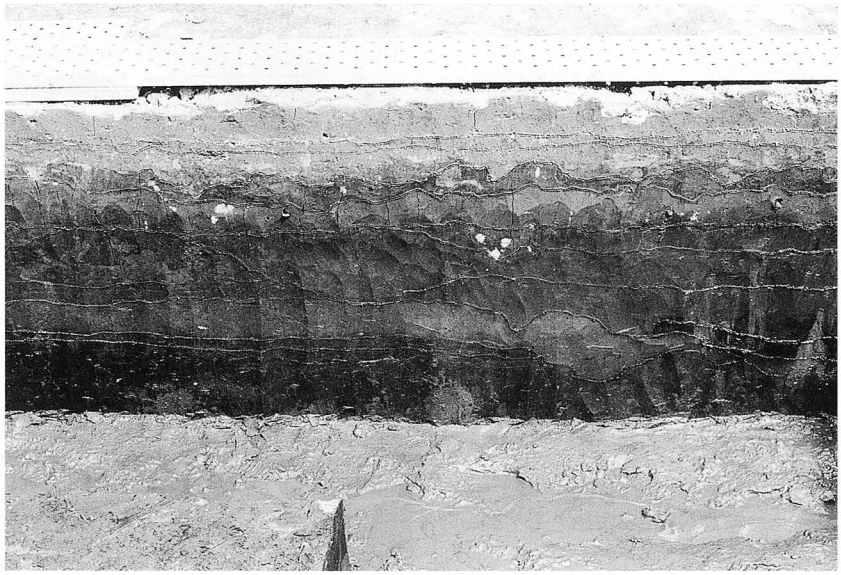
図版6　調査状況



1　8層水田跡検出状況（南より）
畦畔は疑似畦畔Bとしての
10層



2　調査終了時状況（北東より）



3　東壁土層断面（西より）

図版７　調査状況・土層断面

Ⅳ　富沢遺跡（第128次）発掘調査報告書

1　調査要項

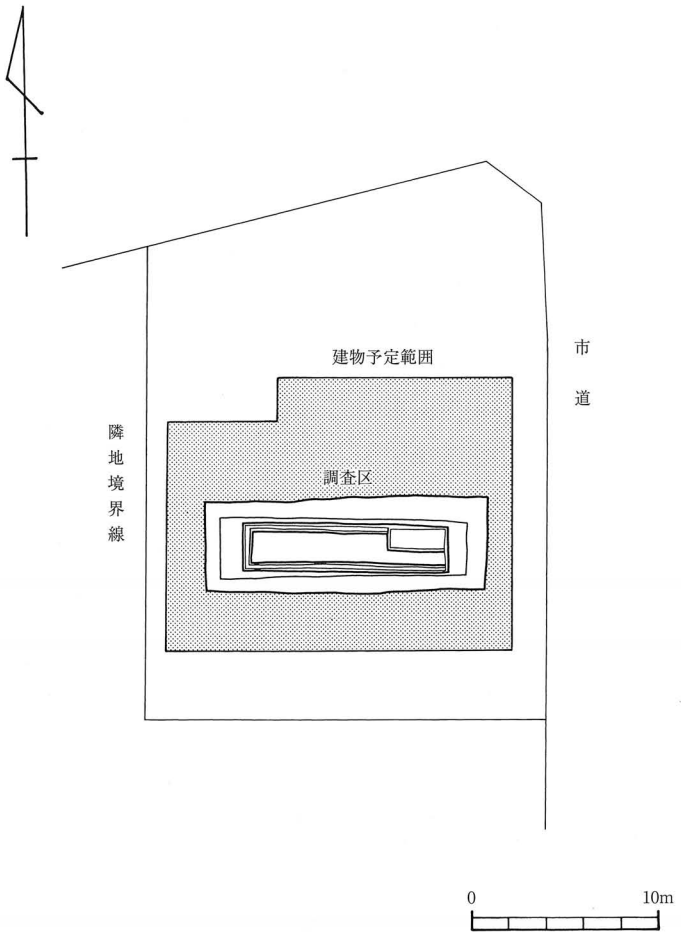
遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区長町南四丁目11－1
調 査 期 間　　平成15年７月22日～８月１日
調査対象面積　　242㎡
調 査 面 積　　75㎡
調 査 原 因　　共同住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之　　教諭　豊村幸宏

2　遺跡の位置と環境

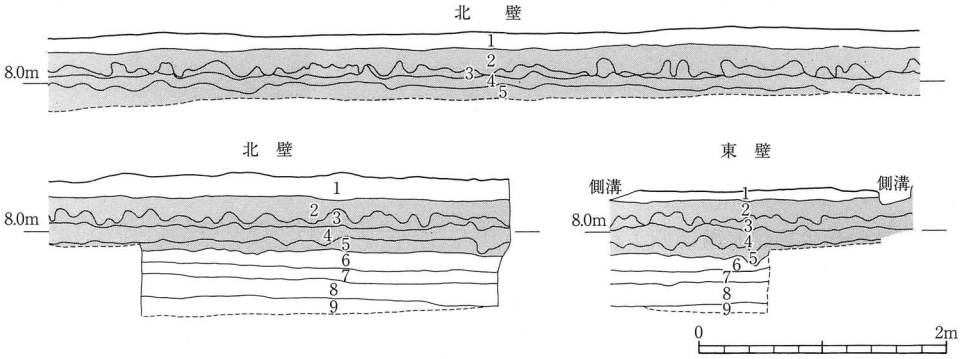
遺跡の環境及び地形、地質については、第127次発掘調査報告書の他に富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）、第24次調査報告書（豊島：1988）、第30次調査報告書（太田：1991）に詳しい記載があるのでこれらを参照されたい。今回の調査地点は、昭和62年から昭和63年に発掘調査され、後期旧石器時代のナイフ形石器や埋没林、毬果等が発見された30次調査区の南西側、平成4年に実施された82次調査区の西側に位置し、遺跡中央部の住宅地に当たり標高は約10mである。

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年７月11日付で株式会社深松組代表取締役深松勇氏より仙台市太白区長町南四丁目11－１に於ける鉄筋コンクリート造5階建共同住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－86号で回答）。これを受けて平成15年７月22日に、建物予定地内に東西15m、南北５mの調査区を設定して調査を実施した。調査地内は厚さ1.5m～1.8mの盛土に覆われていたことから、重機により盛土を除去した後、盛土下の1層上面で、東西11m、南北2.5mに調査区を縮小し人力で2層以下の掘り込みを行った。５層上面までは調査区全面の精査を行い５層以下は調査区北東コーナー部分に東西３m、南北１mの下層調査区を設けて９層まで掘り下げ、断面調査を実施した。



第24図　調査区配置図



層位	土　色	土性	備　　考	層位	土　色	土性	備　　考
1	5Y2/1 黒色	シルト質粘土	層下面に厚さ1cmの酸化鉄の集積層を含む。木炭粒、白色砂粒を含む。水田耕作土。	7	5Y2/1 黒色	泥炭質粘土	オリーブ黒色粘土を縞状に含む。植物遺体を多量に含む。自然堆積層。
2	10YR1.7/1 黒色	粘土	酸化鉄斑、木炭粒、白色砂粒、植物遺体を含む。径1～5cmの3層土ブロックを含む。水田耕作土。	8	10YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	互層。植物遺体を多量に含む。自然堆積層。
3	10YR3/1 オリーブ黒色	粘土	層下面に灰白色火山灰小ブロックを含む。植物遺体を含む。水田耕作土。		10Y3/1 オリーブ黒色	泥炭質粘土	
4	5Y2/1 黒色	粘土	灰白色火山灰ブロックを含む。5層土ブロック、植物遺体を含む。水田耕作土。		7.5Y5/2 灰オリーブ色	泥炭質粘土	
5	10YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	6層土ブロックを含む。植物遺体を多量に含む。水田耕作土。	9	2.5Y2/1黒色	泥炭質粘土	植物遺体を多量に含む。自然堆積層。
6	7.5Y4/1 灰色	泥炭質粘土	黒色粘土、灰色粘土を縞状に含む。植物遺体を多量に含む。自然堆積層。				

第25図　調査区北壁・東壁断面図

4　基本層位

区画整理の際の盛土が1.5m～1.8mあり、その下に旧表土の水田耕作土（１層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高7.3mまで９層である。

１層　黒色シルト質粘土。層厚は10～24cmである。下面は緩やかに起伏している。層下面に厚さ１cmの酸化鉄集積層がある。旧水田耕作土。

２層　黒色粘土。層厚は６～23cmである。下面は凹凸が著しく、３層土を巻き上げている。水田耕作土。

３層　オリーブ黒色粘土。層厚は２～14cmである。灰白色火山灰小ブロックを含む。層下面は緩やかに起伏している。水田耕作土。

４層　黒色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は３～19cmである。層下面は緩やかに起伏しており、５層土を含む。水田耕作土。

５層　黒色泥炭質粘土。層厚は３～24cmである。層下面はやや起伏があり６層土を攪拌している。水田耕作土。

６層　灰色泥炭質粘土。層厚は４～16cmである。黒色粘土、灰色粘土を縞状に含む。層下面は平坦である。自然堆積層。

７層　黒色泥炭質粘土。層厚は８～12cmである。オリーブ黒色粘土を縞状に含む。層下面は平坦である。自然堆積層。

８層　黒色泥炭質粘土。オリーブ黒色泥炭質粘土。灰オリーブ色泥炭質粘土の互層。層厚は13～20cmである。層下面は平坦である。自然堆積層。

９層　黒色泥炭質粘土。層厚は18cm以上である。自然堆積層。

5　まとめ

１）水田耕作土

調査の結果、畦畔状の高まりなどの水田にかかわる遺構は確認されなかった。断面観察から、下面の凹凸と直下層を起源とするブロック土の混在により、現代の水田耕作土の１層を除いた２層、３層、４層、５層が水田層と考えられる。年代的には10世紀前半（西暦915年）に降下したと言われている灰白色火山灰（十和田ａ）をブロック

状に層中に含む４層が、降灰直後の水田層と考えられることから、２、３層は10世紀前半以降近・現代以前の時間幅に収まるものと捉えられる。このうち、２層については、層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないことから近世頃に所属するものと指摘し得る。３層については灰白色火山灰小ブロックを含み、火山灰降下以降連続して耕作が続けられていたと想定されること、82次調査区の３層との対応が考えられることから平安時代中葉～中世頃の年代が考えられる。５層については、降灰前の水田層と考えられること、82次調査区の５層との対応が考えられることから古墳時代～平安時代前半の水田層と思われる。なお、前述調査間の各層の対応関係については以下のとおりである。出土遺物は、２層上面から外面に叩き目、内面に当て具痕のついた須恵器甕体部片１点と２層中から桃の種子が１点出土した。

128次	82次	30次	所属年代
１層	１層	１層	現代
２層	２層	２・３層	近世
３層	３層	４・５層	平安時代中葉～中世
４層	４層	６・７層	平安時代前半
５層	５層	８ａ層	古墳時代～平安時代前半
６層	６・７層	８ｄ・９層	
７層	８層	10層	弥生時代
８層	９層	11層	
９層	10層	12層	

２）まとめ

①　今回の調査は、富沢遺跡の中央部、30次調査区の南西側、82次調査区の西側に近接する地点で実施した。

②　調査を実施した地点では，現状地盤から深さ約2.8mまでの地層は９層に分けられた。

③　現代の水田耕作土層である１層を除き、２、３、４、５層が水田耕作土層と考えられる。

④　水田の年代は、２層が近世、３層が平安時代中葉～中世、４層が10世紀前半頃、５層が古墳時代から平安時代前半に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

阿子島功（1991）：「東北地方．10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

五十嵐康洋（1993）：「富沢遺跡第82次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（５）』仙台市文化財調査報告書第171集

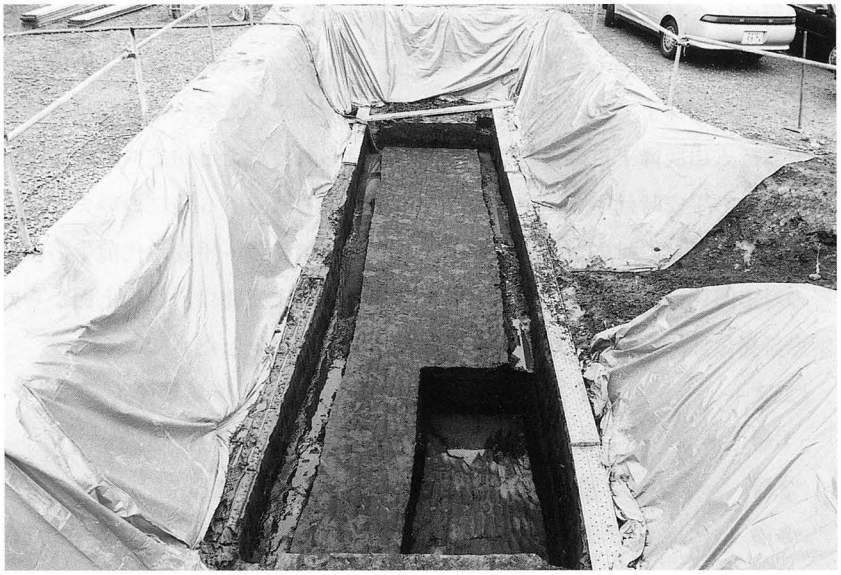
太田昭夫（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

斎野裕彦（1987）：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

東日本の水田跡を考える会（1990）：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』

平間亮輔（1989）：「富沢遺跡35次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集



1　5層上面状況（東より）

2　深掘り部全景（西より）

3　北壁土層断面（南より）

図版８　調査状況・土層断面

1　東壁土層断面（西より）

2　南壁土層断面（北より）

3　南壁土層断面（北より）

図版９　土層断面

Ⅴ　富沢遺跡（第129次）発掘調査報告書

1　調査要項

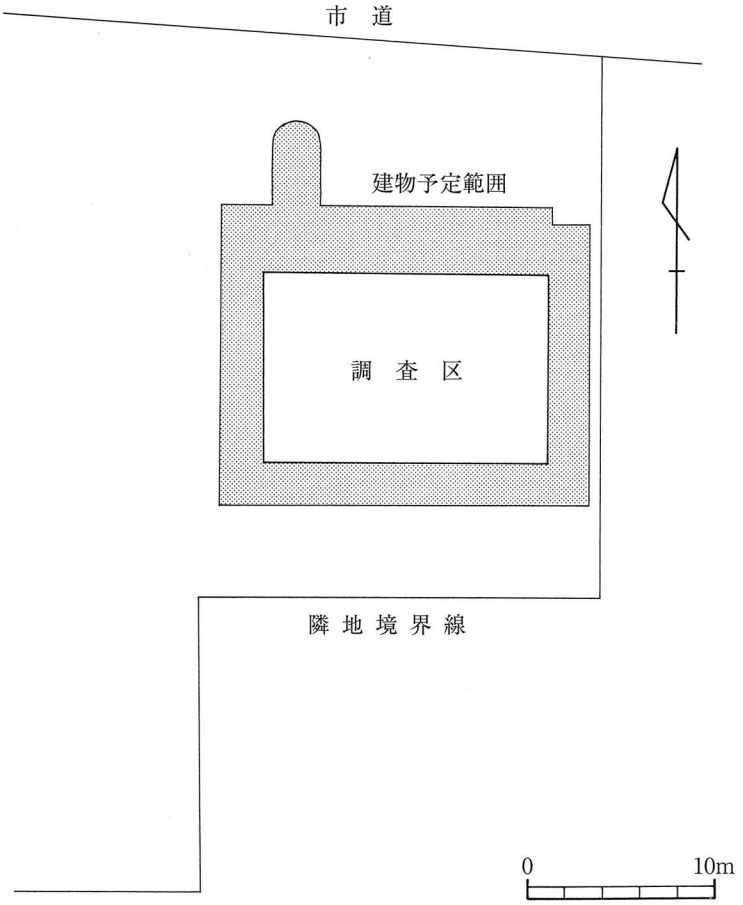
遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区泉崎1丁目21－13
調 査 期 間　　平成15年8月18日～9月3日
調査対象面積　　821.5㎡
調 査 面 積　　48㎡
調 査 原 因　　共同住宅・地下ピット型機械駐車場建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之　　主事　鈴木隆

2　遺跡の位置と環境

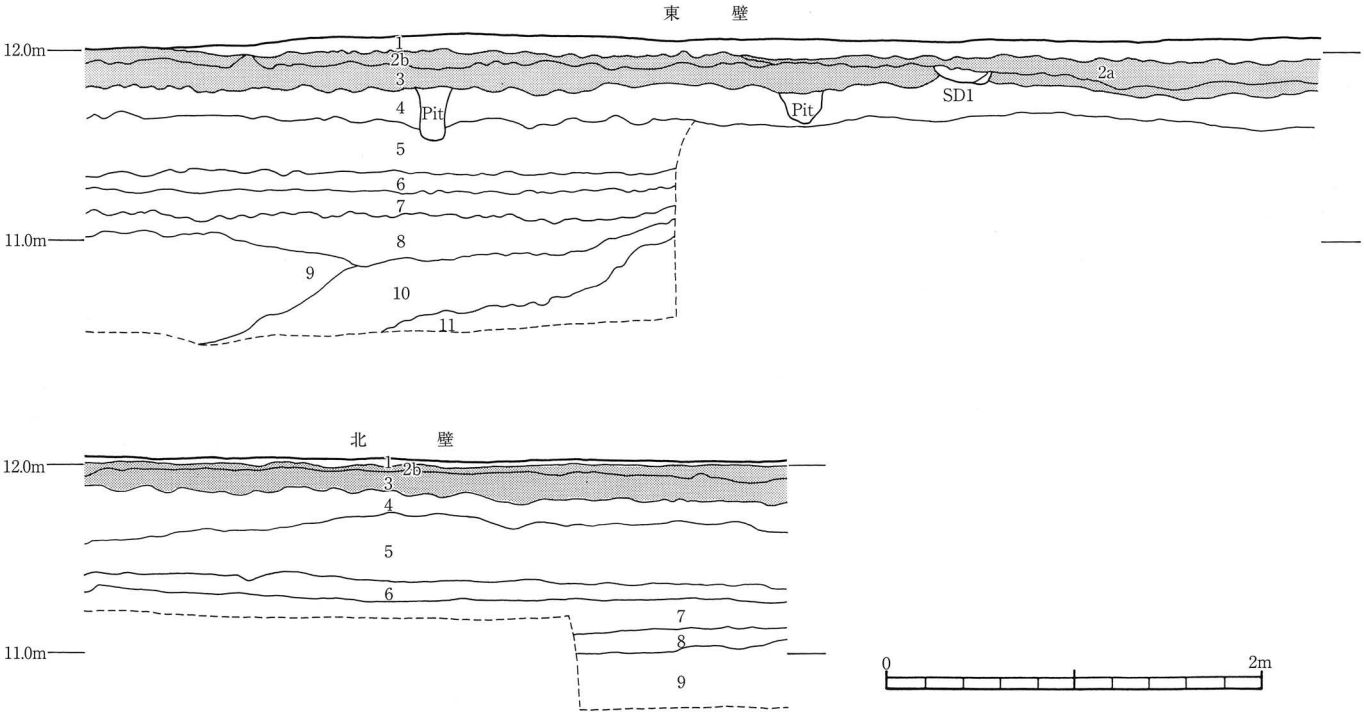
富沢遺跡は、仙台市の南東部、JR長町駅の西側一帯に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西半部にあり、北西を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に立地している。遺跡の総面積は約90haにも及ぶ。なお富沢遺跡の地理的・歴史的環境については、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）、第24次調査報告書（豊島：1988）、第30次調査報告書（太田：1991）に詳しい記載があるのでこれらを参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の西南部にあたり、周辺の調査としては、西側隣接地点において昭和60年に実施した21次調査の他、95次、97次調査がある。

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年５月26日付でみずほ信託銀行株式会社管理部長坂田雄一郎氏より仙台市太白区泉崎1丁目21－13に於ける鉄筋コンクリート造９階建共同住宅・地下ピット型機械駐車場建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第2－41号で回答）。建築工事には杭基礎工事を伴い、また工事地点においては周辺での調査成果から水田土壌や遺構が良好に遺存し



第26図　調査区配置図



層位	土　色	土　性	備　考	層位	土　色	土　性	備　考
1	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	下面に酸化鉄の集積層を含む。現代の水田耕作土。	6	10YR4/1 褐灰色	粘土	7層土をラミナ状に含む。
2a	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	下面に酸化鉄の集積層を含む。調査区南半に分布。	7	10YR2/1 黒色	粘土	下面に著しい凹凸あり。
2b	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径1～3cmの灰白色火山灰ブロックを多く含む。調査区北半に分布。	8	7.5Y5/2 灰オリーブ色	砂質シルト	
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	調査区北半で厚く南半ではうすいかもしくは見られない。下面に著しい凹凸がみられる。	9	5Y6/2 灰オリーブ色	砂	径1～5cmの凝灰岩礫を多量に含む。
4	10YR6/2 灰黄褐色	シルト質砂	下部に5層起源の凝灰岩粒を少量含む。	10	5Y4/1 灰色	砂質シルト	一部ラミナ状に堆積。下部に11層土の巻き込みあり。
5	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂	下面に酸化鉄の集積層を含む。径1～3cmの凝灰岩礫を多量に含む。	11	5Y6/2 灰オリーブ色	砂質シルト	

第27図　調査区東壁・北壁断面図

ていることが明らかであった。よって工事着手前に発掘調査を実施することとした。調査は平成15年８月18日に開始した。まず建物建築予定地内に東西15m、南北10mの調査区を設定し、重機により盛土整地層部分を1.8m除去した後、盛土下の１層上面検出範囲を東西８m、南北６mとし、その後5層上面検出範囲を東西3.5m、南北2.5mに縮小し、11層まで遺構検出作業と掘り込みを行った。調査は安全面に配慮して、現地表から－3.1mの11層中まで掘り下げたところで終了した。

4　基本層位

区画整理の際の盛土が1.8mあり、その下に旧表土の水田耕作土（１層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高10.5mまで大別11層、細別12層である。

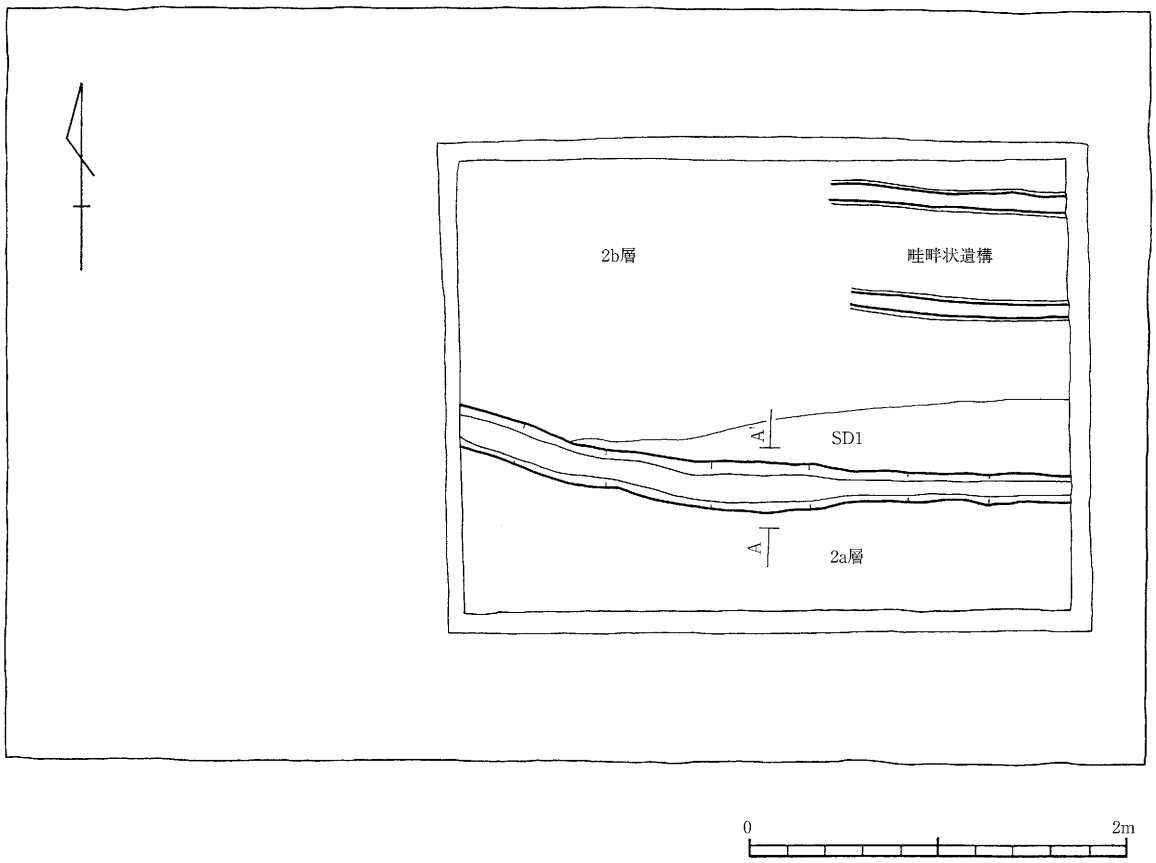
１　層　　黒褐色砂質シルト。層厚は２～14cmである。層下部に酸化鉄の集積がある。現代の水田耕作土。

２ａ層　　灰黄褐色砂質シルト。層厚は２～17cmである。層下部に酸化鉄の集積がある。調査区南半にのみ分布。水田耕作土。

２ｂ層　　灰黄褐色粘土。層厚は３～12cmである。径１～３cmの灰白色火山灰（十和田ａ）ブロックを多く含む。調査区北半にのみ分布。水田耕作土。

３層　　黒褐色砂質シルト。層厚は３～17cmである。調査区北半で厚く、南半では薄い。層下面に著しい凹凸が見られる。水田耕作土。

４層　　灰黄褐色粘土。層厚は８～31cmである。層下部に５層起源の凝灰岩粒（径１～２cm）を少量含む。自



第28図　2a・2b層遺構配置図

然堆積層。

5層　にぶい黄橙色砂。層厚は18～35cmである。層下部に酸化鉄の集積あり。部分的に粗砂を含む。径1～3cmの凝灰岩礫を多量に含む。自然堆積層。

6層　褐灰色粘土。層厚は7～14cmである。7層土をラミナ状に含む。自然堆積層。

7層　黒色粘土。層厚は9～17cmである。層下面に著しい凹凸あり。自然堆積層。

8層　灰オリーブ色砂質シルト。層厚は6～28cmである。自然堆積層。

9層　灰オリーブ色砂。層厚は60cm以上である。径1～5cmの凝灰岩礫を多量に含む。自然堆積層。

10層　灰色砂質シルト。層厚は35cm以上である。一部ラミナ状に堆積し層下部に11層の巻き込みあり。自然堆積層。

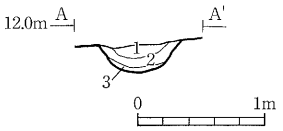
11層　灰オリーブ色砂質シルト。層厚は45cm以上である。自然堆積層。

5　発見遺構と出土遺物

1）溝跡

ＳＤ１　溝跡

調査区南半の2ａ層上面で検出した。調査区内を東西方向に延びているが、西半部でやや北向きに屈曲する。規模は、検出総長8.0m、上幅36～66cm、下幅10



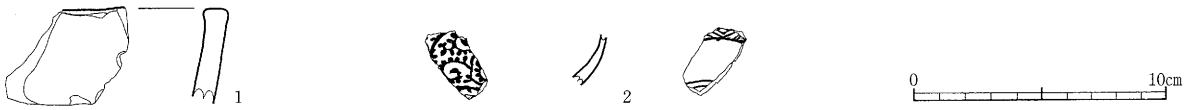
層位	土　色	土性	備　　考
1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑を少量含む。炭化物粒を微量に含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑を全体に含む。10YR3/1黒褐色（3層）ブロックを含む
3	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄斑を少量含む。

第29図　SD1溝跡断面図

～42cm、深さ14～31cmである。断面形は半円形を呈し、壁は底面から丸みを帯びて外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は３層に分かれ１、２層は人為堆積、３層は自然堆積と考えられる。遺物は１層からロクロ土師器甕片１点、須恵器甕片１点が出土した。

２）畦畔状遺構

調査区北東部の２ｂ層上面で２条検出した。東西方向に延びており、いずれも調査区中央部で途切れている。規模は北側のものが検出総長3.6m、上幅18～22cm、下幅26～32cm、高さ２～４cm、南側のものが検出総長3.2m、上幅17～21cm、下幅27～29cm、高さ２～３cmである。両者の間隔は芯芯間1.5mでほぼ平行である。３層を盛り上げて作られており、断面形は台形を呈する。周辺の精査を行ったが、関連する遺構が確認されなかったことから畦畔と断定するには至らなかった。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	I－1	土師質土器・鉢		1層		(3.7)			在地・江戸時代　外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	14-1
2	J－1	磁器・碗		1層		(2.7)			肥前　18c後半染付蛸唐草文	14-2

第30図　出土遺物

6　まとめ

１）水田耕作土

調査の結果から水田土壌と考えられるものは、現代の水田耕作土である１層を除くと、２ａ層、２ｂ層、３層である。また２ａ層において溝跡１条、２ｂ層において畦畔状遺構2条を検出したが、これらについては、水田耕作に係わる何らかの遺構の可能性が考えられる。年代的には10世紀前半（西暦915年）に降下したと言われている灰白色火山灰（十和田ａ）をブロック状に層中に含む２ｂ層が、降灰直後の水田層と考えられることから、２ａ、２ｂ層は10世紀前半以降近・現代以前の時間幅に収まるものと捉えられる。このうち２ａ層については、層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないことから平安中期より時代の下がるものと思われる。３層については、降灰前の水田層と考えられることから古墳時代～平安時代前半頃に位置付けられよう。なお、周辺部での調査との各層の対応関係については以下のとおりである。出土遺物は、１層から江戸時代の土師質土器鉢（Ｉ－1)、18世紀後半の肥前染付碗（Ｊ－1)、瓦質土器片1点、18世紀代の肥前染付碗片1点、江戸時代の肥前染付皿片1点、明治以降の磁器輪花皿片1点が出土した他、３層から打製石器剥片1点が出土した。

129次	95次	21次	所属年代
１層	１層	１層	現代
２ａ層	４ａ層	４ａ層	
２ｂ層	４ｂ層	４ｂ層	平安時代：灰白色火山灰降下以降
３層	５ａ層	５層	古墳時代～平安時代：灰白色火山灰降下以前
４層	５ｂ層	６層	
５層		７層	
６層	６層	８・１０層	
７層	９ａ層	１３・１４層	
８層	１２層	１８層	

2）まとめ

① 今回の調査は、富沢遺跡の西南部、21次調査区の東側に隣接する地点で実施した。

② 調査を実施した地点では現状地盤から深さ約3.1mまでの地層は大別11層、細別12層に分けられた。

③ 現代の水田耕作土層である１層を除き、２ａ、２ｂ、３層が水田耕作土層と考えられる。

④ 水田の年代は、２ａ層が平安時代後半～近世、２ｂ層が平安時代中葉～後半頃、５層が古墳時代～平安時代前半に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

我妻　仁（1997）：「富沢遺跡第95次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口（11）』仙台市文化財調査報告書第221集

阿子島功（1991）：「東北地方．10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

太田昭夫（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

斎野裕彦（1987）：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

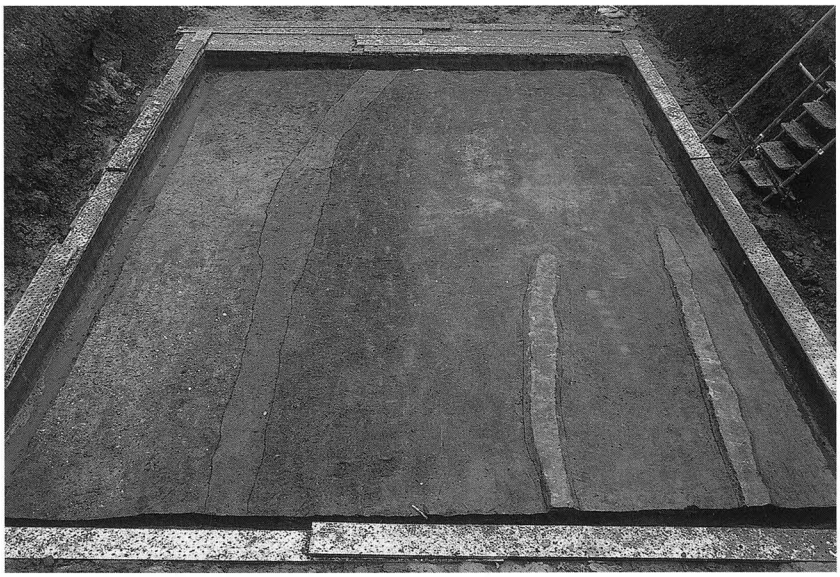
東日本の水田跡を考える会（1990）：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』

吉岡恭平（1997）：「富沢遺跡第97次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（11）』仙台市文化財調査報告書第221集

渡辺　誠（1986）：「富沢水田遺跡－年報7－」仙台市文化財調査報告書第94集

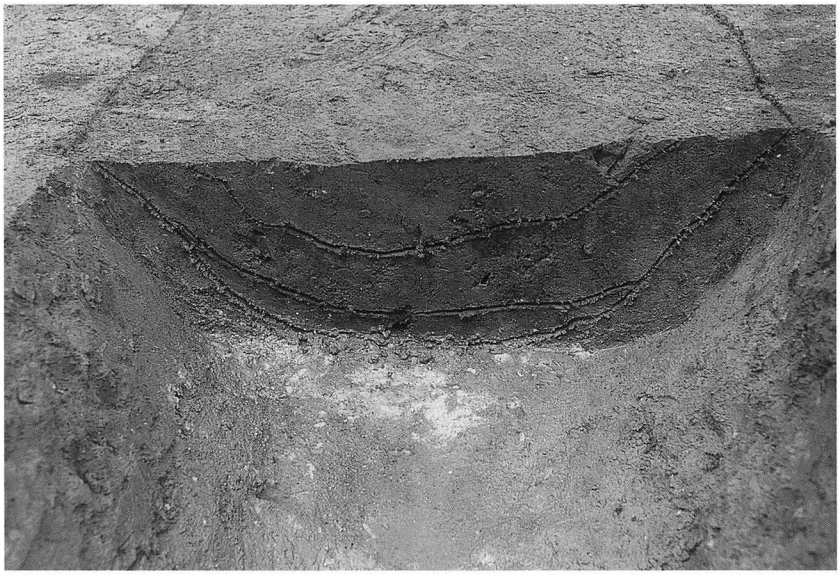
1　調査区全景（南西より）

2　2a層・2b層上面状況（西より）



3　SD1溝跡検出状況（東より）

図版10　調査状況

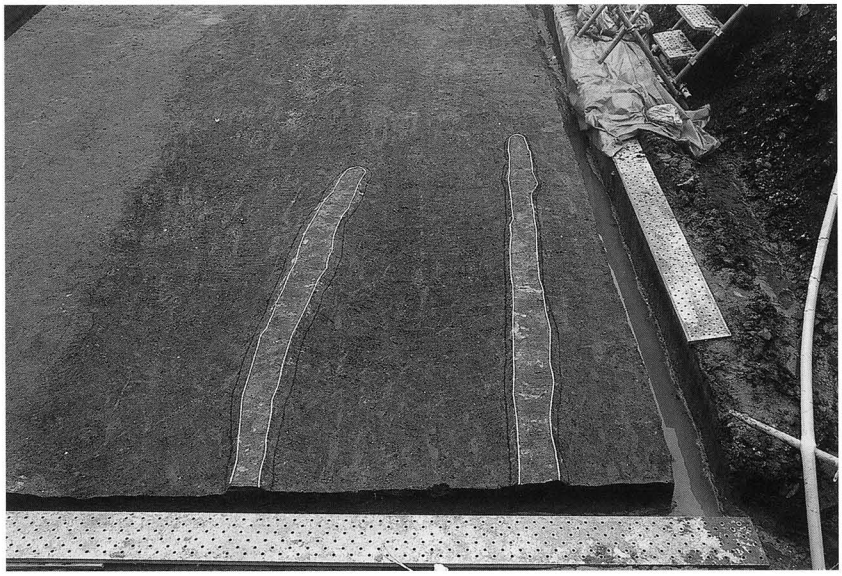


1　SD1溝跡土層断面（東より）

2　SD1溝跡全景（東より）

3　2b層上面畦畔状遺構検出状況（東より）

図版11　SD1溝跡・畦畔状遺構



1　畦畔状遺構全景（東より）

2　東壁土層断面（西より）

3　東壁土層断面（西より）

図版12　畦畔状遺構・土層断面

1　東壁土層断面（西より）

2　東壁土層断面（西より）

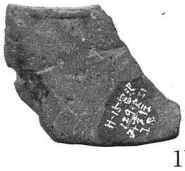
3　東壁土層断面（北西より）

図版13　土層断面

1　北壁土層断面（南より）

2　北壁土層断面（南東より）

1a



1b

2a

2b

※縮尺は任意とする。

1　土師質土器　鉢　I－1（1層　第30図1）

2　磁器　碗　J－1（1層　第30図2）

図版14　土層断面・出土遺物

Ⅵ　富沢遺跡（第130次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区長町南四丁目６－１
調 査 期 間　　平成15年9月16日～12月10日
調査対象面積　　652㎡
調 査 面 積　　156㎡
調 査 原 因　　共同住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　文化財教諭　宮内　周　　主任　荒井　格　　文化財教諭　大倉　秀之

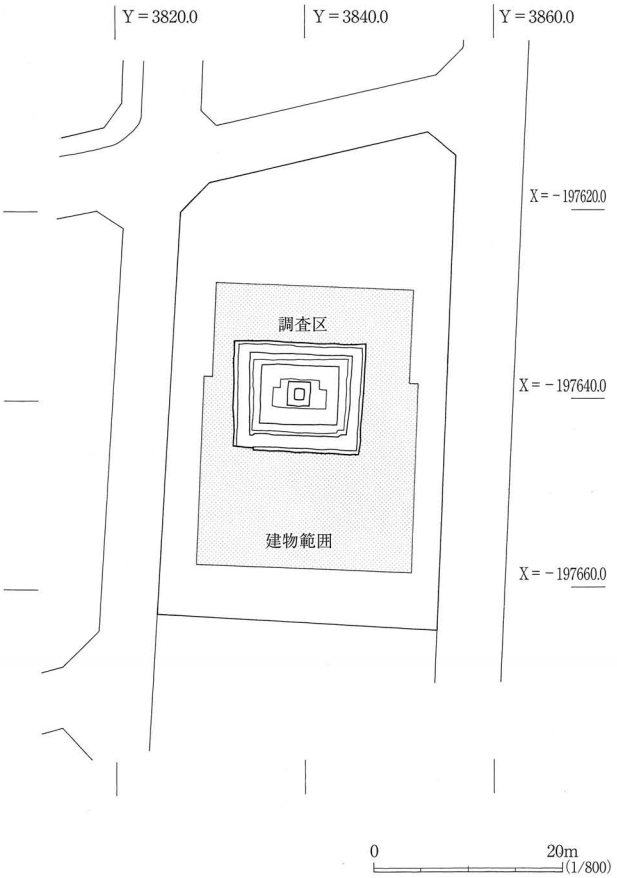
2　遺跡の位置と環境

遺跡の環境については、第127次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、富沢遺跡保存館の南東側にあたり、昭和63年に実施された第37次・第43次調査の西側に隣接し、平成２年に実施された第58次調査の南側に位置している。現標高は約11m～12mで、調査対象地内は南西から北東に傾斜しており、北東部の標高が一番低くなっている。

3　調査に至る経過と調査方法

平成12年９月18日付けで、地権者である庄子とよ氏より仙台市太白区長町南4丁目６－１地内におけるパイル打ちを伴うＲＣ６階建共同住宅建設に関わる協議書が提出された。当該地は富沢遺跡の中央部に位置しているため、平成12年９月20日付けの教生文第６－28号により仙台市教育委員会で発掘調査が必要である旨の回答を行った。平成12・13年度の調査予定がすでに決定していたため、平成14年度の発掘調査として受託することで了解を得たが、その後申請者の諸事情により、調査は平成15年度に行うこととなった。発掘届は平成15年８月１日付けで提出されている。

調査箇所は、弥生時代から近世の水田跡や後期旧石器時代の遺構・遺物の他、当時の樹木遺体や植物化石、昆虫化石などが発見された富沢遺跡第30次調査区（現富沢遺跡保存館）の南東側にあたるため、後期旧石器時代の層位まで調査を行う必要があった。調査箇所及び周辺は以前に水田として利用されていたが、富沢地区の区画整理に伴って盛土がなされており、近隣の調査結果からそ



第31図　調査区配置図

の厚さは２ｍほどと推定された。そのため、重機による盛土と旧耕作土（１層）の除去を行い、その下層（２層）から人力による調査を行うこととした。調査範囲は共同住宅建設予定地内の中央部に盛土の上面で南北19m、東西21mと設定し、調査開始時の面積を旧耕作土直下で南北12m、東西14mと計画したが、調査区南側の盛土が2.8mほどもあったため、実際には南北約11m、東西約13mの範囲での調査となった。

調査は９月16日から開始し、２層から７層まで水田跡の調査を行った。さらに下層を遺構･遺物の有無を確認しながらグライ化の始まる20層の上面まで掘り下げた。19層下部と20層では縄文時代早期と考えられる遺構･遺物を検出し、22層で後期旧石器時代の樹木を確認した。27層で湧水と壁面の崩落により調査が困難となったため、標高約５ｍに達した時点で掘り下げを中止した。その後、壁面の記録や土壌サンプルの採取などの最終的な作業を行い、12月10日に野外調査を終了した。

現場での調査の他に、調査区壁面より採取した土壌を試料としたプラントオパール分析、火山灰分析、花粉分析と珪藻分析、出土した木製品の樹種同定と大型植物化石、昆虫化石の分析を外部に委託・依頼した。それらの結果については本報告の７に掲載している。

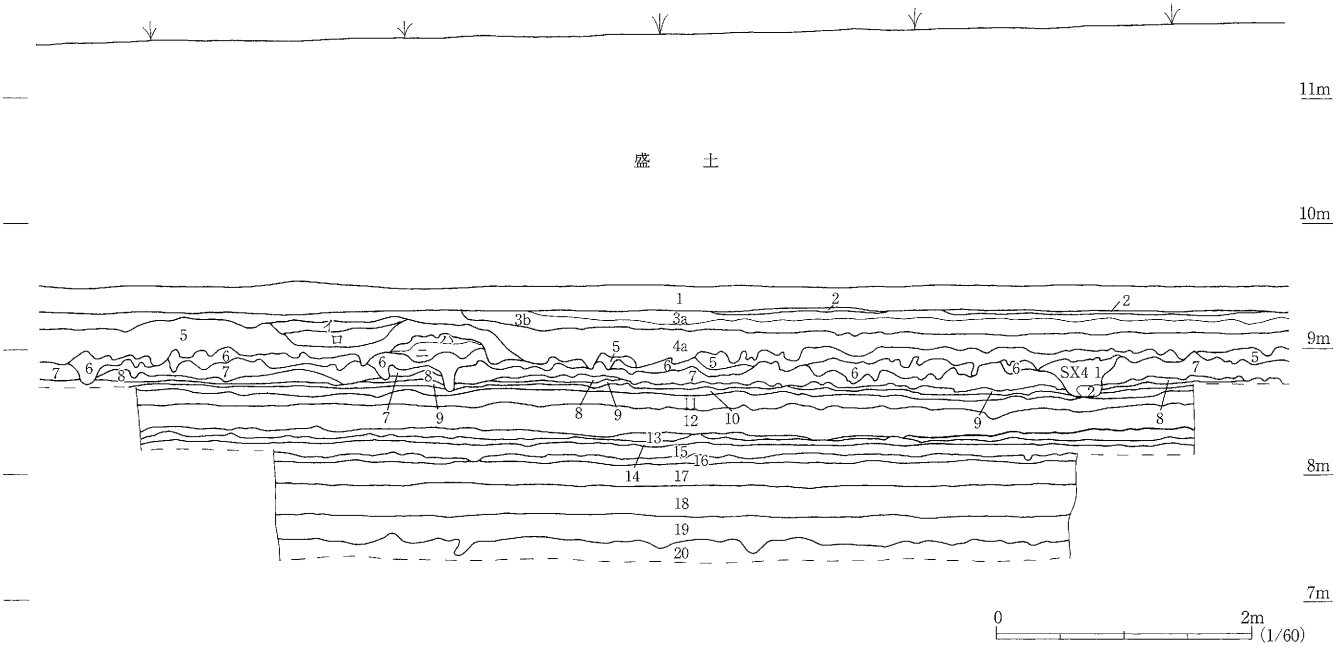
遺構の測量は、平面直角座標系Ｘを基準として設定し、座標値Ｘ＝－197,634.0ｍをＳ＝０、Ｙ＝3,834.0ｍをＥ＝０と置き換えて行った。

4　基本層序

本調査区内で確認した層位は大別で27層である。さらに３層、４層、21層を２層に分層し調査を実施しており、細別では30層となる。１層が盛土以前の水田耕作土で、２層から７層までのうち3ａ層・3ｂ層を除く２層・４ａ層・４ｂ層・５層・６層・７層の６層が水田跡または水田土壌である。ただし、４ｂ層は上層の耕作に伴う攪拌が大きく、北壁の一部でしか検出されなかった。ハ層とニ層は本来６層の上に堆積していた層が、５層以降の耕作によってほとんど攪拌され、東壁の5層畦畔の直下にのみ残存したものと考えられる。６層中に「十和田a火山灰」と考えられる灰白色火山灰が混入している。10層から15層まで泥炭質粘土層が薄い粘土層を挟んで連続して堆積しており、20層からグライ化が漸次始まっている。19層下部と20層中では縄文時代早期と考えられる遺構・遺物を検出している。21a層は砂とシルトの互層で層の厚さが100～120cmあったが、大量の土砂が急激に流れ込んで形成された自然堆積層と判断して分層せず単層として調査した。21b層で毬果が出土し、22層では後期旧石器時代の樹木と種子・毬果・昆虫化石などを検出している。26層中では標高５m20cm～30cmでテフラ分析によって姶良Tn火山灰との結果が得られている灰白色シルトが確認された。

第30次		第58次		第37次		第43次		第57次		第67次		第130次		所属時期
層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	層位	遺構	
1		1		1		1		1・2		1		1		現代
		－		－		－		－		－		2	畦畔	
2a・b		2a・2b		2a・2b		－		－		－		－		
2c	畦畔	3	耕作土	2c	耕作土	－		3a	耕作土	2a	耕作土	－		近世以降
砂		－		－		－		3b		2b		3a・3b		
3	畦畔	4a	畦畔	3	耕作土	－		4	畦畔	3	耕作土	－		近世
砂		－		－		－		－		－		－		
4	畦畔	4b	畦畔	－		－		5	畦畔	－		4a	畦畔	中世
砂		－		－		－		－		－		－		
－		－		－		－		－		－		4b	耕作土	中世？
5	畦畔	5	耕作土	4a	畦畔	－		6	耕作土	4	畦畔	5	畦畔	中世
6	畦畔	－		－		－		－		5	畦畔	6	畦畔	平安
7	畦畔	－		－		－		－		－		－		平安
		－		－		－		－		6		7	畦畔	平安
		6		4b		3		7		－		－		
		7								－		8		
						4		－		－		9		
		8		5		5a		8		7		10		
						5b						11		
		9		6		5c		9		8		12		
		－		－				10		9				
		9		6						10				
		10		7		6		11		11		13		
		11		8		7		12		12～14		14		
												15		
		12		9		8		13		15		16		
		13		10		9		14		16		17		

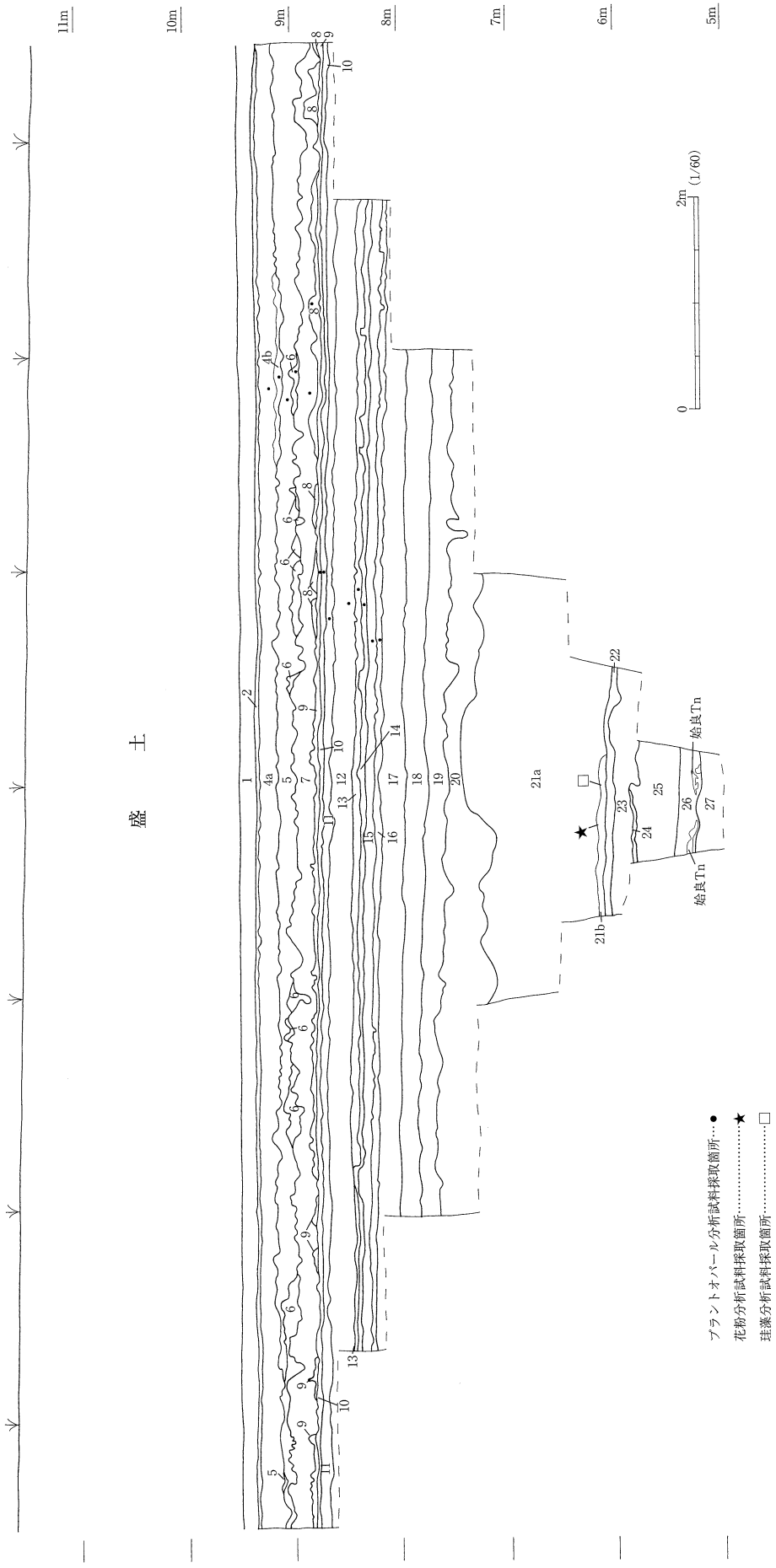
第１表　基本層序　層位対応表



第32図　調査区東壁断面図（1/60）

層位	土色		土性	層厚	備考
1	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	約15cm	旧耕作土
2	5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	1～4cm	細砂を含む。水田土壌。
3a	10YR4/2	灰黄褐色	砂	3～10cm	同色粘土をわずかに含む。調査区南側にのみ分布。
3b	10YR4/4	褐色	砂	3～14cm	層下部に2.5Y4/2暗灰黄色シルトを数mm～5cmの厚さで含む。調査区南側でのみ分布。
4a	10YR4/1	褐灰色	粘土	4～32cm	層全体に砂を多く含むが、調査区南西では砂の交じりが少ない。水田土壌。
4b	10YR3/1	黒褐色	粘土	2～17cm	砂を含む。調査区北壁の一部で確認。
5	5Y2/1	黒色	粘土	2～39cm	水田土壌。
6	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土	1～31cm	灰白色火山灰、10YR2/1黒色粘土を含む。調査区南側では上層の耕作の影響で残りが悪い。水田土壌。
7	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	2～30cm	水田土壌。
8	10YR2/1	黒色	粘土	1～30cm	植物遺体をわずかに含む。10YR6/2灰黄褐色粘土を帯状に含む。
9	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	1～7cm	植物遺体をわずかに含む。
10	10YR2/1	黒色	泥炭質粘土	2～8cm	植物遺体を多く含む。
11	10YR2/1	黒色	泥炭質粘土	6～16cm	植物遺体を含む。
12	10YR2/3	黒褐色	泥炭質粘土	13～28cm	植物遺体を多く含む。
13	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	1～13cm	植物遺体をわずかに含む
14	10YR2/1	黒色	泥炭質粘土	1～8cm	層下部に薄い帯状の粘土層（10YR6/2灰黄褐色）を部分的に含む。層上面に起伏が見られる。
15	10YR1.7/1	黒色	泥炭質粘土	5～15cm	植物遺体を含む。
16	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	2～8cm	植物遺体をわずかに含む
17	10YR1.7/1	黒色	粘土	15～23cm	2.5Y4/1黄灰色粘土を帯状に含む互層。植物遺体を含む。
18	10YR1.7/1	黒色	粘土	16～26cm	植物遺体を含む。
19	2.5Y3/1	黒色	粘土	13～34cm	植物遺体を含む。層全体に砂を含み、層下半ほど粗めの砂になる。
20	5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	7～41cm	砂や小礫を含む。グライ化が漸次始まる。
21a	7.5GY6/1 7.5GY5/1	緑灰色	粘土 砂	105～145cm	粘土と砂との互層。シルトや細砂、粗砂を含み、硬く締まった粘土層が見られる。
21b	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土	4～9cm	植物遺体をわずかに含む。毬果を検出。
22	10YR3/2	黒褐色	粘土	3～11cm	植物遺体・大型植物化石・昆虫化石を含む植物遺体の集積層。
23	2.5GY6/1 7.5Y5/2	オリーブ灰色 灰オリーブ色	粘土質シルト 砂	15～27cm	粘土質シルトと砂が混在し、小礫を含む。層の下面にやや乱れが見られる。
24	5Y3/2	オリーブ黒色	粘土	1～3cm	植物遺体を含む。西側にのみ分布。
25	2.5GY6/1	オリーブ灰色	シルト	35～46cm	同色砂質シルトを含む。
26	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土	10～20cm	部分的に5Y5/2灰オリーブ色粘土、2.5Y5/2暗灰黄色粘土、5Y5/2灰オリーブ色シルト（含2.5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト）、7.5Y7/1灰白色シルト（姶良Tn火山灰）の4層に細分される。
27	2.5GY6/1	オリーブ灰色	粘土質シルト	18～25cm	砂を含む。
イ	2.5Y4/1	黄灰色	砂	10cm（最大厚）	粗砂。10YR4/1褐灰色粘土を北側にわずかに含む。層底部に7.5Y5/2灰オリーブ色シルト層を帯状に含む。
ロ	10YR3/1	黒褐色	粘土	14cm（最大厚）	5層よりやや明るい色調。5層土のブロックを層底部に含む。
ハ	5Y2/1	黒色	粘土	8cm（最大厚）	5層よりややくらい色調。
二	10YR3/1	黒褐色	粘土	16cm（最大厚）	
SX4 1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土	30cm（最大厚）	灰白色火山灰をブロックで大量に含む。
SX4 2	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	10cm（最大厚）	

第２表　基本層序



第33図　調査区北壁断面図（1/60）

5　検出遺構と出土遺物

1）２層上面検出遺構（第36図①）及び２層出土遺物

〔検出遺構〕

２層は盛土及び1層の耕作の影響のため１～４cmの厚さでわずかに残存するのみであったが、東西方向に延びる畦畔痕跡と、それにほぼ直交して南に延びる畦畔痕跡をＴ字形に検出し、３つの区画を形成していたと考えれれる。西から東に延びる畦畔痕跡は調査区外へと続いており、さらに延長すると推定される。検出長は13m50cmで、方向はE－9.5°－Nである。南に延びる畦畔痕跡も調査区外へと続いていると考えられるが、南東の区画を形成していた畦畔のラインは明瞭ではなく、図では遺構の記録写真や南壁の土層観察からの推定線を破線で示した。南北方向の畦畔痕跡の検出長は5m60cmで、方向はN－２°－Eである。水田区画の面積は①が66.5㎡以上、②が42.0㎡以上、③が23.77㎡以上である。

〔出土遺物〕

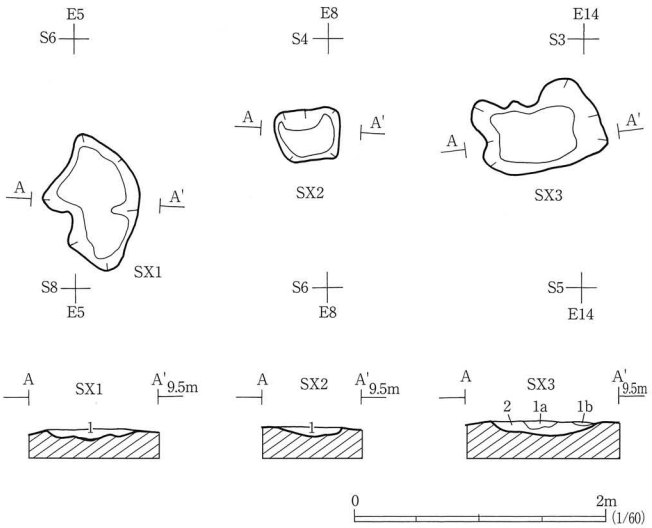
２層中からは、土師器片、磁器片、土製品などが出土しているが、いずれも小破片である。磁器片（J－１）は18世紀頃の肥前染付皿で、くらわんか手の見込部分である。土製品（P－１）は遺存状態が良好ではなく、形状や用途も不明であるため、写真のみ掲載した。土師器片は水田耕作に伴い下層から巻き上げられたものと考えられる。

〔所属時期〕

２層は残存状況が悪く、出土遺物も少ないが、J－１が18世紀頃の遺物であることと、周辺の調査区との層位の対比により、近世以降の水田跡と考えられる。また、この2層上面で確認した畦畔痕跡のうち、東西方向のものは、区画整理以前の畦畔と位置・方向が一致するが、区画整理以前の地図では南北方向の畦畔は記録されていない。これらのことから、２層で確認した畦畔痕跡は区画整理以前より古い時期のものと考えられる。

2）３層上面検出遺構

３層は砂層で水路・河川などからの氾濫堆積土と考えられる。調査区の南半には分布していたが、北半では全く確認されなかった。３層上面では性格不明遺構（SX1）を調査区西側寄りのE５、S７の交わる位置で検出している（第34図）。SX1は、平面形は南北に長い不整形を呈しており、規模は南北112cm、東西78cm、深さ８cmである。SX1からの出土遺物はない。



SX1

層	土　色	土性	備　考
1	5Y3/1　オリーブ黒色	砂	10YR4/3にぶい黄褐色砂と、粘土を含む。

３層検出性格不明遺構

SX2

層	土　色	土性	備　考
1	5Y3/2　オリーブ黒色	粗砂	同色の粘土を含む。

SX3

層	土　色	土性	備　考
1a	5Y4/1　灰色	粘土	5Y4/2灰オリーブ色砂を層底部に含む。
1b	5Y4/2　灰オリーブ色	粘土質シルト	同色砂を含む。
2	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	同色砂を多く含む。酸化鉄を含む。

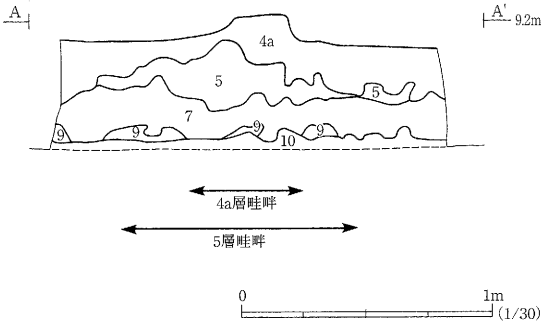
４層検出性格不明遺構

第34図　性格不明遺構平断面図（1/60）

3）４a層上面検出遺構（第36図②）及び４ａ層出土遺物

〔検出遺構〕

４a層上面では、東西方向に延びる畦畔とそれにほぼ直交して南に延びる畦畔痕跡をＴ字形に検出し、畦畔上で性格不明遺構2基を検出した。東から西に延びる畦畔は調査区外へと続いており、さらに延長すると推定される。検出長は13m44cmで、方向はE－８°－Ｎである。南に延びる畦畔も調査区外へと延長すると考えられる。検出長は６m16cmで、方向はN－2.5°－Wである。２条の畦畔はともに５層の畦畔とほぼ同位置にあり、断面観察からも5層の畦畔を踏襲して造られたと考えられる（第35図）。



第35図　４a層畦畔断面図（1/30）

畦畔の上端の幅は東西方向が80～140cmと広いのに対し、南北方向が10～40cmと狭く、東西方向の畦畔を基準として区画がつくられたと考えられる。調査区内で確認できた3つの区画はいずれも調査区外へと広がっているため、全体は確認できなかった。南側で検出した２つの水田区画は水路又は河川の氾濫によると考えられる３層の自然堆積層に覆われていたため、当時の水田面が比較的良好な状態で残されていた。３つの区画のうち、北側の区画①が標高９m20cm～９m25cmと最も高く、南の区画②は標高９m11cm～９m18m、③は９m10cm～９m17cmとなっており、その差は最大で15cmほどであり、南側の区画が一段低くなっていた。水田区画の面積は①が44.9㎡以上、②が41.7㎡以上、③が31.9㎡以上である。

性格不明遺構2基は東西の畦畔上で検出した（第34図）。SX２は調査区中央から北西寄りのE８、S５の交差する付近で確認した。平面形は東西に長い不整形を呈しており、規模は東西54cm、南北40cm、深さ７cmである。SX３は調査区中央から北東寄りのE14、S４の交差する付近で確認した。平面形は東西に長い不整形を呈しており、規模は東西110cm、南北50cm、深さ12cmである。SX２、SX３ともに出土遺物はない。

４a層水田跡の調査後、４a層除去中に南北方向の畦畔とほぼ同じ位置で、５層と４a層からなる帯状のプランを確認し、４a層に伴う擬似畦畔Bと捉えた（第36図③）。本来擬似畦畔Bは水田土壌の直下層が自然堆積層である場合に用いられる（斎野：1987）が、今回のケースは、富沢遺跡第86次調査の『連続耕作の水田跡にともなう「擬似畦畔B」について』で報告（佐藤：1997）されたＩタイプ（中間の水田土壌が帯状にのみ存在するもの）に該当すると判断されたため、擬似畦畔Bとして取り扱った。

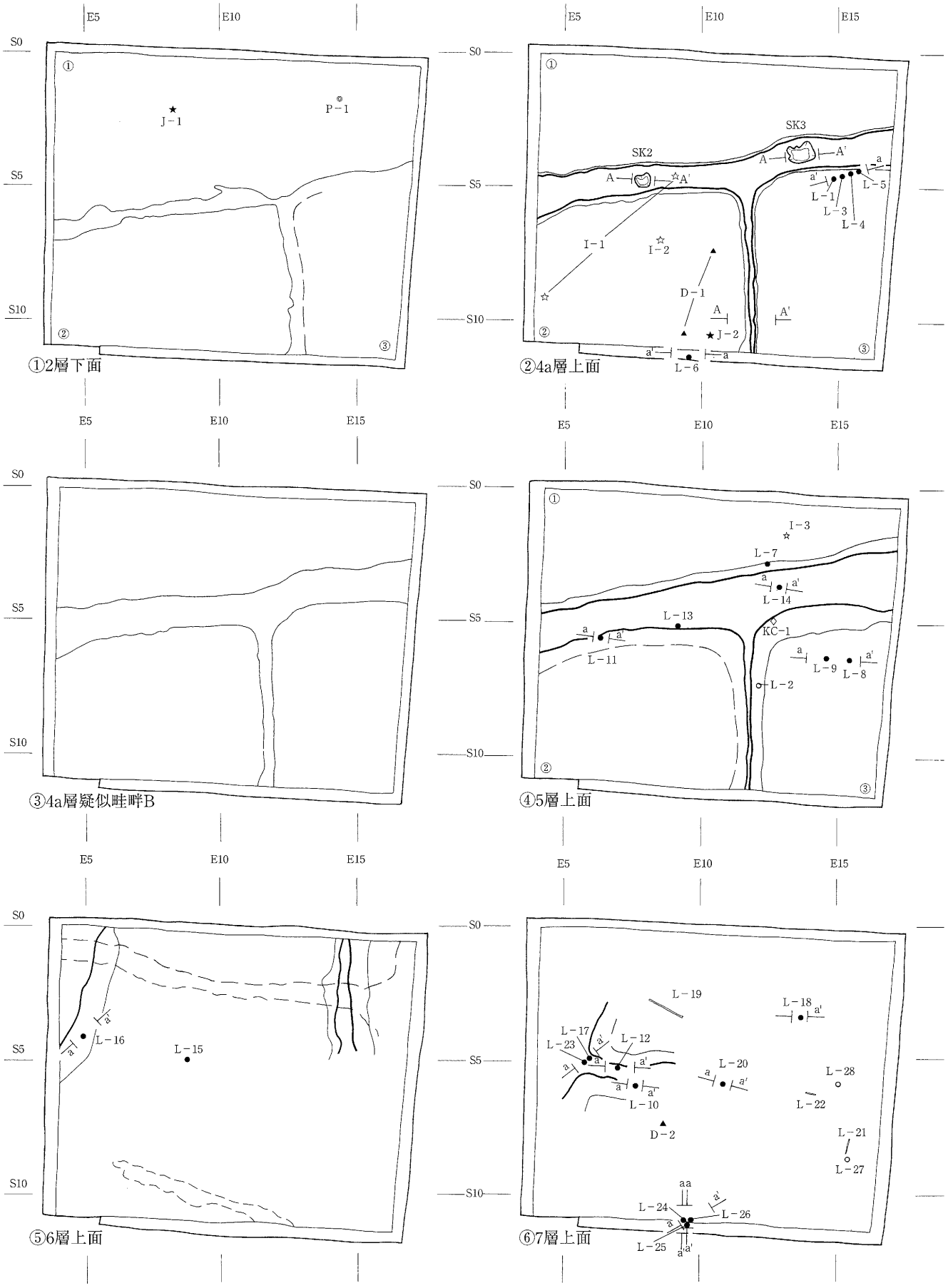
また、４a層の下層には北壁の断面観察で4b層の存在を確認しているが、平面上では畦畔などの遺構は認められなかった。４b層はプラントオパール分析の結果でイネと同時にムギ類の栽培の可能性も指摘されている。詳しくは後述の「７自然科学分析」の１）プラントオパール分析の項目を参照されたい。

〔出土遺物〕

４a層中からは、土師器、陶磁器の小破片と、打ち込み杭、種子（モモ・オニグルミ）などが出土している。

土師器片は８点出土しているが、遺存状態があまり良好ではなく、登録できたものは１点（D－１）であった。D－１は南西の区画で出土した２点の小破片が接合しており、ロクロ調整、内面黒色処理を施した坏の底部であるが、水田耕作に伴って下層から巻き上げられたものと考えられる。

打ち込み杭は5点出土したが、いずれも上端を欠損している。５点とも芯持ち材を加工して尖端部を作り出している。このうち、L－１、L－３～５は等間隔で並んでおり、樹種が4点ともクリであることから、同時期に存在し、水田耕作に関わる何らかの施設を形成した杭列の可能性が考えられる。L－６（クロマツ）は尖端部を二面加工した打ち込み杭であり、数箇所に枝打ち痕が認められる。



▲ロクロ土師器　☆陶器　★磁器　◇石器　●打ち込み杭　○材　◎土製品

第36図　検出遺構平面図（1/200）

陶器片は南西の区画と畦畔上から合わせて３点出土し、２点が接合（I－1）した。12世紀頃の渥美産の甕または壷の体部片である。砥石として転用した痕跡が見られ、稜線や表面が摩滅している部分がある。もう１点（I－2）はI－1と同一個体と考えられる渥美産の小破片であるが、接合はしなかった。I－1と同様に砥石として転用された痕跡がある。

磁器片（J－2）は鎌倉時代後半（13世紀後半から14世紀前半）の中国龍泉窯産青磁蓮弁文碗の体部片である。

〔所属時期〕

４a層の所属時期については、出土遺物は少ないが、I－1・２が12世紀頃、J－2が13世紀後半から14世紀前半のものであることや、周辺の調査区との対比から、中世もしくはそれ以降と考えられる。

４）５層上面検出遺構（第36図④）及び出土遺物

〔検出遺構〕

５層上面では、東西方向に延びる畦畔とそれにほぼ直交して南に延びる畦畔をＴ字形に検出した。東西方向及び南北方向の畦畔とも調査区外へと続いており、さらに延長すると推定される。東西方向の畦畔は検出長が13m80cmで、方向はE－9.5°－Nである。南北方向の畦畔は検出長が５m74cmで、方向はN－1°－Wである。畦畔の上端の幅は東西方向が110～214cm、南北方向が４～38cmとなっており、東西方向の畦畔を基準として区画がつくられたと考えられる。また、東西方向の畦畔は東に向かって徐々に広がっており、東側の畦畔上面で人の足跡を検出している。調査区内で確認できた３つの区画は４層同様いずれも調査区外へと広がっているため、全体は確認できなかった。また、南西区画の畦畔下端ラインは西壁の壁面観察の結果、4層の耕作に伴う影響で当初調査した水田面よりも低くなることが確認されたため、推定の下端ラインを破線で復元したものである。３区画のうち、北側の区画①が標高８ｍ８cm～９ｍ14cmと最も高く、南西区画②は標高８ｍ99cm～９ｍ６cm、南東区画③は８ｍ89cm～８ｍ98cmとなっており、その差は最大で25cmほどであった。水田区画の面積は①が35.3㎡以上、②が35.0㎡以上、③が26.6㎡以上である。

〔出土遺物〕

５層中からは、礫石器、打ち込み杭、材、陶器片、種子（モモ）などが出土している。

礫石器（Kc－1）は２条の畦畔が交わる位置の南東区画側から出土している。隅丸三角形を呈したやや扁平な礫の表裏両面に磨面が見られる。用いられている石材はデイサイトである。

打ち込み杭は６点出土しているが、L－９を除いて、いずれも上端部を欠損している。L－７（サクラ属）は尖端部を刃物で作り出した痕跡がわずかに残っているのみである。L－８（サクラ属）は折り取ってできた尖端部をそのまま利用して杭としている。L－９（ヤナギ属）は「く」の字形に曲がった芯持ちの杭材である。尖端部にわずかな加工痕がみられる。L－11（ヤナギ属）とL－13（ヤナギ属）は、尖端部を細かい加工によって作り出している。L－14（ウツギ属）も尖端部を細かい加工によって作出している。

材（L－２）は南東区画の畦畔から出土している。樹種はウツギ属で先端部に一面のみの加工痕があるが、用途は不明である。

陶器片（Ｉ－３）は常滑産の甕または壷の体部片で、中世に属するものと考えられる。

〔所属時期〕

５層の所属時期については、I－３が中世頃の遺物であり、4a層が前述のとおり中世もしくはそれ以降と考えられること、直下層の6層中に灰白色火山灰が混入していること、周辺調査区との対比から、中世と考えられる。

5）6層上面検出遺構（第36図⑤）及び出土遺物

〔検出遺構〕

6層上面では調査区の東側と西端で南北方向に延びる畦畔を1条ずつ検出した。東側の畦畔は南側にも延びていたと考えられるが、上層の耕作による影響で、南側への延長は確認できなかった。検出長は3m46cmで、方向はN－0.5°－W、上端20～63cmである。西端で検出した畦畔は検出長が6m10cmで、方向はN－17.5°－Eである。上端での幅は検出できた部分で最大140cmである。検出した2条の畦畔のつながりは不明である。

同じく6層上面では調査区の南側で東西方向の帯状のプランを確認した。検出長は7m14cm、方向はE－20.5°－S、幅30～60cmである。5層以前にやや窪んだ部分に堆積したものが、5層以降の耕作による影響を受けずに一部にのみ残ったと考えられるが、性格は不明である。

その他、調査区東壁で性格不明遺構1基（SX4）を検出している。SX4は壁面での検出部分で南北65cm、深さ30cmである。断面形は上部が外側に開いたU字形を呈している。堆積土は2層に分けられ、上層は基本層6層の暗オリーブ褐色粘土を起源とし、大量の灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。下層は7層を起源とする黒褐色粘土ブロックが混入している。

また、6層除去後に調査区の北側で帯状のプランを検出した。検出長は11m28cm、方向がE－3.5°－S～E－7.5°－Sで、幅は40～94cmである。この帯状のプランは、6層を起源とする土壌中に6層と8層が交じり合った状態であったことから、6層の耕作に関わるものと考えられるが、6層で検出した2条の畦畔の位置と一致せず、調査区の北壁と東壁の断面でも確認できなかった。

〔出土遺物〕

6層中からは打ち込み杭が2点出土しているのみである。L－15（ヤナギ属）は調査区の中央からやや西側で検出された。芯持ち材を素材として、尖端部を細かい加工によって作り出している。L－16（コクサギ）は西側の畦畔沿いで検出された。芯持ち材の尖端部を二面加工して作り出している。

〔所属時期〕

6層では時期決定資料となる遺物は出土していないが、畦畔中及び耕作土中に灰白色火山灰が混入している。この状況は、富沢遺跡第30次調査の「富沢地区における平安時代の水田跡（イ）水田の年代について」（平間：1991）で分類されたdタイプであるため断定はできないが、周辺の調査区との対比から、灰白色火山灰降下前後の時期と考えられる。

6）7層上面検出遺構（第37図⑥）及び出土遺物

〔検出遺構〕

7層上面では、調査区の西側で南北方向の畦畔に東西方向の畦畔が、T字形に接する部分を確認した。しかし、上層の耕作に伴う影響で残存状況が良好でなく、一部のみの検出であった。南北方向の畦畔は検出長4m00cmで、方向はN－22°－Eである。畦畔の西側のラインは上層の耕作により確認できなかった。東西方向の畦畔は調査区の中央付近で途切れており、検出できた部分では、長さが3m30cmで、方向はE－11°－S、上端の幅は72cmほどである。

〔出土遺物〕

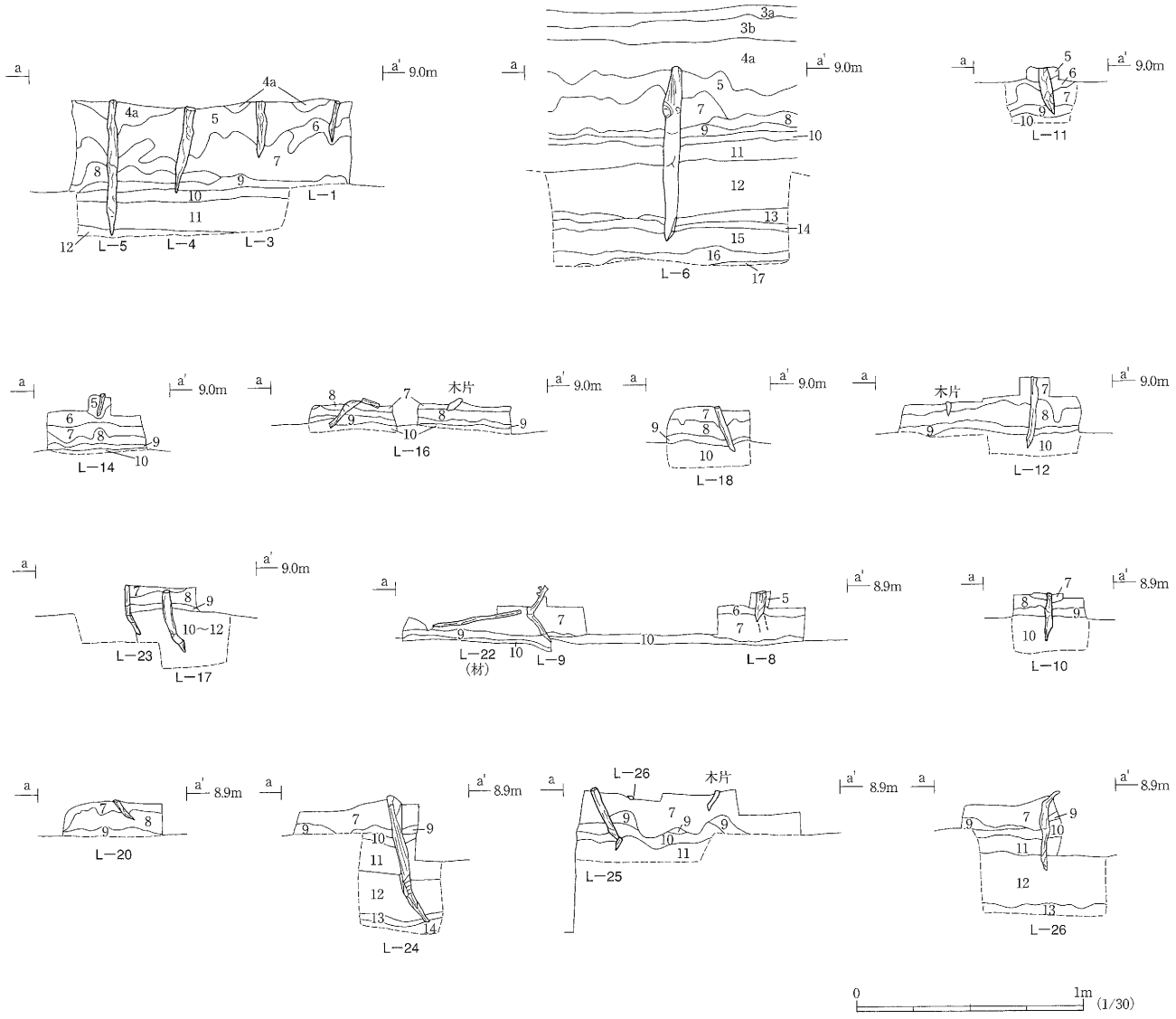
7層中からは土師器片と打ち込み杭、材が出土している。

土師器（D－2）は、ロクロ調整され、内面が黒色処理を施した坏の底部であり、回転糸切りによって底部切り離しが行われている。体部から口縁部のほとんどを欠損している。

打ち込み杭は9点出土しており、そのうち芯持ち材がL－17（リョウブ）、L－18（ウツギ属）、L－20（ヤナギ属）、

L－23（サクラ属）、L－25（カエデ属）、L－26（クリ）の６点で、樹種は様々であるが、いずれも一面のみ加工して打ち込み杭としている。分割材は、L－12（ヤナギ属）とL－24（マツ属）の２点である。L－12は大きく二面を整えたあと、分割面をやや削って調整し尖端部を作り出している。L－24は枝打ち痕があり、尖端部を作り出すために少なくとも5度刃を入れて加工した痕跡が見られる。L－10（ウルシ属）は芯持ち材の先端を割り裂いており、割り裂いた部分をそのまま杭の尖端部として利用している。

材は４点出土しており、先端部を杭同様に鋭角に加工しているものが３点ある。そのうち、L－21（サクラ属）とL－27（サクラ属）は芯持ち材で、出土地点も近接しており、検出状況から考えて同一個体と考えられる。L－21、L－27ともに枝打ち痕と先端部の加工痕が認められる。接合はしなかったが、同一個体であるという判断から、L－21の加工痕を上端部、L－27の加工痕を尖端部と解し、L－21の実測図と写真は加工痕を上にして掲載した。また、L－27の検出層位は10層であったが、L－21との関係から7層の出土遺物として記載した。L－22（キブシ）は尖端部を大別で二面加工した材である。L－19（ウコギ属）は一端が二股に分かれ、最大長が139.8cmある用途不明の材である。両端に細かい加工痕があるが、杭のような尖端部は作出されていない。枝打ち痕も観察される。



第37図　打ち込み杭断面図（1/30）

〔所属時期〕

７層の水田跡は、Ｄ－２の特徴と、層中に灰白色火山灰が混入していないことから、灰白色火山灰降下以前の平安時代前半頃に所属するものと考えられる。

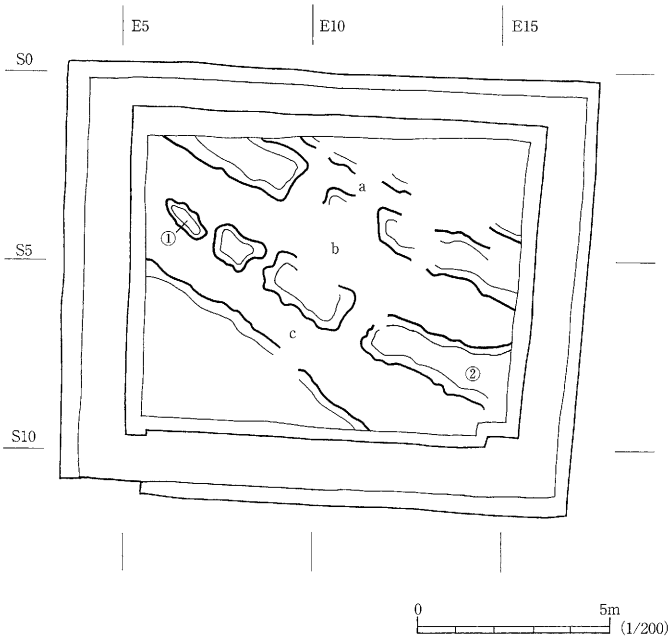
７）10層出土遺物

10層では遺構は検出されなかったが、材が２点出土しており、出土地点を第36図⑥に示した。Ｌ－28（マツ属）は樹皮を残した芯持ち材を素材として尖端部を加工している。加工面は一面である。Ｌ－27も10層で検出されたものであるが、７層出土のＬ－21と同一個体と考えられることから、７層の出土遺物の項で記載している。

８）14層上面（第38図）

14層では北西から南東の方向に延びる帯状の高まりを３条検出した。水田跡と自然堆積の可能性の双方を検討しながら、慎重に掘り下げを行った。その結果、不自然に連続する窪みが数箇所で確認された。

北西から南東に延びる帯状の高まりは3条とも調査区外へさらに延長すると考えられるが、bとcは調査区の北西部で交わることを確認している。帯状の高まりaの検出長は７m40cmで方向はE－26°－S、bの検出長は10m72cmで方向はE－24.5°－S、cの検出長は10m00cm、方向はE－34.5°－Sである。a、b、cの帯状の高まりの間には小畦畔に似た高まりがあり、３条の高まりを結んで区画のような窪みを形成しているが不定形である。これらの窪みは北東部の最も小さいもの①で面積0.2㎡であり、最も大きなもの②で面積　3.23㎡である。



第38図　14層平面図（1/200）

14層の下部には厚さ２～３㎜の薄い粘土層が見られ、自然堆積層の特徴を有しているが、この粘土層は調査区全体に連続的に分布するものではない。出土遺物はなく、プラントオパール分析結果でもイネは検出されていない。人為的なものとは断定できなかったが、近隣の既調査区の壁面でもこの高まりが認められており、今後形成メカニズムの解明を含め性格の究明が必要と考えられることから報告を行った。

９）20層検出遺構及び19層下部・20層出土遺物（第39図）

20層では検出段階でいくつかの土坑状もしくはピット状のプランと倒木痕が確認されたが、掘り込みを行った結果、認定できた遺構はピット１基のみであった。

ピットは調査区中央部の北西寄りで検出された。長軸30cm、短軸18cmの楕円形で、深さは16cmである。堆積土は2層に分けられ、上層が黒色の粘土、下層が黄灰色の砂に粘土が混入している。

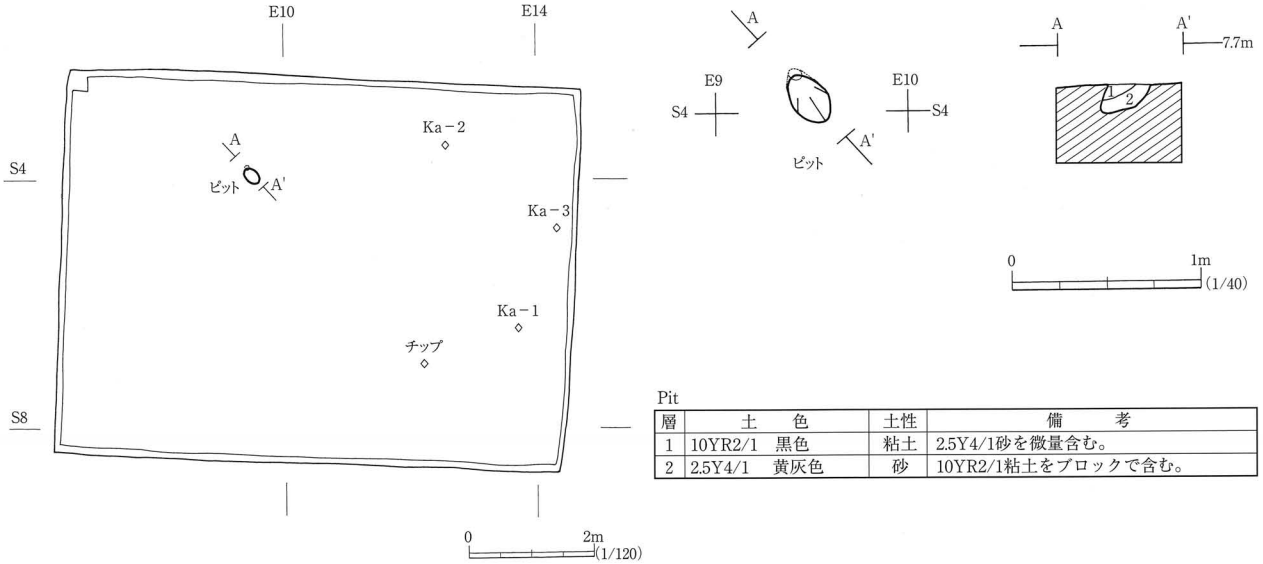
19層下部から石鏃（Ka－1）１点、20層中から石器２点とチップ１点が出土している。チップ以外の石器３点を図示した（第41図）。

Ka－1はやや珪化したデイサイト質凝灰岩を石材とした凹基石鏃である。尖端部分は欠失していたが、基部の両端は検出時の破損である。b面に主要剝離面を残しており、両側縁a面からb面側へ剝離した後をb面側からa面側へ

の細部調整によって整形している。

Ka－2はデイサイト質凝灰岩を石材とした掻器で、剝離面打面の剝片を素材としており、a面に細部調整を施している。刃部の角度は70～85°と急角度である。Ka－3は頁岩を石材とした削器で、a面の右側と末端に自然面を残す縦長の剝片を素材としており、両側縁に粗めの細部調整を施している。刃部の角度はa面の左側縁が55～60°、右側縁が60～70°である。

20層からは時期決定資料となる土器は出土していないが、グライ化が始まっていることや周辺調査区の出土遺物により、20層は縄文時代早期頃の時期と考えられる。



Pit

層	土　色	土性	備　考
1	10YR2/1　黒色	粘土	2.5Y4/1砂を微量含む。
2	2.5Y4/1　黄灰色	砂	10YR2/1粘土をブロックで含む。

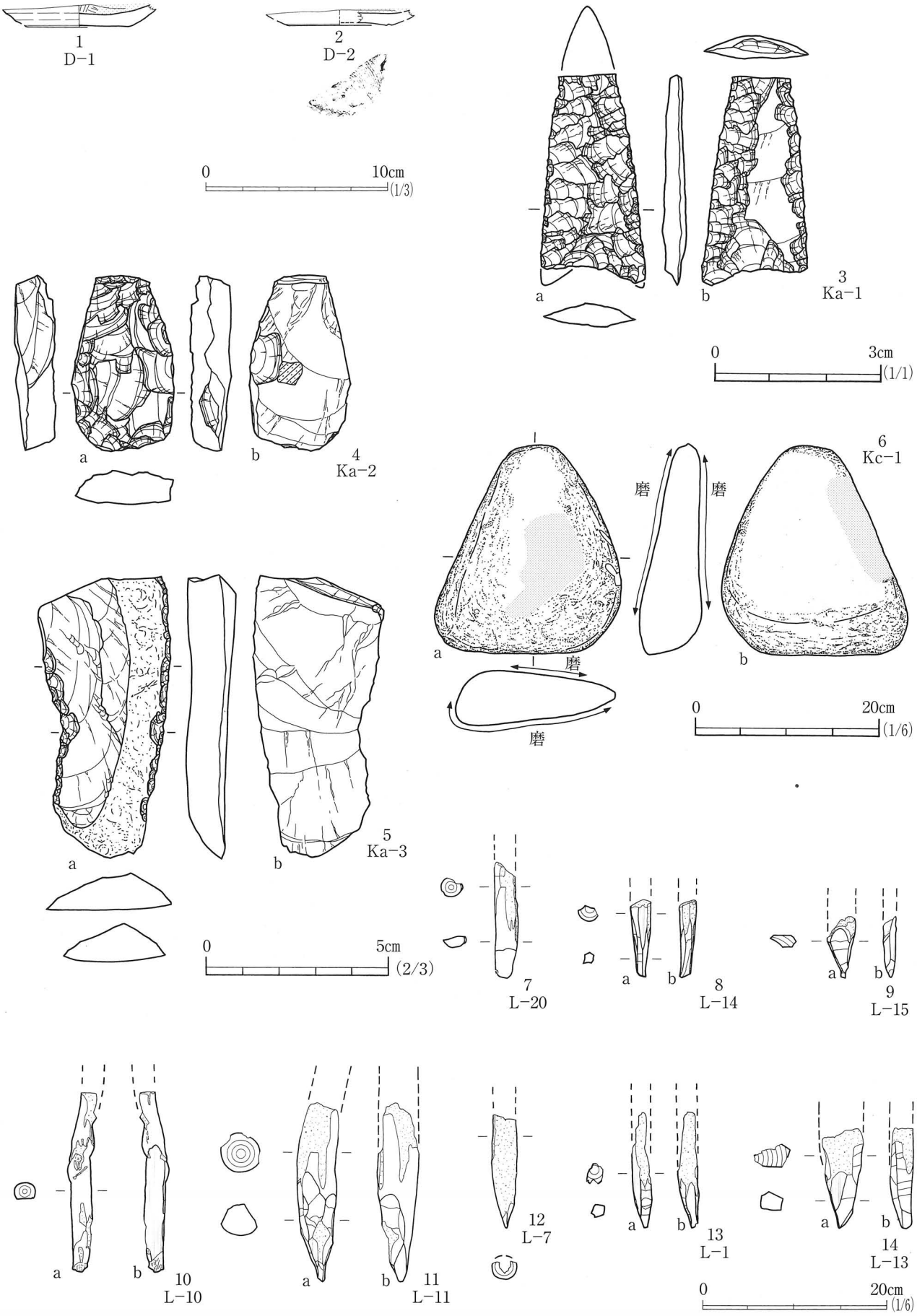
第39図　20層検出遺構平面図（1/120）

図版番号	登録番号	種別	器　種	出土層位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	特　徴	備　考	写真番号
41－1	D－1	土師器	坏	4層	(1.2)		5.6	内面黒色処理	底部摩滅	19－1
41－2	D－2	土師器	坏	7層	(0.8)		(5.6)	内面黒色処理･底部回転糸切痕		19－2

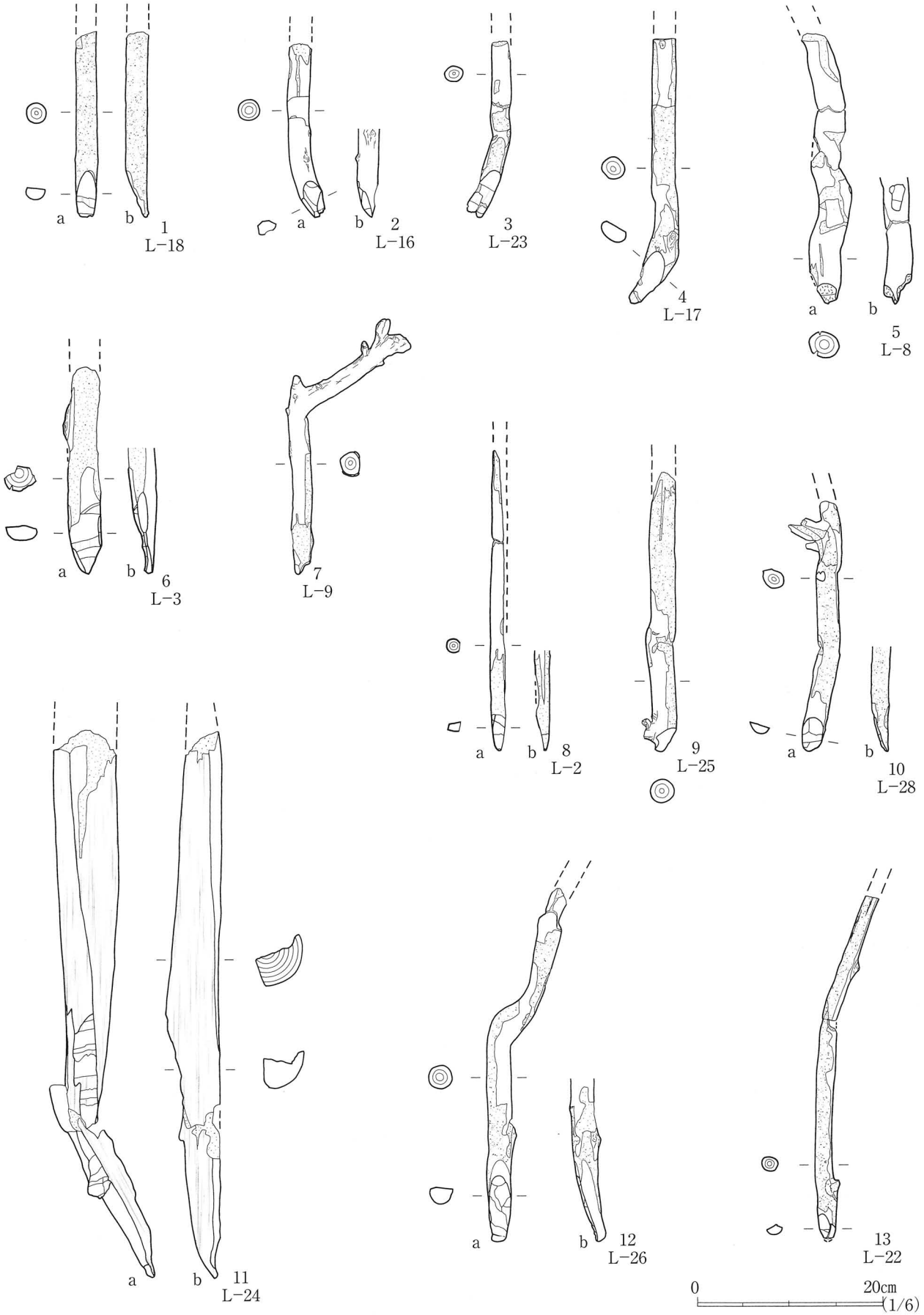
図版番号	登録番号	種　別	石　材	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考	写真番号
41－3	Ka－1	石鏃	デイサイト質凝灰岩	19層下部	(3.9)	1.9	0.4	2.7	やや珪化	19－9
41－4	Ka－2	掻器	デイサイト質凝灰岩	20層	4.9	2.8	1.2	17.3		19－10
41－5	Ka－3	削器	頁岩	20層	7.8	3.65	1.15	31.9		19－11
41－6	Kc－1	磨石	デイサイト	5層	23.3	20.4	7.5	41.7		19－12

図版番号	登録番号	種　別	樹　種	木取り	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備　考	写真番号
41－13	L－01	打ち込み杭	クリ	分割材	4層	(12.8)	2.0	2.2		19－19
42－08	L－02	材	ウツギ属	芯持ち	5層	(32.8)	(1.5)	1.5		20－08
42－06	L－03	打ち込み杭	クリ	芯持ち	4層	(22.8)	3.6	2.9		20－02
43－06	L－04	打ち込み杭	クリ	芯持ち	4層	(36.7)	3.2	2.6	枝打ち痕	20－13
43－03	L－05	打ち込み杭	クリ	芯持ち	4層	(58.5)	3.1	3.3	枝打ち痕	20－16
43－04	L－06	打ち込み杭	クロマツ	芯持ち	4層	(78.6)	6.1	6.4	枝打ち痕	20－18
41－12	L－07	打ち込み杭	サクラ属	芯持ち	5層	(12.7)	2.8	(2.0)		19－18
42－05	L－08	打ち込み杭	サクラ属	芯持ち	5層	(29.8)	3.2	2.9	枝打ち痕、尖端部折り取り	20－09
42－07	L－09	打ち込み杭	ヤナギ属	芯持ち	5層	28.2	2.2	2.6		19－13
41－10	L－10	打ち込み杭	ウルシ属	芯持ち	7層	(19.9)	2.2	1.9		20－12
41－11	L－11	打ち込み杭	ヤナギ属	芯持ち	5層	(19.9)	4.4	4.5		20－03
43－05	L－12	打ち込み杭	ヤナギ属	分割材	7層	(26.9)	4.3	2.9		20－01
41－14	L－13	打ち込み杭	ヤナギ属	分割材	5層	(11.0)	4.5	2.5		19－14
41－08	L－14	打ち込み杭	ウツギ属	半割材？	5層	(8.7)	2.3	1.9		19－15
41－09	L－15	打ち込み杭	ヤナギ属	分割材？	6層	(6.8)	2.8	1.5		19－16
42－02	L－16	打ち込み杭	コクサギ	芯持ち	6層	(19.2)	2.3	2.2		20－04
42－04	L－17	打ち込み杭	リョウブ	芯持ち	7層	(29.3)	2.5	2.5		20－06
42－01	L－18	打ち込み杭	ウツギ属	芯持ち	7層	(20.5)	2.3	2.3		20－11
43－07	L－19	材	ウコギ属	芯持ち	7層	139.8	3.4	2.9	両端加工　枝打ち痕	20－21
41－07	L－20	打ち込み杭	ヤナギ属	芯持ち	7層	(12.8)	2.3	2.2		19－17
43－01	L－21	材	サクラ属	芯持ち	7層	(51.6)	2.5	2.1	L－27と同一個体　枝打ち痕	20－19
42－13	L－22	材	キブシ	芯持ち	7層	(37.6)	2.0	1.7		20－14
42－03	L－23	打ち込み杭	サクラ属	芯持ち	7層	(19.6)	2.0	1.7		20－05
42－11	L－24	打ち込み杭	マツ属	分割材	7層	(61.5)	5.8	6.8	枝打ち痕	20－17
42－09	L－25	打ち込み杭	カエデ属	芯持ち	7層	(30.8)	2.8	2.8		20－10
42－12	L－26	打ち込み杭	クリ	芯持ち	7層	(38.6)	2.5	2.6		20－15
43－02	L－27	材	サクラ属	芯持ち	(10層)	(22.6)	1.9	1.8	L－21と同一個体　枝打ち痕	20－20
42－10	L－28	材	マツ属	芯持ち	10層	(27.5)	2.2	1.9	枝打ち痕	20－07

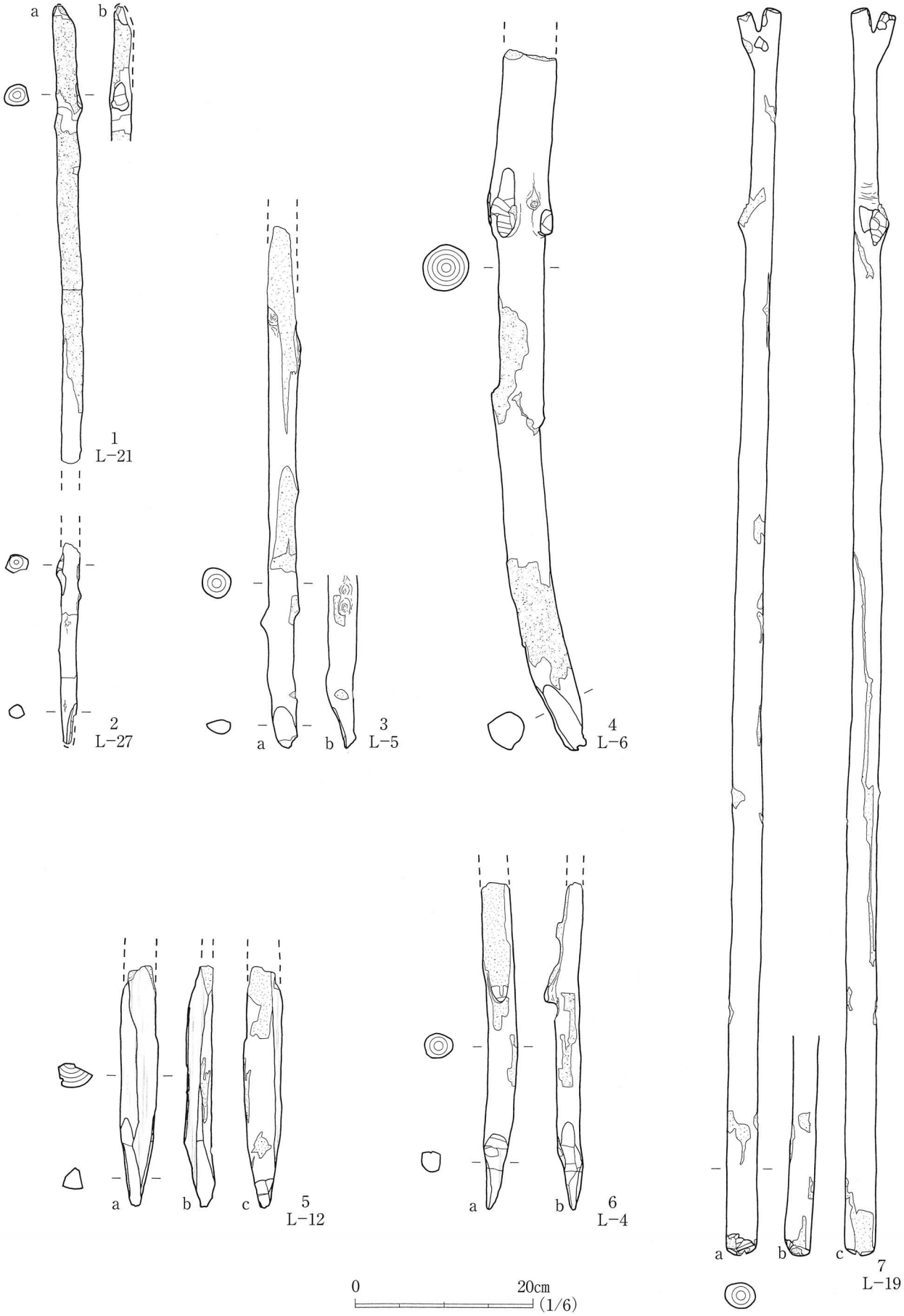
出土遺物観察表


1
D-1
2
D-2
0
10cm
(1/3)
3
Ka-1
a
b
0
3cm
(1/1)
4
Ka-2
a
b
6
Kc-1
磨
磨
磨
磨
a
b
0
20cm
(1/6)
5
Ka-3
a
b
0
5cm
(2/3)
7
L-20
8
L-14
a
b
9
L-15
a
b
10
L-10
a
b
11
L-11
a
12
L-7
13
L-1
a
b
14
L-13
a
b
0
20cm
(1/6)

第40図　出土遺物（1）


a
b
1
L−18
a
b
2
L−16
3
L−23
4
L−17
a
b
5
L−8
a
b
6
L−3
7
L−9
a
b
8
L−2
9
L−25
a
b
10
L−28
a
b
11
L−24
a
b
12
L−26
13
L−22
0
20cm
(1/6)

第41図　出土遺物（２）



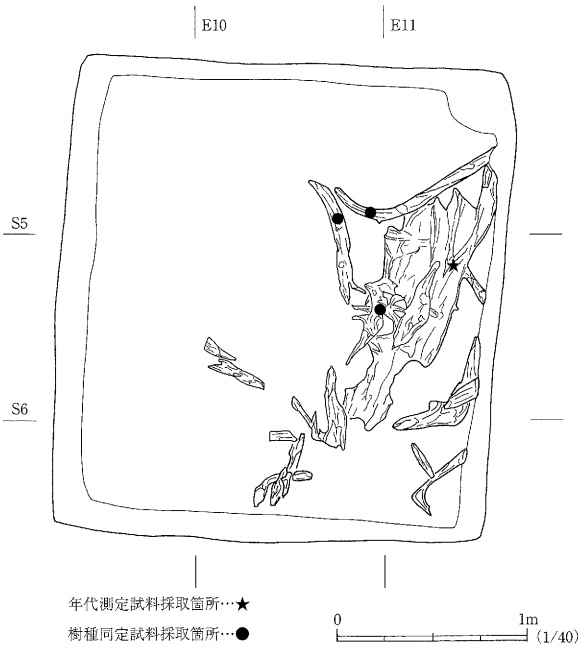
第42図　出土遺物（3）

10）22層（第43図）

22層では、後期旧石器時代の樹木や毬果、種子などの大型植物化石及び昆虫化石が検出された。

上層の21b層においても毬果を検出している。21b層は植物遺体を含む粘土層で、水成堆積の様相を呈しており、未分解の樹木片などを含んでいる。この層からはトウヒ属とカラマツ近似種の毬果が出土していた。

22層は厚さが5～13cmほどで、部分的に植物遺体を多量に含む腐食質粘土層が比較的良好に残っていた。樹木の幹や枝、フシの部分を検出した。樹種同定の結果、樹木はマツ属単維管束亜属やカラマツ属、トウヒ属であり、針葉樹が生育する環境にあったと考えられる。また、トウヒ属の毬果、チョウセンゴヨウの種子が見つかっている。チョウセンゴヨウの種子はまとまって検出され、その出土位置や食痕も認められなかったことから、マツ属単維管束亜属の樹木のものである可能性が高いという指摘がなされている。これらの樹木等の出土は調査区の東側に偏っており、西側では樹木や毬果・種子等は検出できなかったことから、樹木は東側に広がると考えられる。



第43図　22層検出樹木

22層の層下部からはトウヒ属やカラマツ属、マツ属単維管束亜属の花粉化石や陸生の珪藻化石が多く見られるのに対して、上部ではトウヒ属の花粉化石や陸生珪藻化石は減少し、水生の珪藻化石などが増加している。また、22層では地表性の昆虫化石が多数検出されている。これらのことから、22層堆積初期頃には針葉樹を中心とした植物が分布する環境であったが、22層の上部が堆積した頃には徐々に水域が広がり沼沢から湿地が部分的に形成されトウヒ属、カラマツ属などの樹木も部分的に衰退したと考えられる。

本調査区内で腐食質粘土層が比較的明確に確認できたのは22層のみであり、複数の腐食質粘土層が検出されている第30次調査区や第58次調査区などのどの層と対応するものかは、不明である。

6　まとめ

1）富沢遺跡第130次調査では、平安時代から近代までの水田跡、縄文時代の遺構･遺物、後期旧石器時代の森林跡等が検出された。

2）水田跡は、平安時代から近世までの５面（７層・６層・５層・４a層・２層）を検出し、壁面観察により４b層の水田土壌の存在を確認した。

3）２層では東西方向の畦畔痕跡と、それにほぼ直交する南北方向の畦畔痕跡をT字形に検出した。２層水田跡は、区画整理前より古い水田跡で、近世以降近代にかけての時期のものと考えられる。区画整理前の水田では南北方向の畦畔は取り払われている。４a層水田跡の畦畔の踏襲が認められる。

4）４a層では、２層同様に東西方向の畦畔と、それにほぼ直交する南北方向の畦畔をT字形に検出した。４a層水田跡は、中世もしくはそれ以降の水田跡であるが、周辺調査区との対比から、近世までの時期におさまるものと考えられる。５層水田跡の畦畔の踏襲が認められる。

5）４b層は壁面観察で確認された中世の時期に属すると考えられる水田土壌である。プラントオパール分析の結果、イネの他に、ムギの栽培の可能性が指摘されており、今後の調査によって検証していく必要がある。

6）5層では、4a層同様に東西方向の畦畔と、それにほぼ直交する南北方向の畦畔をT字形に検出した。5層水田跡は中世の時期に属する。

7）6層では、南北方向の畦畔を2条検出したが、区画・規模等が分かるものは認められなかった。6層水田跡は灰白色火山灰降下前後の時期に属する。

8）7層では、東西方向の畦畔が南北方向の畦畔にT字形に接する部分を確認したが、区画・規模等が分かるものは認められなかった。7層水田跡は、平安時代前半頃の時期に属する。

9）14層では、畦畔状の高まりを確認したが、調査状況やプラントオパール分析の結果等からも人為的なものと断定するまでにはいたらなかった。自然に形成された可能性も考えられ、形成メカニズムと性格の究明も必要である。

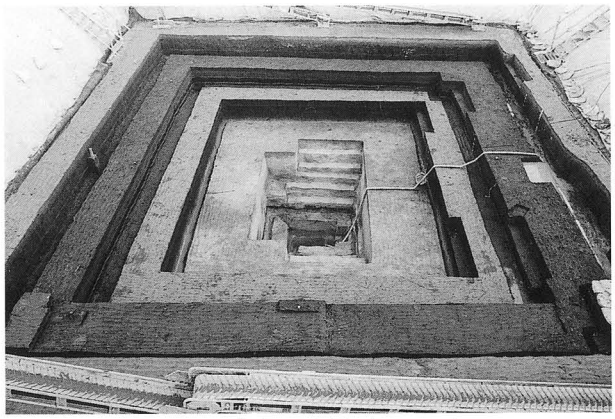
10）20層では、縄文時代早期と考えられるピットが検出され、19層下部から石鏃、20層から掻器・削器等の石器が出土した。

11）22層では、後期旧石器時代の森林跡が発見され、当時の自然環境が、陸生の植物や昆虫が生育する環境から、沼沢や湿地などが広がり、水生植物などが生育する環境へと変化したことが分かった。

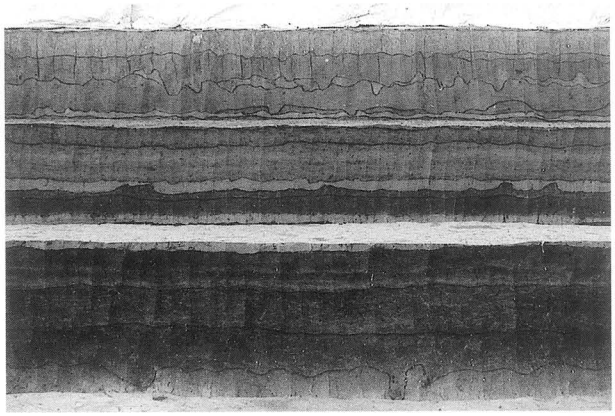
12）26層で検出した灰白色シルト層が、テフラ分析で第58次調査区同様に姶良Tn火山灰と考えられるとの結果が得られたことから、富沢遺跡北部B地区周辺の標高約5mから5m30cmに付近に姶良Tn火山灰が層として広がる可能性が考えられる。年代決定の鍵として重要な層であることから、今後の調査によって検証していく必要がある。

参考・引用文献

荒井　格（2002）：「富沢遺跡第121次調査」『小鶴城跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告集第261集
荒井　格・赤澤　靖章（2000）：『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告集第242集
太田　昭夫（1989）：「第2章第8節富沢遺跡第43次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告集第128集
太田　昭夫（1991）：『富沢遺跡－第30次調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告集第149集
太田　昭夫（1996）：「第3章富沢遺跡第93次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（9）』仙台市文化財調査報告集第208集
太田　昭夫・斎野　裕彦（1992）：『富沢遺跡－第30次調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告集第160集
工藤　哲司（1999）：『富沢遺跡第104次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第235集
工藤　哲司（2003）：「富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告集第266集
斎野　裕彦（1987）：第7章第1節『富沢―富沢遺跡第15次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告集第98集
佐藤　甲二・平間　亮輔他（1991）：『富沢遺跡第35次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集
佐藤　甲二（1991）：「第2章第11節富沢遺跡第67次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告集第152集
佐藤　甲二（1997）：『富沢・泉崎浦・山口遺跡（10）』仙台市文化財調査報告集第220集
佐藤　洋（1991a）：「第2章第1節富沢遺跡第57次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告集第152集
佐藤　洋（1991b）：「第2章第2節富沢遺跡第58次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告集第152集
中富　洋（1989）：「第2章第2節富沢遺跡第37次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告集第128集
平間　亮輔（1993）：『富沢・泉崎浦・山口遺跡（6）』仙台市文化財調査報告集第172集
渡部　紀（2003）：「富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告集第266集
渡部　紀・加藤　徳明（2002）：「郡山遺跡（第141次調査）」『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告集第261集



1　調査完了全景（西から）

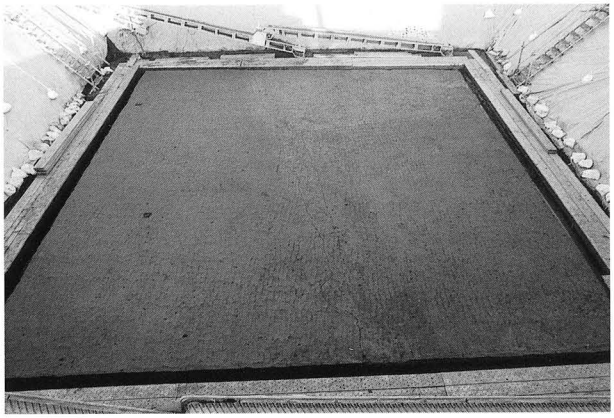


2　北壁断面（1～20層）（南から）

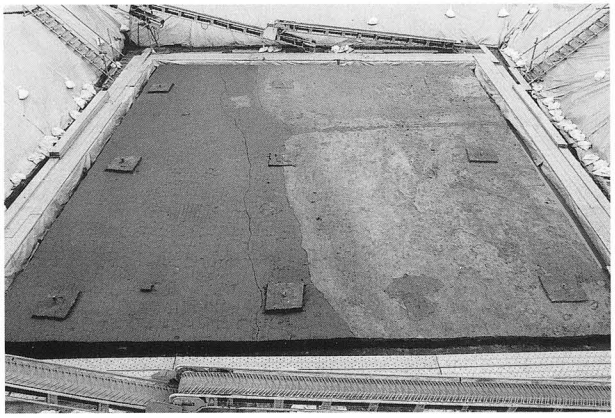
3　北壁断面（20～27層）（南から）

4　北壁断面（23～27層）（南から）

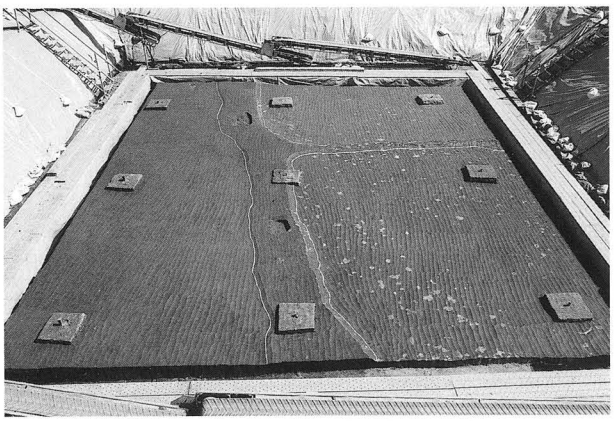
5　26層AT検出（南から）



6　2層水田跡全景（西から）



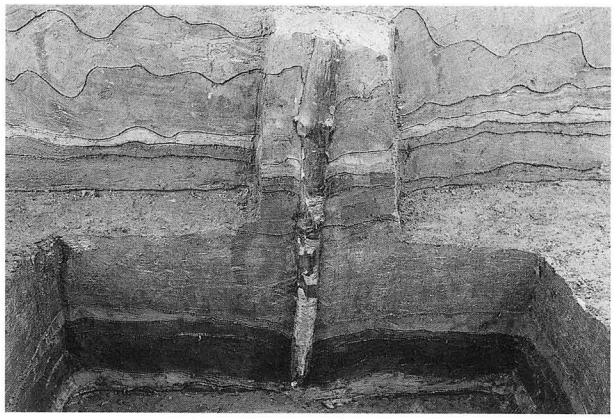
7　4a層畦畔検出（西から）



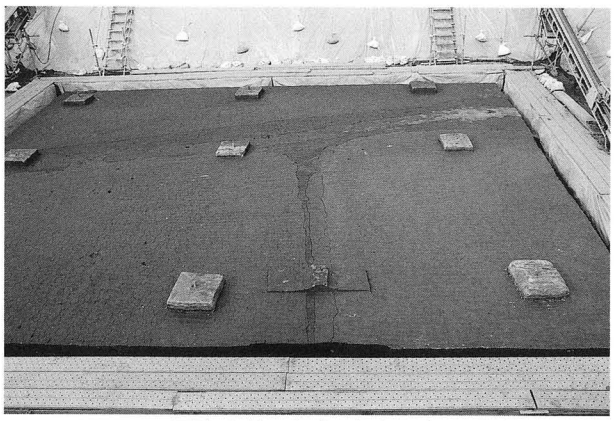
8　4a層水田跡全景（西から）

図版15　調査完了全景　土層断面、水田跡の調査（1）

1　打ち込み杭（L―1、3、4、5）断面（北から）

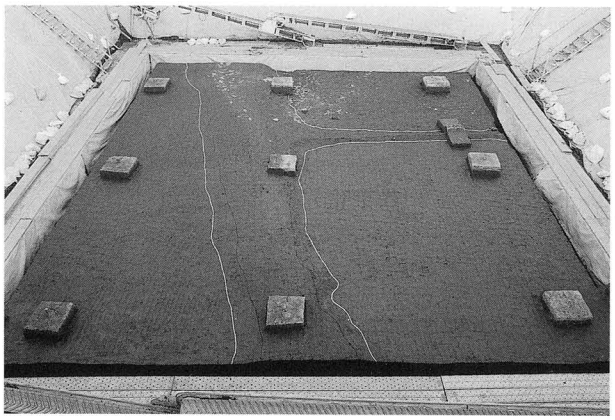


2　打ち込み杭（L―6）断面（北から）

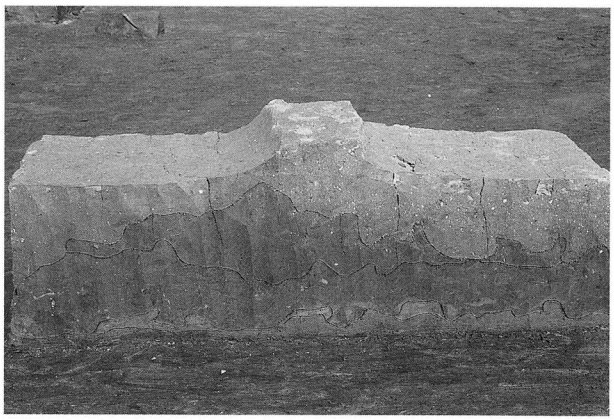


3　4層除去後　疑似畦畔B（南から）

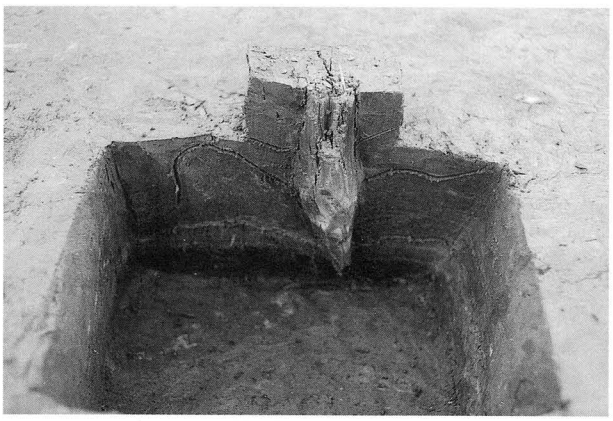
4　5層畦畔検出（西から）



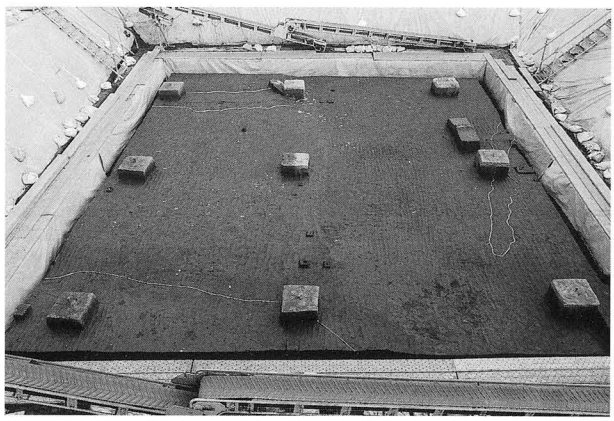
5　5層水田跡全景（西から）



6　4層畦畔断面（南から）

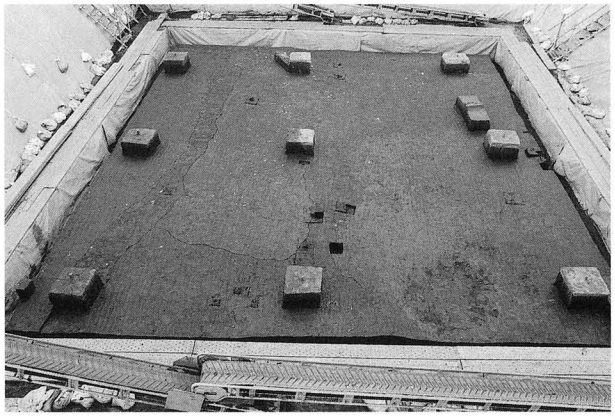


7　打ち込み杭（L―11）断面（南から）

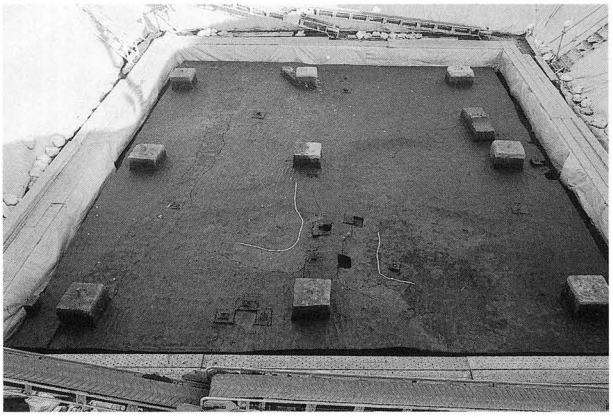


8　6層畦畔全景（西から）

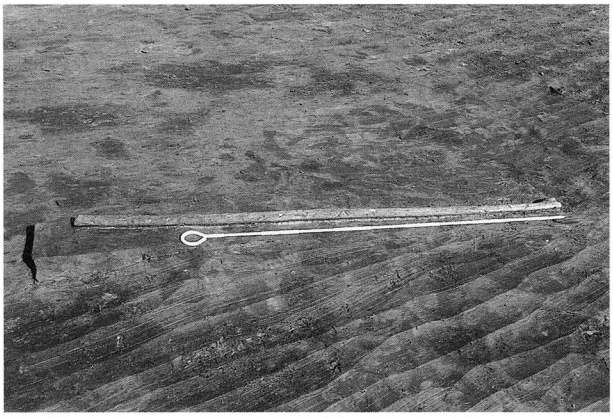
図版16　水田跡の調査（2）



1　7層畦畔検出（西から）

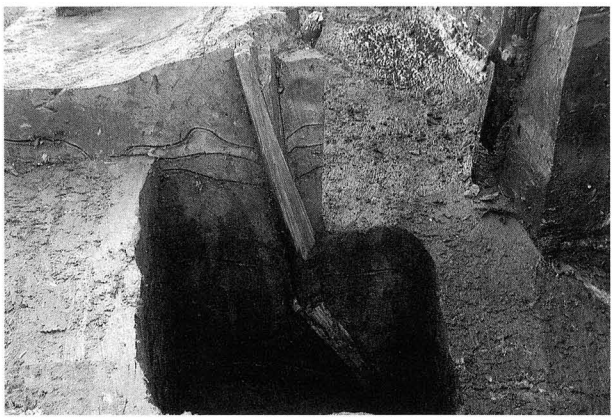


2　7層畦畔全景（西から）

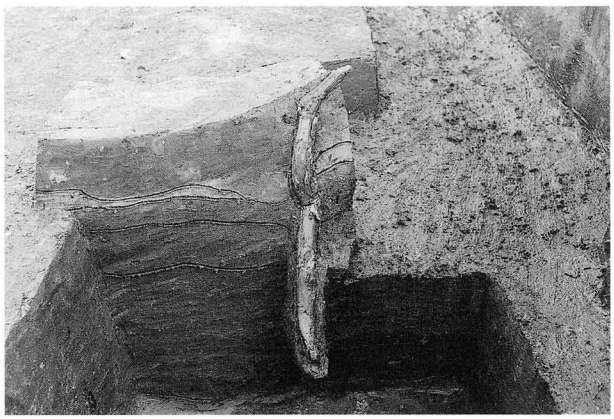


3　L―19出土状況（南西から）

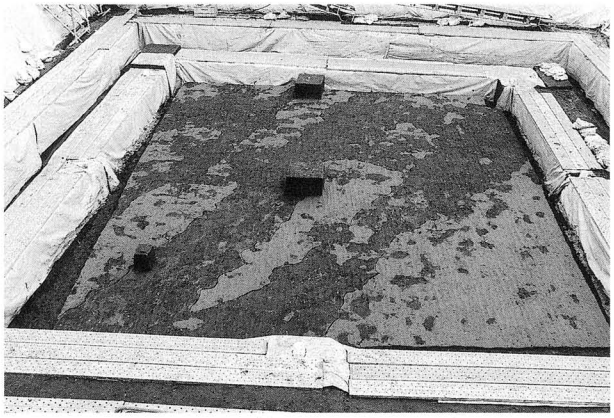
4　L―21、27出土状況（東から）



5　打ち込み杭（L―24）断面（西から）



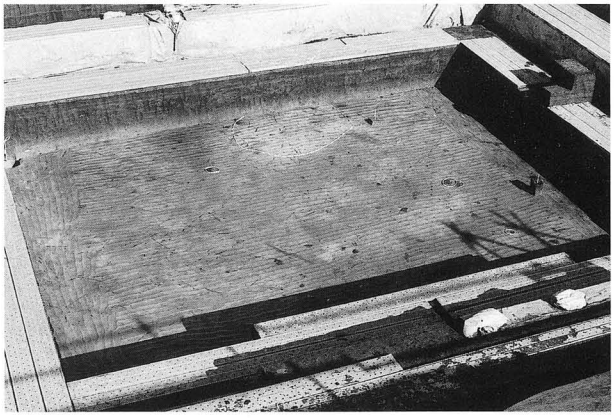
6　打ち込み杭（L―26）断面（西から）



7　14層検出状況（西から）

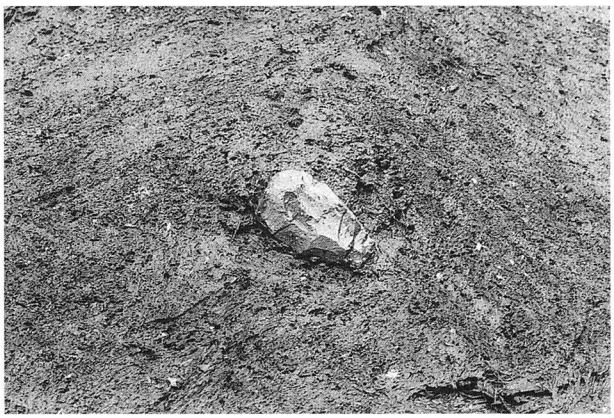
8　14層全景（西から）

図版17　水田跡の調査（3）

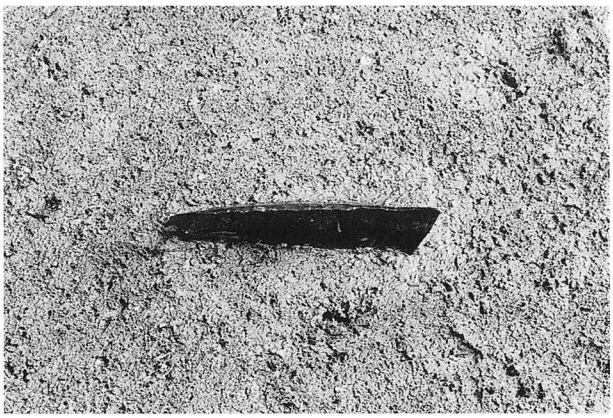


1　20層以降検出状況（南西から）

2　石鏃（Ka－1）出土状況（南西から）



3　掻器（Ka－2）出土状況（東から）

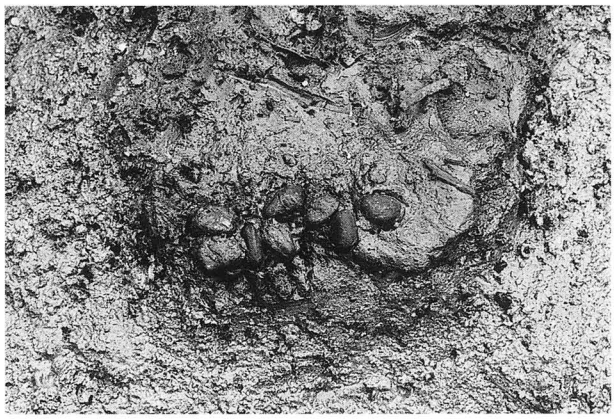


4　削器（Ka－3）出土状況（北西から）

5　22層樹木検出（東から）

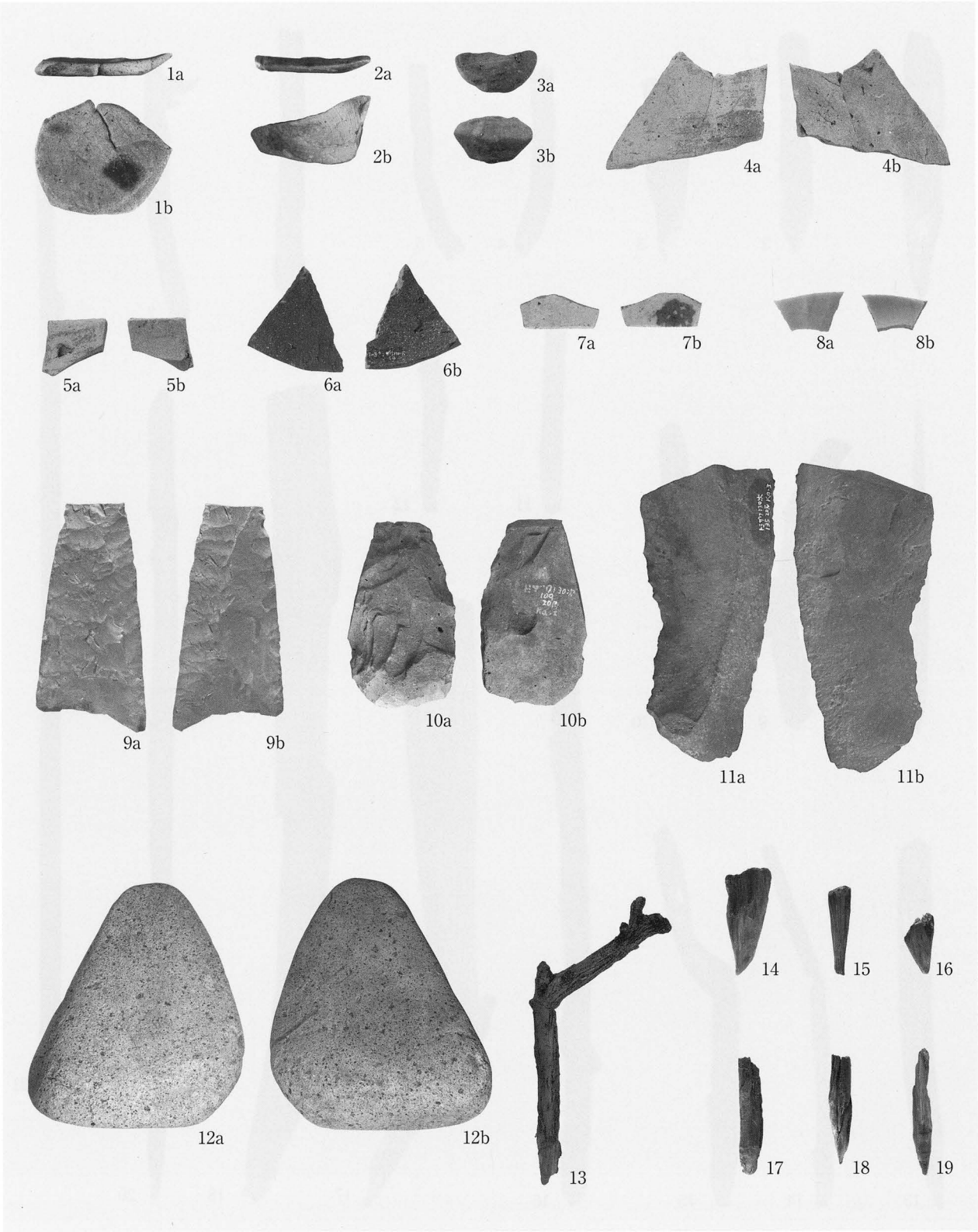
6　毬果（トウヒ属）出土状況（西から）

7　種子（チョウセンゴヨウ）出土状況（南から）



8　種子（チョウセンゴヨウ）出土状況（西から）

図版18　縄文時代早期、後期旧石器時代の調査



1　土師器　坏　D－1　（第41図１）
2　土師器　坏　D－2　（第41図２）
3　土製品　　P－1
4　陶器　甕または壷　I－1
5　陶器　甕または壷　I－2
6　陶器　甕または壷　I－3
7　磁器　皿　　J－1
8　磁器　碗　J－2
9　石鏃　　Ka－1　（第41図３）
10　掻器　　Ka－2　（第41図４）
11　削器　　Ka－3　（第41図５）
12　礫石器　　Kc－1　（第41図６）
13　打ち込み杭　L－9　（第42図７）
14　打ち込み杭L－13　（第41図14）
15　打ち込み杭L－14　（第41図８）
16　打ち込み杭L－15　（第41図９）
17　打ち込み杭L－20　（第41図７）
18　打ち込み杭L－７　（第41図12）
19　打ち込み杭L－１　（第41図13）

図版19　出土遺物（１）（1～8：約1/3　9：約1/1　10・11：約2/3　12～19約1/6）

1　打ち込み杭L－12（第43図５）
2　打ち込み杭L－３（第42図６）
3　打ち込み杭L－11（第41図11）
4　打ち込み杭L－16（第42図２）
5　打ち込み杭L－23（第42図３）
6　打ち込み杭L－17（第42図４）
7　材　L－28（第42図10）
8　材　L－２（第42図８）
9　打ち込み杭L－８（第42図５）
10　打ち込み杭L－25（第42図９）
11　打ち込み杭L－18（第42図１）
12　打ち込み杭L－10（第41図10）
13　打ち込み杭L－４（第43図６）
14　材　L－22（第42図13）
15　打ち込み杭L－26（第42図12）
16　打ち込み杭L－５（第43図３）
17　打ち込み杭L－24（第42図11）
18　打ち込み杭L－６（第43図４）
19　材　L－21（第43図１）
20　材　L－27（第43図２）
21　材　L－19（第43図７）

図版20　出土遺物（２）（1～8：約1/3　9：約1/1　10・11：約2/3　12～19約1/6）

7　自然科学分析

1）テフラ分析

株式会社　古環境研究所

1．調査分析の目的

東北地方中部の仙台市域とその周辺には、蔵王、鳴子、肘折など近傍の火山のほか、十和田、浅間、榛名、洞爺、姶良、阿蘇など遠方の火山に由来するテフラ（火山さいせつぶつ砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、テフラ層が認められた富沢遺跡第130次調査区においても地質調査を行って、土層の層序を記載するとともに、採取された試料と対象に屈折率測定とEPMAによる主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行った。

2．土層の層序

第130次調査区では、下位より青灰色砂層（層厚18cm以上，27層）、桃白色細粒火山灰層（層厚６cm）、灰色砂質シルト層（層厚５cm）、かすかに成層した灰褐色泥層（層厚５cm）、灰白色シルト層（層厚５cm）、青灰色砂層（層厚７cm，以上26層）、層理が発達した青灰色砂層（層厚42cm，25層）、暗灰褐色泥層（層厚0.9cm，24層）、層理が発達した灰色砂層（層厚14cm，23層）、礫混じり灰褐色砂質泥層（層厚３cm，礫の最大径３mm）、暗褐色泥層（層厚0.8cm）、木本類植物遺体混じり灰色シルト層（層厚２cm）、木本類植物遺体混じり暗灰褐色泥層（層厚１cm，以上22層）、灰色シルト層（層厚６cm，21b層）、層理が発達した青灰色砂層（層厚19cm）、青灰色シルト層（層厚11cm）、層理が発達した青灰色シルト質砂層（層厚11cm）、層理が発達した青灰色砂層（層厚23cm）、かすかに成層した青灰色砂層（層厚20cm）、青白色砂質シルト層（層厚12cm，以上21a層）、礫混じり灰色砂質土（層厚21cm，礫の最大径４mm，20層）、黒泥層（層厚20cm，19層）、黒泥層（層厚20cm，18層）、成層した腐植質泥層（層厚19cm，17層）、灰色シルト層（層厚６cm，16層）、黒泥層（層厚11cm，15層）、黒褐色泥炭層（層厚５cm，以上14層）が認められる（図１）。

14層の上面には畦畔状遺構が認められ、さらにその上位には、下位より灰色シルト層（層厚７cm，13層）、暗灰褐色泥炭層（層厚21cm，12層）、黒褐色泥炭層（層厚10cm，11層）、暗褐色泥炭層（層厚５cm，10層）、灰色シルト層（層厚３cm，９層）、黒泥層（層厚４cm）、灰白色シルト層（層厚0.3cm）、黒泥層（層厚４cm）、灰白色シルト層（層厚0.4cm）、黒泥層（層厚１cm，以上８層）、暗灰色泥炭層（層厚20cm，７層）、白色細粒火山灰ブロック（試料０）混じり灰色泥層（層厚３cm，６層）、礫混じり暗灰色泥層（層厚19cm，礫の最大径２mm，５層）、暗灰色泥層（層厚４cm，4b層）、礫混じり黄灰色砂層（層厚３cm，礫の最大径８mm）、礫に富む灰色砂質土（層厚４cm，礫の最大径３mm，以上4a層）、礫混じり灰色泥層（層厚３cm，２層）が認められる。

3．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

試料９および試料０の２点に含まれる火山ガラスについて、位相差法（新井，1972など）をもとに開発された古澤地質調査事務所製作の温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）により、屈折率測定を行った。

（２）測定結果

試料９に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499～1.502である。一方、試料０に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.500～1.508である。

４．火山ガラスの主成分化学組成分析

（１）分析試料と分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、試料９に含まれる火山ガラスについて、波長分散型エレクトロンプローブＸ線マイクロアナライザー（以下，WDS型EPMAとする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01μA、ビーム径5μmの条件で行った。補正法はOxideZAF法を用いた。

（２）分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表１に示す。試料９に含まれる火山ガラスの主成分化学組成は、約2.6～2.9万年前（14C年代：約2.4～2.5万年前）に噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，2003，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）に非常に良く似ている。

５．考察

試料９（26層基底部）が採取されたテフラ層は、含まれる火山ガラスの形態や色調、屈折率、さらに主成分化学組成などから、ATと考えられる。このことは、上位の泥炭層（22層）から採取された樹木片の放射性炭素年代（22,230±120y.BP：Beta-188056，後述）とも矛盾しない。ATに関しては、富沢遺跡第30次調査の際に行われたボーリング調査によっても検出されている（早田ほか，1992）。また試料０が採取されたテフラ層（６層）は、層相さらに火山ガラスの屈折率などから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田ａ火山灰（To-a，大池，1972，町田ほか，1981，町田・新井，1992，2003）と考えられる。

６．小結

富沢遺跡第130次調査区において地質調査、屈折率測定、火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、姶良Tn火山灰（AT，約2.6～2.9万年前，14C年代：約2.4～2.5万年前）および十和田ａ火山灰（To-a，915年）と考えられるテフラ層を検出できた。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254～269.

古田俊夫・森脇　広・町田　洋（1983）火山ガラスの主成分組成に基づく広域テフラの同定．文部省科研費報告書「日本列島周辺の深海底堆積物の分析を中心とした第四紀火山活動と気候変動の研究」（研究代表者　町田　洋），p.35～38.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562～569.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代．第四紀研究，34，p.377～379.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339～347.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の１４C年代．第四紀研究，26，p.79～83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代．地質雑，99，p.787～798.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，p.232～233.

早田　勉・北村　繁・新井房夫（1992）仙台市富沢遺跡（第30次）で発見された姶良Tn火山灰について．仙台市教育委員会編「富沢遺跡－第30次調査報告書第Ⅱ分冊－」p.453-456.

表１　130次調査区における火山ガラスの主成分化学組成分析結果

試料/テフラ	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Total	n
9	78.25	0.13	12.16	1.24	0.04	0.11	1.10	3.46	3.50	0.02	100.00	11
	0.22	0.03	0.14	0.10	0.03	0.02	0.06	0.18	0.20	0.02		
姶良Tn（AT）*1	77.88	0.13	12.26	1.27	0.04	0.13	1.10	3.63	3.53	—	100.00	46
入戸火砕流堆積物*1	78.03	0.14	12.42	1.25	0.04	0.14	1.07	3.44	3.42	—	100.00	21
十和田a（To-a）*2	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	100.00	—

n：分析ポイント数．上段が平均値，下段は標準偏差．*1：町田・新井（1992）のデータから測定点数が多いものを抜粋．基礎データは、古田ほか（1983）．
*2：To-a：八木浩司山形大学教育学部教授の未公表資料．

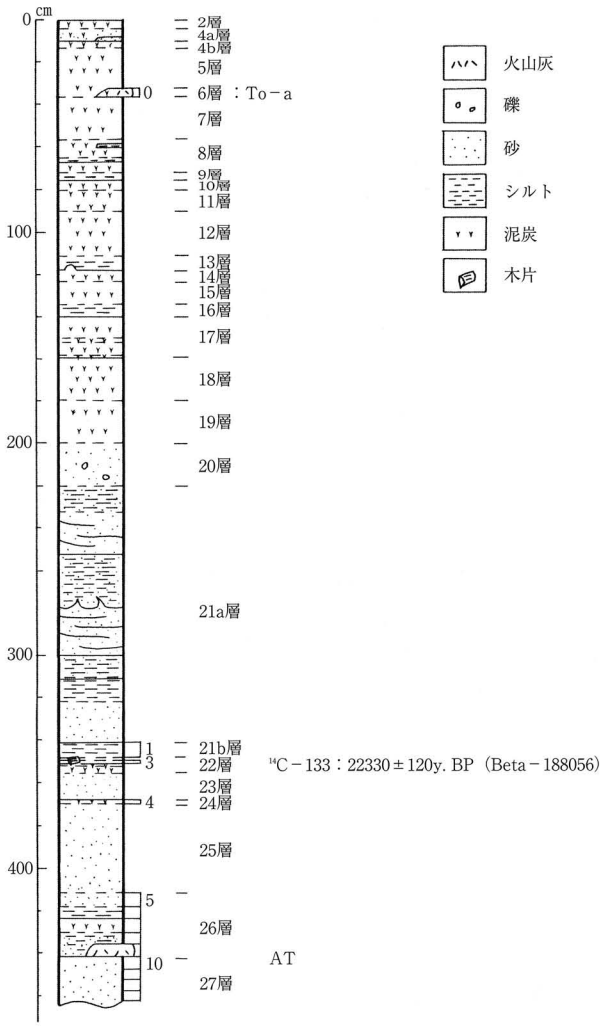


図１　第130次調査区の土層柱状図（数字はテフラ分析の資料番号）

2）放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

試料名	層準	種類	前処理・調整	測定法
№133	22層	樹木片	酸-アルカリ-酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric

※Radiometricは液体シンチレーションカウンタによるβ（ベータ）線計数法

2．測定結果

試料名	測定№（Beta-）	14C年代（年BP）	δ13C（‰）	補正14C年代（年BP）	暦年代（西暦）
№133	188056	22360±120	−26.6	22330±120	---

（1）14C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（2）δ（デルタ）^{13}C測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（3）補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の$\delta^{13}C$値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の１４Ｃの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

3．所見

放射性炭素年代測定の結果、22層から採取された樹木片では、22,330±120年BPの年代値が得られた。この年代値については、暦年代較正の範囲外である。

文献

Stuiver,M.,et.al.,(1998),INTCAL98RadiocarbonAgeCalibration,Radiocarbon,40,p.1041～1083.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1～36.

3）植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試料

分析試料は、富沢遺跡第130次調査区から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）、ジュズダマ属、Ｂタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

〔樹木〕

モクレン科、はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5．考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

富沢遺跡第130次調査区では、4a層（試料1）から27層（試料19）までの層準について分析を行った。その結果、4a層（試料1）から7層（試料4）までの各層および11層（試料8）からイネが検出された。このうち、5層（試料3）と6層（試料3'）では密度が5,000個/g以上と高い値であり、4a層（試料1）、4b層（試料2）、7層（試料4）でもおよそ3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

11層（試料8）では、密度が700個/gと低い値である。ただし、上位の8～10層ではイネがまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類とジュズダマ属が検出された。

1）ムギ類

ムギ類（穎の表皮細胞）は、4b層（試料2）から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

2）ジュズダマ属

ジュズダマ属は、4a層（試料1）から16層（試料13）までの層準のうち、4b層（試料2）と6層（試料3'）を除く各層から検出された。このうち、14層（試料11）と15層（試料12）では8,500～11,200個/gと高い値であり、10層（試料7）と11層（試料8）でも3,600～5,700個/gと比較的高い値である。その他の層準では1,000個/g前後と比較的低い値である。

ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジ

ュズダマとを完全に識別するには至っていない。したがって、これらの各層でハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

3）その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

（3）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1）植物珪酸体の検出状況

最下位の27層（試料19）では、ミヤコザサ節型が多量に検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、および樹木（その他）も検出された。26層（試料17、18）では、メダケ節型が増加している。24層（試料16）では、クマザサ属型やミヤコザサ節型が多く検出され、ネザサ節型なども検出された。22層下部（試料15）では、ミヤコザサ節型が多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、樹木（その他）も検出された。22層上部（試料14）では、ほとんどの分類群が大幅に減少している。

16層（試料13）では、クマザサ属型が多量に検出され、ネザサ節型やミヤコザサ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、メダケ節型、樹木（その他）なども検出された。15層（試料12）では、ヨシ属が大幅に増加しており、タケ亜科は減少している。また、前述のようにジュズダマ属も多く検出された。14層（試料11）でも同様の結果であるが、13層（試料10）ではクマザサ属型やミヤコザサ節型が増加しており、ヨシ属は見られなくなっている。12層（試料９）～８層（試料５）では、ヨシ属が多量に検出され、ジュズダマ属、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども検出された。また、11層（試料８）では、前述のようにイネが少量検出された。７層（試料４）から５層（試料３）にかけては、イネが増加しており、ヨシ属は大幅に減少している。

おもな分類群の推定生産量によると、22層より下位ではクマザサ属型やミヤコザサ節型が優勢であり、26層ではメダケ節型も多い。また、15層から７層にかけては、おおむねヨシ属が卓越しており、部分的にクマザサ属型やミヤコザサ節型も多くなっている。６層より上位ではイネが優勢である。

2）植生と環境の推定

姶良Tn火山灰（AT，約2.6～2.9万年前）直下の27層からAT混の26層にかけては、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。24層および放射性炭素年代測定で22,330±120年BPの年代値が得られた22層下部でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期にはメダケ属はあまり見られなくなったと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山・早田，1996，杉山，2001）。また、クマザサ属のうちチシマザサ節やチマキザサ節は現在でも日本海側の寒冷地などに広く分布しており積雪に対する適応性が高いとされるが、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井，1960，鈴木，1978）。これらのことから、当時は積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した環境であったと推定される。

なお、AT前後の27層～26層では、メダケ率が40～50%と比較的高いことから、当時はその後の時期よりも相対的に温暖な気候であったと推定される。この相対的な温暖期は、ATとの層位関係などから、最終氷期の亜間氷期（酸素同位体ステージ３）に対比される可能性が考えられる。

15層～８層の堆積当時は、おおむねヨシ属が繁茂してジュズダマ属なども生育する湿地の環境であったと考えられ、部分的に竹笹類、キビ族、ウシクサ族などが生育する比較的乾燥したとろも見られたと推定される。また、周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。

その後、十和田ａ火山灰（To-a，915年）直下の７層の時期には、ヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、前述のように11層でも部分的に水田稲作が行われていた可能性が認められる。

６．まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、十和田ａ火山灰（To-a，915年）直下の７層より上位の各層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、それ以前の11層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、４b層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属が繁茂してジュズダマ属なども生育する湿地の環境であったと考えられ、７層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

放射性炭素年代測定で22,330±120年BPの年代値が得られた22層下部の堆積当時は、クマザサ属などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した環境であったと推定される。姶良Tn火山灰（AT，約2.6～2.9万年前）直下の27層から26層にかけては、メダケ属も比較的多く見られることなどから、相対的に温暖な最終氷期の亜間氷期（酸素同位体ステージ３）に対比される可能性が考えられる。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70～83.

杉山真二（1999）過去約３万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動－植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線－．日本植生史学会大会発表要旨集，p.29～30.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189～213.

杉山真二（2001）植生と環境．季刊考古学第74号．雄山閣出版，p.14～18.

鈴木貞雄（1978）タケ科植物の概説．日本タケ科植物総目録．学習研究社．25～45.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15～29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73～85.

室井綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5，p.103～121.

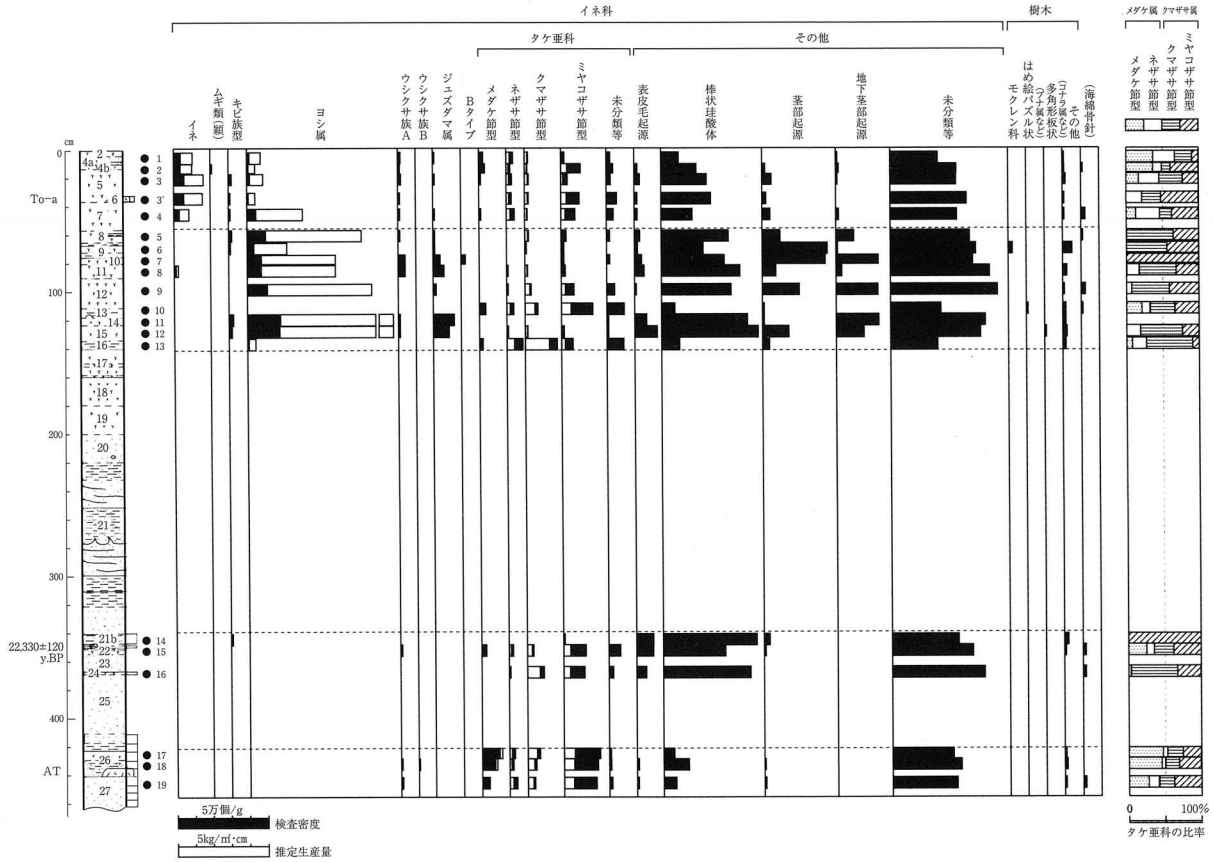


図１　仙台市、富沢遺跡第130次調査における植物珪酸体分析結果

表１　富沢遺跡第130次調査における植物珪酸体分析結果　検出密度（単位：×100個/g）

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	1	2	3	3'	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
イネ科	Gramineae (Grasses)																				
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	35	34	56	54	28				7											
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)		7				14	7													
キビ族型	Paniceae type			14	7	7	101	35	78				21	14		7					
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	12	7	14	7	49	7		36	78	110		182	178	7						
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	12	7	14	7	7				36			7	7			7			4	7
ウシクサ族B	Andropogoneae B type						7	7	36											4	
ジュズダマ属	*Coix*	6		7		7			21	57	14		112	85							
Bタイプ	B type																				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																				
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Medake*	18	27	7		7						29			14		21		97	72	33
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*	35	20	28	27	42	20	7		7	7	36		7	83		21	7	28	20	40
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	18	14	21	20	14	27	14	14	14	34	72		14	180		35	94	69	48	40
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Miyakozasa*	18	109	35	101	77	14		14	21	69	173		14	62	7	124	116	201	188	180
未分類等	Others	18	34	21	54	35					41	93	7	7	90		62	22	7	8	13
その他のイネ科	Others						27	14	36												
表皮毛起源	Husk hair origin		14	28	13	14	365	226	342	50	7		63	121		91	90	51		8	7
棒状珪酸体	Rod_shaped	94	191	247	269	168	95	353	342	428	379	72	468	527	97	511	339	477	55	136	67
茎部起源	Stem origin		14	49	20	42	95	7	228	71	200	7	7	142	35	28	7			4	7
地下茎部起源	Underground stem origin	6	14	7		14	432	466	449	29	227		231	150							
未分類等	Others	259	361	359	417	363				542	585	273	517	491	256	364	442	506	333	376	353
樹木起源	Arboreal							21													
モクレン属	*Magnolia*																				
はめ絵パズル状(ブナ属など)	Jigsaw puzzle shaped (*Fagus etc.*)											7									
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus*)							49						7							
その他	Others	6	7	14	7	7	7			21	7	14	14	21	14	21	7		7	12	7
(海綿骨針)	Sponge		7			21	1202	1207	1597		21	7					14	14			13
植物珪酸体総数	Total	536	858	923	1001	881				1361	1681	776	1629	1788	836	1028	1154	1272	797	879	752

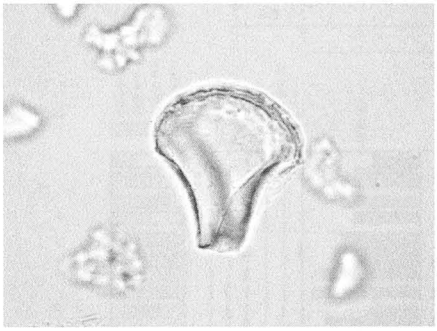
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

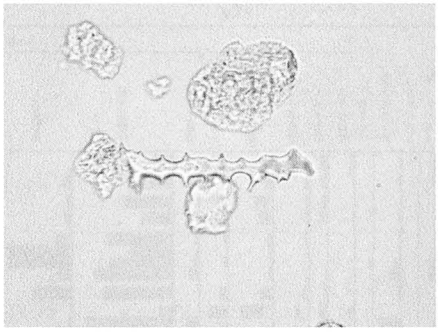
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.04	1.00	1.66	1.58	0.82				0.21											
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.74	0.43	0.89	0.42	3.09	6.39	2.23	4.95	4.95	6.95		11.47	11.24	0.44						
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	0.20	0.32	0.08		0.08						0.33			0.16		0.24		1.13	0.83	0.39
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.17	0.10	0.14	0.13	0.20				0.03	0.03	0.17		0.03	0.40		0.10	0.03	0.13	0.10	0.19
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.13	0.10	0.16	0.15	0.10	0.15	0.05		0.11	0.26	0.54		0.11	1.35		0.26	0.70	0.52	0.36	0.30
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.05	0.33	0.11	0.30	0.23	0.08	0.04	0.04	0.06	0.21	0.52		0.04	0.19	0.02	0.37	0.35	0.60	0.56	0.54

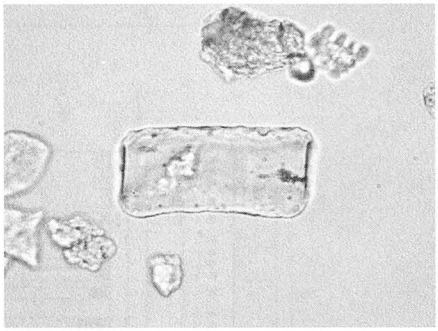
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

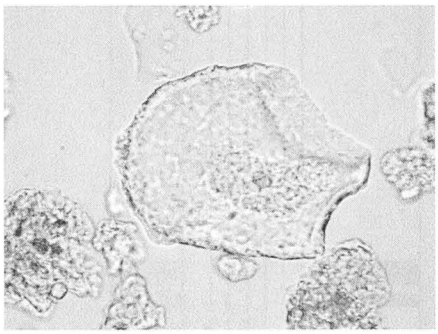
タケ亜科の比率（%）

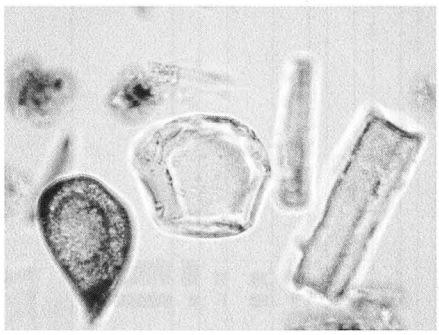
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	37	37	17		13						21			8		25		47	45	27
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	30	12	28	22	33				17	7	11		19	19		10	3	6	5	14
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	24	12	33	26	17	65	56		52	52	34		58	64		27	65	22	19	21
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	9	39	22	52	37	35	44	100	31	41	33		23	9	100	38	32	25	30	38

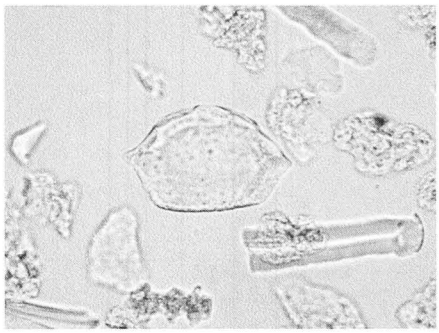

イネ　試料３

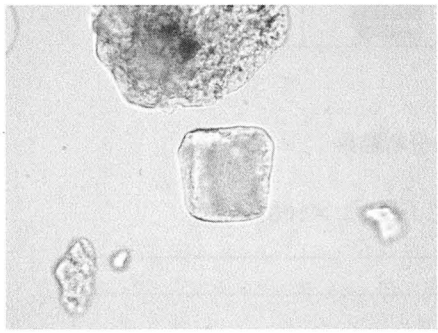

ムギ類（穎の表皮細胞）　試料３

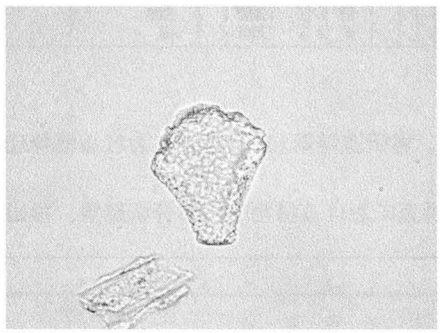

キビ族型　試料４

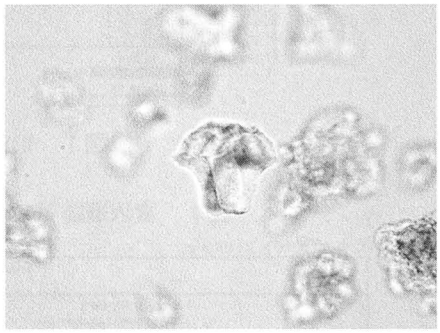

ヨシ属　試料８

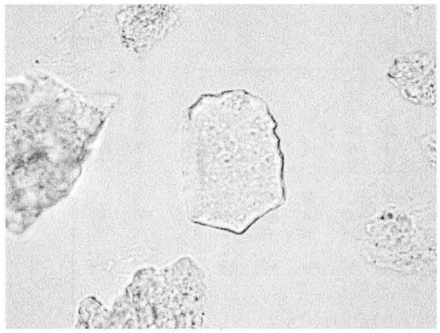

ジュズダマ属　試料７

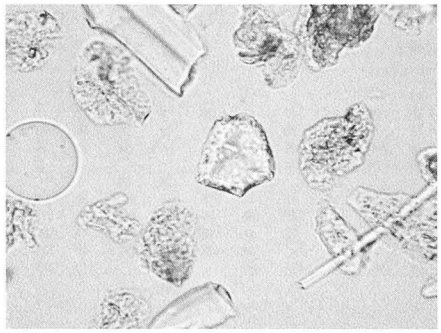

ジュズダマ属　試料12

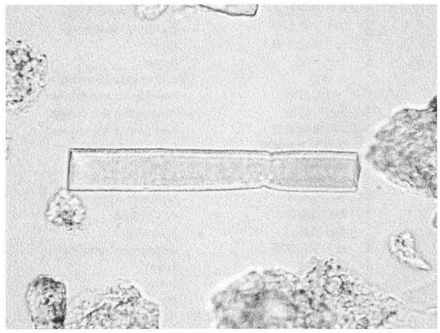

ウシクサ族　試料６

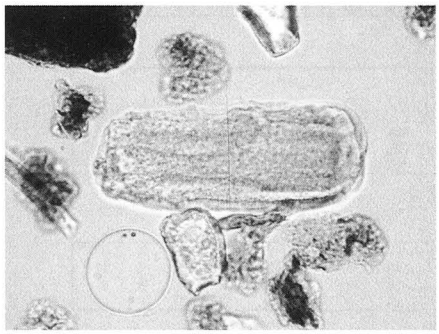

メダケ節型　試料１


ネザサ節型　試料13

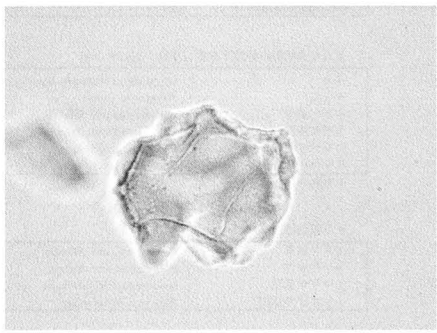

クマザサ属型　試料３


ミヤコザサ節型　試料12


棒状珪酸体　試料８


イネ科の茎部起源　試料７

イネ科の地下茎部起源　試料７


モクレン科　試料６

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　50 μm

4）22層における最終氷期最寒冷期の植物化石群

吉川純子・吉川昌伸（古代の森研究舎）

1.はじめに

富沢遺跡第130次発掘調査地点において埋没林や針葉樹の球果が出土した。これら植物遺体を含む層はATの上位にあり、最終氷期最寒冷期の堆積層と推定される。ここでは埋没林が形成された時期の堆積環境と古植生を復元するために珪藻、花粉、大型植物、木材の植物化石群の調査を行った。

埋没林や針葉樹の球果が含まれる22層はATより上位約1.1mに狭在し、層厚3-8cm前後で波状に堆積する。本層の下位はオリーブ灰色シルト質中～粗粒砂、上位は青灰色シルトからなる。22層は調査区北壁では3層に細分され、下位より黒褐色砂質有機質泥、オリーブ黒色有機質泥、オリーブ黒色シルトからなり、中部層の上部及び上部層には植物遺体が含まれる（図1）。

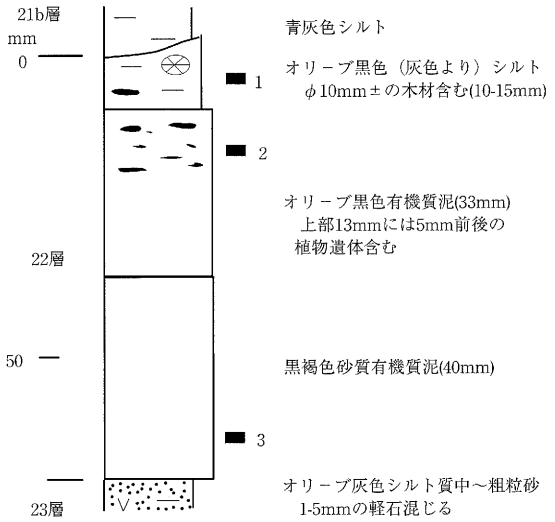


図1　22層の地質柱状図と分析試料採取層準

2．大型植物化石群および木材化石

1）試料と方法

大型植物化石群の調査は、21～22層から肉眼で確認できる球果・種子などの現地取り上げ試料、および22層からブロック（約12cm×12cm×層厚）で採取された3試料で行った。現地取上げ試料は肉眼で観察し、分類群を同定した。ブロック試料は各100ccを0.25mm目の篩で水洗し、残渣から実体顕微鏡で同定可能な部位を拾い出し、同定計数した。残りのブロックはヘラで薄く剥ぎ取りながら、肉眼で確認できる植物化石を拾い出し、同定計数した。木材化石は22層から現地で取り上げられた3試料である。木材は、片刃カミソリを用いて試料の横断面、接線断面、放射断面の3断面の切片を作り、ガムクロラールで封入し、生物顕微鏡で観察と樹種の同定を行った。

2）大型植物化石群の記載

現地取上げ試料では、21層からトウヒ属3タイプとカラマツ近似種の球果、22層からはトウヒ属4タイプの球果とチョウセンゴヨウの種子を産出した（表1）。チョウセンゴヨウの種子はかたまって堆積しており、特に遺物番号125試料は堆積物中にやや円筒形に分布していることから、チョウセンゴヨウの球果が落果し、そのまま種鱗が腐敗したと推定される。富沢88次調査（吉川，1995）では種子の向きに方向性がみられ、球果がそのまま堆積したと明瞭にわかる化石を産出している。なお、食痕がある種子はいずれも単独で堆積している。また、遺物番号126の試料は8個がややま

表1　21層及び22層産出大型植物化石（現地取上げ）

層位	登録番号	遺物番号	Grid	分類群		AFR No.
21	13	120	E11S4	トウヒ属A	球果、1	
21	14	121	E11S4	トウヒ属U	球果、1	
21	15	123	E11S4	カラマツ近似種	球果、1	
21	16	124	E11S4	トウヒ属B	球果、1	
22	4	110	E10S4	トウヒ属C	球果、1	
22	5	111	E10S5	トウヒ属U	球果、1	
22	6	112	E10S5	トウヒ属U	球果、1	
22	7	113	E10S5	トウヒ属A	球果、1	
22	8	114	E11S4	トウヒ属U	球果、1	
22	9	115	E11S5	トウヒ属U	球果、1	
22	10	116	E11S4	トウヒ属U	球果、1	
22	11	117	E11S5	トウヒ属B	球果、1	
22	12	118	E11S7	トウヒ属U	球果、1	
22	17	125	E10S5	チョウセンゴヨウ	種子完形、30	
22	18	126	E10S4	チョウセンゴヨウ	種子完形、8	
22	19	127	E12S4	チョウセンゴヨウ	種子食痕、1	
22	20	129	E11S4	カラマツ属	材	282
22	21	130	E11S4	トウヒ属	材	283
22	22	131	E11S5	マツ属単維管束亜属	根株	284

表２　22層ブロック試料産出大型植物化石

分類群		試料番号 産出部位＼体積	S1 微小 100cc	 大 600cc	S2 微小 100cc	 大 1500cc	S3 微小 100cc	 大 1500cc
カラマツ属	*Larix*	短枝			1		1	
		葉	5		340	多数	300	多数
トウヒ属バラモミ節	*Picea* sect. Picea	葉	9		140	多数	340	多数
トウヒ属	*Picea*	枝			1			
		種子						1
チョウセンゴヨウ	*Pinus koraiensis*	完形種子				2		2
		食痕種子						1
スゲ属A	*Carex* A	果実	8		1			
スゲ属B	*Carex* B	果実	2					
スゲ属C	*Carex* C	果実	6				1	
核菌綱		菌核	多数	多数	多数	多数	多数	多数

ばらに堆積しており、ネズミやリスなどが地中に貯蔵した種子の可能性も考えられる。チョウセンゴヨウは、種鱗が肉厚で乾燥してもマツカサが開いて種子を落とすことはなく、小動物により種鱗がかじられることにより種子が露出し散布される。土中に埋まった種子は、単独では発芽後に土を持ち上げるほどの力がなく、数個集まっていっせいに発芽することによって土を持ちあげ開葉できる。

ブロック試料からはカラマツ属の短枝と葉、トウヒ属バラモミ節の葉、トウヒ属の枝と種子、チョウセンゴヨウの種子を産出した（表２）。草本はスゲ属を産出し、全体的に核菌綱の菌核が多く、腐敗しかけた樹木が多量にあったことが伺える。ブロック試料のＳ１は層厚が約３㎝、試料Ｓ２・Ｓ３は層厚が約８㎝で堆積が厚い地点ほど未分解で針葉樹の葉が多く残っている傾向にある。逆にスゲ属はやや分解の進んだ層厚の薄い地点から多く産出している。全体に単子葉草本とみられる葉茎や根の一部が多く堆積しているが、分類群は特定できない。また、未分解の堆積物では針葉化石を拾い上げても崩れないが、分解の進んだ地点では拾い上げると崩れてしまう場合が多い。これは組織が薄いカラマツ属の葉に顕著にみられ、カラマツ属の短枝も崩れやすい状態であった。

木材化石は、129がカラマツ属、130がトウヒ属、131の根株試料がマツ属単維管束亜属であった。チョウセンゴヨウの種子がまとまって産出した場所は131の根株から半径２m以内にあり、種子がこの株から供給された可能性は高い。

３）大型植物化石及び木材化石の形態記載

１.カラマツ属（*Larix* cf.*kaempferi* Sergent）：楕円形の球果を産出した。種鱗は縦に５段程で少なく、種鱗は先端少しだけ外反する。

２.カラマツ属（*Larix*）：短枝をつけた枝、葉、木材化石を産出した。短枝は輪を重ねたような形態で先端に輪状に葉をつける。葉は線形で薄く、中央にやや膨らんだ濃い色の筋がある。基部は細くなっている。木材組織は、横断面では年輪界が比較的はっきりし、早材から晩材への移行は急激で晩材部に垂直樹脂道がある。放射組織は水平樹脂道を持つ紡錘状のものと単列がある。分野壁孔

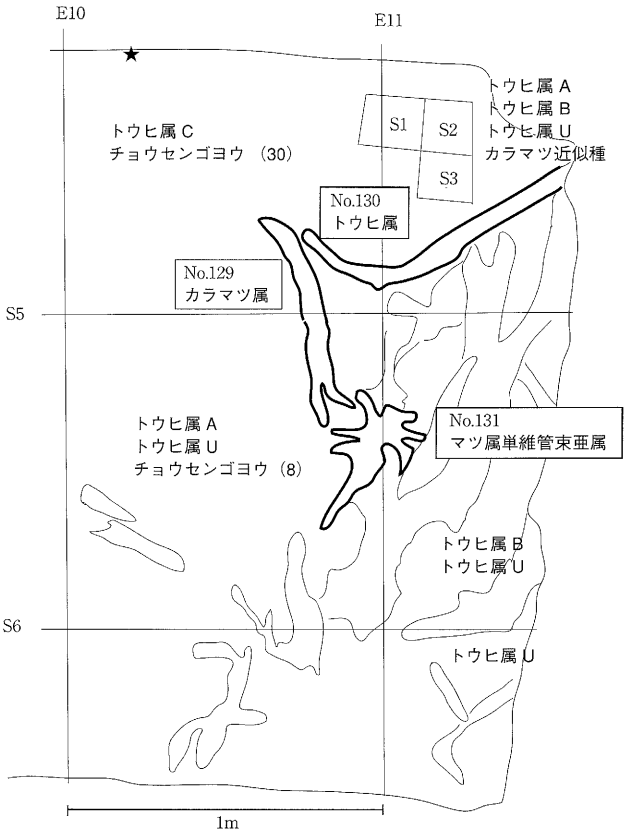


図２　第130次調査区22層の木材化石と大型植物化石の分布
□木材、（　）内は個数、S1－S3ブロック試料、★微化石試料採取位置

はトウヒからヒノキ型で１分野に２～４個である。

3.チョウセンゴヨウ(*Pinus koraiensis* Sieb.et Zucc.)：種子を産出した。種子は三角形で壁は木質で厚く硬い。種子の中には、横にネズミなどの仲間がかじって丸い孔をあけた化石が見られる。

4.マツ属単維管束亜属(*Pinus* subgen.*Haploxylon*)：木材化石を産出した。早材から晩材への移行は緩やかで、比較的大きな垂直樹脂道が見られる。放射組織は水平樹脂道を含む紡錘形の物と単列状がある。分野壁孔は窓状で大きく、放射仮道管の内壁は平滑である。種子はチョウセンゴヨウのみ産出していることから、131番試料の根株もほぼチョウセンゴヨウであると考えられる。

5.トウヒ属バラモミ節(*Picea* sect.*Picea*)：葉化石を産出した。葉の断面は菱形でほとんどの葉が菱形の4面全面に気孔条を持つ。バラモミ節には、ヒメバラモミ、ヤツガタケトウヒ、アカエゾマツなどがある。

6.トウヒ属(*Picea*)：球果化石はその形態から４つのタイプに分けられる。タイプ分けは富沢遺跡第88次発掘調査報告書（吉川，1995）に準じた。トウヒ属A：球果の長さは約５cm以上、種鱗は縦のしわが目立ち、光沢がない。種鱗縁は開いた三角形か半円形で、種鱗先端は若干外に反り、種鱗の縁は薄い。トウヒ属B：球果の先端がトウヒ属Aよりも尖り、種鱗の先端が外反せず上の種鱗に密着している。トウヒ属C：球果の長さ５cm以上で種鱗は半円形、種鱗にはほとんどしわがなく、表面は光沢がある。種鱗の縁はやや厚くしっかりしている。トウヒ属U：球果の表面が風化して種鱗の状態が不明なものをこのタイプとした。トウヒ属は、現在、北海道から本州の亜寒帯から冷温帯にいくつかの種が分布している。本遺跡で産出したトウヒ属球果化石のうち、トウヒ属A、Bはヤツガタケトウヒと比較的形態が近似し、トウヒ属Cはヒメバラモミもしくはアズサバラモミと形態が近似している。

木材化石は横断面では早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部にやや小さい垂直樹脂道を持つ。放射組織は水平樹脂道を持つ紡錘形と単列がある。分野壁孔はトウヒ型で１分野に２～４個ある。

7.スゲ属(*Carex*)：３タイプの果実を産出した。スゲ属Aは長さ1.5㎜で２面の俵型、果皮は薄く透過し、上部突起は0.2㎜以上あると考えられるが途中で折れている。果実の上半部内に褐色の丸い影が見える。

スゲ属Bは長さ1.8㎜で２面の扇形、上部に0.5㎜以上の突起があるが、折れているので全長は不明である。壁はやや厚く、木質で中央が膨れている。スゲ属Cは長さ1.2㎜の２面の俵型、壁はやや薄く半透明、赤褐色で頂部の縦筋の色が濃くやや目立つ。

8.核菌綱　菌核を産出した。菌核はほぼ球形であるが偏球形の物もある。黒色で一見炭化物のように硬く、大きさは１㎜以下から数㎜までまちまちである。割ると内部はスポンジ状の細胞で均質に詰まっており、空洞になっているものもある。核菌綱はおもに腐りかけた樹木の樹皮に着生して生活し、樹皮に張り付いた子座の上面にこの菌核をつくり、胞子を拡散する。中が空洞になっている菌核は胞子を放出したあとの菌核である。

３．花粉化石群

１）試料と方法

花粉化石群の調査は22層の３層準で行った（図１）。花粉化石の抽出は、試料0.5gを秤量し、さらに単位体積あたりの花粉量を算出するため体積を測定後、10%KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒な植物遺体と砂を取り除く－48%HF（約15分）－アセトリシス処理（濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分）の順に処理を行った。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量と泥分（シルト以下の細粒成分）・砂分量、及び微粒炭量について調査した。有機物量の変動については強熱減量を測定した。強熱減量は、るつぼと乾燥試料約２gの質量をはかり、るつぼを電気マッフル炉内に置き、750℃で３時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトの

NIHImageで微粒炭の面積を測定した。

2）花粉化石群の記載

22層より産出した分類群のリストとその個数を表4に、花粉変遷図を図3に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

22層は、泥分が55.0～72.5%、砂分が14.9～0.7%と無機物が卓越し上部でより泥質になる（表3）。細粒な堆積物から構成されることから穏やかな環境で堆積し、水流の営力は低かったとみられる。花粉化石群は、下部のNo.2～

表3　第130次調査区22層の花粉分析試料の堆積物の性質（重量%）

試料	層位	含水比	砂	泥	強熱減量（有機物量）
1	22	107.3	0.7	72.5	26.8
2	22	114.1	1.4	68.0	30.6
3	22	120.4	14.9	55.0	30.1

表4　第130次調査区22層より産出した花粉化石の組成表

和　名	学　名	1	2	3
樹木				
モミ属	*Abies*	24	15	10
ツガ属	*Tsuga*	14	31	21
トウヒ属	*Picea*	44	104	115
カラマツ属	*Larix*	22	21	15
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	25	39	61
マツ属（不明）	*Pinus*（Unknown）	1	1	-
ヤナギ属	*Salix*	-	1	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	1
クマシデ属―アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	1
ハシバミ属	*Corylus*	2	2	-
カバノキ属	*Betula*	22	24	35
ハンノキ属	*Alnus*	15	12	11
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	3	3
ニレ属	*Ulmus*	5	3	3
モチノキ属	*Ilex*	1	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	-	1
ツツジ科	Ericaceae	-	2	6
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	1
草 本				
イネ科	Gramineae	16	4	3
カヤツリグサ科	Cyperaceae	91	31	15
ミズバショウ属	*Lysichiton*	1	-	1
タデ属イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. *Bistorta*	-	1	1
ナデシコ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	8	24	14
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	7	1	1
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	3
セリ科	Umbelliferae	14	13	4
リンドウ属	*Gentiana*	1	2	-
ヨモギ属	*Artemisia*	1	6	3
他のキク亜科	other Tubuliflorae	5	1	20
シダ植物				
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	2	-
ゼンマイ属	*Osmunda*	1	-	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	4	8	3
コケ類				
ミズゴケ属	*Sphagnum*	8	24	7
樹木花粉	Arboreal pollen	175	259	284
草本花粉	Nonarboreal pollen	146	83	65
シダ植物胞子	Fern spores	5	10	3
花粉・胞子	Pollen and spores	326	352	352
不明花粉	Unknown pollen	17	23	3
樹木花粉量（×1000粒 /cm³）		11.4	53.1	134.1
微粒炭量（mm² /cm³）		15	23	20

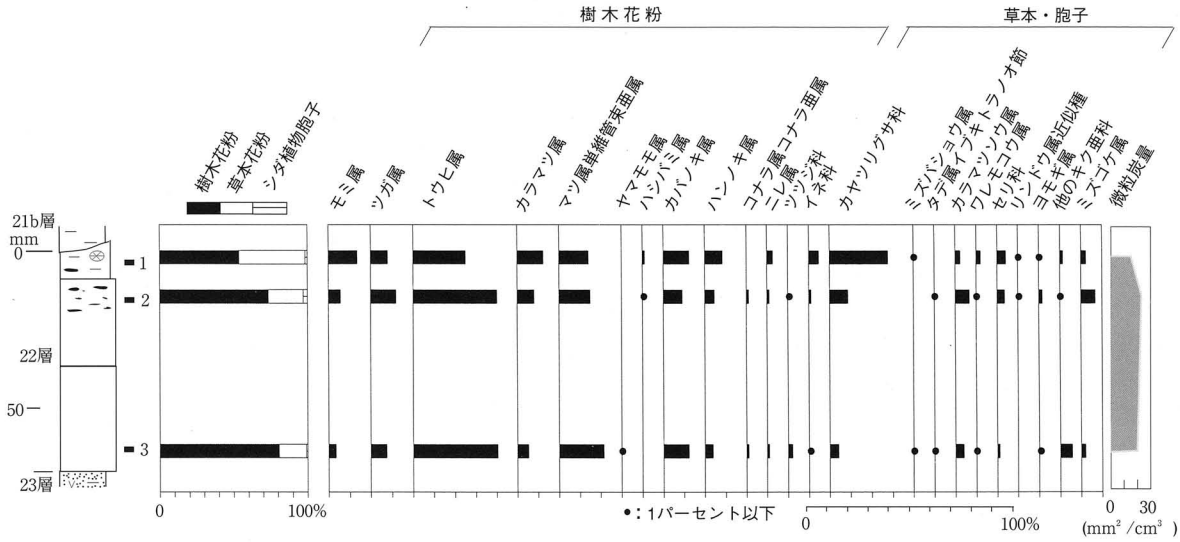


図３　富沢遺跡130次調査区22層の主要花粉分布図
（出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した）

３で針葉樹のトウヒ属が優占し、マツ属単維管束亜属を比較的多く、カラマツ属、ツガ属、モミ属を伴う。また、落葉広葉樹のカバノキ属、ハンノキ属、ニレ属、ツツジ科などを伴う。草本は全般に低率であるが、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、キク科、およびミズゴケ属などが産出する。No.１ではトウヒ属が減少し、ツガ属を除く多くの分類群が若干増加する。草本ではカヤツリグサ科が多く占め、イネ科やセリ科、ミズバショウ属などを伴う。また、22層の微粒炭量は15～23㎟/㎤と極めて少ない。

４．珪藻化石群

１）試料と方法

珪藻化石群の調査は22層のNo.２～３の２層準で行った（図１）。処理は、試料約0.5gをビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後、水洗を4～5回繰り返す。次に分離した試料を適当な濃度に調整し１mlをカバーグラスに滴下し乾燥させる。スライドグラスにマウントメディア（封入剤）を適量のせ、これに先程のカバーグラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が1/2以上残存したもののみ同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は，Krammer&Lange～Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参考にし，古環境の復元のための指標としては安藤（1990）の環境指標種群や森（1992）を用いた。

２）珪藻化石群の記載

22層より産出した珪藻化石群のリストとその個数を表５に示す。No.３では*Pinnularia subcapitata*が71%と高率に産出し、陸生指標種群（陸域を生育地として生活している種群、例えばコケ類に付着する種群）の*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Eunotia fallax*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica*が産出している。*Pinnularia subcapitata*は止水性・底生種とされているが、森（1992）は主に湿潤地表面や湿岩、およびコケ植物表面などに生活する陸生珪藻に分類している。*Pinnularia subcapitata*を陸生珪藻に含めた場合、陸生指標種群は91%と大半を占める。他に沼沢湿地付着生種群（水深が1m内外で1面に植物が繁茂しているところ、および湿地を指標する種群）の*Pinnularia viridis*などが産出している。陸生珪藻が大半を占めることから、地表面が湿った環境であったとみられる。

表５　第130次調査区22層より産出した珪藻化石の組成表

分　類　群	指標種群	2	3
Cymbella minuta Hilse	W	1	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	W	1	-
Diploneis puella (Scumann) Cleve	W	1	-
Eunotia arcus Ehrenberg	W	1	-
Eunotia bilunaria (Ehrenberg) Mills	W	1	-
Eunotia fallax ACleve	Q	-	8
Eunotia lunaris (Ehrenberg) Grunow	W	1	-
Eunotia minor (Kutzing) Grunow	W	16	1
Eunotia papilio (Ehrenberg) Hustedt	W	1	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	W	36	6
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehrenberg) Grunow	O	1	-
Eunotia spp.	?	17	5
Fragilaria brevistriate Grunow	W	2	-
Fragilaria pinnata Ehrenberg	W	2	-
Fragilaria sp.	?	3	-
Gomphonema parvulum (Kutzing) Kutzing	W	2	-
Gomphonema sp.	?	1	-
Hantzschia amphioxys (Ehrenberg) W.Smith	Q	1	18
Mastogloia elliptica (Agardh) Cleve	W	10	-
Navicula contenta Grunow	Q	29	2
Navicula lapidosa Krasske	W	6	-
Navicula mutica Kutzing	Q	4	2
Navicula placenta Ehrenberg	W	-	-
Neidium bisulcatum (Lagerstedt) Cleve	W	10	-
Nitzschia fonticola Grunow	W	5	-
Nitzschia sp.	?	2	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Q	14	14
Pinnularia gibba Ehrenberg	O	2	-
Pinnularia major (Kutzing) Rabenhorst	W	4	-
Pinnularia stomatophora Grunow	W	3	-
Pinnularia subcapitata Gregroy	Q	31	152
Pinnularia viridis (Nitzsch) Ehrenberg	O	20	7
Surirella linearis W.Smith	W	1	-
Tabellaria fenestrata (Lyngbye) Kutzing	O	5	-
環境指標種群（%）			
沼沢湿地付着生種群（O）		12.0	3.3
陸域指標種群（Q）		33.8	91.2
淡水産公布種（W）		44.4	3.3
不定（?）		9.8	2.3
珪藻殻数		234	215
1gあたりの珪藻殻数（×1000）		2009	465

No. 2では、陸生指標種群の*Pinnularia subcapitata*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis*などが34%に減少し、沼沢湿地付着生種群の*Pinnularia viridis*や*Tabellaria fenestrata*、淡水産公布種（淡水域に広く分布）の*Eunotia praerupta*、*Eunotia minor*、*Neidium bisulcatum*などが産出している。陸生珪藻の減少と水生珪藻の増加は、前時期より水域が広がり部分的に沼沢が形成されたことを示す。

５．富沢遺跡第130次調査区における最終氷期最寒冷期の堆積環境と古植生

22層における堆積環境は下部と上部で異なる。すなわち、下部では陸生珪藻が大半を占めるが、上部では減少し、沼沢湿地付着生種や淡水産公布種の水生珪藻が多く占める。陸生珪藻とは、コケ類を含めた陸上の植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群である（小杉、1986）。つまり、23層の砂層の堆積後に乾陸化したわけでなく地表面が湿った環境が形成された。その後、徐々に水域が拡大し上部では部分的に沼沢

が形成され、スゲ属が繁茂する環境へと変化したと推定される。

22層の植物化石群では、カラマツ属やトウヒ属の木材や多量の葉、チョウセンゴヨウの根株と種子が産出し、花粉化石群ではトウヒ属が優占しマツ属単維管束亜属、カラマツ属、ツガ属、モミ属、カバノキ属などからなる。つまり、22層の堆積初期頃には、この地点にはトウヒ属、カラマツ属、チョウセンゴヨウの針葉樹が生え、土壌や根株の表面にはミズゴケなどが付着するような湿った環境にあったとみられる。また、周辺のやや乾いたところにモミ属やツガ属、落葉広葉樹のカバノキ属、ハンノキ属が分布し、コナラ亜属やハシバミ属、ニレ属、ツツジ科なども稀にあった。さらにカラマツソウ属やキク科などが生える草原もあったとみられる。一方、22層の上部が堆積した頃には、徐々に水域が拡大し沼沢から湿地が部分的に形成されたとみられる。沼沢にはスゲ属やイネ科などが繁茂しミズバショウも生え、周囲の湿地にはワレモコウ属、セリ科、ミズゴケ属なども生えていた。また、水域の拡大に伴いトウヒ属などの樹木が部分的に衰退したとみられる。

以上のように、第130次調査地点では砂層の堆積後に地表面が湿った環境にあり、こうした所にトウヒ属、カラマツ属、チョウセンゴヨウが生えていた。その後、水域が拡大しスゲ類が繁茂する沼沢が形成され、それに伴いこの地点における樹木も部分的に衰退したとみられる。

引用文献

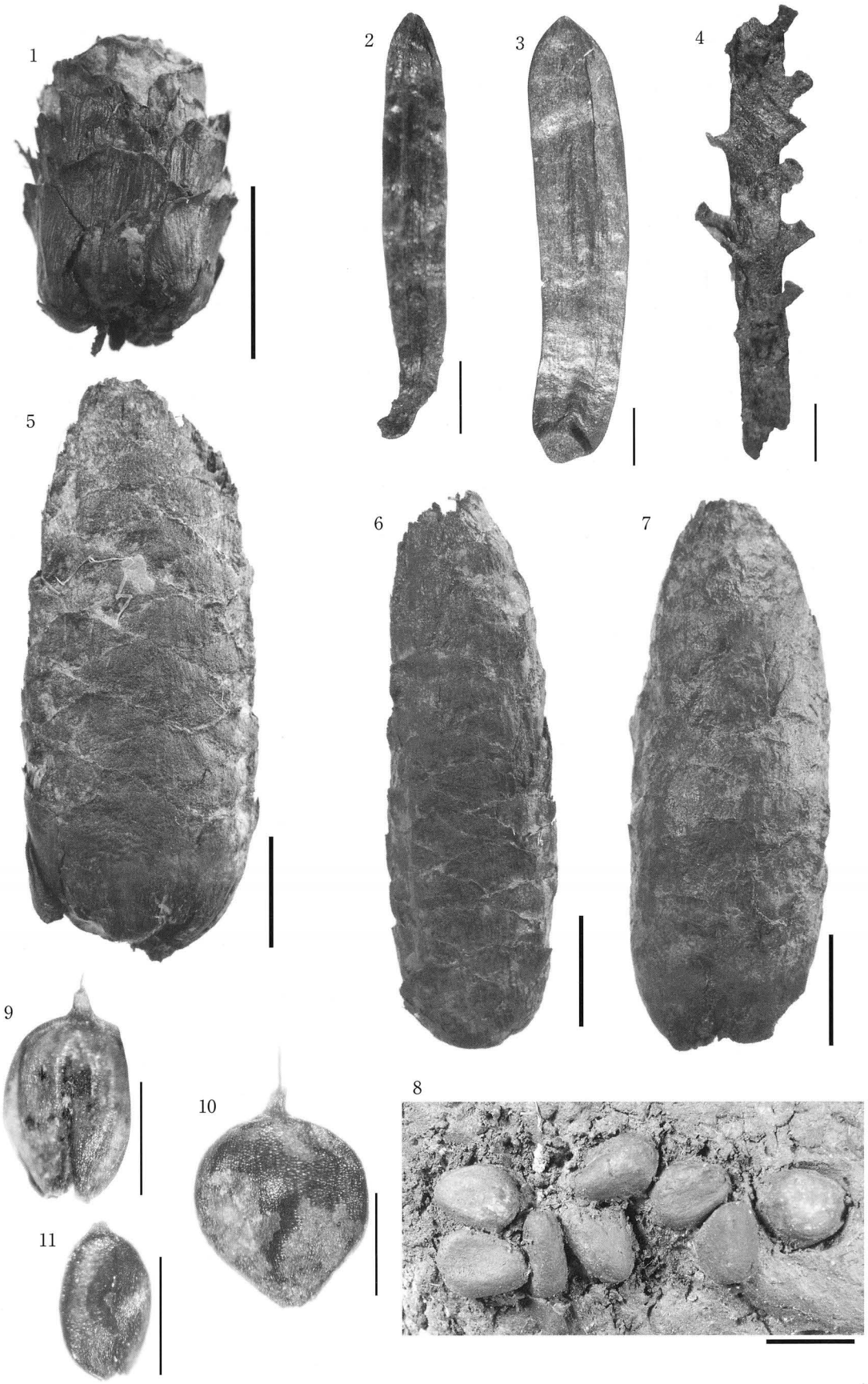
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42, 73～88.

小杉正人（1986）陸棲珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望．植生史研究，1号，29～44.

Krammer,K.and H.Lange－Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）Bacillariophyceae,1.Teil, 2 .Teil, 3 .Teil, 4 .Teil,876p.,539p.,576p.,437p, In Ettl,H.,Gerloff,J.,Heyning,J.,Mollenhauer,D.,Susswasserflora von Mitteleuropa, 2（1）, 2（2）, 2（3）, 2（4）,GustavFischer.Jena.

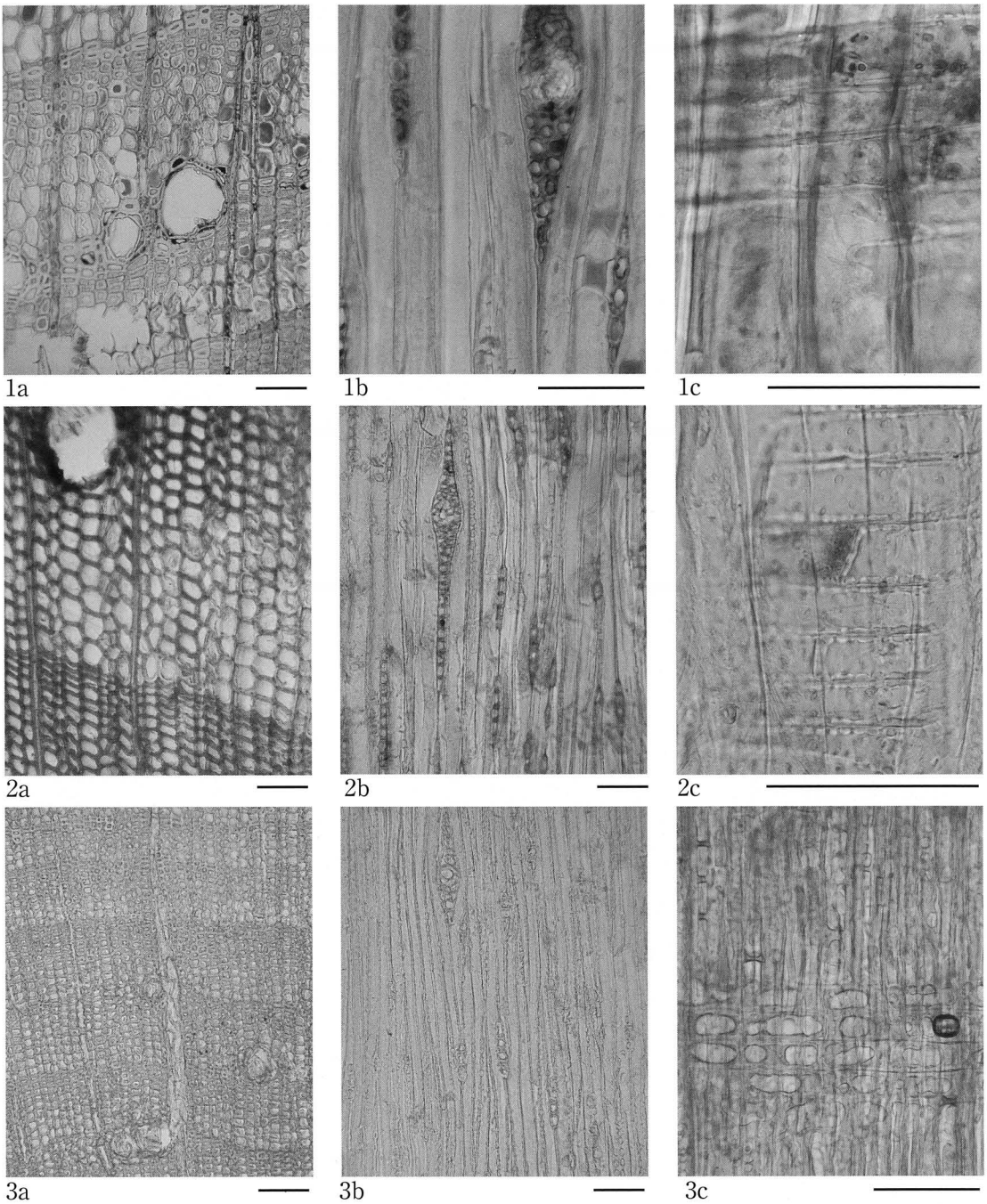
森　勇一（1992）珪藻分析から復元される旧石器時代の地表環境．富沢遺跡－第30次調査報告書第「分冊（旧石器時代編）－」，347-369. 仙台市教育委員会.

吉川純子（1995）仙台市富沢遺跡第88次調査で産出した大型植物化石．「富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）―富沢遺跡第88次・第89次発掘調査報告書－」，50～67. 仙台市教育委員会.



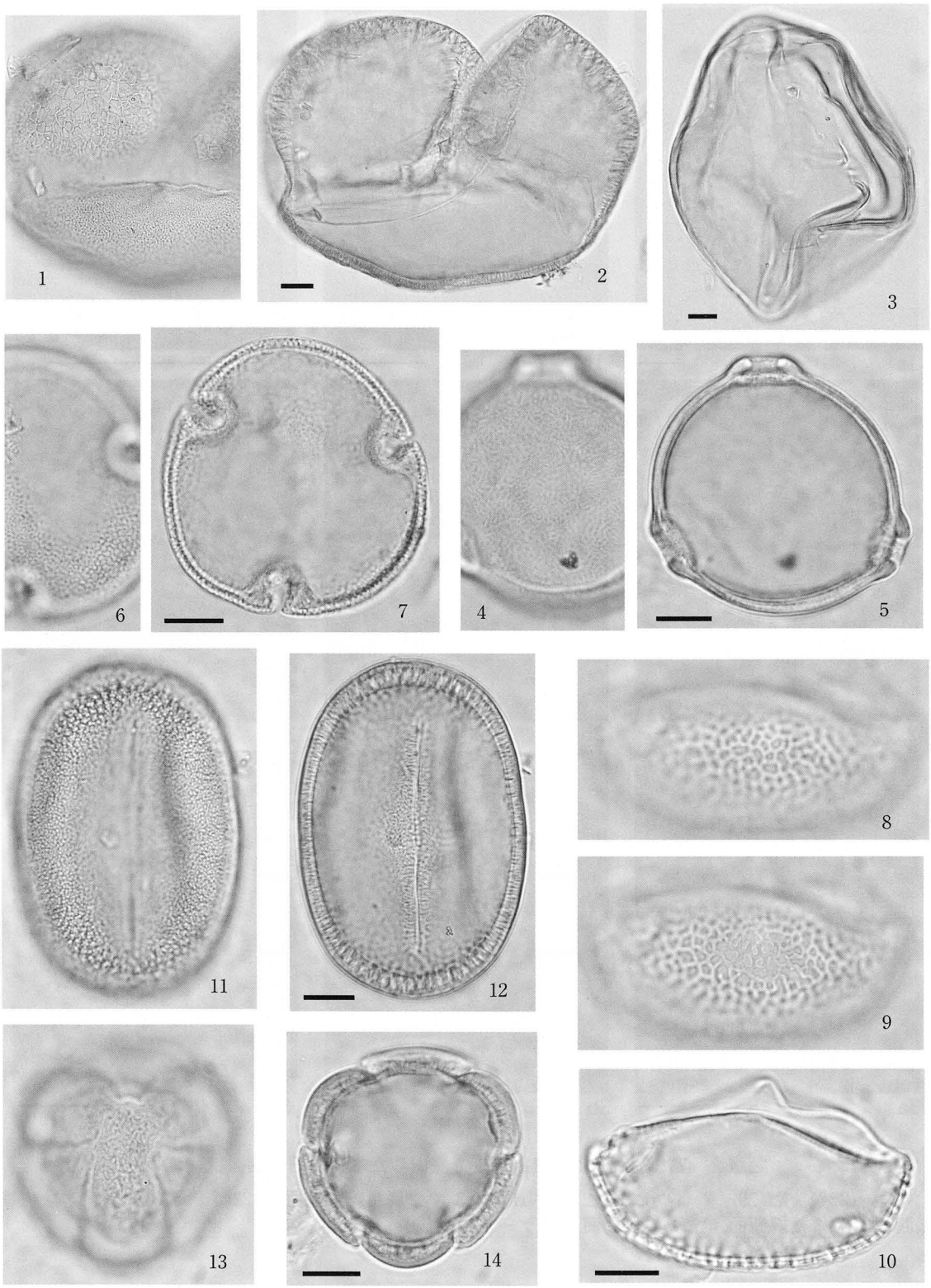
図版１　富沢遺跡第130次発掘調査で産出した大型植物化石

1.カラマツ近似種、球果(No.123)　2.カラマツ、葉(S2)　3.トウヒ属バラモミ節、葉(S2)　4.トウヒ属、枝(S2)　5.トウヒ属A、球果(No.120)　6.トウヒ属B、球果(No.117)　7.トウヒ属C、球果(No.110)　8.チョウセンゴヨウ、種子(No.126)　9.スゲ属A、果実(S1)　10.スゲ属B、果実(S1)　11.スゲ属C、果実(S1)（スケールは１と５～８が10mm、ほかは１mm）



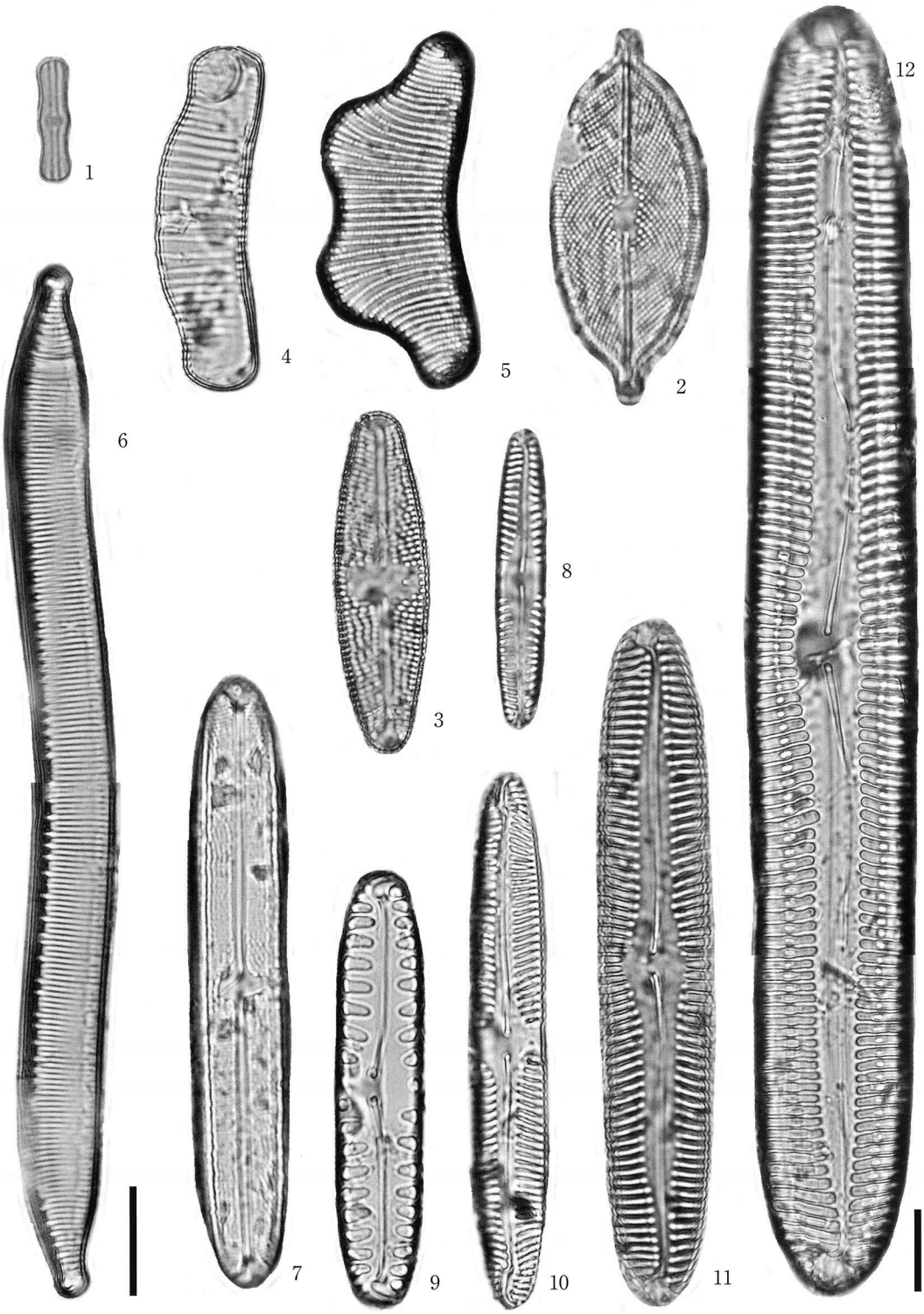
図版２　富沢遺跡130次発掘調査で産出した木材化石の顕微鏡写真

１.カラマツ属（22層　№129）２.トウヒ属（22層　№130）３.マツ属単維管束亜属（22層　№131）
（ａ：横断面，ｂ：接線断面，ｃ：放射断面，スケールは0.1㎜）



図版３　富沢遺跡第130次調査区22層より産出した花粉化石

１～２：トウヒ属（*Picea*），3 ,AFR.MY 1507.　３：カラマツ属（*Larix*），3 ,AFR.MY 1512.　４～５：カバノキ属（*Betula*），3 ,AFR.MY 1510.　６～７：シナノキ属（*Tilia*），3 ,AFR.MY 1508.　８～10：ミズバショウ属（*Lysichiton*），3 ,AFR.MY 1509.　11～12：イブキトラノオ節（*Polygonum* sect. Bistorta），2 ,AFR.MY 1506 13～14：ワレモコウ属（*Sanguisorba*），1 ,AFR.MY 1511.　（スケールは10μm）



図版４　富沢遺跡第130次調査区22層より産出した珪藻化石

1 *Navicula contenta*, No. 2．2 *Navicula placenta*, No. 2．3 *Navicula mutica*, No. 2．4 *Eunotia praerupta*, No. 2．5 *Eunotia papilio*, No. 2．6 *Hantzschia amphioxys*, No. 3．7 *Neidium bisulcatum*, No. 2．8 *Pinnularia subcapitata*, No. 2．9 *Pinnularia borealis*, No. 2．10 *Pinnularia stomatophora*, No. 2．11 *Pinnularia viridis*, No. 2．12 *Pinnularia major*, No. 2．

（スケールは10μm, No.12のみ別スケール）

5）中世から近世より出土した加工材及び種実

吉川純子（古代の森研究舎）

1．試料と方法

富沢遺跡第130次発掘調査に伴い中世から近世にあたる10層～４層から打ち込み杭などの加工材を出土した。ここでは中・近世における木材利用の状況を明らかにするため加工材の樹種同定を行った。また、４層及び５層からは大型植物化石を３試料出土した。

各層から取り上げられた加工材からは、直接剃刀で横断面、接線断面、放射断面を切り出し、ガムクロラールでプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察、同定した。種実は４層と５層から出土しており、肉眼で観察･同定した。

2．中世から近世の木材利用状況

４層から10層で出土した加工材及び種実の同定結果を表５に示す。加工材の種類は打ち込み杭が多く、ほかは先端加工材などである。４層から10層の打ち込み杭利用樹種をまとめるとヤナギ属６本とクリが５本でもっとも多く利用され、次いでサクラ属３本、ウツギ属２本、コクサギ、ウルシ属、リョウブ、カエデ属が各１本ずつ利用されている。比較的利用樹種が統一されているのは４層のクリの杭列のみで、５層から10層は様々な樹種を利用しており、しかも低木であまり径が太くならない樹種が多い。ヤナギ属は低地に生育する種類が多く、ウツギ属、ウルシ属、コクサギは林分の周囲に生育している種類である。こうしたことから富沢の低地周辺に生育していた樹木のうち利用可能な径の樹木を適当に利用したと考えられる。

表６　4層～10層出土加工材及び種実

層位	登録番号	種別	Grid	分類群	遺物番号	AFR No.	備考
4	L-01	打ち込み杭	E10S0	クリ	99	254	杭列セット
4	L-03	打ち込み杭	E15S0	クリ	34	256	杭列セット
4	L-04	打ち込み杭	E15S0	クリ	35	257	杭列セット
4	L-05	打ち込み杭	E15S10	クリ	36	258	杭列セット
4	L-06	打ち込み杭	E5S0	クロマツ	52	259	
5	L-02	材	E10S5	ウツギ属	30	255	
5	L-07	打ち込み杭	E10S0	サクラ属	55	260	
5	L-08	打ち込み杭	E10S5	サクラ属	56	261	
5	L-09	打ち込み杭	E10S5	ヤナギ属	58	262	
5	L-11	打ち込み杭	E5S5	ヤナギ属	75	264	
5	L-13	打ち込み杭	E5S5	ヤナギ属	78	266	
5	L-14	打ち込み杭	E10S0	ウツギ属	138	267	
6	L-15	打ち込み杭	E5S0	ヤナギ属	79	268	
6	L-16	打ち込み杭	E5S0	コクサギ	87	269	
7	L-10	打ち込み杭	E5S5	ウルシ属	74	263	
7	L-12	打ち込み杭	E5S5	ヤナギ属	77	265	
7	L-17	打ち込み杭	E5S0	リョウブ	86	270	
7	L-18	打ち込み杭	E10S0	ウツギ属	91	271	
7	L-19	材	E5S0	ウコギ属	92	272	加工痕
7	L-20	打ち込み杭	E10S5	ヤナギ属	98	273	
7	L-21	材	E15S5	サクラ属	100	274	先端加工
7	L-22	材	E10S5	キブシ	102	275	先端加工
7	L-23	打ち込み杭	E5S0	サクラ属	104	276	
7	L-24	打ち込み杭	E5S10	マツ属	105	277	
7	L-25	打ち込み杭	E5S0	カエデ属	106	278	
7	L-26	打ち込み杭	E5S10	クリ	107	279	
10	L-27	材	E15S5	サクラ属	101	280	先端加工
10	L-28	材	E10S5	マツ属	137	281	先端加工
4	1	種実	E10S0	オニグルミ	15		割れた内果皮
4	2	種実	E10S5	オニグルミ	16		核破片2
4	2	種実	E10S5	モモ	16		核破片2
5	3	種実		モモ	53		核完形31.6×21.1×14.7

種実は５層からモモの完形核、4層からはオニグルミとモモを出土していて、いずれも食痕はなく割れた跡が確認されたため、人間が利用したと考えられる。

３．同定された樹種の形態記載

１．クロマツ（*Pinus thunbergii* Parlat.）　早材から晩材への移行は比較的急で垂直樹脂道は比較的大型である。放射仮道管の内壁は内腔にむかってやや突出するが、アカマツほどではない。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列と、水平樹脂道を持つ紡錘状がある。海岸付近に多く自生している。

２．マツ属（*Pinus*）　クロマツ同様の構造を持つが、放射仮道管の壁などが風化作用によって溶け、詳細な検討ができなかった試料をマツ属とした。

３．ヤナギ属（*Salix*）　中から小型の単独あるいは２個の道管が放射方向に複合する散孔材で、道管は年輪内にほぼ均一に分布する。年輪界付近になると、道管はやや小さくなる。道管の穿孔は単一で、道管相互の壁孔はやや大きめの小孔紋が交互状に密に分布する。放射組織は単列で異性、放射組織と道管の間の壁孔は蜂の巣状を呈する。ヤナギ属は水湿地に普通に生育する落葉低木で、もろいため、本遺跡では短期間利用するため手近の材を入手したと考えられる。

４．クリ（*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.）　年輪のはじめに大きな道管が１～３列並び、その後小道管が集まって火炎状に配列する環孔材である。心材部ではしばしばタンニンが充填して漆黒になり、保存性が良い。道管の穿孔は単一で壁孔は交互上、道管内には薄い膜状のチローシスが見られる。放射組織は単列で同性である。木材は耐久性、耐湿性に優れ、土木材や建築材などに良く利用される。本遺跡の杭材への利用は適合している。

５．サクラ属（*Prunus*）　散孔材で、楕円形の小道管が単独もしくは２～３個放射方向に複合して比較的密に分布する。道管の穿孔は単一で壁孔は交互状、道管内壁には比較的明瞭ならせん肥厚がある。放射組織はやや背の高い１～４列程度の紡錘形で同性に近い異性である。黒褐色ないし褐色の充填物質が良く見られる。種実ではモモを出土しているが、木材はモモではない。

６．コクサギ（*Orixa japonica* Thunb.）　年輪のはじめに1列小道管が並び、その後小道管が３列ほどの幅でX状に分布する紋様孔材。道管内にはらせん肥厚がある。放射組織は単列で10細胞高前後、やや異性である。丘陵地に多い落葉低木であまり太くならない。

７．ウツギ属（*Deutzia*）　小道管がかなりまばらに均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は数の多い階段状である。放射組織は2～4列で幅が狭く背が大変高く、異性である。細胞は大ぶりである。材は低木で径はあまり太くならないが比較的硬い。

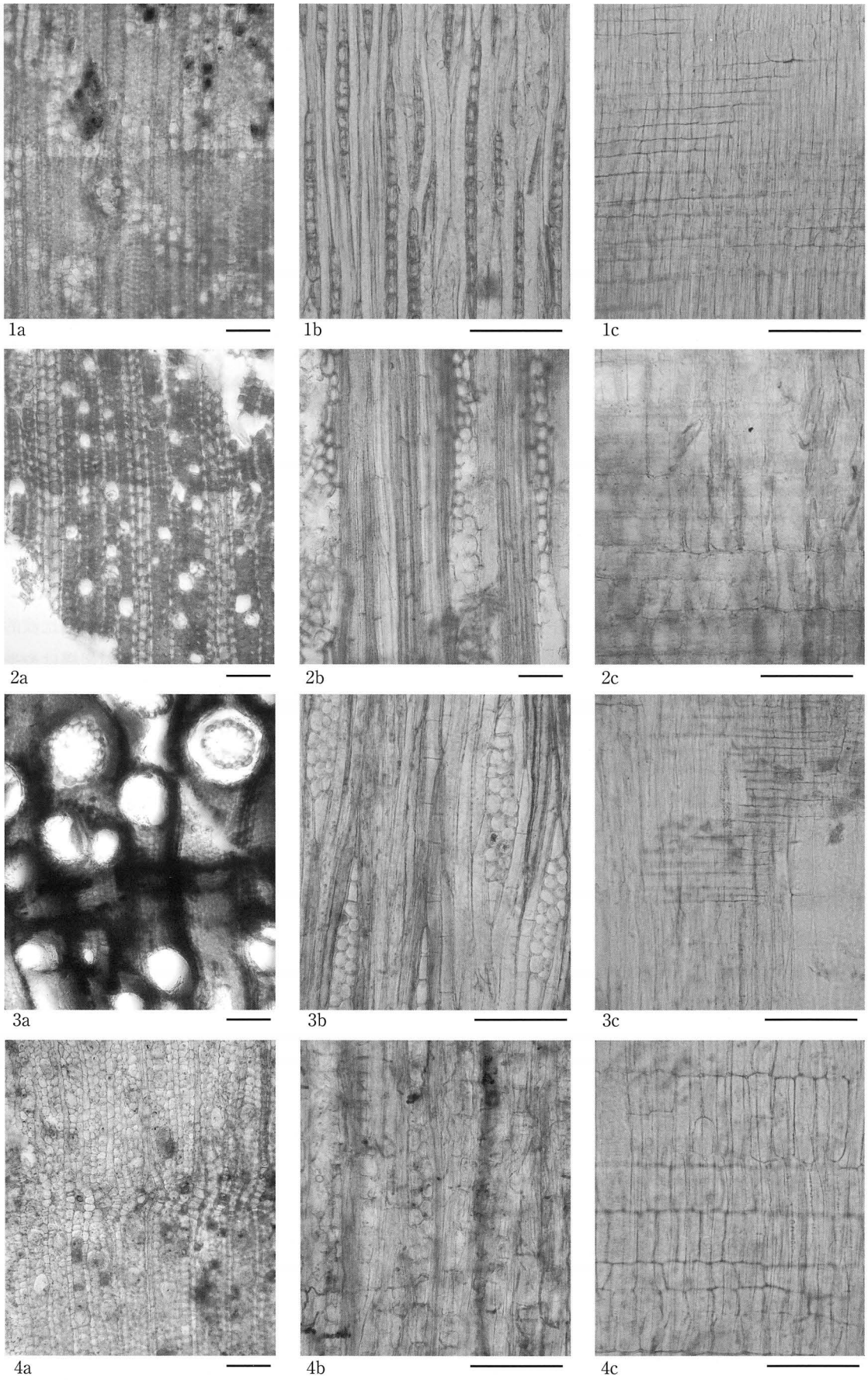
８．ウルシ属（*Rhus*）　年輪はじめに比較的大きな道管が単一もしくは２個程度接合し、晩材になるにしたがって、小道管が径を減じる、環孔材。材全体が黒ずんだ褐色を呈する。放射細胞は３～４細胞幅で、異性、穿孔は単一で小道管の内壁にはらせん肥厚がある。

９．カエデ属（*Acer*）　小道管が単独もしくは２、３個放射方向に複合し、まばらに均一に分布する。道管は早材部ではやや大きく、晩材では径を減じる。道管壁は交互壁孔で、穿孔は単一、大変細いらせん肥厚が確認できる。放射細胞は１～５細胞幅の紡錘状、ほぼ同性である。

10．キブシ（*Stachyurus praecox* Sieb.et Zucc.）　大変小さな小道管が放射方向に２～３個接合し、柔細胞は短接線状、ターミナル状に配列する散孔材。穿孔は階段状で放射細胞は１～２細胞幅で大変高い。放射組織は異性である。山野に生育する低木で径は10㎝未満がほとんどである。

11．ウコギ属（*Acanthopanax*）　小道管が接線状に並ぶ散孔材で、単穿孔、側壁は交互状壁孔である。放射組織は５～６細胞幅で時に30細胞高以上になる紡錘形で、外側は滑らかだが、放射組織内部の細胞はそろっていない。

12．リョウブ（*Clethra barbinervis* Sieb.et Zucc.）　小さい道管がまばらに分布する散孔材で、穿孔は階段状、道管内壁は交互壁孔である。放射組織は３～４細胞幅で５～30細胞高くらいで異性である。中低木だが径はそれほど太くならない。



図版５　富沢遺跡第130次調査区の中・近世より出土した加工材の顕微鏡写真

１.コクサギ（６層№87）２.ウツギ属（５層№30）３.ウルシ属（７層№74）４.キブシ（７層№102）（a：横断面，b：接線断面，c：放射断面，スケールは0.1㎜）

6）昆虫化石

森　勇一（愛知県立明和高等学校）

1．試料および分析方法

2003年に実施された富沢遺跡第130次調査は、地底の森ミュージアム「富沢遺跡保存館」の南東に隣接する一辺約2.5mの小規模な調査区である。本調査区からは、従来の調査同様、旧石器時代（約２万年前）の地層が確認され、この地層から樹根や木材片とともに、現地調査の過程で計２点の昆虫化石が発見された。そのため、昆虫化石について調査すべく、２か所のブロックサンプル（試料１および２）が採取された。今回、筆者のもとに送り届けられた試料１および２は、調査区北東隅より約30cm離れた場所に位置し、東西に隣りあわせたサンプルである。これらの湿潤重量は、試料１が1.8kg、試料２が2.0kgであり、層厚はいずれも約８cmであった。

なお、昆虫化石を含む地層より得られた木片の放射性炭素年代は22,300年yrs.BPという年代値が求められており、また、昆虫化石包含層（22層）の約40cm下位からは姶良－丹沢テフラ（AT）が検出されている。

昆虫化石の抽出は、ブロック割り法（野尻湖昆虫グループ，1988）によった。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と１点ずつ実体顕微鏡下で比較しながら行った。

2．分析結果

A．現地採集の昆虫化石

発掘調査の過程で発見された昆虫化石は、計３点であった。うち１点は、E10S5地点の22層より産出した遺物番号122とされる昆虫化石（標本１）であり、もう1点は、E12S4地点の同じく22層より産出した遺物番号128の昆虫化石（標本２）であった。なお、遺物番号122の試料からは、化石クリーニングの過程でもう１点の昆虫化石が検出され、この化石を標本３とした。次に、標本１および２、３についてその同定結果を記す。

標本１（遺物番号122-1）

アオオサムシ　*Carabus insulicola* Chaudoir　右上翅（長さ15.0mm）図版１－１

標本２（遺物番号128）

ナガゴミムシ属　*Pterostichus* sp.　前胸背板（最大幅4.4mm）図版１－２

標本３（遺物番号122－2）

ハネカクシ科　Staphylinidae　前胸背板（長さ2.2mm）

B．試料１

試料１からは、計36点の昆虫化石が発見された（表１）。数多く認められた昆虫は、地表性で雑食性ないし食肉生のオサムシ科 Carabidae が８点、地表性で主に雑食性のハネカクシ科 Staphylinidae が８点、好植性で食植性のゾウムシ科 Curculionidae が６点、同じく好植性で食植性のハムシ科 Chrysomelidae（５点）などであった。全体に、地表性昆虫（18点）の出現率（50.0%）が高く、植物に依存して生活する好植性昆虫は13点（36.1%）、水生昆虫はわずか２点（5.6%）、不明種は３点（8.3%）であった。また、昆虫化石の保存状態が悪く、検出された昆虫化石はすべて体節片に分離した状態で発見された。

特筆すべき昆虫として、好植性でスゲ類を食するスゲヒメゾウムシの一種 *Limnobaris* sp.（１点）、および水生・食植性昆虫として知られるタマガムシ *Amphiops mater*（１点）などが検出された。

C．試料２

試料２では、計44点の昆虫化石が見つかった。もっとも多く検出された昆虫は地表性で主に雑食性のハネカクシ科（17点）であり、次に同じく地表性で主に雑食性のオサムシ科（６点）、好植性で食植性のハムシ科（５点）な

どが発見された。地表性昆虫（28点）の出現率は試料１以上に高く、全体の61.4%を占めた。好植性昆虫は11点（25.0%）であり，水生昆虫は４点（9.1%）、不明種は１点（2.3%）であった。試料１と同様、昆虫化石の保存状態が悪く、検出された昆虫化石は各体節片に分離し、破壊・変形した状態で検出された。

試料１と同じくスゲヒメゾウムシの一種（１点）が発見されたが，このほかに水生・食肉性のクロヒメゲンゴロウ*Ilybius poppiusi*（１点）、水生・食植性のタマガムシ（２点）、同じく水生・食植性のヒメセマルガムシ*Coelostoma orbiculare*（１点）などが見いだされた。

３．昆虫化石から推定される古環境

A．地表環境

試料１および２からは地表性昆虫が多数検出され、水生昆虫がほとんど見られなかったことより，旧石器時代のころ、130次調査区付近は比較的乾燥した状態であったと考えられる。発掘調査現場（El0S5地点およびE12S4地点）にて採取された昆虫化石（３点）がすべて地表性昆虫であったことも、この結果とよく一致する。また、試料中より検出される昆虫化石が体節片に分離した状態で発見されたことや、これらの保存状態がきわめて悪いことからは、昆虫が死後他の昆虫や土壌生物等に食べられたり分解されたりするなど、常時水につかることのない地表環境だったことを示している。

食植性昆虫が比較的多く認められたことから、遺跡の周りに植生が繁茂していたことが容易に推定される。なかでもスゲ類を食するスゲヒメゾウムシの仲間の発見からはスゲ群落の存在が，またヒメセマルガムシからは遺跡周辺にミズゴケが繁茂していたことが示される。これら２分類群がいずれも湿地に生える植物に依存して生活することや、地表性昆虫の中にミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.，ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. など湿潤地表面を好むものが認められることから，遺跡付近に湿地や水たまりが存在したことを示唆している。

B．古気候について

見いだされた昆虫化石の中には、日本全土に分布する昆虫が多数認められるものの、遺跡の位置する仙台市以南にのみ生息する昆虫は１点も確認されなかった。計２点発見されたスゲヒメゾウムシの一種は種まで同定できていないが、富沢遺跡第58次、第63次、および第88次の調査でも確認された北方系のゾウムシである（森，1993，森，1995a）。また、クロヒメゲンゴロウについては、スゲヒメゾウムシの一種と同じく第58次、第63次、第88次の調査の際、発見された本州からは採集記録のない北方系の水生昆虫である（森，1993，森，1995a）。また、ヒメセマルガムシは東北日本に分布の中心を有し、最終氷期（森，1995b）や第四紀更新世の寒冷期の地層（森，1996）から確認され、氷河時代の遺存種とされるミツガシワ *Menyantes trifoldia* などが繁殖する湿地に多い昆虫とされている。このため、昆虫組成のうえから、22層堆積期の気候は最終氷期の最寒冷期ころかこれに匹敵するほど寒かったのではないかと考えられる。なお、こうした推定は、富沢遺跡における従来の昆虫分析結果とも矛盾しない。

文献

森　勇一（1993）富沢遺跡58次調査区より発見された昆虫化石について．仙台市文化財調査報告書（第172集）富沢・泉崎浦・山口遺跡（6），仙台市教育委員会，33～41.

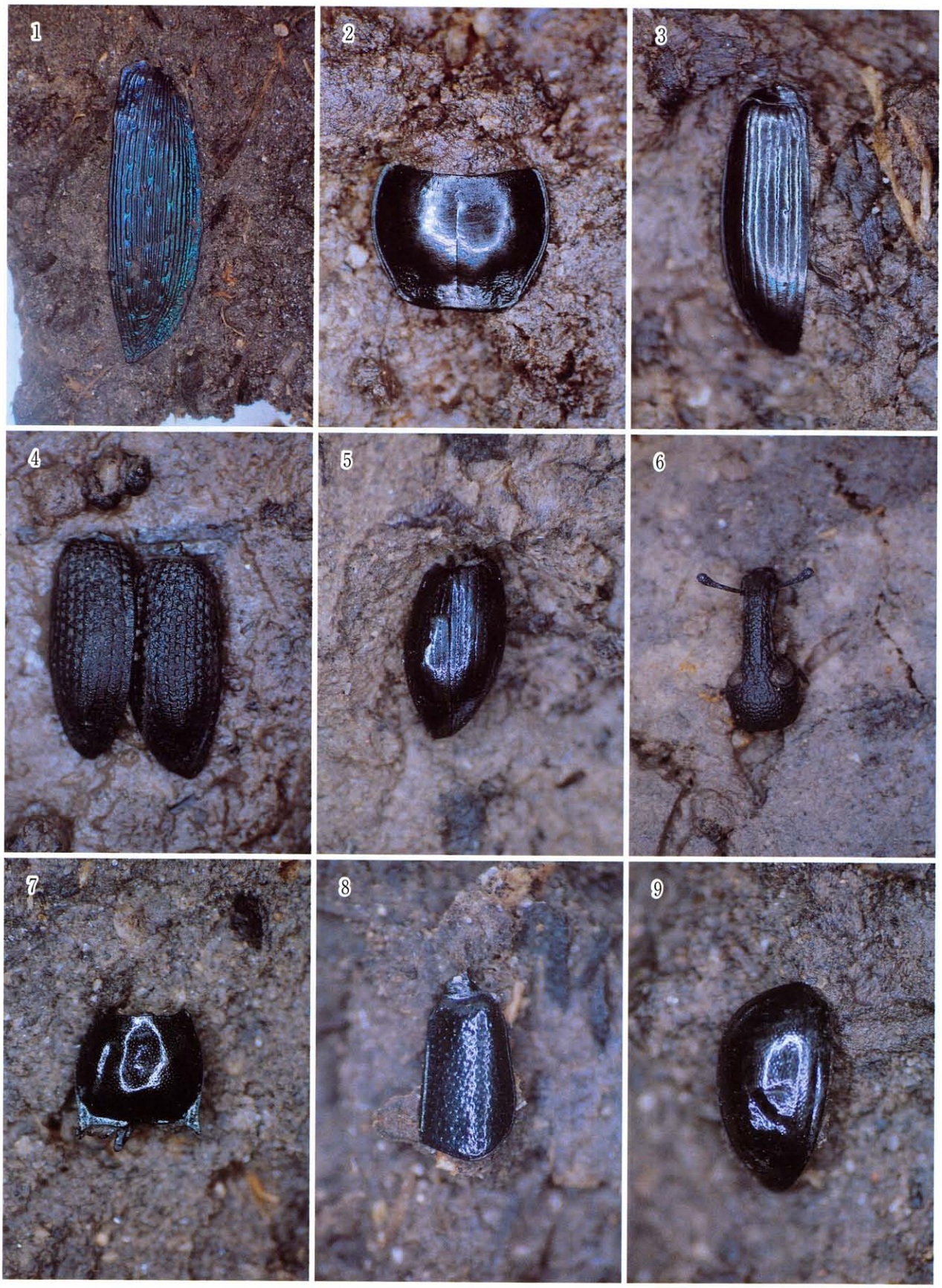
森　勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究，33，331～349.

森　勇一（1995a）富沢遺跡（第88次調査）より産出した昆虫化石と古環境．仙台市文化財調査報告書（第203集）富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）一富沢遺跡第88次・89次調査報告書，仙台市教育委員会，72～81.

森　勇一（1995b）昆虫化石と古環境，大渡Ⅱ遺跡報告書，岩手県埋蔵文化財センター，351～370.

森　勇一（1996）三重県多度町の鮮新・更新統東海層群より産出した寒冷型甲虫化石．第四紀研究，34，373～381.

野尻湖昆虫グループ（1988）昆虫化石ハンドブック（グリーンブックス138），ニュー・サイエンス社，126p.



図版１　富沢遺跡（第130次調査）から産出した昆虫化石の顕微鏡写真

1．アオオサムシ *Carabus insulicola* Chaudoir 右上翅（長さ15.0㎜）標本１（遺物番号122）
2．ナガゴミムシ属 *Pterosttichus* sp. 前胸背板（最大幅4.4㎜）標本２（遺物番号128）
3．ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. 左上翅（長さ3.4㎜）試料２－38
4．ゾウムシ科 Curculionidae 左右上翅（長さ5.3㎜）試料１－21
5．スゲヒメゾウムシの一種 *Limnobaris* sp. 左右上翅（長さ2.8㎜）試料１－37
6．ゾウムシ科 Curculionidae 頭部（長さ3.2㎜）試料１－25
7．コメツキムシ科 Elateridae 前胸背板（最大幅2.5㎜）試料２－11
8．ハネカクシ科 Staphylinidae 右上翅（長さ1.2㎜）試料２－27
9．ヒメセマルガムシ *Coelostoma orbiculare*（Fabricius）左上翅（長さ2.4㎜）試料２－29

現地採取

1	アオオサムシ	*Carabus insulicola* Chaudoir	右上翅	地表性	食肉性
2	ナガゴミムシ属	*Pterostichus* sp.	前胸背板	地表性	食肉性
3	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性

試料1

	和　名	学　名	部　位	生　態	食　性
1	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	好植性	食植性
2	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	地表性	雑食性
3	スゲヒメゾウムシの一種	*Limnobaris* sp.	左右上翅	好植性	食植性
4	ハネカクシ科	Staphylinidae	右上翅	地表性	雑食性
5	ゾウムシ科	Curculionidae	腹部	好植性	食植性
6	オサムシ科	Carabidae	頭部	地表性	雑食性
7	不明甲虫	Coleoptera	不明	不　明	不　明
8	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
9	オサムシ科	Carabidae	頭部	地表性	雑食性
10	不明甲虫	Coleoptera	前胸腹板	不　明	不　明
11	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
12	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
13	ゾウムシ科	Curculionidae	右上翅	好植性	食植性
14	ゾウムシ科	Curculionidae	右上翅	好植性	食植性
15	オサムシ科	Carabidae	上翅片	地表性	雑食性
16	ガムシ科	Hydrophilidae	前胸背板	水　生	食植性
17	双翅目	Diptera	囲蛹	地表性	雑食性
18	ゾウムシ科	Curculionidae	左上翅	好植性	食植性
19	タマガムシ	*Amphiops mater* Sharp	左上翅	水　生	食植性
20	オサムシ科	Carabidae	中胸腹板	地表性	雑食性
21	ゾウムシ科	Curculionidae	左右上翅	好植性	食植性
22	ハネカクシ科	Staphyliidae	右上翅	地表性	雑食性
23	ハムシ科	Chrysomelidae	左上翅	好植性	食植性
24	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	好植性	食植性
25	ゾウムシ科	Curculionidae	頭部	好植性	食植性
26	不明甲虫	Coleoptera	上翅片	不　明	不　明
27	カミキリムシ科	Cerambycidae	前胸背板	好植性	食植性
28	ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus* sp.	右上翅	地表性	雑食性
29	オサムシ科	Carabidae	腿節	地表性	雑食性
30	ハムシ科	Chrysomelidae	右上翅	好植性	食植性
31	オサムシ科	Carabidae	腿節	地表性	雑食性
32	ハムシ科	Chrysomelidae	腿節	好植性	食植性
33	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
34	オサムシ科	Carabidae	頭部	地表性	雑食性
35	ハネカクシ科	Staphylinidae	上翅片	地表性	雑食性
36	ハネカクシ科	Staphylinidae	左上翅	地表性	雑食性

試料2

	和　名	学　名	部　位	生　態	食　性
1	アカガネサルハムシ	*Acrothinium gaschkevitchii* (M.)	上翅片	食植性	好植性
2	ハムシ科	Chrysomelidae	腿節	食植性	好植性
3	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
4	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部背板	地表性	雑食性
5	ゾウムシ科　2	Curculionidae 2	右上翅	地表性	雑食性
6	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
7	ハネカクシ科	Staphylinidae	右上翅	地表性	雑食性
8	クワガタムシ科	Lucanidae	触角	好植性	食植性
9	オサムシ科	Carabidae	頭部	地表性	雑食性
10	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
11	コメツキムシ科	Elateridae	前胸背板	好植性	雑食性
12	オサムシ科	Carabidae	頭部	地表性	雑食性
13	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	好植性	食植性
14	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
15	ハネカクシ科	Staphylinidae	右上翅	地表性	雑食性
16	不明甲虫	Coleoptera	不明	不　明	不　明
17	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
18	オサムシ科	Carabidae	左上翅	地表性	雑食性
19	ハムシ科	Chrysomelidae	左上翅	好植性	食植性
20	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
21	タマガムシ	*Amphiops mater* Sharp	左上翅	水　生	食植性
22	ナガゴミムシ属	*Pterostichus* sp.	前胸背板	地表性	食肉性
23	双翅目	Diptera	囲蛹	地表性	雑食性
24	クロヒメゲンゴロウ	*Ilibius poppiusi* Zaitzev	上翅片	水　生	食肉性
25	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	好植性	食植性
26	オサムシ科	Carabidae	前胸腹板	地表性	雑食性
27	ハネカクシ科	Staphylinidae	右上翅	地表性	雑食性
28	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
29	ヒメセマルガムシ	*Coelostoma orbiculare* (Fabricius)	左上翅	水　生	食植性
30	タマガムシ	*Amphiops mater* Sharp	左上翅	水　生	食植性
31	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部背板	地表性	雑食性
32	アリ科	Formicidae	腹部	地表性	雑食性
33	ゾウムシ科1	Curculionidae1	右上翅	好植性	食植性
34	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部背板	地表性	雑食性
35	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
36	ハネカクシ科	Staphylinidae	左上翅	地表性	雑食性
37	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	地表性	雑食性
38	ミズギワゴミムシ属	*Bembidion* sp.	左上翅	地表性	雑食性
39	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	地表性	雑食性
40	スゲヒメゾウムシの一種	*Limnobaris* sp.	左右上翅	好植性	食植性
41	コメツキムシ科	Elateridae	上翅片	好植性	雑食性
42	ハネカクシ科	Staphylinidae	頭部	地表性	雑食性
43	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	好植性	食植性
44	オサムシ科	Carabidae	腿節	地表性	雑食性

表１　富沢遺跡（第130次調査）より産出した昆虫化石

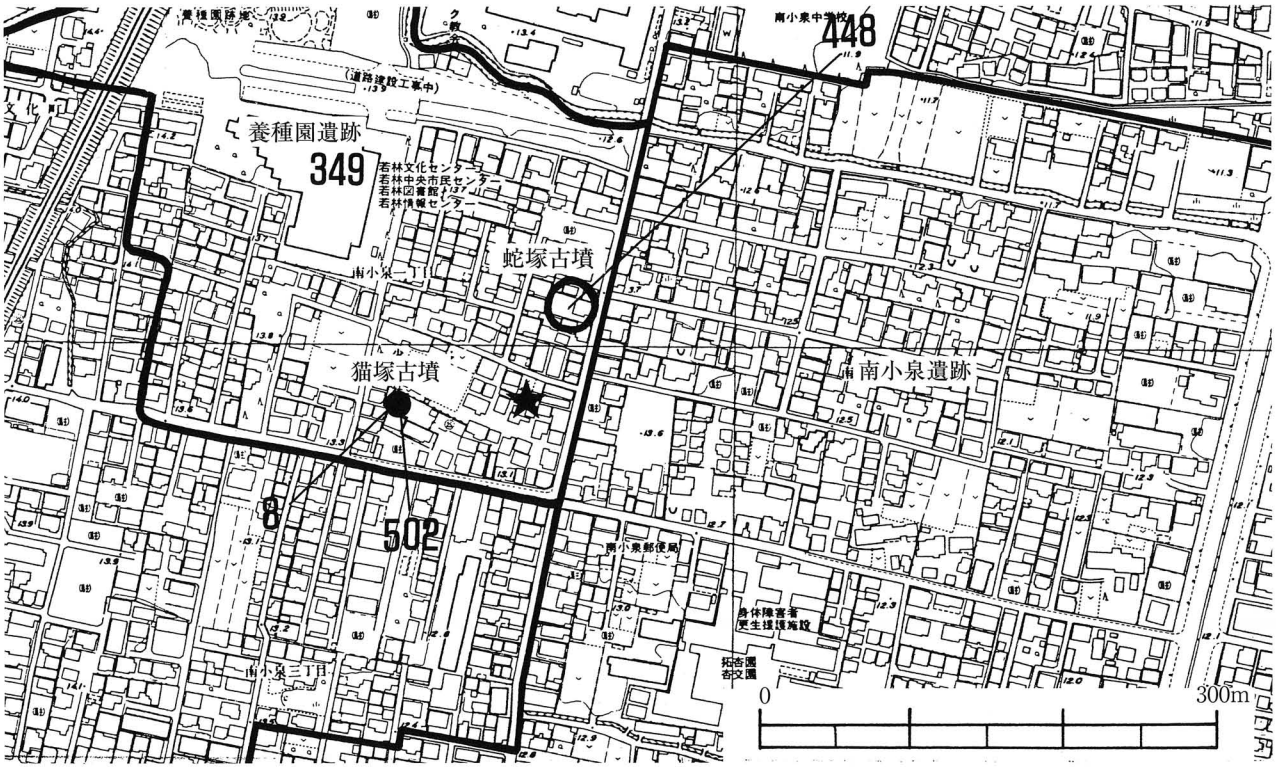
Ⅶ　養種園遺跡（第４次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	養種園遺跡（宮城県遺跡番号01349）
調 査 地 点	仙台市若林区南小泉一丁目14－10の一部
調 査 期 間	平成15年12月22日
調査対象面積	63.76㎡
調 査 面 積	18㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

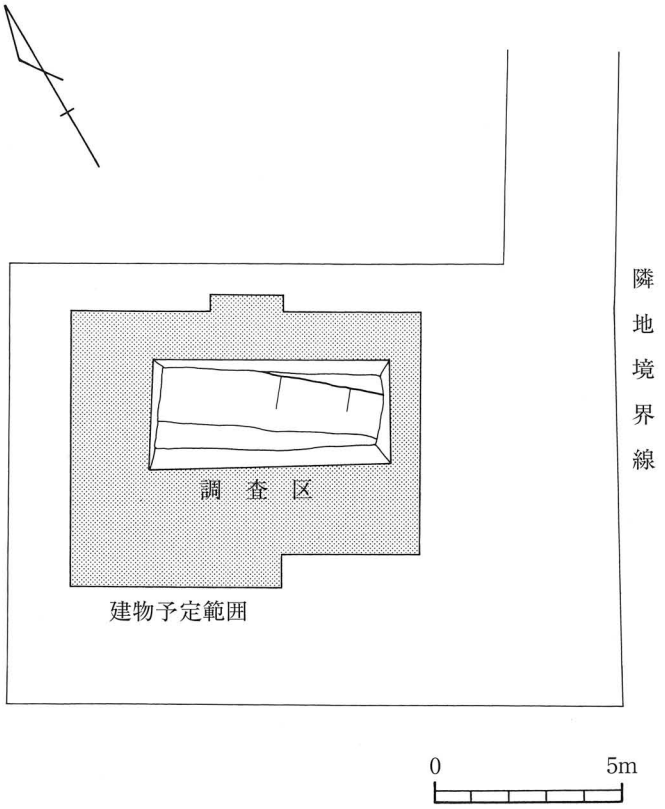
養種園遺跡は、JR仙台駅の南東約2.5km付近の仙台市若林区南小泉一丁目に所在する面積約9haの遺跡である。仙台市街地の東側、広瀬川の北側に位置し、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地の標高12～14mの自然堤防、後背湿地上に立地している。周辺には東側に隣接して南小泉遺跡が広がっておりその中心には遠見塚古墳が存在する。遺跡内には、法領塚古墳、猫塚古墳、蛇塚古墳が点在している。今回の調査地点は、遺跡南東部の住宅地に当たり標高は約12mである。本遺跡ではこれまでに３回の調査が行われており、今回の調査で４次目となる。



第44図　調査地点と周辺の地形

3　調査に至る経過と調査方法

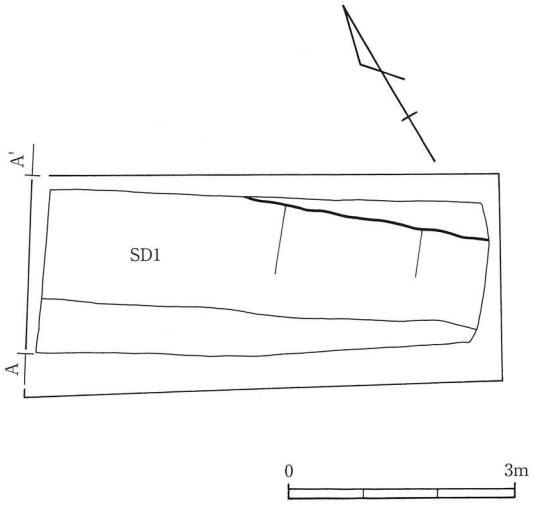
平成15年12月３日付で石川貴之氏より個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第2－192号で回答）。住宅建築工事が杭打ちを伴うため遺構を損なう惧れのあることが分かった。これを受けて平成15年12月22日に、建物予定地内に東西６ｍ、南北３ｍの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、調査区全域にわたって溝跡1条が検出されたため引き続き本調査へと移行し、溝跡の精査を行った。調査は、重機により盛土とⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第45図　調査区配置図

4　基本層位

調査区内は、全体に厚さ10～20cmの盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅢ層まで大別3層である。Ⅰ層は木炭粒、マンガン粒を含む黒褐色シルト層で、近現代の陶磁器類、燻瓦を包含している。Ⅱ層は木炭粒、微砂粒を含む黒褐色シルト層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色シルト層で基盤となる自然堆積層である。この層の上面で遺構検出作業を行った。



第46図　遺構配置図

5　発見遺構と出土遺物

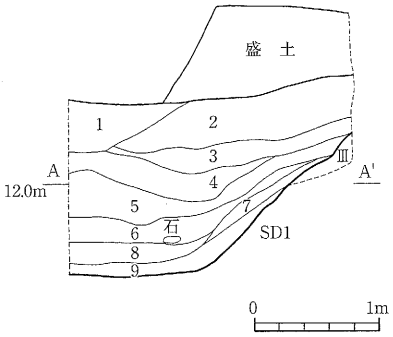
調査区全域にわたって溝跡1条が検出された。

溝跡

ＳＤ１　溝跡

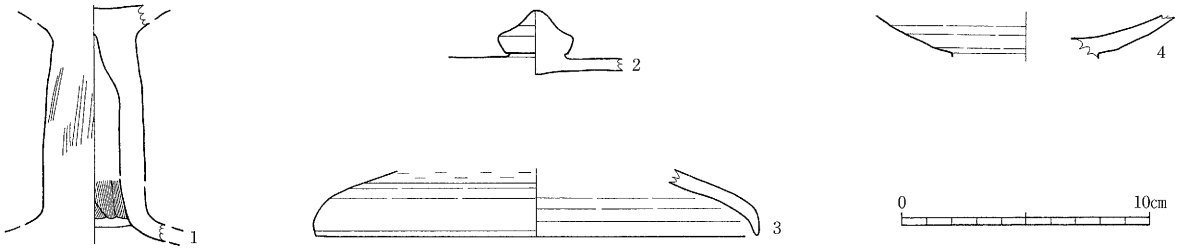
Ⅲ層上面で検出した。検出長5.8m、上幅5.0m、深さ1.4mで、壁は底面から急に立ち上がる。東西方向に延びるものと思われる。堆積土は９層に分かれ、１～５層は人為堆積で６～９層は自然堆積である。出土遺物は、非ロクロ土師器高坏（Ｃ－1）、須恵器蓋（Ｅ－1、2）、灰釉陶器碗（Ｉ－1）、鞴羽口（Ｐ－1、２）、鉄滓（Ｎ－1）の他、非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器坏、須恵器壷、甕、施釉陶器甕である。このうちＣ－1は円筒形をした中空の脚部である。外面はヘラミガキ、内面はナデが施されている。古墳時代中期の南小泉式のものと考えられる。

Ｅ－1は宝珠形をしたツマミ部である。Ｅ－2は口縁部でカエリをもたない。いずれも奈良時代頃のものと思われる。Ｉ－1は10世紀代の東海産と思われる。ただしこれらの遺物については、周辺にあった遺構に伴うものと見なされ、溝跡の年代を直接反映するものとは考えられない。Ｐ－１、２は外面に溶解した鉱滓が付着している。Ｎ－１は碗形滓である。Ｐ－１、２、Ｎ－１とも年代は不明であるが、近隣に鍛冶施設があったものと推測される。堆積土中に含まれている遺物として最も新しいと考えられるものに堤産の鉄釉陶器甕がある。これには幕末～明治初め頃の年代が与えられることから溝跡の埋没年代も概ねその頃と捉えて差支えないものと思われる。



層位	土　色	土性	備　　考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック、炭化物粒を全体に含む。焼土粒を含む。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土ブロック、炭化物粒を疎らに含む。径3cmの礫を僅かに含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を僅かに含む。
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	砂のブロックを含む。炭化物粒、焼土粒を僅かに含む。下半に褐色土ブロックを含む。
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄斑、炭化物粒を全体に含む。径4cmの礫を含む。
6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	下半に酸化した砂層を含む。径13cmの礫を含む。
7	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	
8	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR5/3にぶい黄褐色土を層状に一部含む。
9	10YR5/2 灰黄褐色	砂	下半に5YR4/8赤褐色砂層を含む。

第47図　調査区西壁・SD1溝跡断面図



図中番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	特　　徴	写真図版
1	Ｃ－1	土師器・高坏	SD1	(9.4)		脚部外面:ヘラミガキ　内面:ヘラナデ、二次加熱を受けている。支脚に転用か。	21-1
2	Ｅ－1	須恵器　蓋	SD1	(2.0)		外面:ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面:ロクロナデ　宝珠形。	21-2
3	Ｅ－2	須恵器　蓋	SD1	(2.6)	17.6	外面:ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面:ロクロナデ	21-3
4	Ｉ－1	灰釉陶器　碗	SD1	(1.9)	5.8	東海産（猿投窯か）10c代　外面:ロクロナデ、灰釉　内面:ロクロナデ、灰釉	21-4

第48図　SD1溝跡出土遺物

6　まとめ

① 養種園遺跡は、仙台市若林区南小泉一丁目に所在する縄文時代から江戸時代の複合遺跡である。

② 今回の調査によって検出された遺構は、溝跡１条である。出土遺物には、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器、施釉陶器、鞴羽口、鉄滓がある。

③ 溝跡については、遺構の一部を検出したに留まっているため年代や機能については不明である。出土遺物のうち施釉陶器甕に幕末から明治初め頃の年代が与えられることから19世紀の後半頃には埋め戻されたものと考えられる。

引用・参考文献

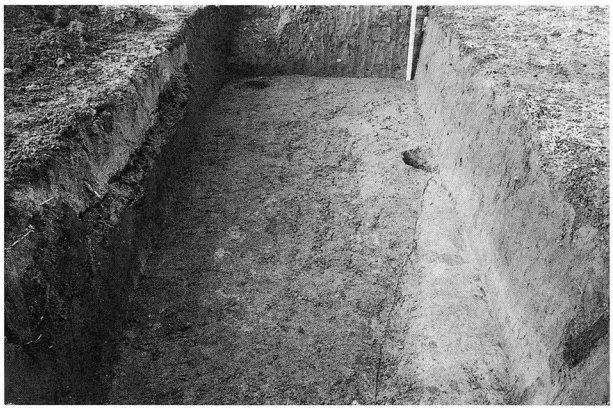
伊東真文（2002）：「若林城跡－第3次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第256集

佐藤　洋（1997）：「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集

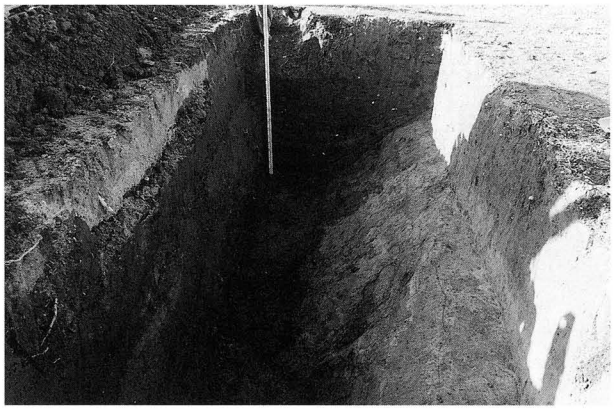
豊村幸宏（2003）：「養種園遺跡（第3次）発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第266集

仙台市教育委員会（2001）：「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集

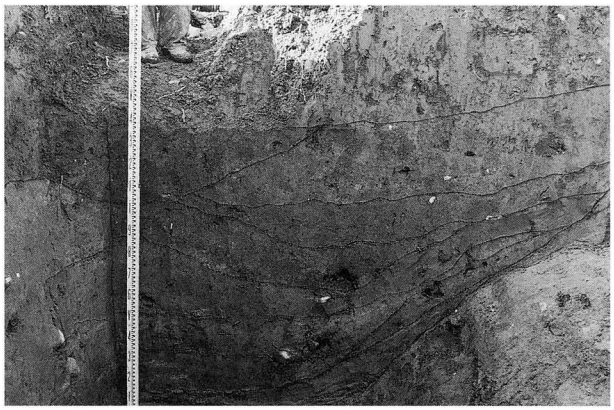
1　調査前状況（北東より）



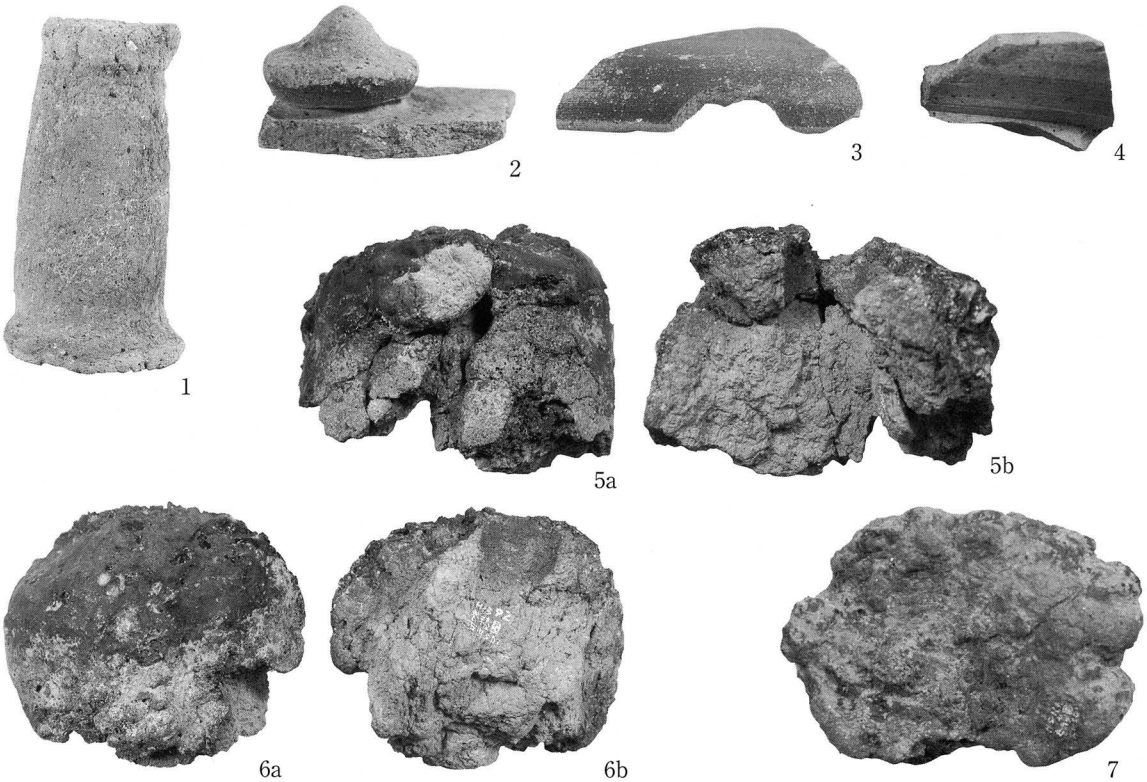
2　遺構検出状況（東より）



3　SD1溝跡全景（東より）



4　SD1溝跡土層断面（東より）



※縮尺は任意とする。

1　土師器　高坏　C－1（SD1 第48図1）
2　須恵器　蓋　E－1（SD1 第48図2）
3　須恵器　蓋　E－2（SD1 第48図3）
4　灰釉陶器　碗　I－1（SD1 第48図4）
5　鞴羽口　P－1（SD1）
6　鞴羽口　P－2（SD1）
7　鉄滓　N－1（SD1）

図版21　調査状況・出土遺物

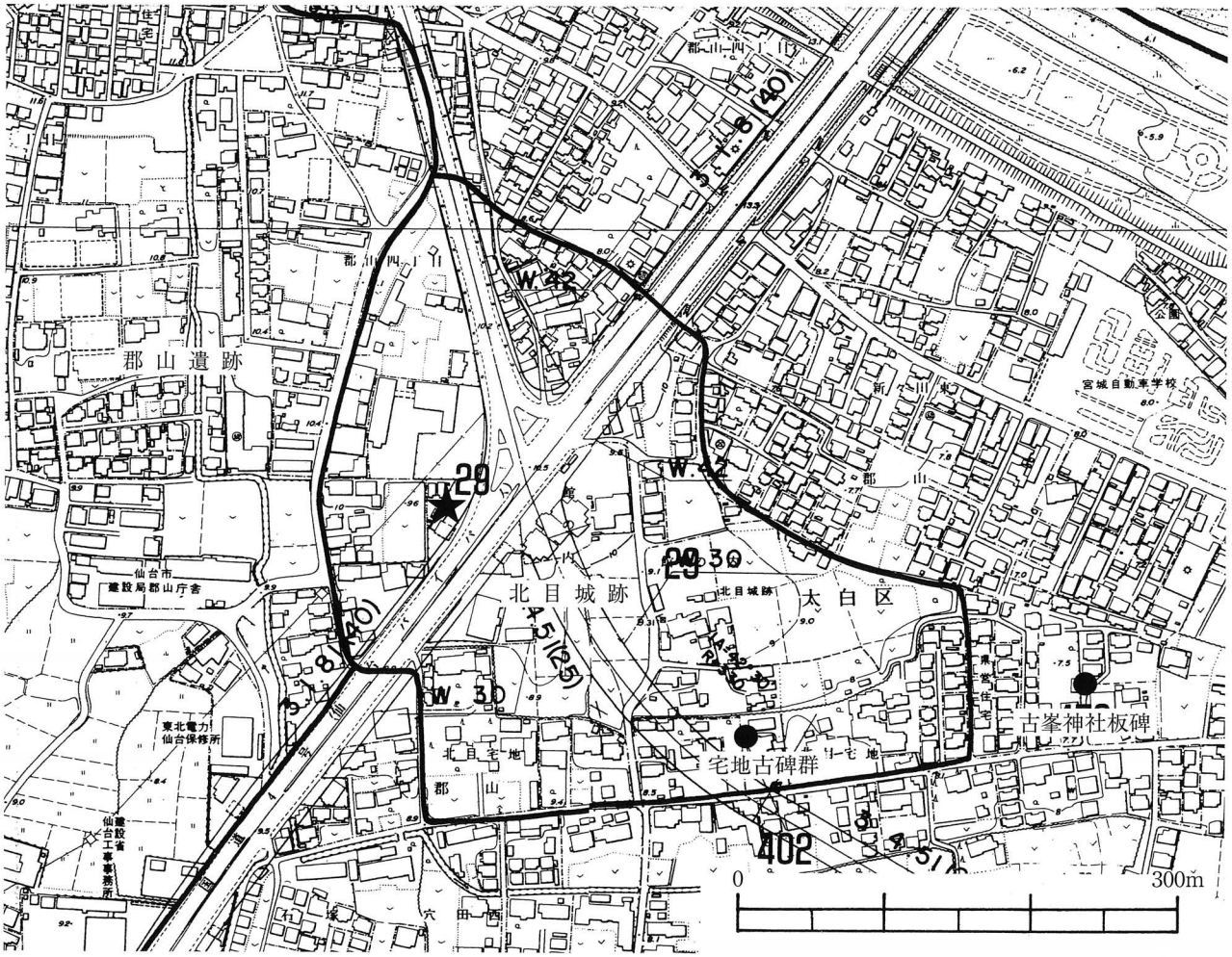
Ⅷ　北目城跡（第３次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	北目城跡（宮城県遺跡番号01029）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山四丁目15－1
調 査 期 間	平成15年７月18日
調査対象面積	130㎡
調 査 面 積	55.5㎡
調 査 原 因	店舗付事務所、地上貯槽、地下水槽、ディスペンサー建設
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　教諭　豊村幸宏　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

北目城跡は、JR長町駅の南東約1.5km付近の仙台市太白区郡山四丁目、郡山字館ノ内、北目宅地に所在する平城跡である。名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部に位置し、標高９～11mの自然堤防上に立地している。周辺には西側に隣接して古代の官衙、寺院跡である郡山遺跡が広がっておりその西方には郡山遺跡に関連する集落跡で

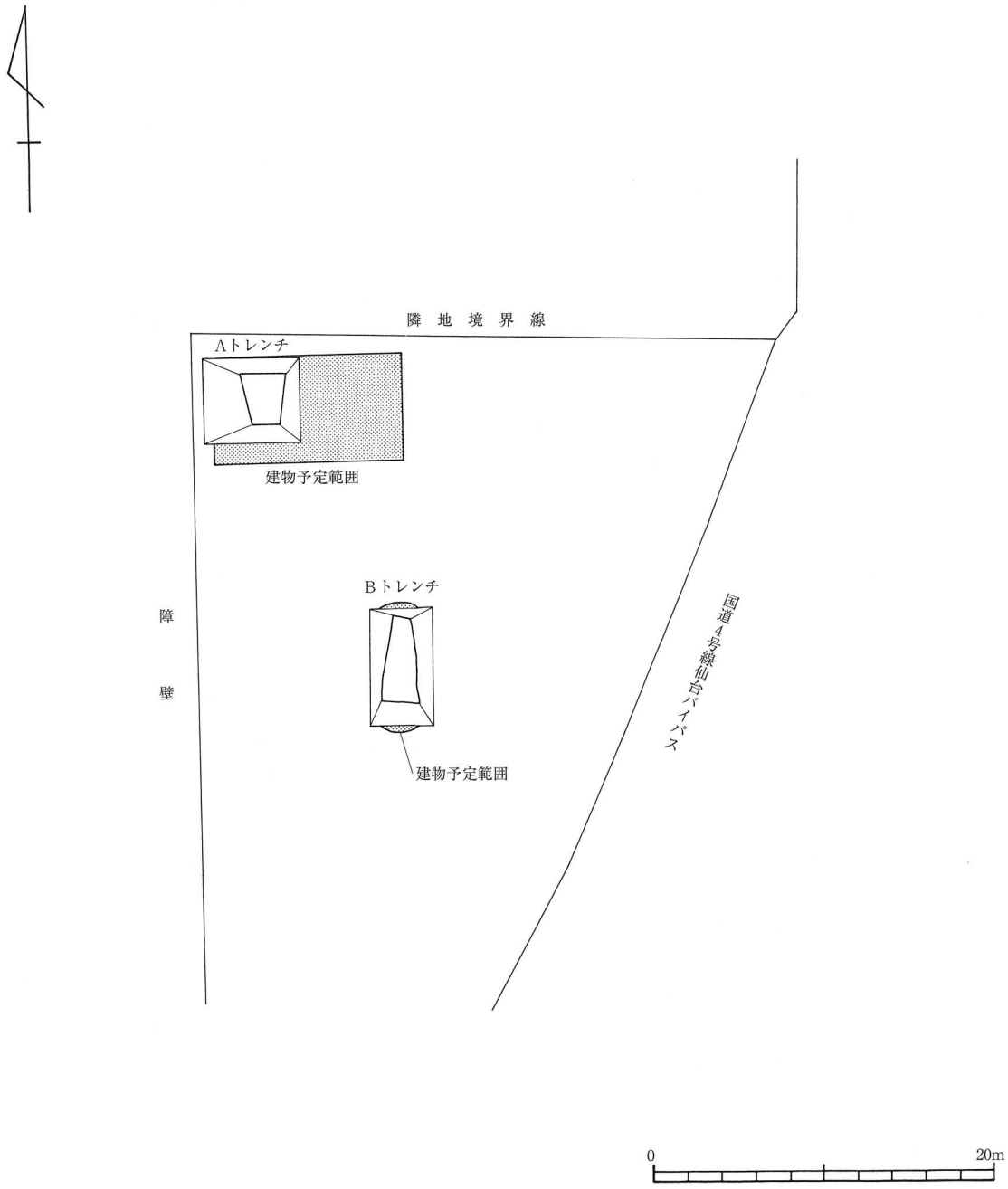


第49図　調査地点と周辺の地形

ある西台畑遺跡、長町駅東遺跡が所在する。遺跡内には、宅地古碑群が点在している。北目城は、伊達政宗が関ヶ原の戦い（1600）の際に入城し、仙台城に移るまでの間居住したことで知られている。「仙台領古城書上」（延宝年間：1673～1681）によれば、政宗入城以前の北目城は、粟野大膳が茂ヶ崎城より移り天正年間（16世紀後葉）まで居城し、その後屋代勘解由兵衛が指置かれたという。今回の調査地点は、遺跡中央部の西側に当たり標高は約10mである。本遺跡ではこれまでに都市計画道路建設や地中送電線設置工事に伴い２回の調査が行われており、平成４～５年度に実施した第1次調査では、陶磁器類や三引両紋が描かれた漆器椀、脇差、虹梁など豊富な遺物を伴う近世初頭の「障子堀」を検出している。

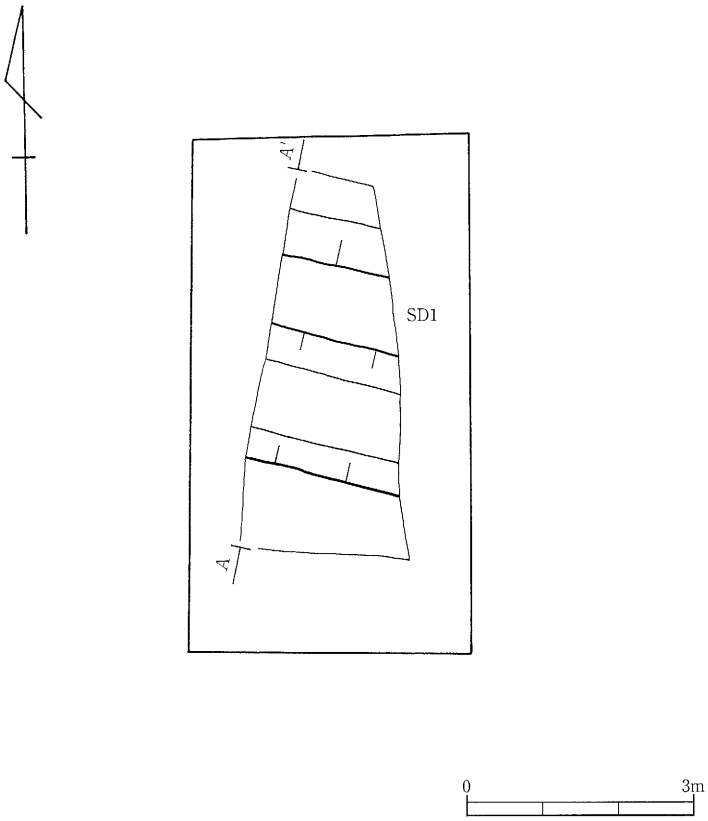
3　調査に至る経過と調査方法

平成15年７月15日付で畑文雄氏より店舗付事務所、地上貯槽、地下水槽、ディスペンサー建築工事に係わる協議書が提出された（教生文第３－16号で回答）。これを受けて平成15年７月18日に、基礎工事によって遺構の損なわ



第50図　調査区配置図

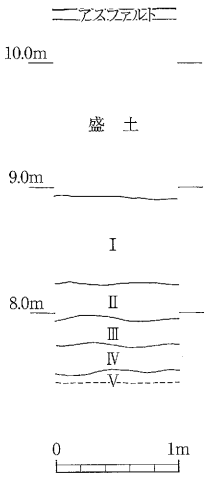
れる惧れのある箇所に東西5.5m、南北５mのＡトレンチ、東西４m、南北７mのＢトレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、Ａトレンチでは自然堆積層を検出したのみで遺構・遺物は発見されなかったが、Ｂトレンチでは溝跡１条が検出されたため引き続き遺構の精査を行ったものである。調査は、重機により盛土とⅠ～Ⅴ層を排除し、Ⅵ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第51図　Ｂトレンチ遺構配置図

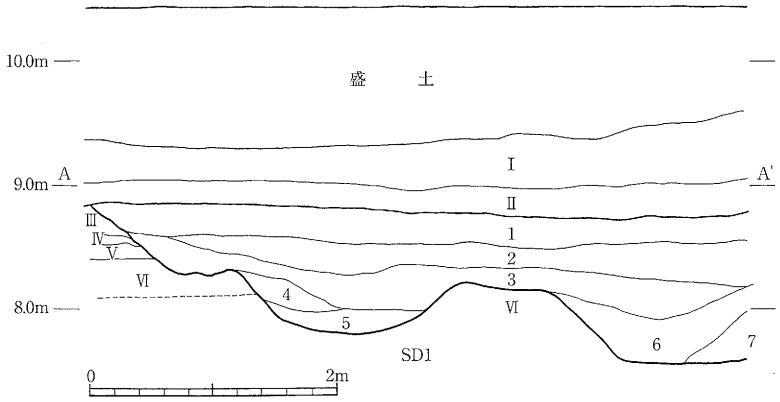
4　基本層位

調査区内は、全体に厚さ80～100cmの盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅥ層まで大別6層である。Ⅰ層は木炭粒、砂粒を含むオリーブ黒色シルト質粘土層である。Ⅱ層は木炭粒、酸化鉄斑を含む灰色シルト質粘土層である。Ⅲ層は暗オリーブ灰色砂質粘土層で灰色粘土ブロック、木炭粒、酸化鉄斑を少量含む。溝跡はこの層の上面から掘り込まれている。Ⅳ層は暗緑灰色粘土層である。酸化鉄斑、木炭粒を含む。Ⅴ層はオリーブ黒色粘土層で、酸化鉄斑、木炭粒を含む。Ⅵ層は暗オリーブ灰色粘土層で、酸化鉄斑、マンガン斑を含む。Ⅰ、Ⅱ層は旧耕作土層、Ⅲ層以下は自然堆積層と考えられる。



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	Ⅰ	10Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	木炭粒を含む。
	Ⅱ	5GY4/1 暗オリーブ灰色	粘　土	植物遺体、マンガン斑、木炭粒を含む。
	Ⅲ	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	シルト質粘土	植物遺体、マンガン斑を含む。
	Ⅳ	10Y3/1 オリーブ黒色	粘　土	マンガン斑を含む。
	Ⅴ	2.5Y4/1 黄灰色	粘　土	酸化鉄斑を多量に含む。マンガン粒を含む。

第52図　Ａトレンチ東壁断面図



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	Ⅰ	10Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	木炭粒、砂粒を含む。
	Ⅱ	10Y4/1 灰色	シルト質粘土	木炭粒、酸化鉄斑を含む。
	Ⅲ	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂質粘土	7.5Y4/1灰色粘土ブロック、木炭粒、酸化鉄斑を少量含む。
	Ⅳ	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘　土	酸化鉄斑を多量に含む。木炭粒を少量含む。
	Ⅴ	5Y3/1 オリーブ黒色	粘　土	酸化鉄斑、木炭粒を含む。
	Ⅵ	5GY4/1 暗オリーブ灰色	粘　土	酸化鉄斑、マンガン斑を含む。
SD1	1	10Y4/1 灰色	シルト質粘土	10Y5/1灰色粘土ブロックを含む。木炭粒を少量含む。
	2	7.5GY4/1 暗緑灰色	シルト質粘土	7.5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック、木炭粒を含む。
	3	7.5GY5/1 緑灰色	粘　土	酸化鉄斑、木炭粒を含む。
	4	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	砂質粘土	木炭粒、マンガン粒を含む。
	5	5GY4/1 暗オリーブ灰色	粘　土	5Y2/1黒色粘土ブロックを斑状に含む。酸化鉄斑を含む。
	6	7.5GY3/1 暗緑灰色	粘　土	7.5GY4/1暗緑灰砂と互層。木炭粒、酸化鉄斑を含む。
	7	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘　土	5Y2/1黒色粘土ブロックを斑状に含む。酸化鉄斑、マンガン粒を含む。木炭粒を少量含む。

第53図　Ｂトレンチ西壁断面図

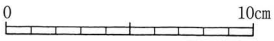
5　発見遺構と出土遺物

溝跡

ＳＤ１　溝跡

調査区内を東西からやや北よりの方向に延びる溝跡の南岸部を検出した。上幅４ｍ以上で、掘り込み面からの深さは1.2mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、南壁部に幅0.5m、高さ0.4mの犬走り状の段差が認められる。底面には下幅1.8m、上幅0.8m、高さ0.5mに地山を掘り残した畝状の高まりが見られる。堆積土は７層に分かれ、１～３層は人為堆積で４～７層は止水による自然堆積である。出土遺物は、３層中から凸面に縄叩きの後スリケシを施し凹面に糸切痕を持つ古代の丸瓦（Ｆ－1）が１点出土した。

1



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	F-1	丸瓦			SD1	(22.5)	(11.0)		凸面:縦位縄叩き スリケシ　凹面:布目 糸切り痕 側面ヘラケズリ	22-1

第54図　SD1溝跡出土遺物

6　まとめ

①　北目城跡は、仙台市太白区郡山四丁目、郡山字館ノ内、字北目宅地に所在する縄文時代から江戸時代の複合遺跡である。

②　今回の調査によって検出された遺構は、溝跡１条である。出土遺物には、古代の丸瓦がある。

③　溝跡については、防御性を高めるため底面に畝状の障壁を備えている点や規模の点などから近世初頭頃に位置付けられる可能性が高い。

④　溝跡の性格については、周辺の調査成果から、北目城の堀跡と考えられる。

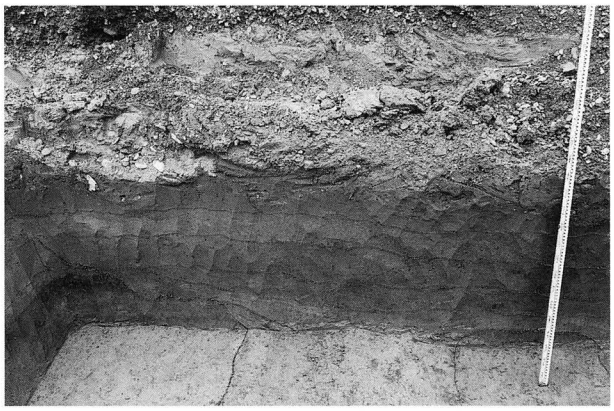
引用・参考文献

紫桃正隆（1974）：「史料仙台領内古城・館」4　宝文堂

竹田幸司（1999）：「北目城跡－第2次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第238集

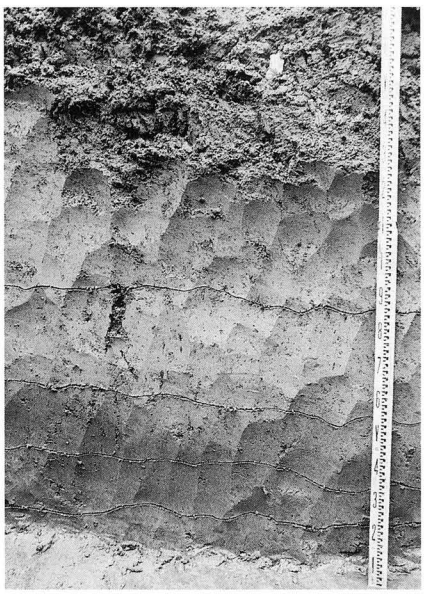
1　Bトレンチ調査前状況（南より）

2　Bトレンチ遺構検出状況（北より）

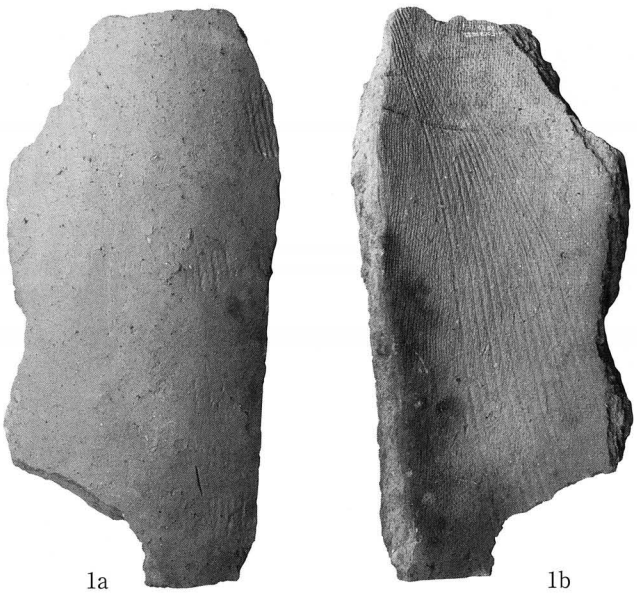


3　Bトレンチ西壁土層断面（東より）

4　Bトレンチ溝跡掘り込み状況・西壁土層断面（東より）



5　Aトレンチ東壁土層断面（西より）



※縮尺は任意とする

1　丸瓦　F－1（SD1 第54図1）

図版22　調査状況・出土遺物

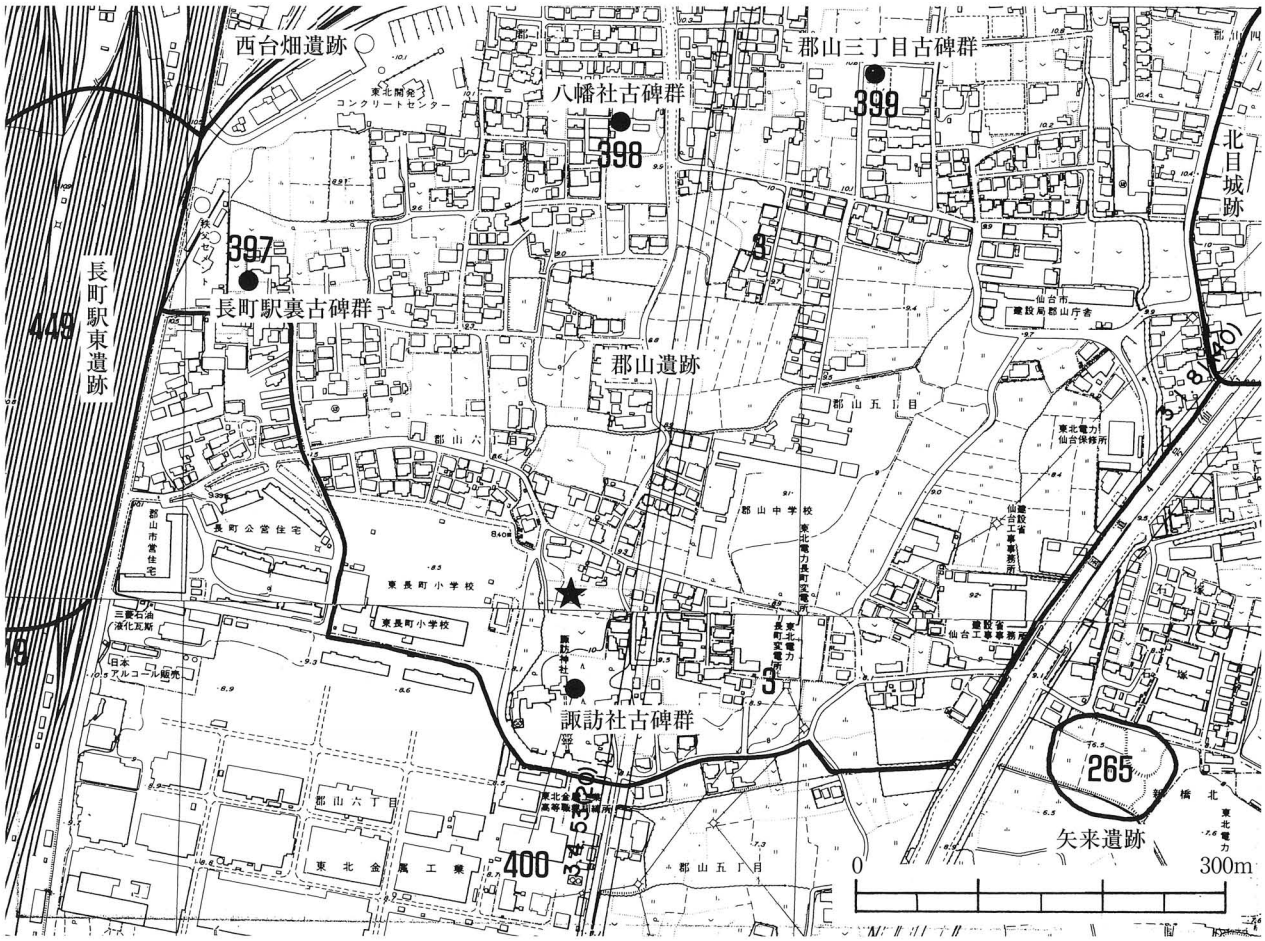
Ⅸ　郡山遺跡（第154次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	郡山遺跡（宮城県遺跡番号01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山五丁目144番１、144番８、144番９、144番10及び法定外公共物
調 査 期 間	平成15年９月８日～９月10日
調査対象面積	2,591.52㎡
調 査 面 積	66㎡（Ａ区34㎡、Ｂ区32㎡）
調 査 原 因	宅地造成工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　主任　長島榮一　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市の南東部、太白区郡山２～６丁目に位置する遺跡で、遺跡の範囲は東西約800m、南北約900mに及ぶ。仙台市街地南部の地形は大きく二つに分けられ、名取川とその支流広瀬川が形成した西側の段丘地形とその東に広がる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられる。名取川と広瀬川は郡山遺跡の南東側で合流しており、両河川に挟まれた一帯は「郡山低地」と呼ばれ、自然堤防と後背湿地が入り組んでいる。遺跡内の標高は８

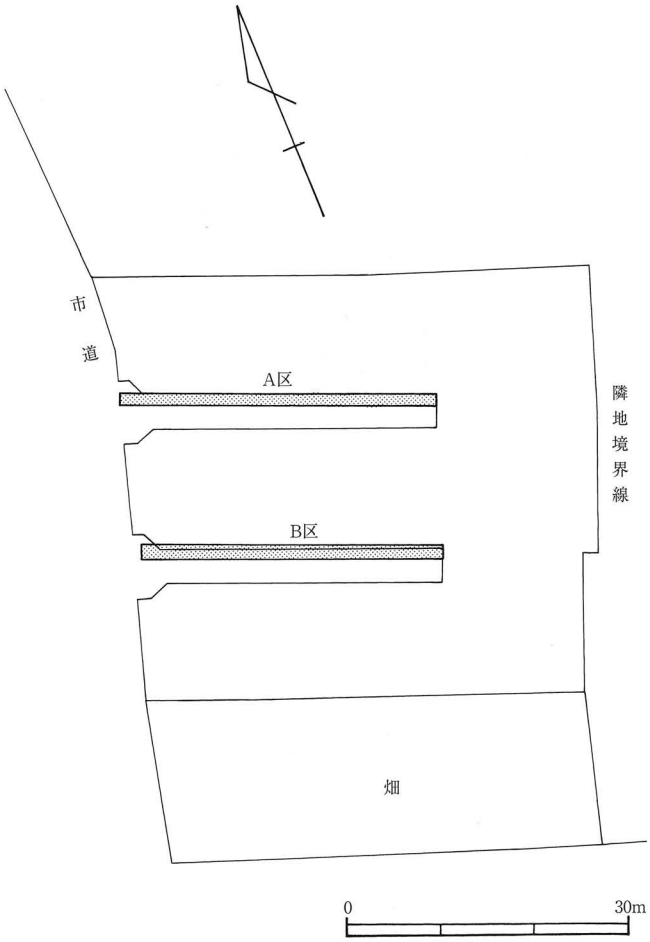


第55図　調査地点と周辺の地形

m～12mである。なお、遺跡の位置と環境についての詳細な記述については、既刊の郡山遺跡の調査報告書を参照されたい。

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年８月12日付で庄子義範氏・庄子はるの氏より宅地造成工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－114号で回答）。今回の調査地点は、昭和55年度より始められた「郡山遺跡範囲確認調査」の昭和62年度の第70次調査として調査が行われた地点である。第70次調査区は推定方二町寺域内の南西地区にあたり、推定講堂跡の南西に位置している。第70次調査は寺院中枢を区画する施設の確認と寺域内における遺構の確認を目的として行われ、天地返し深耕のため遺存状況は極めて悪かったものの寺院中枢区画の材木塀や寺院と同時期と考えられる竪穴住居跡の他に寺院の造営より先行するⅠ期官衙段階の建物跡・溝跡を発見している。



第56図　調査区配置図

今回の調査は申請地の宅地造成工事にあたり、道路新設部分に深く入る下水道の掘削部分（第70次調査時の未調査部分）に調査区を設定した。北側道路部分をＡ区、南側道路部分をＢ区として調査を行った。Ａ区については東西34m、南北１m、Ｂ区については東西32m、南北１mの調査区を設定して調査を実施した。Ａ区・Ｂ区とも重機により盛土、耕作土の排土を行った。排土は黄褐色粘土質シルト・砂質シルト層の上面までとし、天地返しによる撹乱土の排除及び遺構検出作業を人力で行った。

4　基本層位

昭和62年度第70次調査の土層断面図を参照されたい。

5　発見遺構と出土遺物

Ａ区の調査

天地返し深耕による撹乱が深く及んでおり遺構は発見されなかった。遺物も出土しなかった。

Ｂ区の調査

ピット２基を検出した。また、第70次調査で検出されたSI1036の端部の検出が想定されたが、検出されなかった。

ピット

調査区東半部に１基（Pit１）、中央部に1基（Pit２）の計２基のピットを検出した。ピット１は径40cm、深さ18cmで平面形は円形を呈する。ピット２は天地返しの撹乱下面で検出され、径40cm、深さ14cmで平面形は円形を呈す

る。堆積土はいずれも、にぶい黄褐色シルト土である。柱痕跡はみられず、性格については不明である。出土遺物はなかった。

6　まとめ

① 今回の調査区はＡ区が第70次調査のＢ区・Ｅ区の南側、Ｂ区が第70次調査のＣ区・Ｆ区の南側で第70次調査においてベルト部とした未調査の部分である。

② 今回の調査区はＡ区・Ｂ区とも深くまで撹乱が及び、上層の遺構は消失したことも考えられ、また、第70次調査の結果からも遺構の密度が本来希薄であったものとみられる。

③ 今回の調査によって検出された遺構はＢ区のピット２基のみであった。出土遺物はなかった。

④ Ｂ区においては、第70次調査Ｃ区で検出されたSI1036の端部の検出が想定されたが、検出されなかった。

引用・参考文献

木村浩二（1988）：「第70次発掘調査」『郡山遺跡Ⅷ－昭和62年度発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第110集

1　A区全景（西より）

2　B区全景（東より）

3　A区・B区全景（東より）

図版23　調査状況

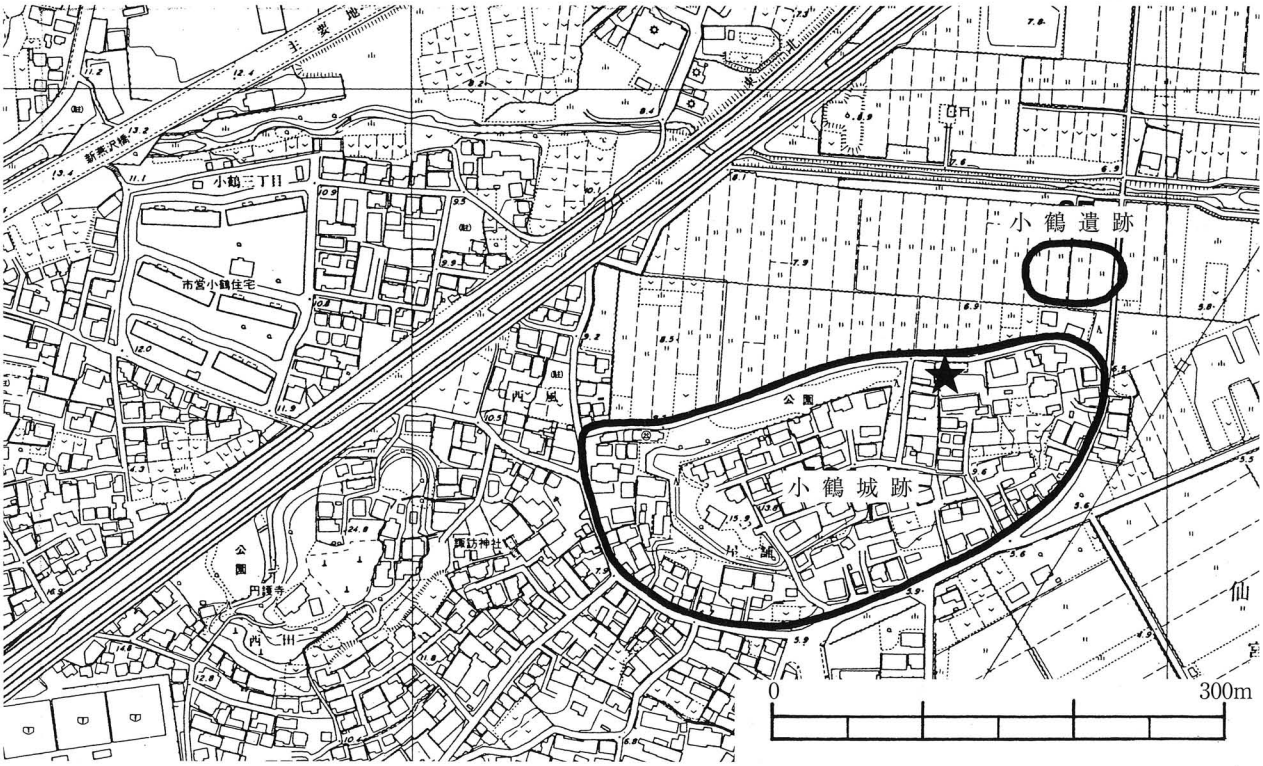
Ⅹ　小鶴城跡（第２次）発掘調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名	小鶴城跡（宮城県遺跡番号01194）
調 査 地 点	仙台市宮城野区新田3丁目239－14
調 査 期 間	平成15年10月14日
調査対象面積	60.21㎡
調 査 面 積	21㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之

２　遺跡の位置と環境

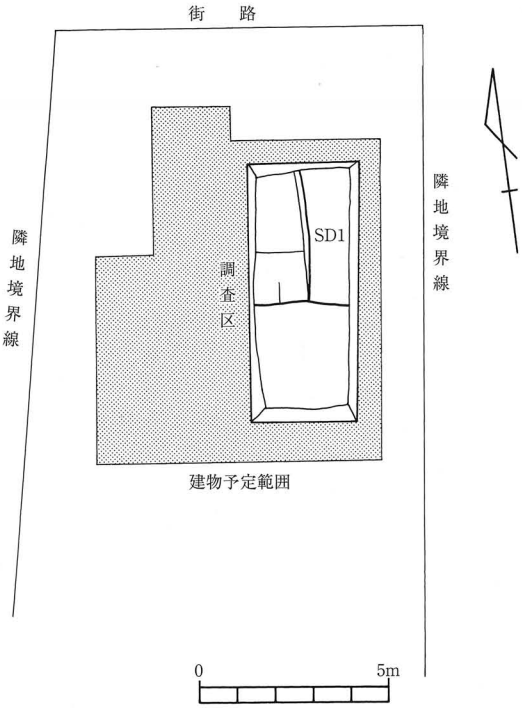
小鶴城跡は、JR東仙台駅の北東約0.9km付近、仙台市宮城野区新田三丁目、小鶴字屋舗に所在する。遺跡は、台原・小田原丘陵から南東に分岐して舌状に延びる標高15m～20mの丘陵地に立地している。「仙台領古城書上」には、小鶴村の「平小鶴城」として東西60間、南北36間とされており、小鶴村「風土記」には「古館」として竪38間、横27間と記録されている。また「風土記」には城主、逸見丹波とある。小鶴城の本丸は、屋舗とよばれる丘陵地の西寄りに当たる「殿上山」と呼ばれているところにあったと言われ、規模は東西40m、南北80mである。また、丘陵裾部には幅5mに達する水濠が廻っていたとされる。遺跡内には、今も小鶴城跡板碑群が残り、遺跡の北側には羽山神社板碑群がある。今回の調査地点は、遺跡北東部の住宅地に当たり標高は約７mである。



第57図　調査地点と周辺の地形

3　調査に至る経過と調査方法

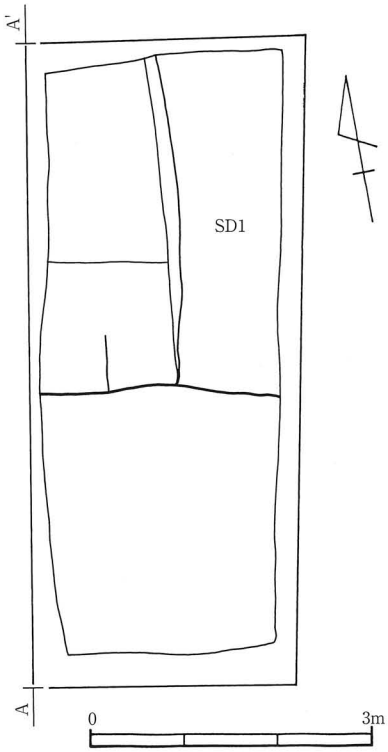
平成15年10月６日付で平山浩文氏より個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－152号で回答）。届出の内容を検討した結果、住宅の基礎工事によって遺構を損なう可能性の高いことが分かった。これを受けて平成15年10月14日に、建物予定地内に東西３ｍ、南北７ｍの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、調査区北半部で溝跡1条が検出されたため引き続き本調査へと移行し、遺構の精査を行ったものである。調査は、重機により盛土とⅠ～Ⅳ層を排除し、Ⅴ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第58図　調査区配置図

4　基本層位

調査区内は、全体に厚さ10～20cmの盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅤ層まで大別５層である。Ⅰ層は黒色シルト質粘土層で、層厚は15～25cmである。調査区の北半部のみに見られる。Ⅱ層は木炭粒、焼土粒、黒色土ブロックを含む黒褐色粘土層である。層厚は18～23cmである。層中に土師器片を含む。Ⅲ層は褐灰色粘土層で酸化鉄斑を全体に含む。層厚は３～９cmである。Ⅳ層は黒色粘土層で径1cm程度の礫を全体に含む。層厚は10～25cmである。Ⅴ層は褐色シルト質粘土層である。この層の上面で遺構検出作業を行った。



第59図　遺構配置図

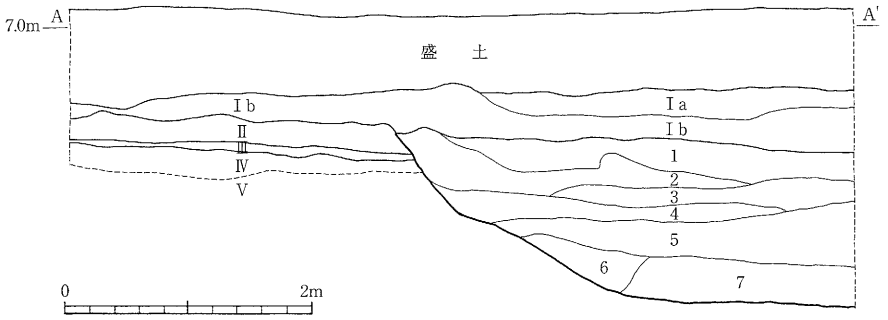
5　発見遺構と出土遺物

調査区北半部で溝跡1条が検出された。

溝跡

ＳＤ１　溝跡

Ⅴ層上面で検出した。調査区壁面の観察から実際の掘り込み面はⅡ層上面である。規模は、検出長2.5ｍ、上幅3.5ｍ以上、下幅2.1ｍ以上、深さ1.3ｍである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。調査区外に東西方向に延びているものと思われる。堆積土は7層に分けられる。断面の形状は逆台形を呈し、底面は平坦である。底面には杭列や畝状の高まりなどの施設は認められず、遺物も出土しなかった。なお、平成15年２月17日に実施した個人住宅建築に伴う確認調査でも東側隣接地においてこの溝跡の延長部分を検出している。



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	Ⅰa	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	調査区北半に分布。
	Ⅰb	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	
	Ⅱ	10YR2/3 黒褐色	粘　土	炭化物粒、焼土粒、黒色土ブロックを含む。
	Ⅲ	10YR4/1 褐灰色	粘　土	酸化鉄斑を全体に含む。
	Ⅳ	10YR2/1 黒色	粘　土	径1cm程の礫を全体に含む。
	Ⅴ	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	
SD1	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	黒色土、明黄褐色土のブロックを全体に含む。

遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SD1	2	5Y3/1 オリーブ黒色	砂	炭化物を僅かに含む。
	3	2.5Y3/2 黒褐色	シルト質粘土	植物遺体を全体に含む。
	4	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘　土	
	5	2.5Y4/1 黄灰色	粘　土	明黄褐色土の小ブロックを全体に含む。
	6	10YR2/3 黒褐色	粘　土	黒色土、暗褐色土のブロックが混在する。
	7	10YR2/3 黒褐色	粘　土	灰オリーブ砂、黒色土の互層。植物遺体を含む。

第60図　調査区西壁断面図

6　まとめ

①　小鶴城跡は、仙台市宮城野区新田三丁目、小鶴字屋舗に所在する中・近世の城館跡である。

②　今回の調査によって検出された遺構は、溝跡１条である。

③　溝跡については、出土遺物を伴っていないため詳細な年代は不明であるが、規模や形態から小鶴城跡の外堀の可能性が考えられる。具体的な性格については今後とも周辺の調査を待って検討していきたい。

引用・参考文献

紫桃正隆（1974）：「史料仙台領内古城・館」4　宝文堂

渡部紀（2002）：「小鶴城跡」仙台市文化財調査報告書第261集

1　遺構検出状況（南西より）

2　SD1溝跡土層断面（東より）

3　SD1溝跡全景（北より）

図版24　調査状況

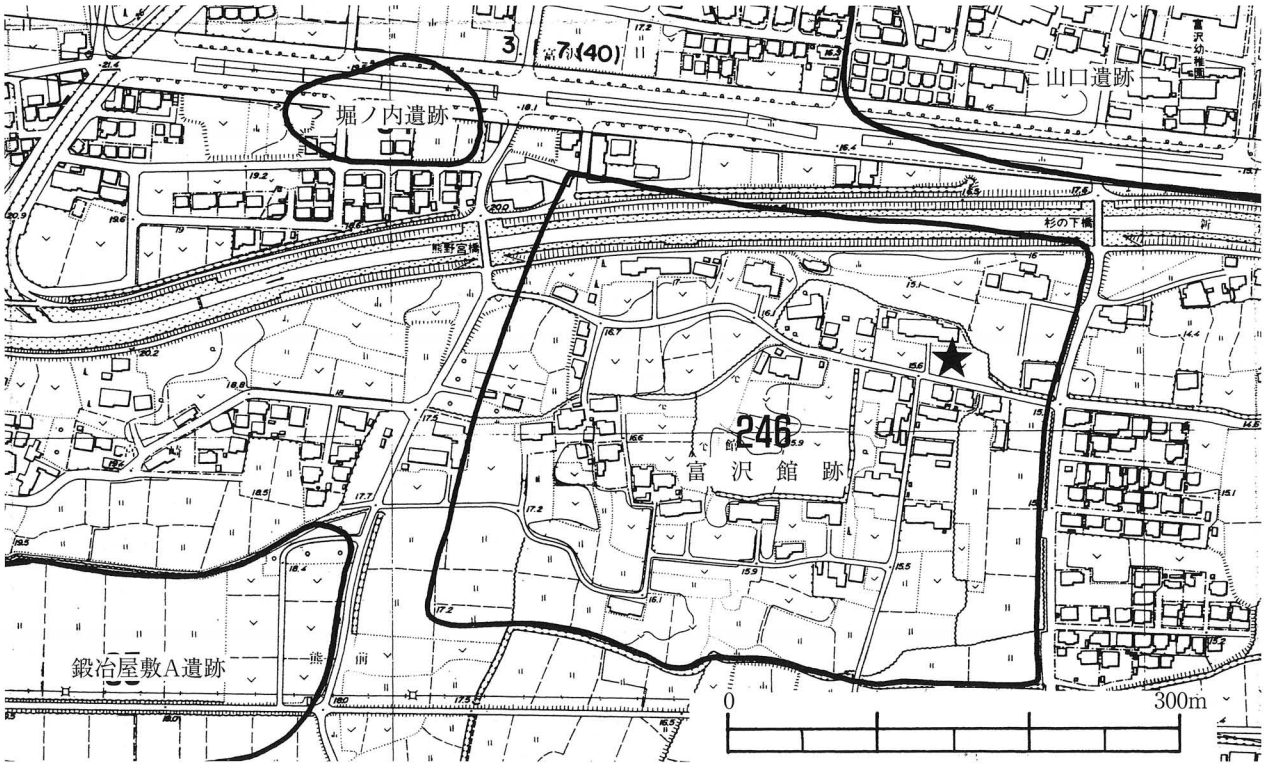
Ⅺ　富沢館跡（第２次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	富沢館跡（宮城県遺跡番号01246）
調 査 地 点	仙台市太白区富沢字舘81－1
調 査 期 間	平成15年10月27日～10月28日
調査対象面積	228.97㎡
調 査 面 積	38㎡
調 査 原 因	共同住宅建築、浄化槽設置
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	主査　渡部弘美　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

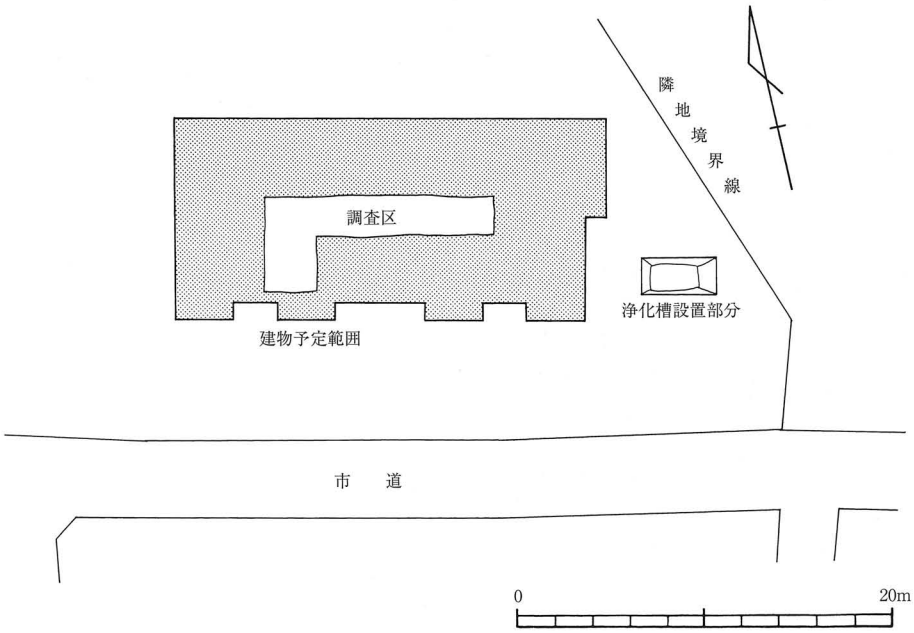
富沢館跡は、仙台市営地下鉄富沢駅の西方0.8km付近の仙台市太白区富沢字舘に所在する面積約17haの遺跡である。名取川の北側、笊川の南岸に位置し、郡山低地と呼ばれる沖積地の西端部、標高15～17mの自然堤防上に立地している。周辺には南側に隣接して鍛冶屋敷前遺跡が広がっている他、鍛冶屋敷Ａ遺跡、鍛冶屋敷Ｂ遺跡、六本松遺跡がある。また遺跡の東方には富沢遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、六反田遺跡等があり、市内でも有数の遺跡の密集地帯となっている。本遺跡一帯は古くから「入生田屋敷」と呼ばれ、水濠、土塁に囲まれた城館跡とされている。平成13年に個人住宅建築の際に実施した調査では、城館に伴うと思われる溝跡の北東コーナー部分が確認され、堆積土中から13世紀後半の古瀬戸の水注が出土している。今回の調査地点は、遺跡北東部の畑地に当たり標高は15.6mである。



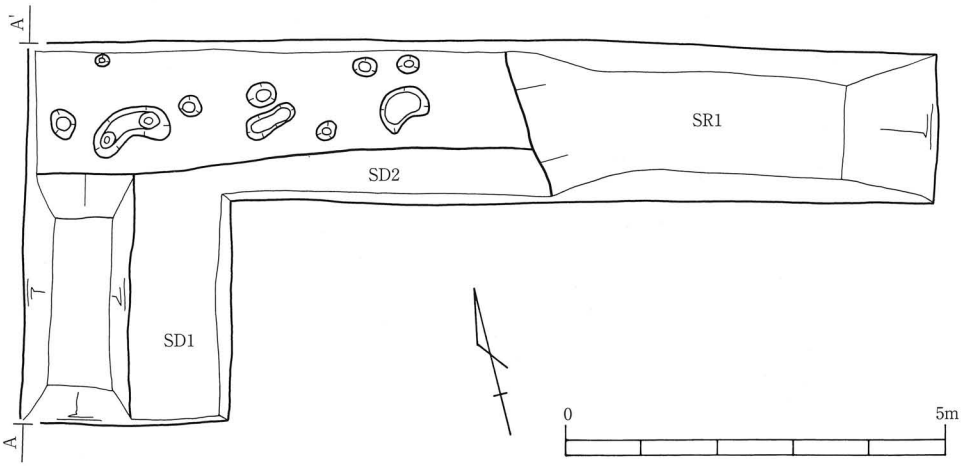
第61図　調査地点と周辺の地形

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年10月10日付で本多竹実氏より共同住宅建築工事及び浄化槽設置工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－157号で回答）。届の内容を検討したところ、建物の基礎掘削並びに浄化槽の埋設によって遺構を損なう可能性の高いことが分かった。その為平成15年10月27日に、建物建築予定地内に東西12m、南北2.5mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、調査区全域にわたって溝跡、河川跡、ピットが検出されたため引き続き遺構の精査を行うこととした。調査は、重機によりⅠ～Ⅱ層を排除し、Ⅲ～Ⅵ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。なお浄化槽設置部分についても東西４m、南北２mの調査区を設定して調査を行い、河川跡に伴うと考えられる砂質土壌を検出している。



第62図　調査区配置図



第63図　遺構配置図

4　基本層位

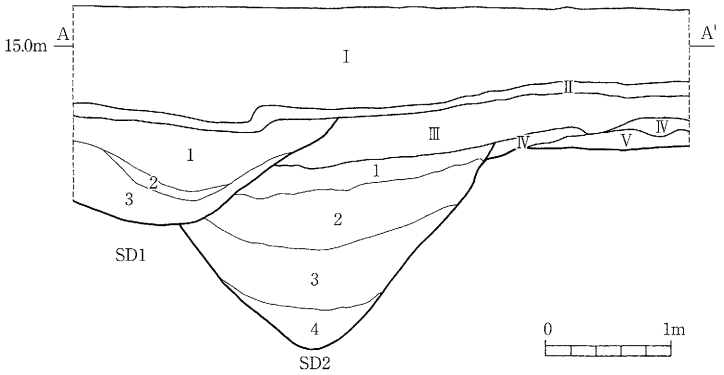
調査区内で大別６層の基本層を確認した。Ⅰ層は木炭粒、焼土粒を含む暗褐色シルト層で、客土された旧耕作土と考えられる。Ⅱ層は木炭粒、焼土粒を含む暗褐色シルト層である。客土以前の旧表土ないしは耕作土と思われる。Ⅲ層は暗褐色粘土質シルト層で層厚は20～40cmである。この層の上面がＳＤ１溝跡の掘り込み面である。Ⅳ層は黒褐色粘土質シルト層で層厚は10cm程である。ＳＤ２溝跡の掘り込み面と考えられる。Ⅴ層は暗褐色粘土質シルト層で、層厚は15cm程である。Ⅵ層は黄褐色砂質土で、周辺一帯の基盤となる自然堆積層である。

5　発見遺構と出土遺物

調査区全域にわたって溝跡2条、河川跡1条、ピット10基が検出された。

１）溝跡

ＳＤ１　溝跡



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	Ⅰ	10YR3/4 暗褐色	シ ル ト	客土された耕作土。
	Ⅱ	10YR3/3 暗褐色	シ ル ト	旧表土ないし旧耕作土。
	Ⅲ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	Ⅳ	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	Ⅴ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	Ⅵ	10YR5/6 黄褐色	砂	
SD1	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質粘土	

遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SD1	2	10YR2/1 黒色	砂質粘土	炭化物を多量に含む。
	3	10YR2/2 黒褐色	砂質粘土	
SD2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土ブロックを含む。
	3	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	砂層を縞状に含む。
	4	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	グライ化。自然堆積層。

第64図　調査区西壁断面図

調査区西壁面で確認した。ＳＤ2溝跡と重複しこれよりも新しい。なおＳＲ1河川跡との新旧関係は不明である。上幅2.1m以上、下幅0.6m、深さ0.8mで、壁は底面から丸みを帯びて緩やかにに立ち上がる。東西方向に延びるものと思われる。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれる。3層は自然堆積層と考えられるが、1、2層は人為的に埋め戻されたものと思われる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ２　溝跡

東西方向に延びる溝跡と思われる。ＳＤ1溝跡、ＳＲ１河川跡と重複しこれらより古い。検出長6.6m、上幅は推定で2.6m、深さ1.7mである。断面形はＶ字形で、壁は底面から下半部では外傾しながら立ち上がり、上半部では直立気味に立ち上がる。堆積土は4層に分かれ、このうち３、４層は止水による自然堆積層、１、２層は人為堆積層と考えられる。遺物は出土しなかった。

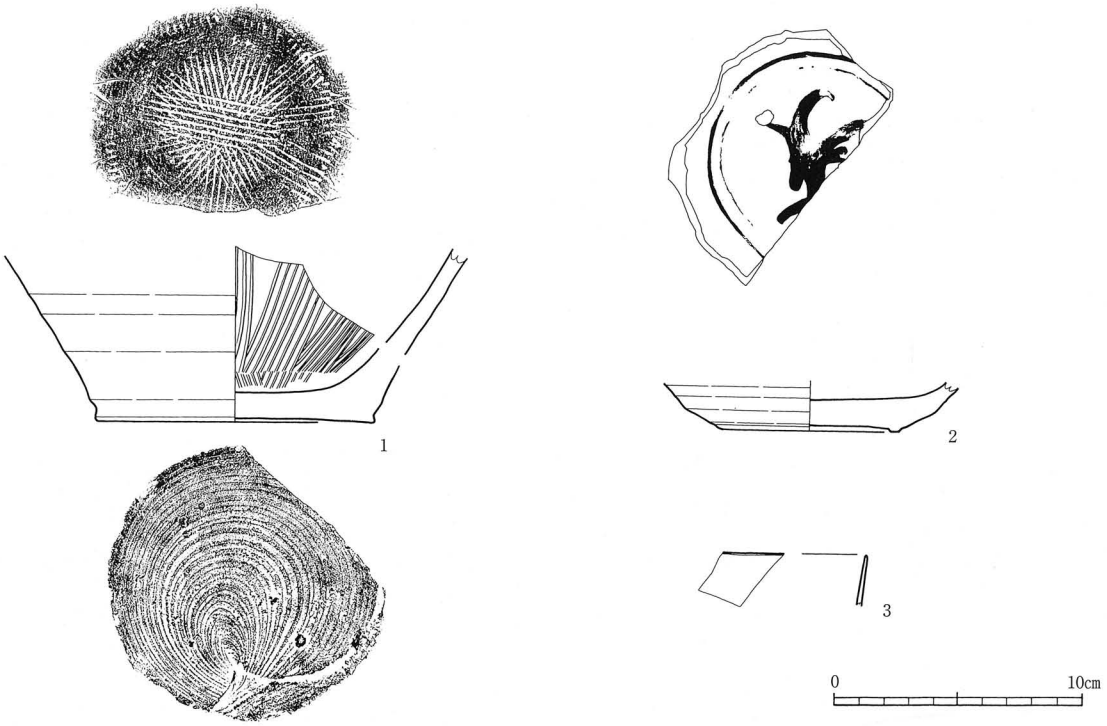
２）河川跡

ＳＲ１　河川跡

北から南に流れる河川跡の西肩部を検出した。東側調査区でも河川跡と考えられる堆積土を確認しており、規模は上幅18m以上に及ぶものと思われる。ＳＤ２溝跡と重複しこれよりも新しい。ＳＤ１溝跡との新旧関係は不明である。出土遺物は、堆積土上層より陶器擂鉢（Ｉ－１）、皿（Ｉ－２）、碗（Ｉ－３）、白磁碗（Ｊ－１）が出土した。このうちＩ－１は鉄釉陶器の擂鉢で胎土に粗い白色砂粒を含み内外面ロクロ調整されている。内面には８本単位の櫛歯状の工具を用いた筋目が放射状に直線的に施されており、内面は使用により滑らかになり底部は摩滅している。底部の切り離しは回転糸切りである。17世紀前半から中頃の岸窯系と考えられる。Ｉ－２は長石釉陶器で断面が三角形の低い高台を持ち、見込みには鉄絵で花文が描かれている。16世紀末から17世紀初めの志野と考えられる。Ｉ－３は灰釉陶器で18世紀後半から19世紀前半の大堀相馬、Ｊ－１は中世まで遡り、中国産と思われる。

３）ピット

計10基のピットを検出した。規模は径19～63cmで、平面形は円形、長円形、不整形を呈する。いずれのピットも柱痕跡を伴わず配置も不規則な為、建物を構成するような柱穴にはならないものと思われるが、性格については不明である。遺物は出土しなかった。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	I-1	陶器　擂鉢			SR1	(7.0)		11.2	岸窯系　17C前半代　鉄化粧　8条1組の筋目、回転糸切り	26-1
2	I-2	陶器　皿			SR1	(2.1)		7.3	志野　16C末～17C初　長石釉、鉄絵花文　内外面に目跡あり	26-2
3	J-1	白磁　碗			SR1				中国?　中世	26-3

第65図　SR1河川跡出土遺物

6　まとめ

①　富沢館跡は、仙台市太白区富沢字舘に所在する中近世の城館跡である。

②　今回の調査によって検出された遺構は、溝跡２条、河川跡１条、ピット10基である。出土遺物には、河川跡堆積土上層出土の施釉陶器擂鉢、皿、碗、白磁がある。

③　溝跡については、掘り込み面が異なる点や形態、規模に違いが見られる点から年代差があるものと考えられる。ＳＤ２溝跡は断面形がＶ字形であることから中世段階に遡る可能性がある。ＳＤ１溝跡は、ＳＤ２溝跡が埋没した後に開削されその後人為的に埋め戻されたものと捉えられるが、その下限年代については不明である。今後とも周辺の調査に留意して遺構の性格について検討していく必要がある。

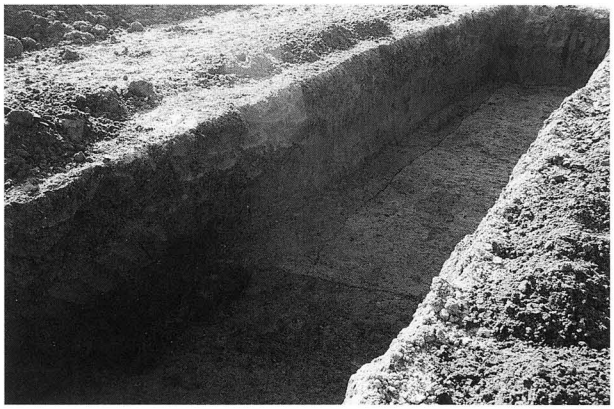
④　河川跡は近世の陶磁器を含むことから江戸時代以降に埋没したものと考えられる。

引用・参考文献

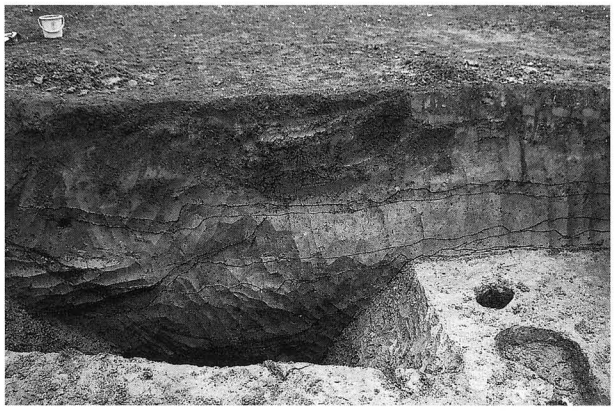
紫桃正隆（1974）：「史料仙台領内古城・館」4　宝文堂

村上秀樹（2002）：「富沢館跡－小鶴城跡ほか発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第261集

1　調査前状況（南東より）



2　遺構検出状況（東より）



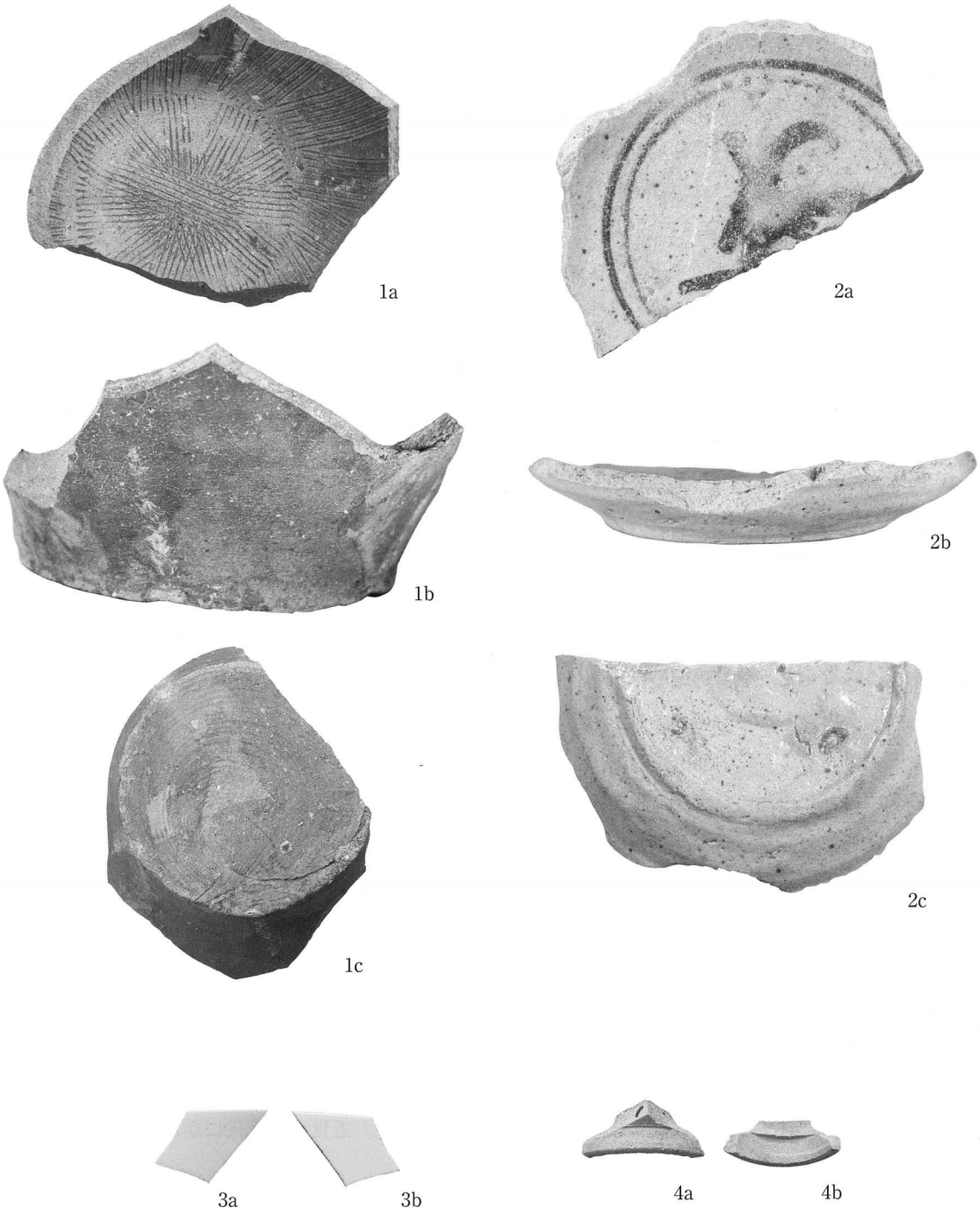
3　調査区西壁・SD1・SD2溝跡土層断面（東より）

4　SR1河川跡土層断面（北より）

5　ピット群全景（西より）

6　浄化槽設置部　南壁土層断面（北より）

図版25　調査状況



※縮尺は任意とする。

1　陶器　擂鉢　Ⅰ－１（SR1　第65図１）
2　陶器　皿　Ⅰ－２（SR1　第65図２）
3　白磁　碗　Ｊ－１（SR1　第65図３）
4　陶器　碗　Ⅰ－３（SR1）

図版26　出土遺物

XII　山田条里遺跡（第８次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　山田条里遺跡（宮城県遺跡番号01367）
調 査 地 点　　仙台市太白区鈎取本町1丁目209他
調 査 期 間　　平成15年11月17日～12月5日
調査対象面積　　21,751㎡
調 査 面 積　　290㎡（１区200㎡、２区90㎡）
調 査 原 因　　店舗・飲食店建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　大倉秀之

2　遺跡の位置と環境

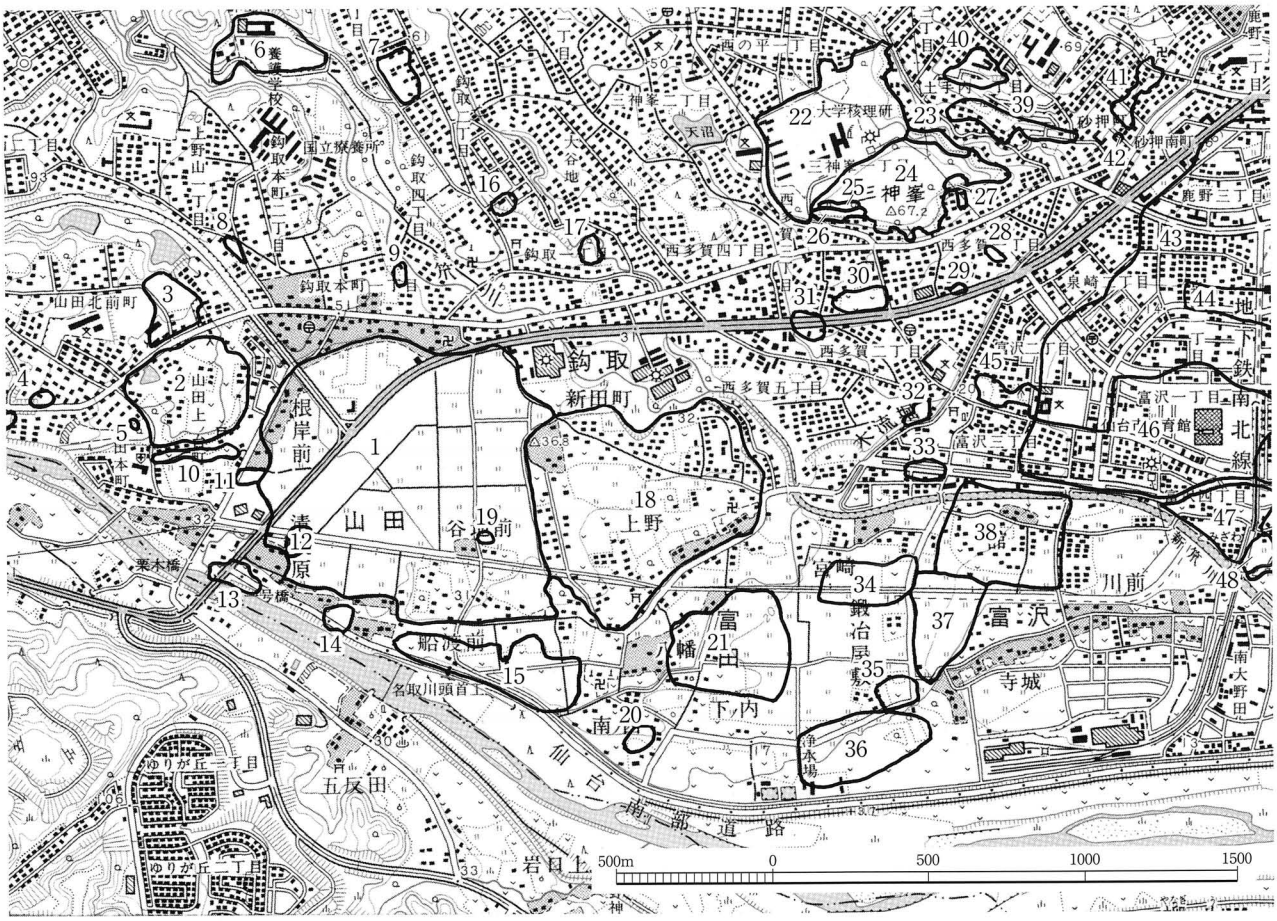
山田条里遺跡は、仙台市の南西部、JR長町駅の西方約４㎞の地点、太白区山田・鈎取地区に所在する。遺跡の北側には青葉山丘陵が東西に延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこれらの丘陵間を流れる名取川により形成された河岸段丘の東端部に位置し、青葉山丘陵より名取川に流入する小河川の影響を受けた扇状地形となっている。遺跡の範囲は東西・南北共に約900mにおよび、遺跡内の標高は24～40mである。現在、遺跡の現況は、そのほとんどが平成元年から行われた農業基盤総合整備事業により新しく区画された水田となっているが、今回の計画のように大型店舗の進出などに伴う商業用地となってきている。

遺跡の周辺には、北西側の丘陵上に縄文時代中期の大規模な集落跡である山田上ノ台遺跡や早期の竪穴住居跡が発見された北前遺跡がある。また、東側の小高い段丘上には縄文時代中期の土器が多量に出土した上野遺跡、南側には弥生時代中期の土器が出土し、近世の建物跡や水路跡なども発見されている船渡前遺跡がある。その他、古墳、奈良・平安の各時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、仙台市内でも遺跡の密度が高い地域である。

本遺跡の調査は平成元年より行われている。１次調査終了後の農業基盤総合整備事業により、「条里型」の土地割は失われ、景観的に見ることは出来なくなってしまったが、これまでの調査により近世～近代と平安時代の二時期の水田跡が数地点で検出されている。これらは、本遺跡の「条里型」の土地割がいつの時代まで遡るかといった点や形態などの点を検討する上で貴重な発見となっている。この他、近世から近代にかけての屋敷跡や縄文時代の落とし穴などが発見されている。

3　調査に至る経過と調査方法

平成15年6月11日付で福田道路株式会社東北支店　取締役支店長　宮崎一市氏より店舗及び飲食店建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第２－62号で回答）。仙台市教育委員会では、申請者との協議の上、店舗建築部分に調査区を設定し、北側の建築部分を1区、南側の建築部分を２区として調査を行った。１区については東西40m、南北5m、２区については東西20m、南北西辺５m、南北東辺４mの調査区を設定して調査を実施した。１区は現代水田層（１層）、２区は盛土を重機により除去し、その後は人力による遺構検出と掘り込みを行った。調査区の周囲に土層観察と排水を兼ねた側溝を設け、断面観察によって現代水田による撹乱の少ない部分を中心に精査



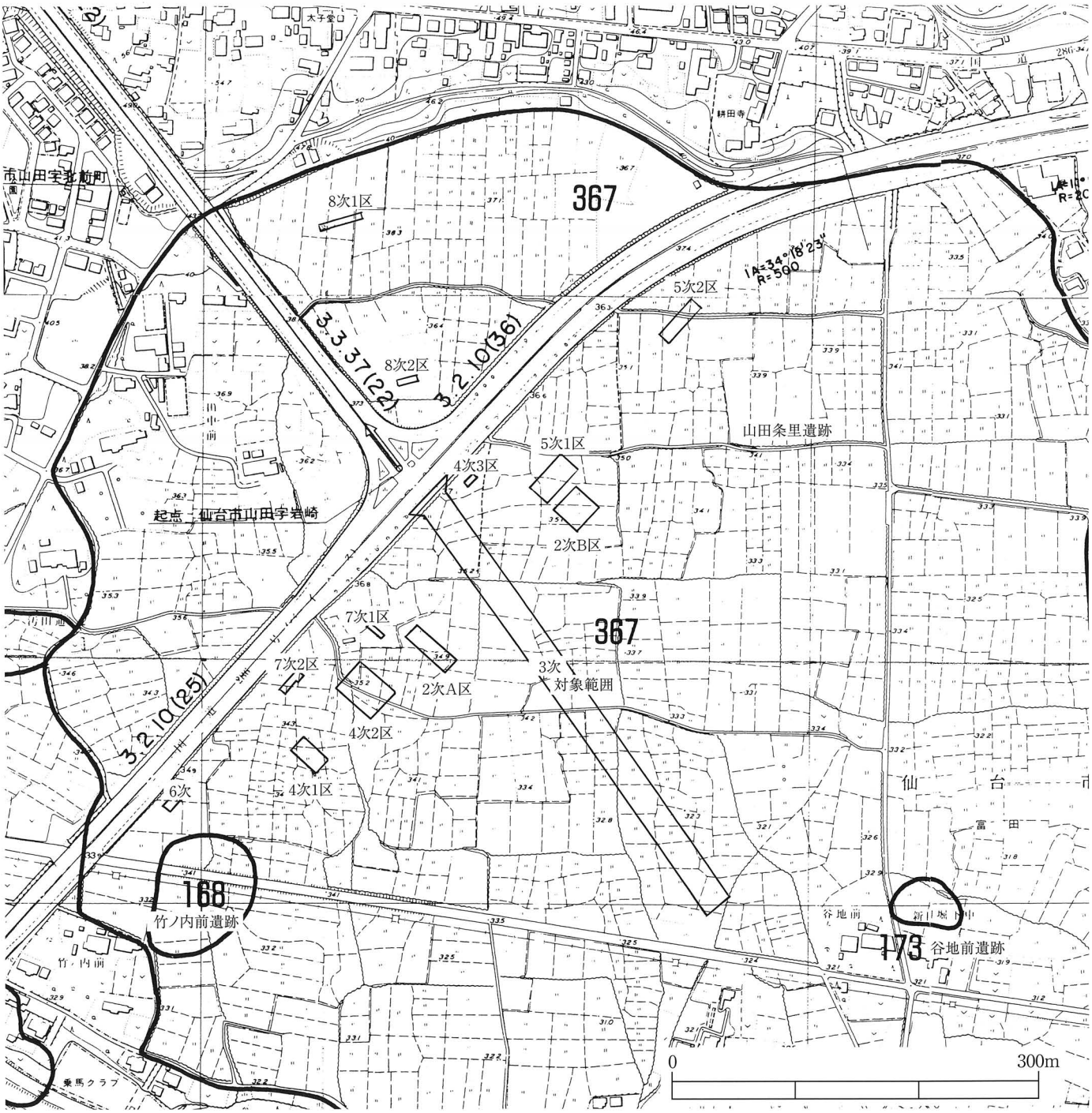
番号	遺跡名	種別	時代・時期	番号	遺跡名	種別	時代・時期
1	山田条里遺跡	散布地、水田跡 屋敷跡	縄文、古代、近世	25	三神峯古墳群	円墳	古墳
				26	富沢窯跡	窯跡	古墳、古代
2	山田上ノ台遺跡	包含地、集落跡	旧石器、縄文、古代、近世	27	金山窯跡	窯跡	古墳
3	北前遺跡	包含地、集落跡	旧石器、縄文、古代、近世	28	裏町東遺跡	散布地	古代
4	羽黒堂前B遺跡	散布地	縄文、古墳、古代	29	原東遺跡	散布地	古墳、古代
5	山田上ノ台塚	塚		30	原遺跡	散布地	弥生、古墳、古代
6	御堂平遺跡	集落跡	縄文、古代、中世	31	西台窯跡	窯跡	古代
7	紙漉山遺跡	散布地	縄文	32	富沢上ノ台遺跡	散布地	縄文、古代
8	上野山遺跡	散布地	縄文	33	堀ノ内遺跡	散布地	古墳、古代
9	町遺跡	散布地	縄文、古墳、古代	34	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	縄文、古代
10	汚田通A遺跡	散布地	縄文、古代	35	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	縄文、古代
11	汚田通B遺跡	散布地	古代	36	六本松遺跡	集落跡	古代
12	竹ノ内前遺跡	散布地	古代	37	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	縄文、古代
13	清太原西遺跡	散布地	縄文、古代	38	富沢館跡	城館跡	中世
14	清太原東遺跡	散布地	縄文、古代	39	土手内窯跡	窯跡	古墳、古代
15	船渡前遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代		土手内横穴墓群B地点	横穴墓	古墳
16	後田遺跡	散布地	古代	40	土手内遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代
17	八幡遺跡	散布地	古墳、古代	41	砂押屋敷遺跡	散布地	古代
18	上野遺跡	集落跡	縄文、古代	42	砂押古墳	円墳	古墳
19	谷地前遺跡	散布地	古代	43	富沢遺跡	包含地、水田跡	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世
20	富田南西遺跡	散布地	古代	44	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡、墓跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
21	南ノ東遺跡	散布地	弥生、古代	45	富沢清水遺跡	散布地	古代
22	芦ノ口遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代	46	山口遺跡	集落跡、水田跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
23	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	古墳	47	下ノ内遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
24	三神峯遺跡	集落跡	縄文、古代	48	伊古田遺跡	集落跡	縄文、古墳、古代

第66図　山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡

を行った。

4　基本層位

調査区が２ヶ所に離れているため、土性、土色等に違いは見られるが、１区では大別14層、２区では大別５層を確認した。本文中の記述における層名は各区ごとのものであり、共通の層名ではない。



第67図　調査区位置図

１）1区の基本層位

１層　褐灰色砂質シルト。層厚は20～35cmである。下部に鉄分の集積がある。現代の水田耕作土。

２層　灰黄褐色砂質シルト。層厚は10～25cmである。上部にマンガンの集積がある。現代の水田耕作土。

３層　黒褐色砂質シルト。層厚は２～10cmである。下面は凹凸が著しく４層土の巻き込みがみられる。西端の一部と東半分に分布する。水田耕作土と考えられる。

４層　灰黄褐色シルト。層厚は２～10cmである。下面は凹凸が著しく５層土の巻き込みがみられる。下部に灰白色火山灰を含む。東半部に分布する。

５層　暗灰黄色粘土質シルト。層厚は４～16cmである。下面には凹凸がみられるが、３、４層のような著しい下

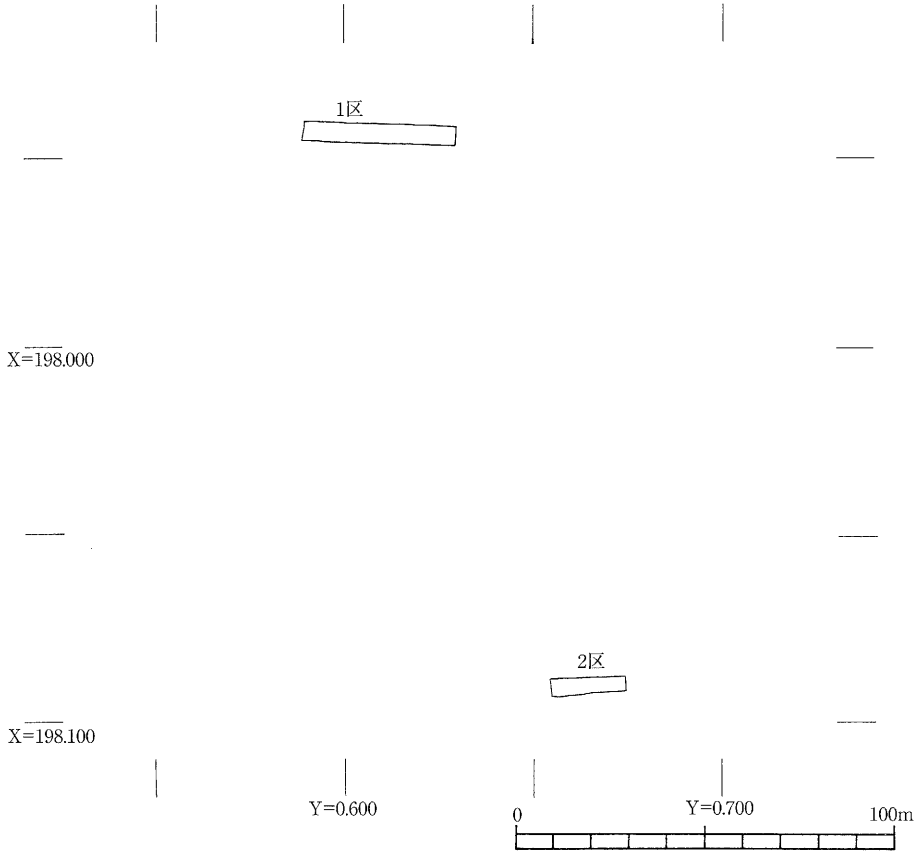
層の巻き込みはみられない。灰白色火山灰を含む。

６層　にぶい黄褐色細砂。層厚は２～10cmである。径２～10mmの白色凝灰岩粒を多く含む。

７層　黒色粘土質シルト。層厚は６～20cmである。下面に著しい凹凸がみられる。８層の巻き込みはみられない。部分的に細砂をラミナ状に含む。

８層　灰黄褐色粘土質シルト。層厚は10～16cmである。下面に著しい凹凸がみられる。

９層　にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は25～40cmである。鉄分を多く含む。マンガンを一部に含む。



第68図　調査区配置図

10層　灰黄色粘土質シルト。層厚は14～20cmである。鉄分を多く含む。下部に11層土をラミナ状に含む。

11層　褐灰色シルト。層厚は5～10cmである。12層土を径１～２cmの粒状に少量含む。鉄分を多く含む。

12層　黄灰色シルト。層厚は16～20cmである。鉄分を多く含む。

13層　黒色シルト質粘土。層厚は９～15cmである。泥炭層。

14層　灰オリーブ色シルト質粘土。層厚は40cm以上である。

２）２区の基本層位

１層　褐灰色砂質シルト。層厚は12～24cmである。全体に鉄分を多く含む。

２層　にぶい黄褐色シルト。層厚は14～30cmである。上部にマンガン粒を多く含む。

３層　明黄褐色粘土質シルト。層厚は12～30cmである。全体に鉄分、マンガン粒を多く含む。

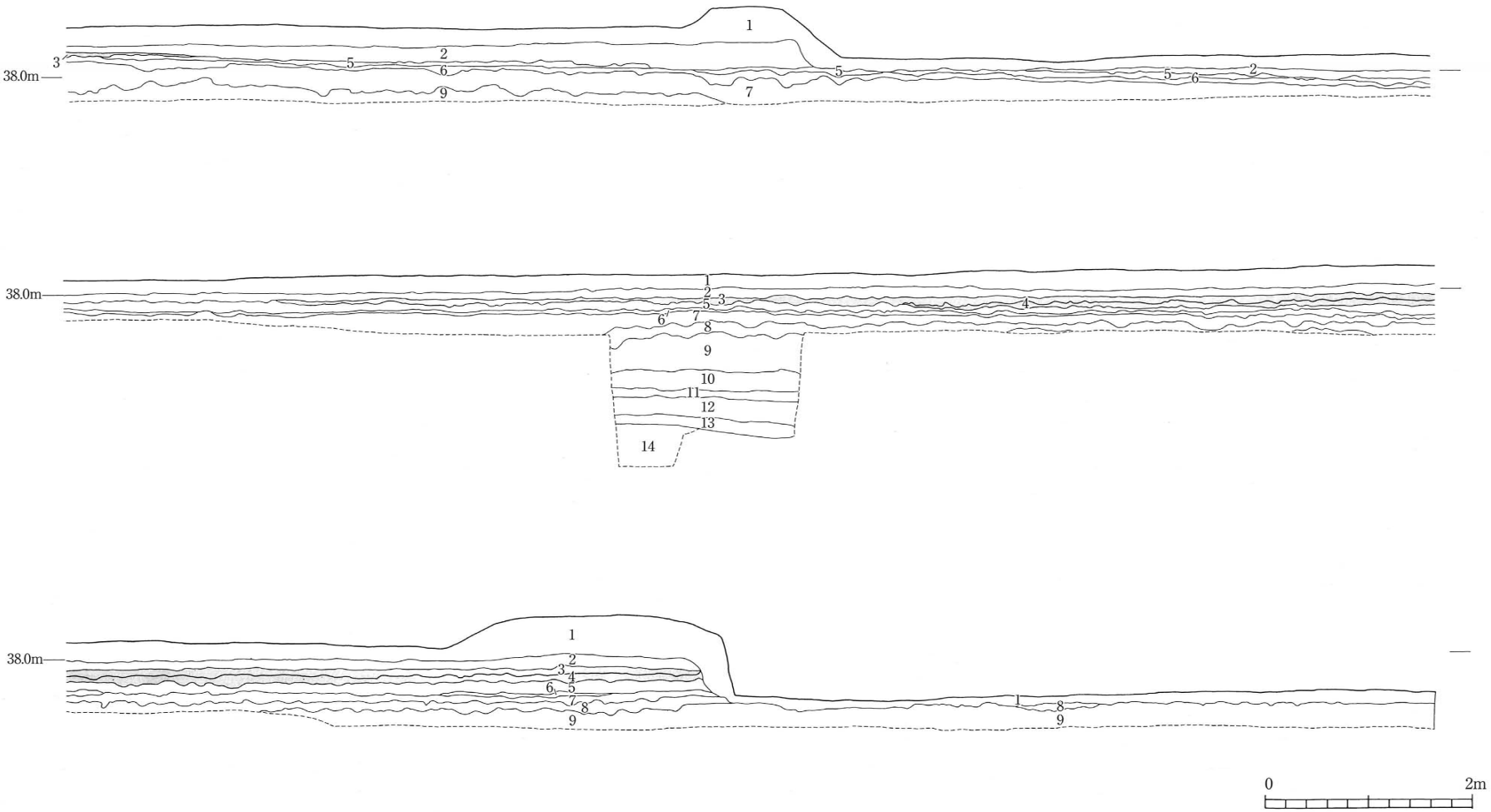
４層　灰黄褐色シルト質砂。層厚は26～46cmである。全体に鉄分、マンガン粒を多く含む。一部粗砂を含む。

５層　灰色シルト質砂。層厚は30cm以上である。全体に鉄分を多く含む。

5　発見遺構と出土遺物

１区の調査

２層の現代水田耕作土より人力により掘り下げを行い、３層上面から調査を行った。３層、４層とも水田耕作土と観察されたが、３層上面及び４層上面では遺構は検出されなかった。また、５層上面、６層上面でも畦畔及び畦畔痕跡は検出されなかった。７層上面においては、性格不明遺構１基を検出した。出土遺物は、調査区の側溝掘り

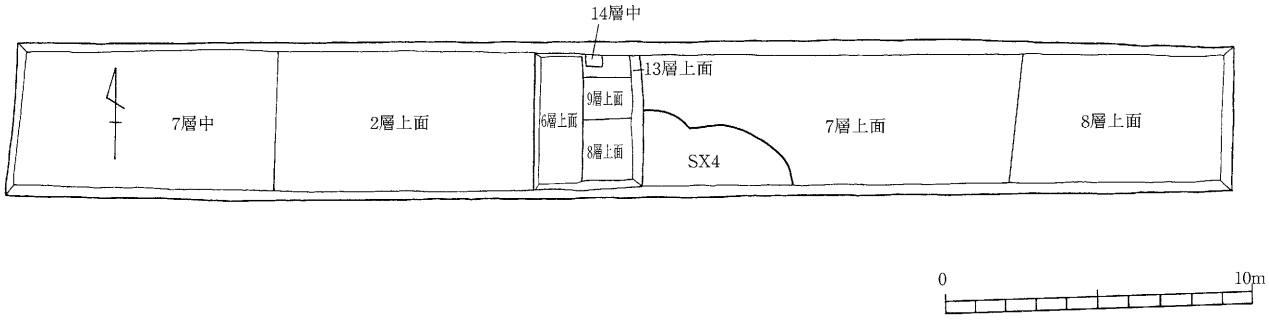


層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	下部に鉄分の集積あり。現代の水田耕作土。
2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	上部にマンガンの集積あり。現代の水田耕作土。
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	下面に著しい凹凸がみられる。西端の一部と東半部に分布。水田耕作土。
4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	下部に灰白色火山灰を含む。下面に著しい凹凸がみられる。東半部に分布。
5	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘質シルト	灰白色火山灰を含む。下面に凹凸がみられる。

層位	土　色	土　性	備　考
6	10YR5/4 にぶい黄褐色	細　砂	径2～10mmの白色凝灰岩粒を多く含む。
7	10YR2/1 黒色	粘質シルト	部分的に細砂をラミナ状に含む。下面に著しい凹凸がみられる。
8	10YR4/2 灰黄褐色	粘質シルト	下面の凹凸が著しい。
9	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘質シルト	鉄分を多く含む。マンガンを含む。
10	2.5Y6/2 灰黄色	粘質シルト	鉄分を多く含む。下部に11層土をラミナ状に含む。

層位	土　色	土　性	備　考
11	10YR4/2 褐灰色	シルト	鉄分を多く含む。12層土を径1～2cmの粒状に少量含む。
12	2.5Y4/1 黄灰色	シルト	鉄分を多く含む。
13	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	泥炭層
14	7.5Y5/2 灰オリーブ色	シルト質粘土	

第69図　1区北壁断面図



第70図　1区遺構配置図

作業時に１層より石鏃１点（Ｋ－１）の他、土師器片、陶器片が数点出土した。また、２層中より施釉陶器碗（Ｉ－１）、磁器染付碗（Ｊ－２・Ｊ－３）、磁器染付皿（Ｊ－５）、白磁皿（Ｊ－４）の他、土師器片、須恵器片、赤焼土器片、瓦質土器片、箆状石器（Ｋ－３）等が、３層中より土師器片、須恵器片、赤焼土器片が、５層中より土師器片１点、７層中よりスクレイパー（Ｋ－２）が出土している。

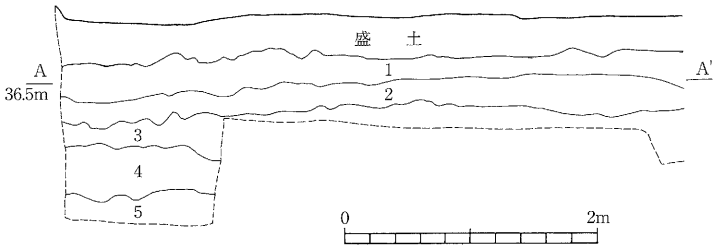
性格不明遺構

ＳＸ４　性格不明遺構

調査区中央部南側に７層上面で検出した。規模は検出部分で長径約6.5m、短径2.5mである。検出状況、側溝部の土層断面からみると倒木痕と考えられる。出土遺物はなく、それ以上の調査は行わなかった。

２区の調査

２層上面においてピット１基、性格不明遺構３基を検出した。１～３層上面まで平面精査、４層、５層については深掘部において断面観察したが、水田土壌と考えられる土層は確認されなかった。出土遺物は、１層より肥前と思われる18世紀後半以降の染付皿（Ｊ－１）、陶器片が出土している。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	全体に鉄分を多く含む。
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	上部にマンガン粒を多く含む。
3	10YR6/6 明黄褐色	粘質シルト	全体に鉄分、マンガン粒を多く含む。
4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質砂	全体に鉄分、マンガン粒を多く含む。一部粒砂を含む。
5	10YR5/1 灰色	シルト質砂	全体に鉄分を多く含む。

第71図　2区西壁断面図

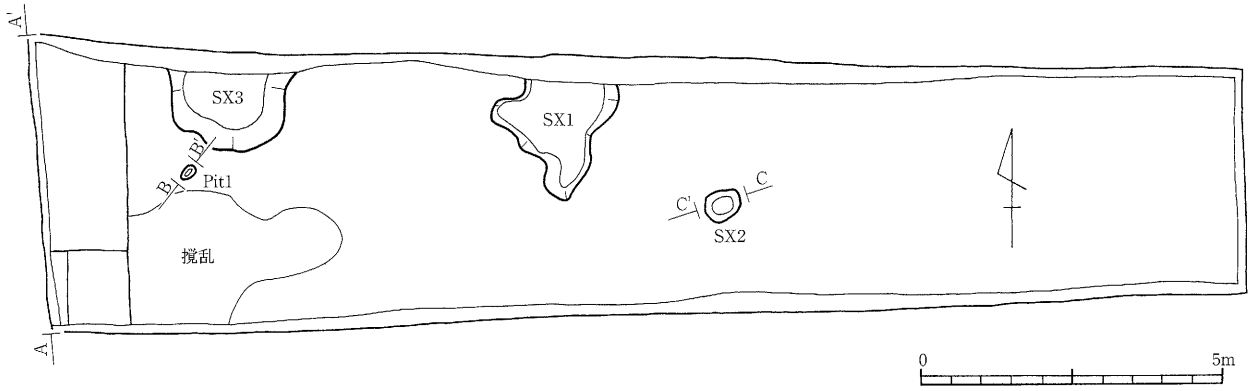
１）ピット

調査区西側に２層上面で検出した。規模は長径約30cm、短径18cmで平面形は楕円形を呈する。深さは約20cmである。堆積土は黒褐色シルト土で、基本層３層土を粒状に少量含む。柱痕跡はみられず、性格については不明である。出土遺物はなかった。

２）性格不明遺構

ＳＸ１　性格不明遺構

調査区中央部北側に２層上面で検出した。規模は検出部で長径約2.0m、短径約2.0mで平面形は不整形である。深さは約35～38cmである。断ち割りを行ってみたが、人為的に掘り込まれた跡ではなく、倒木痕と考えられる。出土遺物は堆積土より土師器、磁器片が数点出土した。



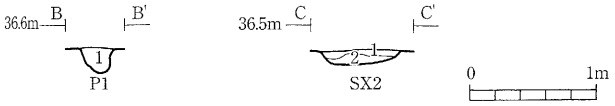
第72図　2区遺構配置図

ＳＸ２　性格不明遺構

調査区中央部に２層上面で検出した。規模は長径約70㎝、短径約50㎝で平面形は楕円形を呈する。深さは約12㎝で、堆積土は黒褐色シルト層とこの黒褐色シルト土に基本層３層土を２～３㎝のブロック状に含む層の２層である。出土遺物はなかった。

ＳＸ３　性格不明遺構

調査区北西部に２層上面で検出した。規模は検出部で長径約1.3m、短径約1.8mで平面形は不整形である。深さは約40㎝である。断ち割りを行ってみたが、人為的に掘り込まれた跡ではなく、倒木痕と考えられる。出土遺物はなかった。



P1

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	基本層3層土を径1cmの粒状に少量含む。

SX2

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	基本層3層土を2～3cmのブロック状に多く含む。

第73図　遺構断面図

6　まとめ

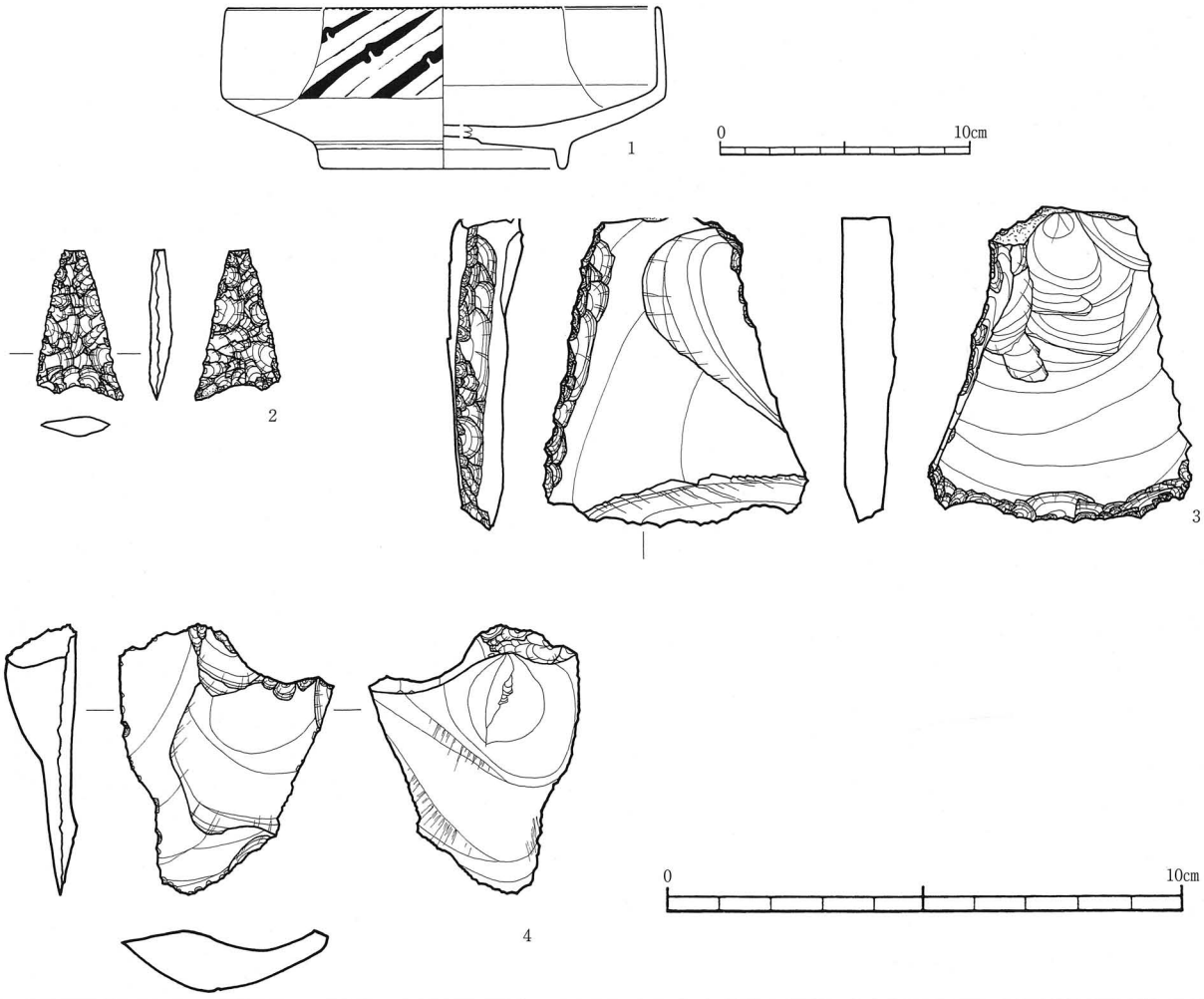
①　今回の調査区は遺跡中央から北西よりの地点である。標高は１区で38.5m前後、２区で36.9m前後である。

②　１、２区ともに水田跡に伴う畦畔等の遺構は検出されなかったが、１区の３層、４層が水田土壌と判断された。

③　１区の水田土壌の時期については灰白色火山灰を巻き上げて耕作していることから、４層は10世紀前半以降と考えられ、３層から土師器、須恵器が出土し、それ以降の遺物が出土していないことから平安時代の中頃に位置付けられるものと考えられる。

④　発見遺構は１区では性格不明遺構１基で、堆積土の堆積状況から倒木痕と考えられる。２区ではピット１基、性格不明遺構３基で、ピットは柱痕跡が見られず、出土遺物もないことから詳細な性格については不明である。性格不明遺構については、いずれも堆積土の堆積状況から倒木痕と考えられる。

⑤　出土遺物については、１区は土師器片、須恵器片、磁器片、陶器片の他、石鏃１点、篦状石器１点、７層よりスクレイパーが出土している。２区は土師器片、陶器片、磁器片などが出土している。なお、１区、２区ともに客土されている可能性があり、上層より出土した遺物が、必ずしも本来の下層における遺物の包含を示唆するものではないと考えられる。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	J-1	磁器　鉢	2区	1層		6.4	17.2	9.8	肥前か　18C後半～明治　底部 蛇目凹高台	29-1

図中番号	登録番号	出土地区	基本層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	特　　徴	写真図版
2	K-1	1区	1層	剥片石器	石　　鏃	30.0×17.2×4.1	1.6	硅化凝灰岩	先端・左下端折れ	29-2
3	K-3	1区	2層	剥片石器	箆状石器	63.1×52.9×13.4	46.6	硅化凝灰岩	腹面下側縁・背面左側縁に少し急角度の二次加工あり。	29-3
4	K-2	1区	7層	剥片石器	スクレイパー	52.9×42.9×13.6	17.8	頁　　岩	背面にのみ微細剥離がみられる。	29-4

第74図　出土遺物

引用・参考文献

渡部弘美（1993）：「山田条里遺構」『仙台平野の遺構群XII　平成４年度発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第170集

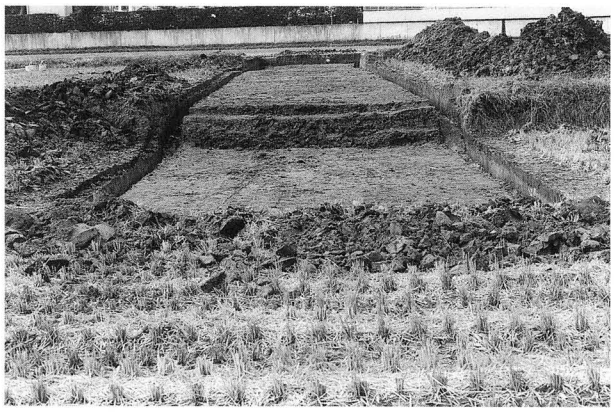
主浜光朗（1999）：「山田条里遺跡－第２次・第３次調査」『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集

平間亮輔（2000）：「山田条里遺跡－第４次・第５次調査」『五本松窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第247集

佐藤　淳（2001）：「山田条里遺跡－第６次調査」『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第253集

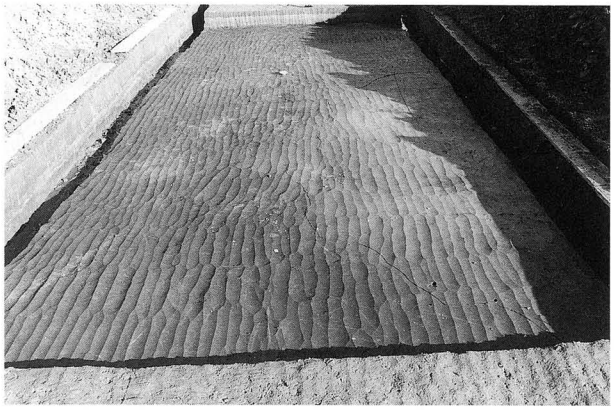
大倉秀之（2002）：「山田条里遺跡－第７次調査」『国分寺東遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第266集

1　1区全景（西より）

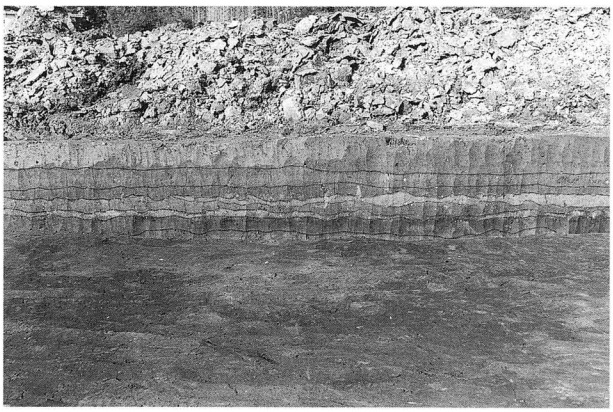


2　1区全景（東より）

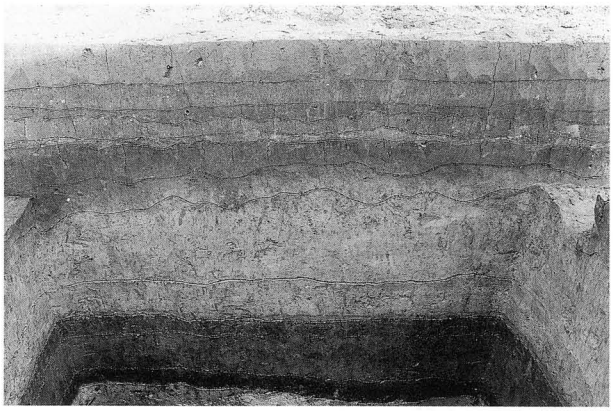
3　1区5層上面状況（西より）



4　1区7層上面遺構検出状況（西より）



5　1区北壁土層断面（南より）



6　1区深掘部北壁土層断面（南より）

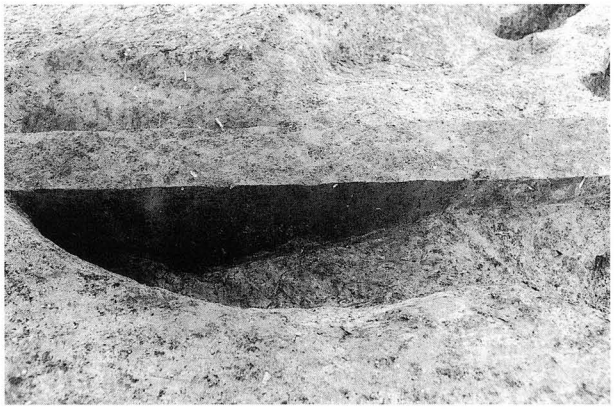
7　1区調査終了時状況（東より）

8　2区2層上面遺構検出状況（西より）

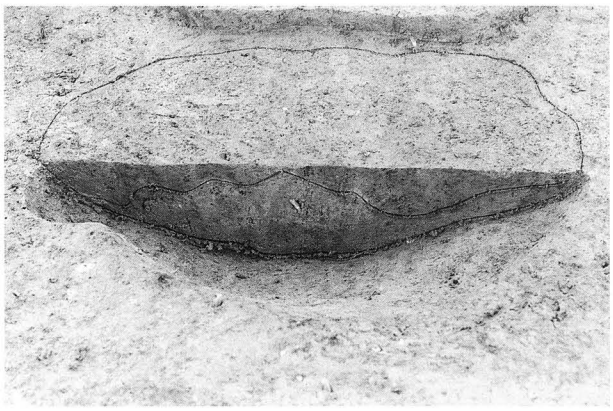
図版27　1区・2区調査状況

1　2区遺構完掘状況（東より）

2　2区SX1・SX2性格不明遺構検出状況（南より）

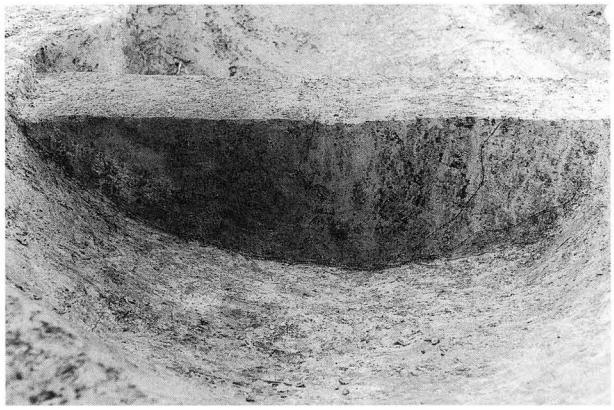


3　2区SX1土層断面（東より）

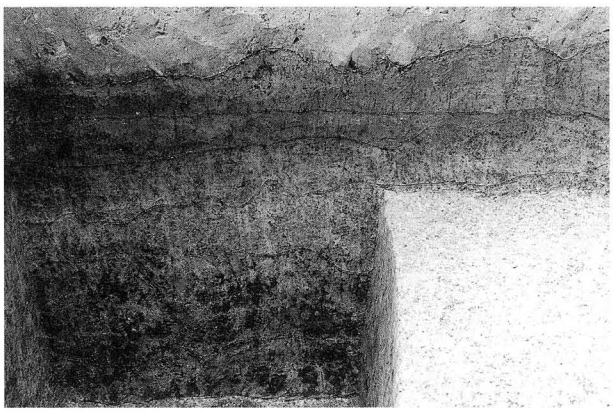


4　2区SX2土層断面（東より）

5　2区SX3性格不明遺構・Pit1検出状況（南より）



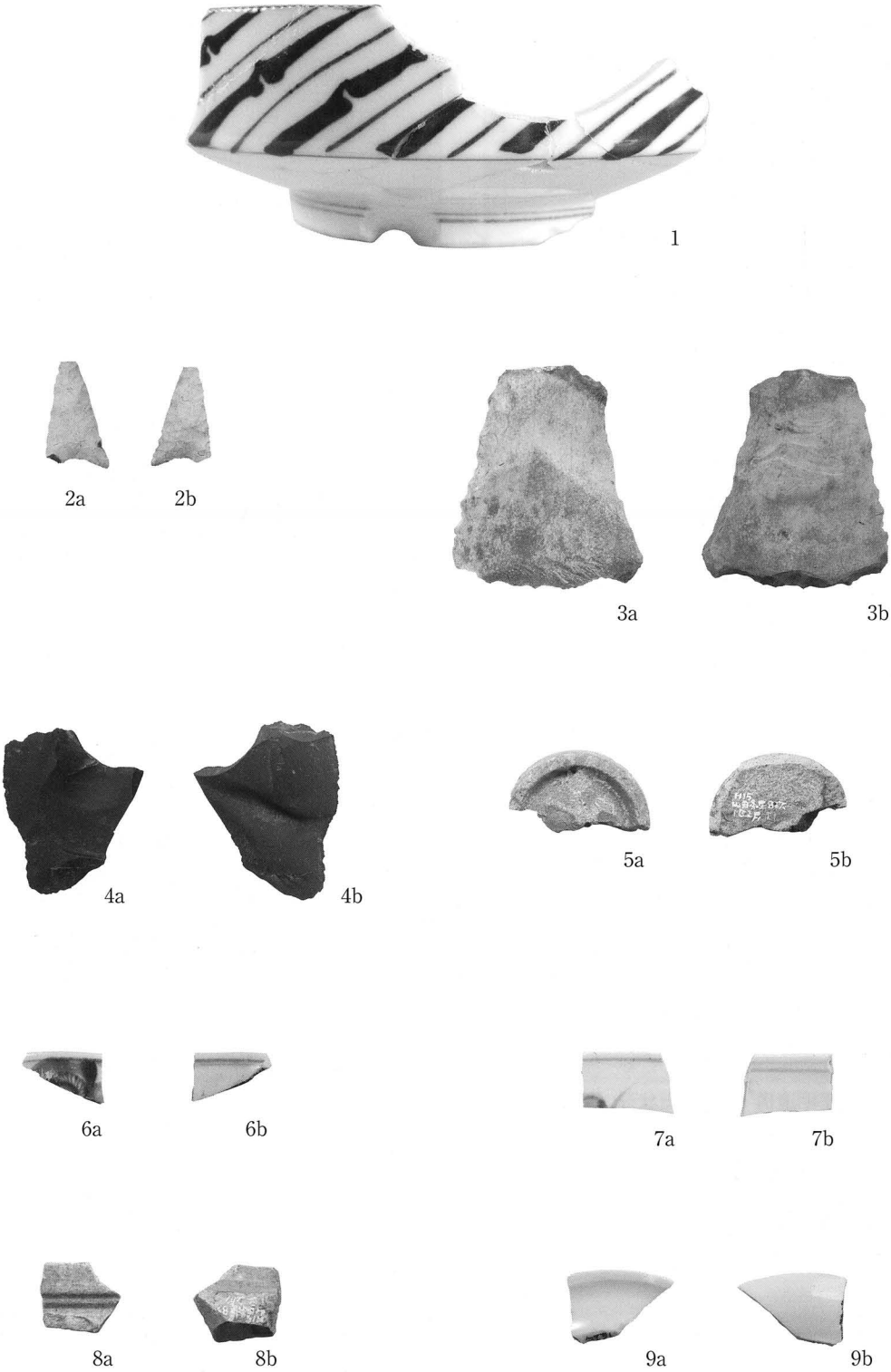
6　2区SX3土層断面（東より）



7　2区西壁土層断面（東より）

8　調査区遠景（北より）

図版28　2区調査状況・遠景



※縮尺は任意とする。

1	磁器　鉢	Ｊ－１（２区１層　第74図１）	6	磁器　染付碗	Ｊ－２（１区２層）
2	石鏃	Ｋ－１（１区１層　第74図２）	7	磁器　染付碗	Ｊ－３（１区２層）
3	篦状石器	Ｋ－３（１区２層　第74図３）	8	磁器　染付皿	Ｊ－５（１区２層）
4	スクレイパー	Ｋ－２（１区７層　第74図４）	9	白磁　皿	Ｊ－４（１区２層）
5	施釉陶器　碗	Ｉ－１（１区２層）			

図版29　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほしゅんいんまえいせきほか
書名	保春院前遺跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第274集
編著者名	豊村幸宏・大倉秀之・宮内　周
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7－1　電話 022－214－8894
発行年月日	平成16年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
保春院前遺跡 （第2次）	宮城県仙台市 若林区六十人町95	04100	01555	38°14′26″	140°54′04″	2003.06.16 ～ 2003.06.20	66㎡	電線地下埋設
南小泉遺跡 （第40次）	宮城県仙台市 若林区南小泉2丁目101-1・102-2	04100	01021	38°14′16″	140°54′33″	2003.07.16 ～ 2003.07.17	90㎡	共同住宅建築
富沢遺跡 （第127次）	宮城県仙台市 太白区泉崎1丁目20-5・20-6	04100	01369	38°13′00″	140°52′28″	2003.04.11 ～ 2003.04.22	21㎡	店舗付共同住宅
富沢遺跡 （第128次）	宮城県仙台市 太白区長町南4丁目11-1	04100	01369	38°13′09″	140°52′30″	2003.07.22 ～ 2003.08.01	75㎡	共同住宅建築
富沢遺跡 （第129次）	宮城県仙台市 太白区泉崎1丁目21-13	04100	01369	38°13′03″	140°52′21″	2003.08.18 ～ 2003.09.03	48㎡	共同住宅建築
富沢遺跡 （第130次）	宮城県仙台市 太白区長町南4丁目6-1	04100	01369	38°13′10″	140°52′37″	2003.09.16 ～ 2003.12.10	145㎡	共同住宅建築
養種園遺跡 （第4次）	宮城県仙台市 若林区南小泉1丁目14-10の一部	04100	01349	38°14′18″	140°54′23″	2003.12.22	18㎡	個人住宅建築
北目城跡 （第3次）	宮城県仙台市 太白区郡山4丁目15-1	04100	01029	38°13′09″	140°54′03″	2003.07.18	55㎡	店舗付事務所他
郡山遺跡 （第154次）	宮城県仙台市 太白区郡山5丁目144-1他	04100	01003	38°12′58″	140°53′38″	2003.09.08 ～ 2003.09.10	68㎡	宅地造成
小鶴城跡 （第2次）	宮城県仙台市 宮城野区新田3丁目239-1	04100	01194	38°16′39″	140°56′04″	2003.10.14	21㎡	個人住宅建築
富沢館跡 （第2次）	宮城県仙台市 太白区富沢字舘81	04100	01246	38°12′44″	140°51′58″	2003.10.27 ～ 2003.10.28	38㎡	共同住宅建築
山田条里遺跡 （第8次）	宮城県仙台市 太白区鈎取本町1丁目209他	04100	01367	38°12′56″	140°50′28″	2003.11.17 ～ 2003.12.05	290㎡	店舗・飲食店建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
保春院前遺跡（第2次）	集落跡	中世・近世	溝跡・土坑	陶磁器	
南小泉遺跡（第40次）	集落跡	中世・近世	溝跡・焼土遺構	土師器・須恵器	
富沢遺跡（第127次）	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	畦畔	なし	
富沢遺跡（第128次）	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし	
富沢遺跡（第129次）	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし	
富沢遺跡（第130次）	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	畦畔	土師器・石器・木製品	
養種園遺跡（第4次）	集落跡	近世	溝跡	陶磁器	
北目城跡（第3次）	城跡	近世	溝跡	なし	
郡山遺跡（第154次）	官衙・寺院跡	古代	ピット	なし	
小鶴城跡（第2次）	城跡	近世	溝跡	なし	
富沢館跡（第2次）	館跡	中世・近世	溝跡	なし	
山田条里遺跡（第8次）	水田跡	平安～中・近世	性格不明遺構	陶磁器	

仙台市文化財調査報告書第274集

保春院前遺跡他

発掘調査報告書

2004年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7番1号
文化財課　TEL 022(214)8893・8894

印刷　株式会社　仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL 231-2245